リリカルブレイドStrikerS

元副会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ

【Ｎコード】
Ｎ７４２６Ｓ

【作者名】
元副会長

【あらすじ】
ジョーカーになった剣崎一真の前に現れる「本当の統制者」
それは剣崎を新たな世界へ導く・・・。
剣崎はそこで出会った少女たちとともにその世界の「運命」と戦うため、
別世界で行われるバトルファイトへと身を投じてゆくのであった。
仮面ライダー剣と魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳのクロ

スオーバーです。
剣崎だけではなく、彼以外のブレイドメンバーも出していきたいと思います。（ライダー三人は確実に）
処女作なので色々と至らないところもあると思いますがよろしくお願いします！

番外編～七夕のお願い～（前書き）

いきなり、『そうだ、明日（数分後）はもう7月7日か～』ということで書いた番外編。
後書きはありません。予告は既にやってますからね。

例のプールの話はまた別の話ですから、８日に本編と同時に投稿します。

時系列もなにもない単なる番外編ですので、何も気にせず読んでくだされば嬉しいです。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ番外編、始まります。

番外編～七夕のお願い～

「皆！今日は何の日か知ってるか！？」

突然剣崎が叫んだ。

「え！？なんですか・・・まさか一真さんの誕生日とか！？」

「違うな・・・今日は、今日は七夕だぁ！！」

―数分後―

「七夕なんて久しぶりに聞いた気がするね～♪」

「うん、こっちにはそういうのは無いから・・・」

「ほんなら機動六課一同、短冊にお願い事を書いて各々括りつけておくこと！」

そう言ってはやてが取り出したのは、なかなかのサイズの笹。

倒した状態で括りつけ、最後にザフィーラがそれを立てるという段取りとなった。

「特別に、二枚まで書いていいことになってるです～♪」

その言葉に辺りがざわつく。皆1つに絞るのは大変だったようだ。

「一旦解散！」

はやての言葉に、メンバーが思い思いの場所で短冊とペンを手に取った。

―スターズFの場合―

「ねえねえ見せてよ～」

「うっさいわね！なんであんたなんかに見せなきゃいけないのよ！」

『ティアのいじわる～』と言いながらスバルが自分の短冊を眺める。

「私は書けたから先に行ってるよ？」

「はいはい・・・」

スバルが部屋から出た後、ティアナはようやく自分の短冊を取り出した。

―ライトニングFの場合―

「う～ん・・・」
「どうしたのキャロ？」

先程からずっと考えているキャロ。

「え～っと・・・何を書いたらいいのかな？」
「そんなに深く考えなくても、自分が一番叶ってほしいことでいいんじゃないかな・・・」
「あ、それなら！」

突然ペンを走らせるキャロ。
見てはいけないと思い、エリオは自分の短冊と向かい合った。

―八神家の場合―

「お！ザフィーラも書いてんじゃん！！」
「一真に、『お前も書かないとダメだ！』と言われたからな」

すぐに黙々と書きつづけるザフィーラ。
ヴィータはザフィーラの短冊を覗き見ようとしたが、流石盾の守護獣だけあってガードは堅かった。

「ちぇ・・・なあ、シグナムは何書いたんだよ？」
「え、あ・・・私は・・・秘密だ」

すぐに短冊を隠すシグナムを見て、ヴィータは笑みを浮かべる。

「へっへ～ん♪だいたいわかったからもういいや」
「そういうヴィータちゃんは何を書いたの？」
「あ、それ私も気になるわ」
「です～♪」

「あ、ああ・・・秘密だ！！」

ヴィータは逃げた。

―隊長コンビの場合―

「フェ～イトちゃんは何を書いたのかな～？」
「だ、ダメだよなのは！人の短冊を見ちゃ・・・」

そう言って背中に短冊を隠したフェイト。だが『もう一枚』はまだ机の上だった。

「甘いねフェイトちゃん・・・もう一枚が隠せてないよ！！」
「あ！！」

フェイトが手を伸ばす前に短冊を取って、フェイトから短冊を遠ざけながら読んだ。

「ふむふむ・・・」
「な、なのは！」

―言いだしっぺの場合―

「・・・あ～!!どれにしたらいいのかわからない!!」

頭を掻き毟りながら叫ぶ剣崎。

彼の机の上にはクシャクシャになった短冊が何枚もあった。

「これでもない・・・これでもないな・・・」

何度も試行錯誤する剣崎、そして彼は思い至った。

「これでいいな・・・」

そして剣崎もペンを走らせる。

―食堂―

次々に短冊を括りつけていくメンバー。

それぞれが他のメンバーの短冊を覗き見ようとして、逆に自分の短冊は見られないように頑張って隠す。

「俺が最後だな・・・」

剣崎が括りつける二枚を食い入るように見つめるメンバー。

括りつけると剣崎は言った。

「わかってるとは思うけど・・・他の皆の短冊を見るとかは無しだからな」

『は、は～い』
じっと見つめる剣崎に、少々汗を流しながら答えるメンバー。
それで納得したのか、剣崎はザフィーラに促した。
するとザフィーラが笹を持ち上げ、特別に作ったスタンドに立てる。
「よ～しっ！これでお終いだ！！」
剣崎が満足そうな笑顔になり、『おやすみ、早く寝ろよ』と言いながら食堂を去った。
それを合図に全員が部屋に戻っていく。
―ＡＭ１：００―
（なのは・・・やっぱりやめようよ・・・）
（フェイトちゃんは一真君が書いた短冊が気にならないの？）
（それは・・・気になるよ・・・）
明りの消された食堂で動く二つの影。
そう、なのはとフェイトは剣崎の書いた短冊をこっそり見ようとこっそりと忍び込んでいた。
だがそんなことを考えるのは二人だけではなかった。
なのはが明りを点けると・・・。
「な～んだ、やっぱり皆来てたんだね♪」

そこには予想通りのメンバーが揃っていた。
今ここにはヴィータ、エリオ&キャロ、ザフィーラ、そして剣崎以外のメンバーがいる。
「スバルとティアナも興味があるんやな～」
「「はい・・・」」
「それじゃあ早速・・・」
なのはとはやてが笹に括りつけられた短冊を一つ一つ漁っていく。
「う～ん『スバルが無茶しませんように』・・・ティアナだね♪」
「な、なのはさん！わかってるならわざわざ読まなくたって！！」
「ティア～私嬉しいよ～」
「『エリオとキャロがいつまでも健康でいてくれますように』・・・フェイトちゃ～ん？」
「はやて・・・読まなくても・・・」
「『アイスがいっぱい食べたい』・・・ヴィータちゃん・・・」
「『主はやてからのマッサージがなくなりますように』・・・残念やったなぁシグナム？今から早速・・・」
「そ、そんな！？」
「も～、一真君のはどこ・・・あった！！」
なのはが見つけた『青い』短冊に皆が集まった。
そしてなのはが読み上げる

「え～っと『六課の皆が元気でいてくれたらそれでいい、今はここが俺の家だから』・・・一真君・・・」

―何故だろう、涙が流れ出した―

「もう、一真さんはこんな時まで自分の事を考えないのね・・・グスン」

「嬉しいが・・・自分の事も考えてくれ・・・ヒクッ」

「シャマルもシグナムもなんで泣いとるんや・・・うぅ・・・」

―数分後―

「やっと皆落ち着いたね・・・それじゃあもう一枚も見て見ようかな・・・」

そう言ってもう一度短冊を漁ろうとするなのはだったが・・・

「言っただろ・・・『他の皆の短冊を見るとかは無しだからな』って・・・」

突然かけられた声に全員が固まった。

「か、一真くん・・・これは・・・その・・・ね？」

「『ね？』じゃない」

剣崎は思いっきり息を吸い込んだ。

「お前等・・・さっさと寝ろぉぉぉぉぉぉっ！！！」

『ご、ごめんなさ～い！！』

一斉に食堂を飛び出していくなのは達。

誰もいなくなった後、剣崎は笹の一番上に括りつけられた『金色』の短冊を見る。

だがすぐに視線を外し、明りを消して食堂からでていった。

いったいあの短冊にはなんと書いてあったのだろうか

やはり六課のメンバーのことが書いてあったのだろうか

もしくは誰か個人のことについて書いてあったのだろうか

それとも

自分自身の為に書いたものだったのだろうか

それは剣崎と短冊しか知らない

プロローグ～新たな始まり～（前書き）

記念すべき初作品！
駄文であること間違いないですが、頑張っていきます。
誤字・脱字の指摘や感想など、いつでも待っております。

注：プロローグに、なのはの世界のキャラはまだ出てきません。

それではよろしくお願いします！

プロローグ～新たな始まり～

ある林の中、二人の男がいた。

片方は茶色い髪で長身のジャケットを着た青年。もう片方は彼より背が低いが、その体からは常人らしからぬ気迫が漂っている、大きめに開かれた目が印象的なコートを着た青年。
どちらも息を乱しており、その場には只ならぬ雰囲気が漂っている。
そしてその雰囲気を更に異質にする「モノ」があった・・・。
彼らの傷口から流れる、人間なら赤い血であるはずの液体は、

「緑色」なのだ・・・

コートを着た青年は自分の「血」のことは気にしていない。しかし、ジャケットの青年の傷口から流れ出るその「血」を見た瞬間、コートの青年の開かれた目が更に開かれる。

「剣崎、お前・・・お前は・・・アンデッドになってしまったと言うのか・・・」
「・・・・・・。」
コートの青年の言葉に「剣崎」と呼ばれた青年は答えようとしない。

だが剣崎はこう言った・・・
「俺は運命と戦う！　そして勝ってみせる！」

と、さらに・・・

「お前は・・・人間たちの中で生き続けろ。」
そう言って彼、剣崎一真はその場を立ち去ろうとする。
コートの青年「相川　始」は彼を追ったが、たどり着いた崖には、すでに剣崎の姿はなかった。
彼らの仲間「橘　朔也」と「上城　睦月」も駆けつけたが、既に手遅れだったことを知り、彼の名を叫ぶ。

こうして「もう一人のジョーカー」剣崎一真は彼らの前から姿を消した。

しかし当の剣崎の現在地は、海でも陸でもない、真っ白な空間の中だった。

「・・・・・ウェッ！？」
海に飛び込んだはずの剣崎が目を開くと、そこにはただ真っ白な空間が広がっているだけ。

―俺は海に飛び込んだはずなのに―

流石に戸惑いを隠せない剣崎。
しかしジョーカーである彼には、この空間にある自分以外の「何か」の存在を感知することができた。
そして振り返った先に見たものは、
捻じれた金属の塊のようなもの・・・バトルファイトの統制者の声を伝える、
「モノリス」と呼ばれるものであった。
それを見た瞬間、剣崎は身構える・・・が、そこで異変に気付く。

そのモノリスは「真っ白」なのだ。

剣崎は最初、それをこの白い空間のせいだと思っていた。だが違うよく見ると、確かに金属ではあるものの、その色は自分の見たモノリスとは違う、輝くような白であった。
あまりの印象の違いに少し警戒が緩んでしまう剣崎、しかし・・・

『剣崎一真、もう一人のジョーカーよ・・・』

白モノリス（仮）から突然声が発せられた為、今一度警戒する。
「だ、誰なんだあんた一体・・・？」
剣崎なりに相手を予想しながらも尋ねてみる。
だが以前、始にそう尋ねたところいきなり攻撃されたため、流石に今回は身構えている。

『私はお前たちから統制者と呼ばれるもの・・・』

攻撃こそされなかったが、予想通りの相手だったため剣崎の顔には怒りが見える。
―こいつのせいで始は・・・！―
「あんたは始をあそこまで苦しめた！あいつの本当の願いを聞き入れずに！
そんなやつが俺に何の用だ！」
自分の怒りをぶつける剣崎、だが統制者からの返答は思いもよらぬものだった。

『確かに、それについてまず謝らなければならない』

・・・へ？あいつは今なんて？
あまりの衝撃に開いた口がなかなか塞がらない剣崎、だが気を取り

直して
「な、ならなんであいつの・・・始の願いを聞いてやらなかったんだ！謝るぐらいなら、なんで・・・」

『奴の願いを聞き入れられなかったのは私自身が封印されていたからだ』

統制者の話によれば、彼？はここことは別の世界の破壊を望む統制者によって封印され、傍観するしかなかったのだという。そして別世界の統制者は天王寺をつかって今回のバトルを引っ掻き回し、この世界でのバトルファイトで勝ち残ったのがジョーカー二体ということを認識した。
どちらが勝ち残ろうとも破滅しかない戦いなのだ。そいつはこの世界から去り、次の世界を破滅へと導きに行った。
そのためこの世界の統制者は封印を解かれ、こうして剣崎の前に白モノリスとして現れたのだ。

「・・・それが本当だったとしても、そいつ（別世界の統制者）の言うとおり残ったのは俺と始の二人だけだ・・・。今更出てきたってその事実は変わらない！」

『確かにその通りだ。だがお前たちは忘れているのではないか？二体以上残っているならば、リモートテイピアの能力が使用できる。』

それを聞いた瞬間、驚愕と同時に剣崎の中に捨てたはずの希望が生まれる。リモートを使えば、みんなと離れてなくてもよいのではないか？頭の中にはクラブのカテゴリーキング、嶋（しま）　昇（のぼる）の顔が浮かぶ。
しかし統制者はそんな彼の心を読んでいるのだろうか、彼に更なる驚愕をもたらす発言をする。

『残念だが、お前にはやってもらいたいことがある。』

・・・・・？

『お前には、先程言った別の世界の統制者を止めてもらう。』

・・・・・！？

「一体どういうことだ！なんで俺が・・・あんた統制者なんだろ？自分でやろうとは思わないのか！？」

『残念ながら私に奴を止めるほどの力は無い。それに奴にかかればバトルファイトの結末がどうなってしまうのか、お前ならわかるだろう？』

思わず言葉が詰まる剣崎。そう、彼が一番よく知っている。

『更に言えば、奴は次の世界でのファイトの早期決着を望んでいる。なぜなら解放したアンデッドはスペードスートのアンデッドのみ。ならばそこへ行くのはお前しかいまい。』

―剣崎一真・・・いや仮面ライダーブレイド・・・お前にあの世界を託す―

そういって白モノリスは姿を消した。剣崎の周りには、今度こそ何もなかった。

「・・・はぁ。託すなんていわれても、別世界なんてどうやって行けばいいんだよ・・・。」

剣崎は別世界への行き方など知らない。今の彼はジョーカーであるが、それがこの事態を好転させるわけでもない。第一アンデッドにそんな能力を持った者はいない。

そんなことを考えていると、ふと周りが暑くなったような気がしてきた。
気のせいかと思いきや、次第にそれは「暑い」ではなく「熱い」に変わっていく。
俯きながら剣崎は思い出す。彼は昔この熱さを感じたことがある。
―それは彼が忌み嫌うもの
彼の両親はこれによって亡くなってしまったのだ―
「・・・これは・・・まさか」
そう呟きながら顔をあげた次の瞬間、
―彼は灼熱の炎に取り囲まれていた―

プロローグ～新たな始まり～（後書き）

いかがでしたか？
こんな感じで剣崎の新たなストーリーが始まっていきます。
オンドゥルもほどほどに出していきます（笑）
ちゃんとした場面では普通に喋らせますが・・・。

補足

・最後に剣崎が移動したのは「あの」空港です。
・なのはの世界で解放されたのがスペードスートだけなのは、白モノの言った通り、
「バトルファイトの短期決着」と、それ以外にも「剣崎に対する挑戦（皮肉）」
「ヒューマンアンデットを勝ち残らせないため（確実に現在の生態系を破壊す為）」などの理由があります。
・なのはの世界にいまのところ剣崎以外のジョーカーはいません。
アンデッドの存在は全くと言っていいほど認知されていません。
っといったところです。

予告は次回から始めていきたいと思います。
それでは一言、

―運命の切札をつかみ取れ！―
また次回お会いしましょう！

第一話～運命の出会い～（前書き）

第一話投稿です！
サブタイはブレイド的に行きたい・・・という私の思いです。
残念ながら戦闘はありません。次回からですかね？（っておい！）

次回予告は今回から入れていきます。

プロローグを読んで評価・感想・お気に入り登録をしてくださった皆さん、
ありがとうございました！

それでは第一話、始まります！

第一話～運命の出会い～

激しい戦いの末、友と世界のために自ら不死身の生命体アンデッドとなり、
世界を破滅から救った男　―剣崎一真―
そのアンデッドの一体であるジョーカーになった彼は、「本当の統制者」からバトルファイトの真実を教えられる。
「統制者」の言葉によって、一時は友と同じように人間として暮らせると思った剣崎。
だが彼には「仮面ライダーブレイド」としての新たな使命が与えられる。
そしていきなり壁にぶち当たり、これではどうにもならないのでは？
そう思っていた彼が突然放り出されたのは・・・

―灼熱の炎の中なのであった―

「なんなんだ一体・・・。」
彼の第一声はそれであった。

自分は真っ白な空間で別世界に行く方法について考えてたはずだ。
だけど突然暑くなって、さらにはそれが「熱い」に変わって、嫌な予感がして顔をあげたら
俺の周りは火の海・・・見たところ空港のようだ。

普通だったらパニックになってしまうだろう。しかし彼はアンデッド・・・「不死身」なのだ。
ここにずっといたとしても彼が死ぬことはない。

だがそれはあくまで「不死身」なだけなのであって「無敵」な訳ではないのだ。
だからダメージは受けるし、どんな苦しみであっても死ぬことはできない。
いままで戦ってきたアンデッドや、同じジョーカーである始を見ていれば、それが自分たちにどれほどの枷となっているのかが剣崎にはわかる。
なので彼は、とりあえずこの場からの脱出を最優先にすることにした。

「いくらジョーカーとはいっても、流石に少し厳しい・・・な」

それでも歩き続ける剣崎なのであった。

―場所は剣崎とは少し離れた場所―
そこにはアンデッドとはまた違った「人間」の少女が一人
その少女の名前は「スバル・ナカジマ」
彼女は「戦闘機人」と呼ばれる存在であるが、それについてはまた次の機会に。

父親に会いに、姉である「ギンガ・ナカジマ」とこの空港に訪れたスバルだが、ギンガと離ればなれになり、更にこの火災に巻き込まれる。
「・・・お姉ちゃん・・・どこぉ・・・」
泣きながら歩き続けた彼女が辿り着いた石造のある広間。
そこで座り込んだ彼女がふと視線を上げたその先にあったのは・・・

―自分に向かって倒れてくる石造だった・・・―

助けを呼ぶ暇も余裕もない彼女はただギュッと目を瞑る・・・だが何も起こらない。
不思議に思った彼女が今一度視線を上げたその先には・・・

―刺々しい体をした、青と黒の異形が石造を支えていた―

青いジョーカー・・・剣崎は、支えていた石造を下ろす。
そして助けた少女の方へ振り返り声をかけようとするが、自分の顔を見た少女の目が見開かれたのを見て
思いとどまった。
自分はどう考えても「化け物」だ。だが数時間前まで自分は人間だったのだ。
剣崎の心は混乱する。

わかってた・・・覚悟はできていた・・・だけど・・・

苦悩する剣崎。だがそれは一瞬にして消え去る

―泣きながら化け物である自分に抱き着く少女によって―

戸惑う剣崎・・・そんな彼に少女はこう言った

「・・・エッグ・・・助けてくれて・・・ありが・・とう・・・」

無意識に人間としての姿に戻っていく剣崎
その様子に少女は驚いていたようだが、すぐに戸惑ったままの剣崎に笑顔をむける。
剣崎は溢れそうになる涙を堪えながら、少女に笑顔をかえす。
だが少女の笑顔はすぐに曇ってしまう。

「どうしたの？どこか怪我したの？」
少女は首を振る。そして話し出す・・・
「お姉ちゃんが・・・お姉ちゃんがいないの！」
それを聞いた瞬間、剣崎はジョーカーとしてのその感覚で周りを探る。
そして感じた、小さくなっていく子供の気配を・・・。
そこまで感じ取った剣崎は、目の前の少女を抱えて走り出す。
ジョーカーへと姿を変えながら、少女に告げる
「・・・君のお姉ちゃんは、俺が絶対助ける！」
「うん！！」
決意を告げる剣崎に、少女も力強く答える。

そのころギンガは、炎の中スバルを探し続けていた。
いくらスバルと同じ「戦闘機人」である彼女も、まだ少女。長時間炎に囲まれていたため、体力の限界が近い。
それでも妹のを探すために階段の上を歩く彼女を、突然の浮遊感が襲う。
階段が崩れたのだ。
いきなりの事態に全く対応できず落下していくギンガ。
だが彼女はそんな中で口を開く・・・
「助けて・・・だれか助けてぇぇぇ！！」
叫ぶギンガ
だが次の瞬間、彼女は自分が落下が止まっていることに気が付く。
ふと視線を上げるとそこには・・・

「大丈夫か！？」

「・・・えっ？」

―青い異形、剣崎一真がそこにいた―
いきなり現れた「それ」に、言葉を失うギンガ。だが不思議と「驚愕」があっても、「恐怖」は出てこない。それどころか・・・「安心」・・・それしかでてこない。
ふと自分を呼ぶ声がした気がした。そちらに顔を向けると、離ればなれにっていた妹、スバルが
泣いているのか笑顔なのかわからない顔で手を振っていた。

それを見たギンガは、彼に問いかける。
「あなたが妹を・・・スバルを助けてくれたの?」
その言葉にうなずく剣崎。
それを見た彼女も、掴まる腕の力を強くして異形である彼に対してこう告げる。

ありがとう・・・と

ゆっくりギンガをおろし、姿を人間に戻す剣崎。
彼の前には、自分が助けた二人の少女が泣きながら抱き合っている。
(そろそろここも限界か?)
周囲の状態からそう悟る。
―急いでここから離れるぞ!―
そう少女たちに言おうとした剣崎の耳が、誰かの声を察知する。

「・・・だれかいませんかー!」
「・・・いたら返事をして!」
二人分の声が聞こえたが、どちらの声もまだ幼さを感じさせる。
剣崎が戸惑っているうちに、声の主たちは三人の前に姿を現した。
片方は栗色の髪に白い独特の服を着た少女。

もう片方は金色の髪にこれまた独特の黒い服を着た少女。

どちらもまだ１０代半ばといったところだろう。だが二人からは、修羅場をくぐってきた者特有の気配があった。先程の様子からして、救助にきたのだろうか？

二人はこちらに気が付くと、飛びながらこちらに近づいて・・・って飛びながら！？

「ウェッ！？人が・・・飛んでる？」

驚く剣崎。だが彼にはそれよりも優先すべきことがあった。

・・・そう、彼が助けたこの姉妹を急いでここから脱出させること。

それが彼をすぐさま行動に移させる。

「救助隊の人か？そうだとしたら急いでこの子たちを！」

「！、分かりました！フェイトちゃん、そっちの子をお願い！」

「わかったよなのは！　大丈夫？もう平気だから。」

そう言って二人は姉妹の手を握る。だが、なのはと呼ばれた少女が剣崎に向かって、「あなたも！」

と言ったときには、剣崎はすでに四人に背を向け歩き出していた。

「・・・っ、何をしてるんですか！？」

「今一緒に逃げなくちゃ、死んじゃいますよ！」

二人が叫ぶ、

だが振り返った剣崎は二人にこう告げる。

「いいんだ・・・俺は死なないし、それに俺なんかより、その子たちの命の方が大事だから・・・」

彼は優しい笑みを浮かべてそう言う。だが彼の笑みには、誰が見ても「悲しみ」しかなかった。

だがそれでも食い下がろうとする二人に、剣崎は自分の「もう一つの姿」を見せた。

息を呑む二人から視線を逸らし、また歩き出そうとする剣崎。
だが・・・
「「待って！！」」
そう叫んだ姉妹の声に、剣崎は足を止める。
それを確認した姉妹は剣崎にこう言った・・・

「さっきは私とお姉ちゃんを助けてくれて、本当にありがとう！」
「あ、あの！・・・あなたの名前を、教えてくれませんか！？」

そんな二人の声に、剣崎は振り返りながらその姿を再び人間に戻し、
今度は正真正銘の笑顔を向けて告げる・・・

「俺は・・・仮面ライダーだ！」

そう言って剣崎は四人の前から姿を消した・・・。

「・・・ハァ、やっぱりちょっと無理があった・・・かな？」
自力で脱出はできたが、その体はあちこちが傷だらけで、顔も苦痛で歪んでいた。
仰向けに倒れた剣崎・・・しかし突如聞こえてきたバイクのエンジン音に素早く起き上がる。
その音は彼が最も聞きなれた音。
徐々に近づいてくるそのバイクには人が乗っていなかった。だが剣崎の真横に来ると、そこにピッタリと停まる。
バイクの名は【ブルースペイダー】
数多の戦いを剣崎と共に駆け抜けた、彼の「相棒」である。
「あれ？こいつに自立型ＡＩなんて・・・でも俺のために来てくれ

たんだな・・・サンキュー・・・・」
そう言って跨る剣崎、そして彼はスペイダーと共に、町の中へと消えていった・・・。

この大火災以降、ミッドチルダにはこんな都市伝説が流れ始める・・・

―「仮面ライダー」と名乗る異形が、
様々な事故や事件の現場に現れては、多くの人を助けて去っていく―

・・・と

第一話～運命の出会い～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「もうこれで何回目だろうな・・・」

スバル「そんな事無いよ！すっごく優しい人なんだから！」

ティアナ「スバル！危ない！！」

？？？「ウェェェェェイ！！」

スバル＆ａｍｐ；ティアナ「「仮面・・・ライダー」」

第二話「異形の戦士」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）コラ作者！「？？？」ってバレバレじゃないディスカ！

無言で逃げんな！何とか言えよ！

（　作者）次回もお楽しみに～

（　；ｏｗｏ）そうじゃな～い！

第二話～異形の戦士～（前書き）

お待たせしました第二話です！
なんだかどんどん長くなってる・・・。
まぁそんなことは置いといて、今回はあれから四年後の剣崎と、スバルの再会です。
評価・感想・お気に入り登録もありがとうございます！
誤字・脱字の指摘も受け付けておりますので、よろしくお願いします！

ではちょっとなのは風に・・・

作者「『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第二話～異形の戦士～

ジョーカー・剣崎一真が別世界へ飛ばされてから遭遇した（飛ばされたのが正にソコだった）
あの大火災からはや四年。
当の剣崎は・・・

「剣崎君！もっとキビキビ働いて！！」
「ウェ、ウェイ！！」

・・・働いていた。
あれから彼は、この世界について学んでいた。
とりあえず、

1、ここは自分のいた世界とは違う。ここが統制者の言っていた「世界」なのだろう。

2、ここでは「魔法」が当然のごとく存在しており、魔導師と呼ばれる者たちと「時空管理局」という、とどのつまりが警察のようなものが様々な事象を取り扱っていること。話を聞けば、四年前の少女二人も、そこのエースとして籍を置いているようだ。

3、ここでの自分は「次元漂流者」と呼ばれるものであり、本来なら管理局によって保護されもといた世界に返されるべき存在であること。

・・・などなどだ。

今の彼は、「ちょっとのお金と明日の寝床」のために働いていた。
だがこれがどうもうまくいかない。彼は職を転々とする日々だ。
それも当然である。いくら職場に馴染もうと、もちょっと怪我をしたら最後、その職場からは出ていかなくてはならない。
いくらなんでも、職場の仲間がいきなり緑色の血を流しだしたら「・・・・」である。
住むところもまた同様なのである。
それに次元漂流者（つまり正体不明）である彼に、職や住むところを提供してくれる人はなかなかいない。
なので、怪我には一番気を使っている。

だが彼も、生活のためにこの四年間を過ごしてきたわけではない。
この四年間ミッドチルダに出現するアンデッドたちを封印していた。

現在、剣崎の封印したアンデッドは・・・
カテゴリーA．ビートルアンデッド
2．リザードアンデッド
3．ライオンアンデッド
4．ボアアンデッド
5．ローカストアンデッド
7．トリロバイトアンデッド
8．バッファローアンデッド
10．スカラベアンデッド
・・・以上である。

数だけ見てしまえば、ほとんどのアンデッドを封印している。
だが剣崎からしてみれば、これはあまり芳しいものではなかった・・・
その理由は、
1、「ディアーアンデッド」そして「ジャガーアンデッド」の未封印。

これによって彼は必殺の「ライトニングソニック」が放てない。
剣崎からすれば、これは
「スカラベアンデッドがカテゴリーキング、コーカサスアンデッドに利用されている」
よりはましな事ではあるのだが、それによって（下記参照）

2、「上級アンデッド」の未封印。
その名の通り、不死身のアンデッド集団の中でもかなりの力を持ったアンデッドの事であるが、
どうしても封印できないのだ。
これは上記のように自身の決定力不足が原因としては挙げられるが、それ以外にも（下記参照）

3、アンデッドを発見する手段がない。
これればかりはどうにもならない。自らの感覚だけではアンデッドの動きは察知しきれない。
今までは、「騒ぎのあった現場へいち早く駆けつけ、封印して即立ち去る」
という流れだったが、ディアーはともかくその他のアンデッドは「逃げ足が速い、または姿を現さない」など厄介な者が多く、封印どころか戦闘にすらならない場合がほとんどだ。
もし戦闘になっても今の彼では返り討ちである。

・・・という状況が剣崎を悩ましている。
とはいえ今の彼はただの「レストランのバイト」なのだ。
何故レストランなのかといえば、こっちの世界に来てからというもの、突然料理に目覚めていった。
最初は、親友の虎太郎のレベルを目指していたのだが、あまりの上達ぶりに
今では夢の中で、「社員食堂のチーフとして働く自分」を見たほど

である。
その腕を買われてバイトでありながら厨房で働いている。
（チーフか・・・それもいいのかもしれない。でも俺じゃぁな・・・）
気を取り直して野菜を切ろうとする剣崎だが、一瞬の気の緩みがあだとなる。

「・・・イテッ・・・あっ・・・」

やってしまった、流れ出る「緑色」の血。
剣崎の声に反応して様子をうかがった皆の動きが止まる・・・。
そして剣崎は、
「今まで、ありがとうございました！・・・失礼します・・・。」
それだけ言って厨房から出ていく・・・。

「ハァ・・・また、やっちゃったんだな」
とぼとぼと歩きながら呟く剣崎・・・。既に傷は回復しているし、
「血」も洗い流した。
だがもうあの職場にはいられない。
「もうこれで何回目だろうな・・・。」

その頃、ある場所の食堂では・・・
「ハ～、おいしかった！！」
青い髪をした少女が、ものすごい数のお皿を前に満足そうな表情を

していた。
彼女の前に座っているオレンジの髪でツインテールの少女が、呆れた顔で返す。
「スバル、あんた食べ過ぎよ・・・。もうちょっとどうにかなんないの？」
「何言ってるの！これぐらい食べれなきゃ『仮面ライダー』みたいに強くなれないよ！」
「・・・ハイハイ分かったわよ。」
読者の皆様はとっくにお気づきのことだろう。
青い髪の少女、スバルは四年前に剣崎で助けられたあの姉妹の妹のほうである。
あれ以来彼女は、自分を助けてくれた謎の男『仮面ライダー』と、自分を安全なところまで運んで行ってくれた『エース・オブ・エース　高町なのは』を目標に努力して、魔導師となった。
オレンジの髪の少女、ティアナ・ランスターも、理由は違えど彼女同様に魔導師となり、現在は執務官を目指している。
二人はコンビを組んでおり、現在は『古代遺物管理部　機動六課』という部署に籍を置いている。
スバルの憧れであるなのはは、二人の所属する『スターズ分隊』の隊長である。

お皿やトレーを返してきた二人が残った昼の時間をどうしようかと思案していた時、
―突然サイレンが鳴りだす―
『市街地にガジェットが出現、スターズ３・４は市街地での迎撃のため先行して出撃、同じくスターズ１・２は散開した敵部隊を叩いてください！』

「行くわよスバル！」
「オーケー！！」

いきなりの出現要請に戸惑うこともなく、すぐに走り出すスバルとティアナ。

現場に到着した二人はすぐさま迎撃に向かう。
二人の前には『ガジェット』とよばれるロボット兵が十数機、
スバルが突撃して叩き落としていく、ティアナは後ろから正確に撃ち落とす。
流石に歴戦のエースたちが認めたコンビである、瞬く間にガジェットがスクラップと化していく。
しかし・・・
「ティア！後ろっ！！」
「・・・え？」
スバルが声をかけた時にはもう遅く、ティアナは突然現れた影に蹴り飛ばされる。
地面を数回跳ねるティアナ・・・
「大丈夫！？」
「こ、これぐらい平気・・・よ！でもあいつはいったい・・・」
そう言って二人はその影を見る。
『機械的なボディー』そこまではいい、だが他のガジェットとは根本的に異なるものがある。

「「人型・・・？」」

そう、今二人の前に立っているのは『人型のガジェットらしきもの』である。
今までに人型のガジェットなどは確認せれておらず、いきなり現れた『ソレ』に、
戸惑いを隠せない二人。

だが相手はそうではない。あくまで機械である謎のガジェットはそのプログラムに従うまま、二人に再び攻撃を仕掛けてくる。
「くっ！プロテクション！！」
すかさずスバルが防御魔法で対応しようとするが、相手の一撃が重すぎる。
防御の甲斐もなく飛ばされるスバル。
ティアナがサポートに入ろうにも、先の一撃が重すぎたようで立っているのがやっとのようだ。
「グッ、ガハッ！！」
その間にも攻撃され、ボロボロになっていくスバル。
どうにかして反撃しようと拳を突き出すが、容易く躱され後ろに回り込まれる。

「スバル！危ない！」
気付いたスバルが振り返るとそこには今にも振り上げた拳を叩きつけようとしている敵の姿。
（あぁ・・・もう終わりかなぁ・・・あの人にお礼・・・言えなかったなぁ）
諦めたスバルが目を閉じた・・・

―その瞬間―

『ｋｉｃｋ』
―聞きなれない電子音―
「ウェェェェェェイ！！」
―どこか聞き覚えがある声―

そして爆発・・・

攻撃がこないことを不思議に思ったスバルが目を開けたその先には・

・・

（あの時も、大体こんな感じで・・・って、えっ？ウソ・・・）

―自分に背を向けた青と黒の異形―

スバルとティアナが同時に言った。

「「仮面・・・ライダー」」

その後も異形・剣崎は残ったガジェットを破壊していく。

それは二人のスピードをはるかに上回っていた。

「これが・・・仮面ライダー」

ティアナが呟くと、

「やっぱり・・・かっこいい」

スバルが尊敬の眼差しを向けながらそう言う。

そして戦闘が終了する。

二人が気付いた時には、剣崎は既にスペイダーに乗ってその場を立ち去ろうとしていた。

「あっ、ちょっと待ってください！！」

すぐにスバルが彼の前に出る。そして・・・

「助けていただいて、ありがとうございます！あの、私のこと・・・覚えていますか・・・？」

（覚えてなかったらどうしよう・・・）

なんてことを考えて不安になるスバル。

だが異形はあの時のようにその姿を人間にして、自分に笑顔を向ける。

「あぁ、覚えてる。大きく・・・なったんだな。」

その瞬間、スバルの目から涙が溢れてきた。
そしてまた剣崎に抱き着く。剣崎はやはりあの時同様、戸惑いを隠せない。
おろおろする剣崎に向かってスバルが言った。

「あれから、あなたみたいに強くて優しい人になるために・・・たくさんっ・・・努力っ・・・してっ」

上手く喋れないスバル。
「『自分』を目指していた」という彼女の言葉に喜ぶべきか悲しむべきかよくわからない表情をしている剣崎。

「わたし・・・置いてかれてるのよねぇ」
そう呟くティアナの声は、誰にも届かないまま風に流されていくのであった・・・。

第二話～異形の戦士～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「それじゃあ、俺はここで」

なのは「あなたとは、まだ『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ』できてないんだけどなぁ・・・」

剣崎「『広瀬さんタイプ』だ・・・」

はやて「聞かせてもらおか？あんた等の事」

剣崎「俺たちは・・・」

第三話「剣崎の秘密」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）オレ、ドウナルンディスカ・・・？

（　作者）次回もお楽しみに～

第三話～新たな居場所？～（前書き）

すいません！予告通りだと軽く５０００文字を超えそうだったので二つに分けました。もう一つは既に完成していますが、明日か明後日にでも投稿します。
分けたためサブタイも変更です。

書いてから気が付いたんですけど、六課のみんないい人過ぎる・・・。
まぁいっか（いいわけないだろ！）

それは置いといて、『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります

第三話～新たな居場所？～

突然現れた『仮面ライダー』剣崎一真に再び命を救われるスバル。
泣きながら自分に抱き着くスバルをどうしたらいいのかわからない剣崎。
そして一人だけ置いて行かれているティアナ。

そんな状況を打開したのは・・・
「そっちも終わったみたいだね・・・ってどうなってるの？」
管理局のエースの一言だった。

「あ、あの時の・・・」
スバルを離してそういう剣崎と
「「なのはさん！」」
彼女・なのはを見て安心する二人。
なのはは剣崎をじっと見つめてそしてふと思い出す。
「あ～！あの時の！」
そう大声で言うとなのはは剣崎に詰め寄る。
そして・・・
「あの時はごめんなさい！」
深々と頭を下げた。いきなり謝られてビックリする剣崎。
スバルとティアナも呆然としている。
「・・・？」
「あなたの・・・姿を見て・・・怖いって思っちゃって・・・」
「・・・あぁ・・・」

そうだった。火災の時に、彼女ともう一人の少女、（フェイトと言

っていたような気がする）が自分を追うのを避けるために、自分はあえてジョーカーとなり、その場から立ち去った。
今謝っているのはその時、『それでも止めなかった自分』を悔いていたのだろう。

「いいんだ・・・あの反応が・・・普通だから」
チラッとスバルを見て剣崎は言った。
この四年間、スバルたち姉妹のように自分の姿を見ても気にしない人もいたが、
それでも大半は自分を見て怯えていた。
なのはの反応が普通・・・いやある意味正しい。
「それでもっ！あのときのあなたは・・・悲しい顔をしてたから。」
（気が付いてたのか・・・）
「いいんだ・・・俺はもう気にしてないから」
「でもっ・・・」
「いいんだ！！」
今度は少し強く言うと、流石になのはも黙ってしまう。
するとスバルが、
「あの・・・なのはさん？この人にも、協力してもらいませんか？」
「！？何言ってんのバカスバル！いくら助けてもらったっていったって、こんな得体のしれない奴・・・」
なのはとスバルに睨まれて黙るティアナ。
剣崎は、
「あ、あの・・・俺はもう帰ってもいいかな？」
そう言うと三人の視線が一気に集まる。少したじろぐ剣崎。それでも・・・
「それじゃあ、俺はここで」
そう言って無理にでも帰ろうとする剣崎。スバルが止めようとするが今回ばかりは無視する。
そしてスペイダーに跨ろうとしたその瞬間・・・

―殺気を感じた―

「今回は・・・逃がさないよ？」

後ろを振り向くとそこには、なのはが笑顔で人差し指をこちらに向けていた。

直感でそれがヤバいものであることを悟る剣崎だが、どうせ自分には・・・

「あなたは死なないらしいけど・・・動けないようにして連れて行っても・・・いいんだよ？」

背筋に悪寒が走る。考えが読まれていた。さらになのははこう言った。

「あなたとは、まだ『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ』できてないんだけどなぁ・・・来てくれるよね？」

「ウェ・・・ウェイ」

「返事は？」

「「「ハ、ハイ！」」」

なぜかスバルとティアナも返事をしてしまう。

なのははそれを見て納得したようで、殺気を消して少女？の笑顔に戻る。

「うん！よかった。来てくれなかったらどうしようかと思ってたの！」

（（（どうなってたんだ・・・））））

そんな三人の思いなど露知らず、なのはは歩き出す。そんな彼女を見て剣崎は、元いた世界で唯一逆らってはいけない女性の事を思い出す。

「『広瀬さんタイプ』だ・・・」

「なにか言ったかな？」

「イエッ！ナニモ！」
剣崎たちも、なのはの後について歩き出す。そして近くに降りてきたヘリにスペイダーごと乗り込んだ。

―ヘリの中―
（気まずい・・・）
剣崎はそう思った。今このヘリに乗っているのは、なのは・スバル・ティアナの三人に加え、操縦者であるヴァイスと呼ばれた青年と、先程から剣崎を睨みつけるヴィータと呼ばれた少女？・・・と自分の六人なのだが、誰一人として喋らない。
何事もなかったのかといえばそうでもない。
ヘリに乗り込んだとき既にいたヴィータに気付いた剣崎が、「こんな子供までいるのか？」と尋ねたところ、どこからかハンマーを取り出したヴィータに殴られかけた。
それから剣崎は、
『なぜか笑顔のままのなのは』
『キラキラした目を向けるスバル』
『半分疑い半分敵意を向けるティアナ』
『敵意丸出しのヴィータ』
以上の視線にさらされていた。ヴァイスは無言を決め込んだようだった。
（気まずい・・・）
再び剣崎はそう思うのであった。そんな六人を乗せて、ヘリは目的地へと飛んでいく・・・。

「ここが私たちの隊舎なの」
そう言われて見たその先には建物が建っていた。なかなかデカい。
ヴァイスがその場に残って、剣崎たち五人が建物の中へと入っていく。

どんどん歩いて辿り着いた部屋。少し薄暗かったが気にせず入っていく五人。
そこで待っていたのは・・・

「あんたがあの『仮面ライダー』さんかぁ、背はあるけど思ったより優男やなぁ」
「リインの想像よりもいい人そうです！」

なのはぐらいの少女と妖精・・・妖精！？

「妖・・・精！？」
「ああ、ちゃうちゃう。確かに妖精に見えるけど、リインは立派な人間で私の家族や」
「そうです～」
ホントに人間なのか？という疑問があるが、あえて口にしない剣崎。人間ではないのだろう。だが彼女らがそうだと言っているのにそれを意地でも否定しようとする剣崎ではない。それどころか二人に対していい印象を持った剣崎なのであった。
「ところではやてちゃん、この人の事なんだけど・・・」
「うんええよ。あの仮面ライダーさんが協力してくれるんやったら、私たちも心強いし」

なのはと、このはやてと呼ばれた少女は何を言ってるんだ？と疑問に思う剣崎。

「二人とも・・・いったい何を・・・」
「そういう事でよろしくなぁ。仮面ライダーさん・・・ってどうしたん？」
最後まで言えなかったので気を取り直してもう一度。

「だから何を言って・・・」
「「「よろしくお願いします。仮面ライダーさん！」」」
そこで更に被せてくる、なのは・スバル・リイン。

「あの・・・」
「まぁはやて（部隊長）が言うんだからしょうがないな（ないか）」
さらに被せるヴィータとティアナ。

「だからさっきから何言ってんだ！！」
軽くキレながらではあるがやっと言えた剣崎・・・だがここで衝撃発言。

「今日から私等と一緒に戦ってもらうんやけど、いかんかった？」

「・・・ウェッ！？」
「いいよね？」
「はい・・・」
なのはには逆らえなかった。
こうしてあまりにも突然に、剣崎の六課入りが決定されるのであった。

第三話～新たな居場所？～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

はやて「聞かせてもらおか？あんた等の事」

剣崎「俺たちは・・・」

剣崎「俺、こんなにたくさん『仲間』が」

第四話　今度こそ！「剣崎の秘密」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）あっ！作者がまた逃げた！

（；作者）すいませんでしたー！！

第四話～剣崎の秘密～（前書き）

はい！第四話です
今回剣崎がアンデッドについて説明するところは簡単に済ませました。
重要なのはそこではなく、剣崎が『言わなかった事』こそが彼の秘密なのですから。

そして今回は剣崎にちょっとした心の救済をｗ

それでは、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第四話～剣崎の秘密～

こうしていきなり本人の意思関係なしに決定された剣崎の六課加入だがはやての
「でもなぁ、素性のわからんような人を入れるほど、私は甘くないよ？」
という言葉に、剣崎の表情が固まる。
「とりあえずあなたの本当の名前を・・・」
スバルが言うと、流石に仮面ライダーでは通せないと判断し、
「剣崎・・・一真」

「なら剣崎さん・・・聞かせてもらおか？あんた等の事」
そう言ってはやてがモニターに数枚の画像を出す。
そこには、剣崎がこの四年間で封印したアンデッド達と、
それらと戦う剣崎（ジョーカー）の姿。
（ギクッッ！）
「き、気付いてたのか・・・」
「あれだけ事件を起こされちゃ、流石にこっちも気付くよ」
なのはが言った。
（ここで俺が話せば、アンデッドに襲われる人が、少しでも減るかもしれない・・・）
そう決意した剣崎は語りだす・・・

「俺たちはアンデッド。不死身の・・・生命体だ」

剣崎は語る。アンデッドの事、バトルファイトの事、自分が来た理

由、ラウズカードの事、残りのアンデッドのこと。そして自分がその中の一体・ジョーカーであること。
剣崎が語り終わると部屋は静寂に包まれる。
『これでいいか？』という意思を込めてはやてを見る、

「わかった！なら一真さんには私たちの手伝いと、アンデッドたちの封印を頼むわ！」
呼び方が『剣崎』から『一真』に変わっている。

「よろしくお願いします！一真君（さん）」
頭を下げるなのはとリイン。二人もやはり『一真』になっているし、なのはに至っては『君』である。

「一緒にがんばりましょう！一真さん！」
スバルが剣崎の手を握りながら目を輝かせる。

「よろしくな！一真！」
ヴィータでさえも変えてた。

「よろしく・・・」
どうやらティアナだけはスタンスを変えないようだ。
だが剣崎はそれを気にしない。
それどころか名前で呼んでくれる六課の面々に対する喜びの方が大きい。
「皆・・・あぁ、よろしくな！」
こうして正真正銘、剣崎一真は六課の仲間入りを果たすことになる。

だが剣崎は話していないことがある。それはある意味もっとも重要なこと。
剣崎は言えなかった・・・

―剣崎が元は人間だという事―

・・・彼がそれを話すのはまた後の話。

「そうと決まれば、さっそく一真さんの部屋を当てたらないかんなぁ」

それを聞いた剣崎は思い出す。

「そうだ！大家さんにこのことを伝えないと！それに俺の荷物も・・・」

短い間とはいえお世話になった大家さんにお礼を言わなければならないし、自分の持ち物も持って来なくてはならない。（ほとんど何も無いのだが）

「そっか、なら・・・」

「『仮面ライダー』が来てるって本当！？」

はやての言葉が突然の乱入者によって遮られる。

長い金色の髪の綺麗な少女。四年前、なのはと共に剣崎の前に現れた少女。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンがそこにいた。

「ちょうどいいとこに来たな～。フェイトちゃん、一真さんの荷物運ぶの手伝ったってな。」

こうしてフェイトの車で剣崎のアパートに向かうことになった二人。

「・・・あの・・・一真さん？」

フェイトもすでに『一真』である。
「なんだ?」
「あの時は・・・すいませんでした!」
「ウェッ!?・・・・・・フッ」
「何か・・・おかしかったですか?」
すこし顔をしかめて言うフェイト。それを聞いた剣崎は急いで首を振る。
「違うんだ・・・なのはにも、同じように謝られたから」
それを聞いて納得した表情になるフェイト。どうやら二人とも自分の事を気にしてくれていたようだ。剣崎はそれが少し嬉しかった。
アパートの前に着いたため、車から降りる二人。

目的の大家さんがちょうど外に出ていたので、早速声をかける。
「神崎さん!」
「ああ、剣崎君!ってどうしたんだいその娘?・・・ハハ~ン、あんたも隅に置けないねェ」
神崎という地球出身の大家の女性の言葉に、そういう事に縁のないフェイトは顔を真っ赤にする。
「ちちち違いますって!そ、そんな事より今日は話があって」
慌てる剣崎。

気を取り直して事情をを説明する。
「そうなのかい・・・。剣崎君ちょっと間は抜けてるけどマナーは守るし、素直でいい子だったから、いつまでもここに住んでくれてよかったのにねぇ・・・。」
「ありがとう・・・グスッ・・・ございます。」
「なんだい剣崎君!?泣いてんのかい?だめだよ~こんな綺麗な娘の前でかっこ悪いとこ見せちゃあ」

そんな事はないと首を横に振ってはいるが、また顔を赤くするフェ

イト。
これは相当色恋沙汰に縁がないようだ。彼女の仕事故だろう。

「まぁしょうがないね、剣崎君！これからも元気なあんたでいてくれれば、私は満足だから！」
「ウェイッ！！」

大家へのあいさつを済ませ、自分の部屋へと向かう二人。
だが剣崎はあることに気が付く。いつもなら新聞以外に何も入っていないはずのポストに、白い封筒が入っている。

「なんだこれ？いったい誰が・・・・・・！？」
その封筒の差出人は、自分が働いていたレストランの店長。
戸惑いながらゆっくりと封を切る剣崎。そこにはお金と、何通かの手紙・・・。

『剣崎君
君がいきなり居なくなちゃったから渡せなかったけど、今月分の給料です。
いつでも帰ってきたっていいんだよ。
津上』

二通目はいつも笑顔を絶やさない、サムズアップの似合う先輩から
『一真君へ
君がどんな秘密を抱えていようとも、それでも君は俺たちの仲間だから！
大丈夫！
五代』

他にも、ある先輩の秘伝の豆腐メニューだったり、剣崎の仕事中の姿を撮ったと思われるピンボケ写真（裏に『大体分かった』と書いてあった）などが入っていた。

それを見た剣崎は

「あれっ？・・・俺、こんなにたくさん『仲間』がいたのに・・・気付かなかったのか・・・」

涙を流しながらそう言う剣崎を、フェイトは優しい眼差しで見つめていた・・・。

「う～ん・・・こんなところかな？」

「サンキュー！少ないけど、全部俺がここに来てからの思い出だから。」

荷物を運び終えた二人は、車に乗ろうとする。

しかし剣崎が何かを思い出すと、アパートに向かって深々と一礼。

「ありがとう・・・ございました」

そう言って車に乗り込む。二人を乗せた車は隊舎への道のりを走ってゆく…。

「ここが今日から一真さんの部屋や！」

部隊長であるはやてに直々に案内された剣崎は、良い意味でビックリした。

「こんな綺麗で大きい部屋、ホントに使っていいのか！？」

「ええんやって、一真さんはいわば私等のお客さんなわけやし！」

「わかった！サンキュー！」

「・・・とは言ったものの、落ち着かないな・・・。広い部屋って四年ぶりだから・・・」

以前、虎太郎達と住んでいた屋敷を思い出す。あれとはかなり趣が違うが、広いことに変わりはないのだ。

「少し中を見ておくのもいいかもしれないな。」

まだ引っ掛かりはあるが、今日からここに住むことになる。構造を知っておくのも重要なのだ。

剣崎の探検（笑）が始まる・・・。

第四話～剣崎の秘密～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

はやて「あれまぁ、一真さんあんなところにおったんか。」

シグナム「貴様があの『仮面ライダー』か。」

剣崎「アンタを敵と思うことにする！」

次回「話を聞かない」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（ＯＭＯ）話を聞かないというのは、オレノコトカ？

（；ｏｗｏ）ウェッ！？ダディバナサン！？

（　作者）橘さんはまだ出ないんだから待っててください。

（；ＯＭＯ）次回も読んでくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

（；作者）彼の言葉は気にしないで、次回もお楽しみに～

第五話～話を聞かない～（前書き）

はい！第五話です！
今回のサブタイと内容の事なんですけど、私は『戦闘時、キレていると相手の話を聞かない』のがブレイドらしいと思うんですよね。
自分としてはまだ出し切れてない感じがしますけど。

前回の歴代ライダーの登場は、かなり好評でしたね！嬉しいです！
彼らはオリジナルですが、変身は精々剣崎の夢の中ですね。

あまりチェックができなかったので、誤字・脱字があるかもしれません。
その時はよろしくお願いします！

それでは、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第五話～話を聞かない～

思いつきで始まった剣崎の六課探検（笑）
何故だろう、はやてから話を聞いているはずなのに、ここの皆は剣崎に笑顔を向けてくる。
何人かはティアナのように顔をしかめるのだが、それでも何人かなのだ。
この四年間とはまるで逆の状況。
だが剣崎は疑問よりも喜びが前に出るタイプ（単純）である。
疑問はすぐに吹っ飛び、剣崎も笑顔で探検を続けるのであった・・・。

「・・・？ここは？」
辿り着いた施設。少し開いた扉から聞えてくる尋常じゃない音が気になって入ってみたのだが、
そこには・・・

「ウェッ？・・・外！？」
そこに広がるのはちょっとしたビル街のようなところ（むしろ廃墟に近い）。
だがこれが本当の外ではないことはすぐわかった。この世界の技術力は剣崎が元いた世界のレベルをはるかに上回っている。
そしてここに来る原因となった爆発音。
それが尋常じゃないレベルになってきたので剣崎は駆け出した。

―その頃部隊長室―

「あれまぁ、一真さんあんなところにおったんか。」

はやてとリインがモニターで訓練室に紛れ込んだ剣崎を見ている。

流石の剣崎でも見られていることは気付かない。つまりツッコんだりもしない。

―ＭＯ）＜ジー・・・　Σ（０ｗ０；）＜ナズェミテルンディス!?

だが今の剣崎の頭の中にはこの時（→ブレイド第一話）の光景が何故か浮かんでいたという・・・。

「いいんですかはやてちゃん?一真さんをあのままにして」

「ええんや。話や映像だけじゃあ、わからんこともあるしなあ。それに『仮面ライダー』と闘ってみたいって、前々から言っとったしなぁ。」

そう言ったはやては『ある人物』を思い浮かべ口元に笑みを浮かべる。

リインもはやての言葉の意味を理解して苦笑い・・・。

「なんだかわからないけど、とにかくっ!」

そう言って走り続ける剣崎。

先程から爆発音は止まらない。というより更に激しさを増しているようだ。

そんな剣崎の前にビルを突き破って一人の少年がぶっ飛ばされてきた。

「おい!だいじょうぶか!?」

突如現れた赤い髪の少年を抱えて声をかける剣崎。少年の体はボド・・・ボロボロだ。

「・・・・・・。」

少年は気絶しているようだ。

「エリオ、お前の実力はそんなものか？」

少年・エリオが飛ばされてきた方向から声が聞こえる。煙によって姿は見えないが声は女性のものだ。

「これくらいで音を上げるとは・・・」

ボロボロの少年をもう一度見ると剣崎は、

「おいアンタ！ここまでやることないだろ！」

すると煙が晴れて声の主が姿を現す。

長いピンクの髪をした、強い意志のこもった目を持つ女性

『ヴォルケンリッター烈火の将・剣の騎士シグナム』がそこにいた。

「・・・？何者だ貴様は」

「俺は剣崎一真！仮面ライダーだ！」

剣崎はなにを勘違いしたのか、どこからか一枚のカードを取り出す。

そのカードはスペードのＡ【ＣＨＡＮＧＥ】

剣崎と幾度となく戦場を駆け抜けてきたカード（アンデッドはこの世界の）である。

そして腰に【ジョーカーラウザー】を出現させると、

―両手の人差し指以外を軽く曲げる。右手にはＡを持っている―

―左手を腰に引く―

―右手の手の甲を相手に向けながら、腹の前からゆっくり左斜め上へと上げていく―

―そして右手が顔の前に来た瞬間、素早く手首を返して―

「変身(ヘンシン)！！」

そう宣言して右手のＡをラウザーに通す。

『ｃｈａｎｇｅ』

すると彼の姿は一旦ジョーカーになると、そこから少し変化する。元がブレイド故に緑の部分が青かった剣崎のジョーカー。

その肩・腕・胸・脚には銀の鎧が追加され、ラウザーのハートがスペードになる。

そして顔の上部にもスペードが彫られる。

これが剣崎が手に入れたもう一つのジョーカーとしての姿

【ブレイドジョーカー】である

「ほう・・・貴様があの『仮面ライダー』か。その実力がどれほどのものか、確かめるいい機会だ。ヴォルケンリッター烈火の将シグナム・・・参る！！」

シグナムが剣【レヴァンティン】で切りかかる。

それを見た剣崎は、自らの意思によって右手に一本の『剣』を召喚する。

それは過去にブレイドとなって使っていた【醒剣ブレイラウザー】に酷似していた。
だが剣崎の召喚したその剣の色は、彼の体のように青と黒と銀で構成され、トレイにはカードがない。さらに元トレイだったところの右側にはジョーカーラウザーをセットするためのスペースが空いている。
これは剣崎がブレイドジョーカーとなることで使用できる、
【ジョーカーラウザーB（ブレイド）】である。

剣崎はこの世界のカテゴリーA『ビートルアンデッド』を封印してからは、ブレイドに近いこの姿と武器で闘うようになっている。
これでパッと見は五分と五分の状態になった。

「「ハァァァァァ・・・」」

「「ハァッ!!（ウェイ!!）」」

（（なかなかやるな!!））
一度の攻撃で相手の大体の実力を推し量る二人。

「おい!なんであの子にあそこまでできるんだ!」
絶賛気絶中のエリオを示して剣崎が言った。
「ウッ・・・それは・・・」
シグナムは『模擬戦でつい熱くなって手加減が出来なかった』などとは言えなかった。

流石にヤバいと思ったのか、空中モニターにはやてが出てくる。

『あー・・・一真さん？シグナムは、つい・・・やなぁ』
「『つい』でこんなことやっていいと思ってるのか！？」
『でも、あれは模擬せ・・・』
「もういい！！」
そう言ってはやてとの会話を無理やり終わらせる。
人の話を聞かない。まさに『ブレイド』らしい事である。

「あんな事をするアンタを、俺は味方とは思わない！」
そう言って剣崎がラウザーを振るう。
その勢いにシグナムも後退せざるを得ない。
「俺は・・・アンタを敵と思うことにする！」

もとから能力で上回る剣崎の攻撃は、シグナムでも抑えるのがやっとだった。
このままなら剣崎の圧勝だった。
だが剣崎は、はやてからヴォルケンリッターの事を聞いていた。
ヴィータや目の前のシグナムが『守護騎士』だという事も聞いている。

そしてここで剣崎の余計なひと言・・・
「あんな事して、アンタそれでも騎士なのか！！」

（ブチッ・・・）
シグナムがキレた。
「いいだろう・・・実力がわかればよかったのだが・・・」

「私も、騎士を侮辱した貴様など・・・味方とは思わん！！」

その後のシグナムは凄かった。能力で上回る剣崎を、彼よりも遥かに多い経験でカバーする。
二人の戦いは更にヒートアップする。

そんな二人を見ているはやて以外の隊長陣とフォワード陣（一人を除く）
彼女らが今心配しているのは、剣崎やシグナムではない。

「「「「「「エリオ（君）、大丈夫か（なぁ）？」」」」」」
気絶したまま戦場の真っただ中に置かれてる少年、エリオ・モンディアルの心配である。

「なのは・・・行って来たら？」
「ははは・・・フェイトちゃんこそ、あの二人はフェイトちゃんの隊のメンバーじゃない・・・」
隊長二人は諦めている。

「こうなったシグナムは・・・止められねぇな」
スターズ副隊長も諦める。シグナムとは長い付き合い故、よくわかっている。

「あははははは・・・一真さん・・・」
「・・・ハァ」
フォワード年長二人も手を出そうとは思っていない。というか出せない。

「エリオ君・・・」
「キュウ・・・」
そんな中、真剣にエリオを心配している少女と子竜。
少女の名前はキャロ・ル・ルシエ
現在気絶中のエリオとともにフェイトが隊長を務める『ライトニング分隊』に所属している。
そして彼女の隣の白い子竜はキャロの使役竜、フリードリヒである。

だがもちろん二人の戦いを止める自信はなく、見ることしかできないのであった。

二人の戦いはまだまだ続く・・・

第五話～話を聞かない～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

シグナム「紫電・・・・一閃！！！」

ラウザー『ｍａｇｎｅｔ』

シグナム「どどど、どうすれば・・・」

剣崎「人間を護るのが・・・ライダーの仕事だ」

次回「フラグってやつなのか？」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（０Ｈ０）ついに剣崎さんも身を固めるんですね！

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）やっとか・・・

（０Ｍ０）俺と小夜子のようにはなるなよ・・・

（；０ｗ０）アンタ等なに勘違いしてんだ！？

（作者）お楽しみに～（彼は気付きませんからね～）

第六話～フラグってやつなのか？～（前書き）

はい、第六話です！
意外とペースを崩さずにいけるもんですね。
書いてる自分がビックリしますよ。

今回は書いてて楽しかったです。
皆さんに楽しんもらわなくちゃ意味がありませんがｗ

ここで発表があります！
本来の流れならとっくに終わっているはずの『ファースト・アラート』を、
『ホテル・アグスタ』の後に持っていきます！
剣崎の『ブレイド』としての見せ場を作りたいからです！
となるとギンガの再登場はいつにしようか・・・うーん・・・。

まあとにかく、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第六話～フラグってやつなのか？～

開始されてから何時間たっただろうか。

剣崎とシグナムは未だに戦っていた。

最初から見ていた隊長・フォワード陣以外の六課の面々も既に仕事を終え、
この戦いを見に来ている。
皆が剣崎やシグナムの応援をしていて、一帯がものすごい熱気に包まれていた。

当の二人も、この熱気にあてられたのか、その勢いは留まることを知らない。

「紫電一閃！」
シグナムが後ろに回り込んで切りかかれば、
剣崎が容易く受け流す。

『ｔａｃｋｌｅ』
「ウェェェェェイ！」
剣崎がカテゴリー４『タックルボア』の力を使えば、
シグナムはそれを避ける。

両者とも決定打が無いまま動き回る。

そしてビルの屋上に辿り着いた二人。

「フフフ・・・ここまでやるとは・・・な」
「アンタも・・・な・・・」

どちらも肩で息をしている。
ジョーカーである剣崎も、残りの体力はシグナムより少し多い程度である。

二人が同時に動かなくなる・・・

それに伴い周りは誰も声を出さなくなった・・・

そして二人が・・・動いた!!

―ガチャッ―
『ｋｉｃｋ』

「ハアァァァァ・・・」
剣崎が腰のラウザーをラウザーBにセット、カードをラウズする。
シグナムは気合いをためる。

剣崎のラウザーが輝き、目が赤く光る。
シグナムのレヴァンティンが今までとは比べ物にならない程の炎を帯びる。

「ハッ・・・・ウェェェェイッ!!」
剣崎がシグナムにカードによって強化されたとび蹴りを放つ。

「紫電・・・・一閃！！！」
シグナムは真っ向から攻撃を受け止める。
互いの攻撃がぶつかり、物凄い衝撃が拡がった。
自分たちの足元に亀裂が走るが、二人は気付いていない。

「ハァァァ・・！！」
「くぅ・・・・！！」

相手の炎を物ともせず、更に力を入れる剣崎。
その力に、シグナムを支える足場が崩れ去る。
（！？　不味い！）

「ウェェェェェイ！！！」

体制を崩した彼女に、剣崎の『ローカストキック』が決まる。
本来の半分以下の威力しか出なかったが、今のシグナムの意識を奪うには十分だった。

落下していく二人。だがシグナムは気絶しているのだ。
それに二人のいたビルはかなり高かった。
このまま落下すれば大怪我は間違いない。

そう考えた剣崎の判断は速かった。
彼は一枚のカードを取り出しラウズした。

『ｔｉｍｅ』
その能力は『任意の範囲内の時間停止』

周りの時が止まった中でさらにもう一枚のカードをラウズ

『ｍａｇｎｅｔ』
引力と斥力を操るそのカードで一時的に落下の止まったシグナムを自分のもとに引き寄せる。

だがそれと同時に剣崎の体からも力が抜ける。
二つのカードの効果が消え、落下が再び始まってしまう。

それでも剣崎は自分の体を下にすることで、シグナムにかかる衝撃を少しでも減らそうとした。

そしてその直後、彼の背中を凄まじい衝撃が襲った。

シグナムは強い衝撃で目を覚ますと、彼女の顔の前には、先程まで自分と戦っていた男・剣崎一真の顔があった。
彼の変身は既に解けていて、戦いに勝ったはずの彼は自分よりも怪我を負っている。
シグナムは自分が気を失う直前の事を思い出し、
（助けて・・・くれたのか）
その身を挺して自分を護ってくれた剣崎に感謝する。

だがここで自分の状態を考えると、
1，剣崎は落下する自分を何らかの方法で引き寄せると、彼女を庇う様に落ちた

2，今はその際の体勢のままである

3，つまり彼女は剣崎に抱きかかえられている（シグナムの体が上）

4，だが彼女の体は全く動かない

5，ということは剣崎が起きない限りはこの状態

そこまで導き出した瞬間、シグナムの顔が真っ赤に染まる。
彼女の周りに男がいなかったわけではない。
だが彼女の性格諸々のため、色恋沙汰には縁が全くない。（六課の主要メンバーは何故かない）
そんな自分が今日初めて会った男とこんな状況である。

「どどど、どうすれば・・・」
「・・・うっ、痛ってぇ・・・」
「!?　起きたのか?」
ここでやっと剣崎が目を覚ます。
すると彼はシグナムの顔を見て安心した表情になる。

「アンタ、大丈夫・・・だったか?」
「あ、あぁ・・・だがお前が・・・」
『貴様』が『お前』になったのは落ち着いたからである。

シグナムの言葉に、剣崎はシグナムを抱えた手の片方を離すと、その手を見た。
自分が人でないことを、ジョーカーとしての姿よりも身近に実感する『緑色の血』。
血が流れながらも、既に少しずつ回復している傷。

だが新たな、そして揺るがないかもしれない居場所を手に入れた剣崎には、

あまり悲しい事ではなかった。
だから彼は、弱々しいが今までで一番明るい笑顔をシグナムに向けてこう言った。

「俺の事は気にしなくていいんだ。人間を護るのが・・・ライダーの仕事だ」

（強いんだな・・・お前は・・・）
そんな彼の笑顔を『超』至近距離で見たシグナム。
彼の『人間でありライダー』としての心を認めると同時に、
彼女の心には得体のしれない感覚が渦巻き始める。
（そ、それにしてもなんだこの気持ちは!?）

とにかくこの気持ちを振り払うために、
「と、とにかく!・・・この体勢・・・どうにかしてくれないか・・・？」
つい口走ってしまった。言ってしまってから何故か後悔したシグナム。

「・・・あっ!ごっ、ごめん!!」
やっと異様な状態だということに気が付いた剣崎が謝る。
そしてシグナムを、まともな壁を背に座らせる。

「大丈夫か?アンタこそ動けないんだろ?」
「これくらい、少し休めば大丈夫だ・・・ってなにを!?」
シグナムが動けないのは自分の所為でもあると思った剣崎は、彼女を抱え上げる。

―お姫様抱っこで―

「っ！？わわわわ私は大丈夫だと・・・」
「駄目だ！そうなったのは俺の所為でもあるんだから！！」

剣崎はそう言って真剣にシグナムを見た。
これには流石に勝てないシグナムであった。

「・・・わかった。よろしく頼む・・・」
真っ赤にした顔を背けながらシグナムが言った。

剣崎はシグナムの様子には気付かずに、嬉しそうに
「ウェイ！！」
そう言って歩き出した・・・。

「大丈夫かなぁ、二人とも。」
こちらは観客サイド。
「大丈夫や。二人とも強いしなぁ。」
はやてやリインもこちらに来ている。

「おい！出て来たぞ！」

観客の誰かの発した一言で、その場の全員が視線を移す。
そして出て来た二人の状態を見て・・・

「「「

あのシグナムが、剣崎にお姫様抱っこされた状態で出てくることなど、
ここにいる六課全職員の、誰が予想しただろうか。
いや、一人だけ・・・
（ニヤッ・・・）
笑みを浮かべた狸がいるが・・・。

「「いいな～、憧れるな～。」」
なのはとスバルがそう言うと、そこにいるメンバーも口々に同意する。
先程笑みを浮かべたはやてとて例外ではない。

フェイトは同意しながらも、剣崎たちを見て複雑な顔をする。
だが自分の顔に気が付くと、すぐに顔を振る。
彼女も自分の気持ちがよくわかっていないようだ。
まだ剣崎との接点が少ないことが理由だろう。

「ヒューヒュー！やるな新入り！！」
誰かのこの台詞で、全員がそれに乗りだした。

「・・・やっぱりやめるわけには・・・」
「いかない！」
シグナムが、仲間の表情やその他諸々に気が付いて、剣崎に提案する。
だがよくわかってない剣崎は、すぐに拒否した。
（ハァ・・・ならば）
「もう少しだけ・・・よろしく頼むぞ・・・『一真』」

「ウェッ!?今俺の事、名前で呼んでくれたのか?」
「うるさい!はっ、早く行け!!」

「わかったよ、シグナム!」
剣崎の笑顔＋名前を呼んでもらったシグナムが再び真っ赤になる。
だが少しだけ、掴まる腕の力を強くしたシグナムなのであった。

こうして何時間も続いた二人の戦闘は終わった。

だが、
「あれ?エリオ君は・・・?」
「キュウ?」
キャロとフリード以外、エリオの事を思い出した者はいなかった。
あのフェイトですら忘れていたようで、
エリオは二十分後、剣崎に発見された時よりも傷が増えた状態で、
やはり気絶しているところを発見された。

こうして今度こそ、今日という日の事柄すべてが片付いたのであった。

第六話～フラグってやつなのか？～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「で、なんの用だよ？こんな朝っぱらから・・・」

はやて「フフン、一真さんもそんな態度とってられんくなるで～？」

シグナム「そっ、そんなことは・・・ありませんが・・・」

剣崎「ウェイ！！」

次回「新しい仕事」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（０Ｈ０）それにしても今回の剣崎さんは鈍すぎますよ！

（０Ｍ０）俺が言えたことではないが、睦月の言うとおりだ。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）本人があれではな・・・

（作者）始にまであそこまで言われて・・・ドンマイ剣崎！

第七話～新しい仕事～（前書き）

はい、第七話です・・・。
何にもない回ですね・・・。

次回はあいつが出るんですけど、それが誰かは予告を見ていただければ一目でわかりますｗ

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります・・・。

第七話～新しい仕事～

剣崎とシグナムが行った戦闘が終わり、
その次の日の朝・・・。

ここは剣崎の部屋、今そこには彼以外に三人いる。
「一真君、起きないとだめだよ～」

「虎太郎？う～ん、あと五分・・・」
剣崎は気が付かない。この呼び方は虎太郎ではない。

「一真さん、ベタすぎだよそれ！っていうか早く起きて！」
「広瀬さん・・・まだ早いってば・・・」
広瀬ももちろん一真とは呼ばない。
「とにかく起きてもらわないと・・・・・・なのは？」

「一真君がどうしても起きないっていうなら・・・ニヤッ」
なのはが笑みを浮かべる。
彼女から発せられる雰囲気に、剣崎の眠気も一気に覚めた。
「おおお起きます起きます！だから待て！！」
「よかった～。一真君が起きてくれなかったらどうしようかと」
（（（いったいどうなってたんだ））））
なのは以外の三人が同時に思う。

ちなみに剣崎を起こしに来たのは、なのは・スバル・フェイトの三人。
そして剣崎とスバルは、

（（あれ?昨日もこんなことが・・・））
と、剣崎を六課に連れてくる時のことを思い出していた。

「・・・それにしてもなんだよ皆、俺に用でもあるのか?」
「あぁそうそう、はやてちゃんが一真君を呼んで来いって言ってたよ?」
「はやてが?・・・う~ん、なんだろう?」

「とにかく早く行かないといけませんよ!」
「そっか・・・わかった!行ってくる!」

そう言って剣崎は部屋を飛び出す・・・パジャマで・・・。
一分後に気が付いて部屋に戻って来たとき、三人とも笑っていた。

今度こそ着替えて（もちろん三人は部屋から出して）部屋を出る。

そして部隊長室の扉をノックし、返事があったので部屋に入る。
するとそこにいたのは、
「シグナム・・・とはやて、おはよう」
「あっ、ああ、おはよう・・・」
「私はついでなんやな・・・ニヤッ」
挨拶をしたら顔を赤らめるシグナムと、それを見てニヤニヤするはやて。

「リインもいるです~!」
「あ、ごめん!おはようリイン!」
「おはようございます!一真さん!」
そしてリインの三人。

「で、なんの用だ?こんな朝っぱらから・・・」

少々イライラした様子の剣崎。起こされ方があれでは無理もない。
「フフン、一真さんもそんな態度とってられんくなるで～？」

そう言ってはやてがモニターに出したのが・・・
「これ、昨日の・・・だよな？」
「そう！昨日二人がボド・・・ボロボロにした訓練室や」

そこには昨日、剣崎とシグナムが戦った訓練室・・・だったものが映っていた。
これでは使えたものではない。

「「・・・あぁ・・・」」
張本人達が同時に明後日の方向を向く。

「これじゃあ使い物にならんな～」
「「はい・・・」」

「反省は、しとるみたいやけどなぁ？」
「「はい・・・」」
剣崎とシグナムは体を縮ませる。
だが剣崎は元の身長のせいで意味がない。

「シグナムはともかく一真さんは・・・来ていきなりこんな事されるなんて思いもせえへんかったわ～」

「うぇい・・・」
かなり元気のない剣崎。
自分の責任だということがよくわかっているからこそである。
「ここ（六課）を追い出す・・・のもありやけど・・・」
「待ってください主はやて！それはあまりにも・・・」

シグナムはそう言って剣崎を見る。
彼の表情からは、諦めと寂しさが読み取れる。
「どうせ俺は・・・ハァ・・・」
どこぞの兄貴のような台詞を呟く。

「ホホ～、そんなに一真さんに出て行って欲しくないみたいやなぁシグナム？」
「そっ、そんなことは・・・ありませんが・・・」
はやての言葉に焦りながら顔を俯けるシグナム。
そんな彼女を見てはやては口元に笑みを浮かべると、二人に言った。

「・・・っていうのは半分冗談なんや～。確かにちょっとだけそれも考えたけど」
「「・・・はいっ！？」」
「イヤ～二人とも本気にしすぎや。特に一真さんなんて」
「ウェッ！？それならなんで呼んだんだ？」

剣崎がもっともな理由を述べる。
確かに、単なるからかいならわざわざ呼び出す必要もないと思う。

「ホントのところは、今日は一真さんに提案があってやなぁ」
「どういう・・・」
「一真さんには、六課（ウチ）の食堂で働いてもらいたいんや！」

―・・・・・・―

「どうしてそうなったんだよ・・・」
「フェイトちゃんから聞いたで？レストランで働いとったって、なぁ？」
はやての言葉に、フェイトが部屋に入ってくる。

「あの・・・ごめんなさい！一真さんに・・・出て行ってもらいたくなかったから。」
その言葉にシグナムの眉が『ピクッ』っと動いたが、だれも気が付かない。

剣崎はフェイトに歩み寄る。
フェイトは怒られると思ったのだろうか、俯いて目をつぶる。
だが剣崎は・・・
「ありがとう・・・フェイト」
「えっ？」
「フェイトのおかげで追い出されなくて済んだんだ。お礼を言わなくてどうするんだよ？」
「いや・・・だから追い出す気はないって・・・」
はやてが訂正を入れるが、剣崎は聞いていない。
「よし！これで追い出されなくて済んだぁ！」
一人ではしゃぐ剣崎、『アンデッドというのはこうも人間らしいのか？』と疑問に思うその場の面々だが、それよりも彼が六課に残れる方がうれしいので、そんなことは忘れることにした。

だが！
「・・・一真さんは、ここでは誰が一番偉いんかわかっとらんようやなぁ・・・」
ドスのきいたはやての声に空気が凍る。
「は、はやて？」
「昨日といい今日といい、とにかく私を無視して・・・なぁ？」
「はやてサ～ン？」
「やっぱり一真さんは、本部に引き渡しを・・・」
「勘弁してください！」
堪らなくなった剣崎が頭を下げた。

この時の剣崎の頭の中には、
『オロ○ミンCを盗った万引き犯と間違われて、警察に通報されそうになっている』
かつての自分の姿が浮かんでいたが、彼以外が知る由もない事である。

「なんでもするから！だから警察だけは・・・」
彼も『警察』と口にしているから、あの出来事はかなり堪えたのだろう。
偶然にもこの場のメンバーは全員昔は地球で過ごしているので、かなり必死な彼を見て苦笑い。
リインだけはよくわかっていないようだが・・・。
はやてはそんな彼を見て、またもや口元に笑みを浮かべる。
「なんでも・・・やな？」
「ああ、なんでもだ！」
「ホントに、ええんやな？」
「度合いによるけど・・・」

「嫌なら追い出すけど、それでもええんやな・・・？」
「わかりました・・・」
剣崎も、無一文・トカゲが晩飯な生活は勘弁してほしい。
死ぬことはないだろうが、『剣崎一真』としての自分を保つためには、
人らしい生活をしたいのが彼の本心である。

「なら決まりや！一真さんは食堂のコック兼、私の忠実な僕（しもべ）っていうことでよろしくな～」
「うぇ、ウェイ！」

「し、しかし主はやて。僕（しもべ）は流石に・・・」

「それは冗談や。でも、一真さんさえよければいっその事、八神家の新しい家族でもええんやけど。・・・なぁシグナム？」
「それは・・・私も賛成です・・・どうだろうか・・・一真。やはり・・・嫌か？」

二人の言葉に剣崎は一瞬だけ嬉しそうな顔をする。
だが彼はすぐその顔を俯かせた、
「すごい嬉しい。でも俺じゃあ、皆の家族には・・・なれないから・・・」
「お前が人間でない事など、私たちは気にしていない！それでも・・・」
「サンキュー。でもその気持ちだけで・・・俺は嬉しいから」
そう言って剣崎は部屋を出た。

その姿を見ていたはやては、彼の言動に違和感を感じた。
だが彼女がその違和感の理由を知るのは、まだ先の話。

とにかくその日から、剣崎が食堂で働くことになった。
彼の料理は六課の面々に大好評だったようで、剣崎は笑顔を取り戻した。

第七話～新しい仕事～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ザフィーラ「どういうことか、詳しく聞かせてもらおう」

剣崎「ザフィーラ・・・今から話すことは」

矢沢「フォォォォォォォォォウ！！」

剣崎「それにこいつ、かなり卑怯だからな！」

次回「あいつはやはりあいつだった」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回は少し遅れるかもしれません。矢沢の喋り方めんどくさいですね。

とにかく次回も頑張ります！

（＾Ｕ＾）いい心構えだ、感動的だな、だが無意（ｒｙ

『ライトニングソニック』

（；ｏｗｏ）ウェェェェェイ！！

（；作者）流石ニーサンだ、予告に介入するとは・・・。

気を取り直して、次回もお楽しみに！

第八話～あいつはやはりあいつだった～（前書き）

結局あまりオーバーしませんでした。
第八話です。でも短いです。

しかし今日からパソコンが何故か封印されてしまうという事態が起こるようです。

『家族』のパソコン故に巻き込まれるなどというので、キレてしまいそうなぐらいイライラしますが、この次の話は既にできていますので、隙を見つけられたら投稿します！

感想がすぐに返せないかもしれません。申し訳ありません。
しかし書いていただいた感想は絶対返すのが作者として当然のことです。
遅れても必ず返しますので待っていてください。

未来ライダーさんへ、目標は・・・次回ということでｗ

それでは
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第八話～あいつはやはりあいつだった～

あの日から剣崎が食堂で働きだしてからというもの、六課の食堂は大賑わいとなった。
剣崎自身のほどほどの腕と、レストラン『ＡＧＩ○Ω』で磨いてきた技術は、
六課の職員全員を呻らすほどであった。

特に『エースランチ』（レストランのある先輩と考えた）は好評で、起用したはやても大満足のようだ。

あのティアナでさえ、彼の料理をかなり評価している。

自分の料理がここまで評価されると思っていなかった剣崎は、最初は戸惑っていたものの、次第に本来の明るさを取り戻していった。

シグナム&フェイトはとうと、誰かと一緒に食べに来たときは必ず、一人でみんなの分を何回もかけて取りに来るようになった。
シグナムの行動はまだしも、
『いつの間にフェイト（さん・隊長）を落としたんだ?』
と、六課ではもっぱらの噂である。
二人は剣崎の事については否定しているが、なにしろその時の顔が真っ赤に染まっているので、説得力がまるでないのだが・・・。

とにかくあの時場にいた四人は、剣崎の様子が元に戻った事につい

て喜んでいるのは確かなのである。

「お疲れ様剣崎君。もう上がってもいいよ～。」
「ウェイ！お疲れ様でした！」
剣崎の一日の仕事が終わる。
彼を包む充実感は、レストランで働いていた時と同じくらいだ。
それだけ今の彼は六課（ここ）を好きになれたという事だろう。

自分の部屋に帰りながら、剣崎は思う。
（俺、ここの皆に会えてよかった・・・）
それもこれも、四年前この世界に飛ばされてから、彼が自分の中に眠る『ジョーカー』をしっかり押さえて来たからであろう。
「始も・・・こうだったのかな？」
ある親友を思い出す。
最初こそ相容れず何度もぶつかり合ってきたが、今の始の人間に対する思いは本物だ。
栗原親子と仲良くやっているだろうか・・・。
いやそんな心配もいらないだろう。
そうでなくては・・・

「俺がこうなった意味がないから・・・。」
つい口に出た思い。

「どういう事か、詳しく聞かせてもらおう・・・一真」
それは聞かれていた。驚いて振り向く剣崎の前には、
ヴォルケンリッター盾の守護獣（騎士）ザフィーラがいた。

ついでに今の彼は人型。剣崎が彼を知ってからは、その姿でいて欲しいと頼み込んだからである。そこには騎士以前に人間として生き

て欲しいという彼なりの思いがあった。

「ザフィーラ・・・いったい何のこと・・・」
「とぼけるな・・・。お前は、まだ隠していることがあるな？」
完全に見抜かれている。
こうやって訊いてきたのも前々から剣崎の言動に、はやて同様違和感を感じていたからである。さらに先程の剣崎の発言で確信した。

―剣崎が、一番大事な事を自分たちに隠していることに―

「そんなことは・・・」
「一真、お前の事は皆(みな)が信用している。だが、お前が我々を信用しなくては、それは成り立たない。聞かせてくれ、本当のお前について。」
彼らしくない。本来ザフィーラは寡黙な男だ。
だがそんな彼がここまで言っているのは、
それ程に自分の事を信じてくれているということだと剣崎は思う。

だから決意した。

「ザフィーラ・・・今から話すことは」
「承知している、誰にも話さない。もちろん主にも」
「・・・ありがとう」

そして剣崎は語りだした。
「俺は・・・『元』人間だ。剣崎一真こそが、本当の名前なんだ・・・。」
彼は語った。

自分がただの人間だったこと。

ライダーシステムによって変身した姿のことを、『仮面ライダー』と呼ぶこと。

仲間や親友の事。

ライダーになった理由。

あの戦いの事。

自分の決断。

そして戦いの最後、自分が『ジョーカー』になった時の事。

全てを語り終えるまでにどれほどの時間が経ったのだろうか。

だがザフィーラは最後まで彼の話を聞き続けた。

「これが・・・真実だ・・・」

「そうか・・・よく話してくれたな。お前の『真実』は、お前が自分から話すその時まで、この盾の守護獣の誇りにかけて護ろう。」

「サンキュー・・・じゃあ俺、もう寝るから。おやすみ」

その言葉にうなずいたザフィーラを見て、剣崎は部屋への道を再び歩き出した。

次の日の剣崎は、今までを遥かに超えた明るい彼となった。

彼が六課の面々に真実を話すことも、そう遠くないのかもしれない。

だが、そんな明るい日々がいつも続くわけではない。

突然鳴り響くサイレン

『アンデッド出現を確認！これは・・・カテゴリーQです！』

『更にガジェットも確認！ライトニングも出撃してください』

聞いた瞬間走り出す。

スペイダーで現場に到着すると、フェイトたちと合流。
ガジェットは確認できたが、肝心のアンデッドが確認できない。
剣崎が自分の感覚を使い周囲を探ると・・・

「そこだな・・・」
剣崎が見たのはあるビルの角。
そしてそこから・・・

「フォォォォォォォォォ！！」

「やっぱりそこは同じなのか・・・」

一人の男が奇声を上げて出て来た。
この男こそカテゴリーQ『カプリコーンアンデッド』なのである。
ちなみに今のの姿（人間態）のときは『矢沢』と名乗っている。

「この感じ、あんたがジョーカー・・・だねぇ？」

相変わらず嫌な雰囲気の奴だ。

まさか別世界なのにここまで同じだとは・・・。剣崎の肩がガクッと下がった。

「一真さん・・・あいつがホントにアンデッドなんですか？」
隣にいたエリオが剣崎に尋ねてくる。
その言葉に剣崎が再び警戒をし始める。
「油断するな・・・こいつはこれでも上級アンデッドだ。それにこいつ、かなり卑怯だからな！」

以前戦った時の記憶が甦る。
あの時のカプリコーンは、ほかのアンデッドと手を組み虎太郎を人質にとった。
今回は相手が一人だが、油断は禁物だろう。

「皆！ここは俺に任せてガジェットを！」
「「「了解！」」」

「いいのかい？一人でさぁ！」
「お前は・・・俺が封印する！・・・変身（ヘンシン）！！」

『ｃｈａｎｇｅ』

「なめんじゃないよ！」

ブレイドジョーカーとなり突撃する剣崎。
相手も本来の姿を現し、既に戦闘態勢だ。

別世界とはいえ、既に対戦経験のある剣崎が有利に戦えるはず・・・だった。
だが剣崎はその足を止める。

何故なら・・・

「ウェ！？」

―カプリコーンの右腕が、変化し始めているから―

右腕の変化が終わる。

そしてその腕は・・・

「ハートの・・・カテゴリーQ・・・？」

カプリコーンの右腕は、かつてカプリコーンと手を組んだアンデッド、

ハートのカテゴリーQ『オーキッドアンデッド』のものだった。

今のカプリコーンは、まるで合成アンデッド『ティターン』のような状態だが、

『なぜこの世界でこんな事が起きるのか』

剣崎は混乱するのだった・・・。

第八話～あいつはやはりあいつだった～（後書き）

予告の前に一つ。
矢沢は融合したから更に口調が女に近くなった・・・という解釈でお願いします。

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

カプリコーン「なんだよっ！こいつムチャクチャ強いじゃない！」

剣崎「フェイト！シグナム！」

シグナム「やめろ！一真ではなく、私を・・・」

剣崎「何言ってんだ！！」

次回「仲間だから」

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（Ｘ）嫌いなんだよ・・・早く投稿しない作者は！

（０Ｍ０）『何言ってんだ！』は俺の台詞（もの）だあああああ！！

（作者）どんどんカオスになっていく・・・ってなんで草加？

第九話～仲間だから～（前書き）

少し遅れて第九話です！

目標を決めました！

『まずは目指せ！お気に入り２００人！！』

ということで頑張ります！

つまり、『ブレイド』か『なのは』どちらかにしか興味の無い人も、これを読んでお気に入り登録をしてもらえるように頑張る。

それが私の仕事だぁぁぁ！！

おっと剣崎のソレがうつってしまった・・・。

目標も決まったところで！

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第九話～仲間だから～

突然起こったカプリコーンの『変化』に驚きを隠せない剣崎。
対するカプリコーンは、そんな剣崎を見て笑い声をあげる。

「あはははは！ただ戦っちゃぁ負けるんだから、これぐらいしないとね！」

「お前・・・どうやって・・・・」

「答えるわけないじゃん！馬鹿じゃないの！？」

そう言って剣崎に攻撃をしかけてきた。
咄嗟に防御しようとするが、
「グッ・・・」
圧倒的に、剣崎が押し負けた。

もともとジョーカーは、アンデッドの中でも戦闘力が高く、更に？Ａ『ｃｈａｎｇｅ』を使ってブレイドジョーカーとなっている今の剣崎が押し負けるなど、ありえない話だ。

いくら、相手が？Ｑ『オーキッドアンデッド』の力を手に入れていても、それなら最大でも剣崎を少し上回る程度。

圧倒的な差が・・・あるはずがない。

なら何故こうして剣崎が負けているのか。
考えられる事は一つ

―融合後に更に手を加えられている―

それならば、同じQ（クイーン）である二体が融合しているのに、カプリコーンが自分を保っていることにも説明が付く。
「でも・・・いったいだれが・・・」
だがそんなことまで考えてはいられない。
「ボーっとしてる余裕あんの！？」
カプリコーンの拳が剣崎を捉えた。
後退させられる剣崎、だがそれが剣崎の戸惑いを払った。

「そうか・・・相手がどんなに強くても、アンデッドを封印する！それが俺の仕事だ！！」

正確にはそれは違う。今の彼は六課の食堂のチーズ（フ）なのだ。
だが剣崎の中では、昔も今もそれが彼の『仕事』だ。

言葉と共に攻勢に転じる剣崎。
その勢いに次第に押され、ダメージを負っていくカプリコーン。
「なんだよっ！こいつムチャクチャ強いじゃない！」
余裕の無さから口調も男のソレに戻っている。

だがこの戦い、ただでは終わらなかった。
カプリコーンの視界に二人の『人間』が映った。
（チャ～ンス・・・これで！）
すぐさま右腕の蔦を伸ばす。

「えっ？」
「何っ！？」
絡めた蔦を一気に戻し、その二人を自分の前に出した。

「フェイト！シグナム！」
捕まったのはフェイトとシグナム。
二人がすぐさま蔦を振りほどこうとするが、ガジェットが数体寄ってくる。
それによりＡＭＦの範囲内に入り、魔法による離脱ができなくなる。
しかし二人は高ランク魔導師だ、それでも離脱を試みる。
だが
「鬱陶しい・・・ジッとしてな！！」
蔦が二人の首に巻きつき締め上げた。
「アッ・・・グッ・・」
「こ・・・これ如きで・・・」
「こいつ！！」

剣崎がラウザーＢで切りかかろうとするが・・・

「いいのか？これ以上攻撃するようなら・・・二人は・・・」
そう言って二人の首を更に締め上げる。
「さあ・・・どうする？二人の代わりにでもなる？」
剣崎を試すようなカプリコーン。

「当たり前だ！！」
剣崎は即答する。

「へぇ・・・ならまずは人間態になってもらおうかなぁ？」
「わかった！」
そう言って剣崎は変身を解いた。

アンデッドであっても、剣崎が元人間だという事には気が付かないようだ。
ジョーカーが人の姿になるときは、ハートのカテゴリー2『ヒューマンアンデッド』が必要だが、そんなことはこのカプリコーンは知らないのであろう。

変身を解いた剣崎を見て満足そうな仕草をすると、
カプリコーンはそのまま剣崎の腹を蹴る。

「ガハッ・・・」
崩れ落ちる剣崎。
上級アンデッドなら、人間態のままでも下級のアンデッドを一蹴するほどの力を持っている。だが剣崎はジョーカーに変身しないとその力は発揮されない。
つまり今の彼は、不死身だが能力などは人間のレベルなのだ。

剣崎は、どこぞの誰かさんのように『鍛えてますから。シュッ』なんてことは無い。

そんな剣崎を、カプリコーンは何度も蹴る。
「『仮面ライダー』、いやジョーカーも大したことないねェ！」

「一真（さん）！！」
フェイトとシグナムが叫ぶ。二人はまだ蔦に捕まっている。
カプリコーンは蔦をどんどん伸ばし、距離があっても二人を逃がそうとはしない。

『自分達のせいで剣崎が傷つく』
それは二人にとっては最悪の事だった。

「やめろ！一真ではなく、私を・・・」
『私を攻撃すればいい』
そう言うはずだったシグナムの口が、
他でもない剣崎の怒声によって塞がれる。
「何言ってんだ！！」
「でも・・・そのままじゃ一真さんが！」
フェイトが言う。だが、
「いいんだ！これも！・・全部俺のせいだから！」
そう、剣崎はこうなる可能性はあると考えていた。
なのに二人は人質にとられてしまった。
『全ては自分が招いたこと』
そう思ったからこそあえて攻撃を受け続ける。
いや、少し違う。『剣崎一真』を知っている者ならだれでも言うだろう。
『剣崎一真は仲間を絶対に見捨てない。誰よりも仲間の大切さを知っているから』
「二人は、俺の仲間だ！！・・・ウッ・・・」
あくまで自分を犠牲にする彼を見てフェイトが涙を流し、シグナムは唇を噛み締めた。
「あ～あ、飽きた。次はこの二人で・・・」
「！？どういうことだ！二人には手を出さない約束だろ！」
「やっぱり馬鹿だねェ。そんな約束守るわけないだろうが！」

そう言って剣崎をぶっ飛ばす。そしてそのまま蔦を戻していき、二人を自分のもとへ引く。

そして手を振り上げた。

「や、やめろ！フェイト！シグナム！」

剣崎が怪我だらけの体をおして駆け出すが、今の彼では間に合わない。

そしてフェイトとシグナムも目を瞑った瞬間・・・

―雷を纏った赤き閃光が駆け抜けた―

「ギャン！いきなりなんなのさぁ・・・ってあれ？」

いきなり攻撃されたカプリコーンが視線をフェイトたちに戻す。

二人はまだ捕まってはいる。だが、

「ガジェットが・・・」

二人を囲んでいたガジェットが見事に破壊されていた。

そして煙を上げる残骸から背を向けて怒りのオーラを放つ少年。

「よくもフェイトさんたちを・・・」

「「エリオ！！」」

別の場所でガジェットと戦っていたエリオがここにいるという事は・・・

「一真さん、大丈夫ですか？」

「ああ・・・サンキュー、キャロ」

キャロが剣崎の隣にしゃがんで彼にヒーリングをしている。

ついにライトニングが集合した

「エリオもキャロも・・・いいところに来たな。」
「本当に・・・いいタイミングだったよ二人とも。」
「なに余裕みたいなことを・・・あ？」
カプリコーンの前には、
捕まっているにも関わらず異様な殺気を放つフェイトとシグナムがいる。

「「よくも・・・」」
二人の声が重なる
「ヒイッ！・・・あっ！」
カプリコーンが二人から離れるが、その時に蔦も解いてしまった。

「「一真（さん）をやってくれたなぁあああ！！」」

「二人とも・・・すごい気迫だ」
「俺・・・死なないって言ったのに・・・」
「一真さん・・・あれはそういう意味じゃないと思います・・・」
「キュク～」

「バルディッシュ！！」
『Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ』
「レヴァンティン！！」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ』
それぞれのデバイスが形状を変化させる。
バルディッシュが死神を連想させる鎌に、
レヴァンティンが蛇を連想させる蛇腹剣に、

どちらもこの形態のためにはカートリッジを一個消費する。

「「ハアアアアアア・・・」」

「「ハァ！！」」

二人の放つ攻撃が、カプリコーンの蔦を見事に切り裂く

「いったい・・・いったいなんなのさこの二人は！？」

蔦を切られ、フェイトとシグナムの気迫に圧されて後退するカプリコーン。

「すごいんだな・・・フェイトも・・・」

シグナムとは以前戦ったが、フェイトの実力をいまいち把握していなかった剣崎が、感嘆の声をあげる。あのシグナムの上に立つのだから、どれ程のものなのか気になっていた。

それにしても、今のシグナムは、剣崎と戦ったあの時よりも力を感じる。きっとこれが恋する乙女・・・いや女の力なのだろう。

フェイトも実はかなり本気である。これもやはり恋する乙女（こっちは正真証明）のちかｒｙ

剣崎には理解できないだろうが・・・。

「・・・ってそうじゃない！エリオ、キャロ！俺にいい考えがある！」

妙に自信満々な剣崎。だが剣崎は知らないのだろうか。

過去にこう言っては、ことごとく失敗する司令官がいたことを。

彼がそうなるのかは別としてだが・・・。

「「？」」

「キュク？」

「いやフリードは今回はいいんだけど・・・」
「キュウ・・・」

そして剣崎は、カプリコーンを封印するための『アイデア』を二人に告げた。

第九話～仲間だから～（後書き）

（ｏｗＯ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

キャロ「それ！いいと思います！」

フェイト＆シグナム「「許さん！！」」

エリオ「一真さん！いいですか！」

剣崎「は・・じ・・・め？」

次回『決着と再会』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）俺の出番だな・・・。

［一ｌｉｌ一］残念だが次回の台詞というお宝は僕がいただいた。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）なんだと・・・？俺は貴様をムッコロス！

（作者）結局兄弟で出てきやがったよこいつら（兄の純一は登場済み）・・・二　　人とも好きなライダーだからいいんだけどね。

［一ｌｉｌ一］この物語の続きも、僕が頂いたよ。

（作者）始の台詞どころじゃねぇ！返せコソ泥！！

［―ｌｉｌ―］次回もお楽しみに！

（　作者）そこも盗られた・・・。

ちなみに次回から正式に『更新は３～４日、事情がある際は先に報告』という事になりました。ご迷惑をおかけしますが、これからもよろしくお願いします。

第十話～決着と再会～（前書き）

はい第十話です！

今回は『矢沢戦、決着』
そろそろ『ホテル・アグスタ』編かな？
そうすれば・・・いやなんでもありません！

アドバイスをもとに、ここでアンケートを一つ。

ズバリ『ゲストとして出演して欲しい歴代ライダーは？』
基本は主役級の人物がいいです。あまり多く出すと、皆さんの中で嫌悪感を抱く人もいるでしょうし、これはブレイドの物語ですからね。

すでに登場済みの、五代雄介（クウガ）・津上翔一（アギト）・天道総司（カブト）・門矢士（ディケイド）は今となって再登場させるか迷ってますｗ
まだ変身してないのに・・・ｗ
なので彼らのリクエストも受け付けます。
ちなみに、城戸真司は登場がすでに決定しております。（というか次回）
『変身』は、剣崎たち（ブレイドメンバー）の前では絶対にありません。（ブレイドが主体ですから）
ですが、彼らの前でなければ『変身』させます。
つまり、『共闘はしないが、単独・またはそれぞれの仲間たちと登場はする』ということです。

感想を書いてくださる皆様はもちろん、いままで書いたことが無い方も、ぜひ参加してくださるとうれしいです。

前書きが長くなってしまいましたね。

それでは！

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第十話～決着と再会～

剣崎が二人に話した『アイデア』

―それはエリオの『電撃』―

―キャロの『ブースト』―

―そして自分の『キック』―

それらを組み合わせた必殺技の使用。

・・・そう、剣崎がやろうとしているのは、

―魔法による『あの技』―

「・・・っていう事で、二人はどう思う？」

剣崎はなかなか自信のある顔で二人に告げる。

「それ！いいと思います！」

キャロはそれに賛同する。

だが、

「僕もいい考えだと思います！・・・でも僕の『能力（ちから）』はどうやって渡せば・・・」

確かにエリオの意見は当然のことだ。
魔法の使えない剣崎には、魔力を流し込んでも意味がない。
だがそれを、剣崎がとんでもない意見で覆す。
「それは・・・直接電気を流し込んでくれればいい！！」
「「・・・・・・・ええっ！？」」

流石に驚く。
単純明快な話だが、『ディアーサンダー』の威力になる程の電気を流すことは、エリオにとっても、それを受ける剣崎にとっても容易ではない。
「「う～ん・・・」」
考え込む二人・・・。
だが更にそれを覆す意見がエリオから、

「そうだ・・・強すぎる電気がネックなら、一真さんのキックの威力を上げればいいんですよ！！」

「・・・それだ！！キャロ、できるか？」

「はいっ！」

こうして剣崎たちが動き出したころ・・・

戦闘中の三人は・・・
「ハァ！よくもっ・・・一真・・・さんをっ！」
「ハッ！貴様っ・・・だけは・・・絶対に！」

「「許さん！！」」

「もうやだ・・・この二人コワイ・・・」
かなり弱気になっているカプリコーン。
だがその体のダメージは、あまり多くない。
流石の二人と言えども、こちらは融合体。正直受けるダメージも少なく、普通だったら圧倒的有利のはずなのだが、勢いにのまれてしまっていては元も子もない。

だがしかし、きっかけというのは突然なもので、
「「とくにその変な喋り方は」」

「「気持ち悪い！！」」

その発言はカプリコーンに流れを引き戻させるきっかけになった。

「・・・うるせぇなこのブス共が！！黙ってれば好き放題言ってくれちゃってさぁ！」

二人はブスではない。『超』のつく美人だ。

「正直お前たちの攻撃なんて効いてないんだよカスが！」

そう言って自信の武器であるブーメランで一撃。
フェイトとシグナムはデバイスで受けようとするが、二人がかりでも全く抑えきれない。

そして二人が派手に吹っ飛んだ。
「なん・・・だと？」
「こんなに・・・強かったなんて・・・」
本気のアンデッドの攻撃を食らって、衝撃を受ける二人。

「人間ごときが・・・アンデッドをなめるとどうなるか、教えてやるよ・・・」
ゆっくりと二人に近づくカプリコーン。
発せられるプレッシャーが、フェイトとシグナムの動きを止める。

一歩、また一歩と近づくカプリコーン。
だが二人の表情がおかしい事に気が付いた。

なぜ目の前の二人は

―笑っているのか―

「なに笑ってんだよ・・・そうか！ついに気が狂っちゃったんだねぇ！」
そう言ってブーメランを振り上げる。

そこで不意にシグナムが口を開いた。

「確かに・・・」
そこでカプリコーンの動きが止まる
「確かに我ら（人間）は弱いかもしれない・・・」

「でも・・・」
フェイトも口を開いた
「心では・・・負けてない・・・」

「「それに！！」」

「ここには・・・」
「貴様に打ち勝つことができる・・・」

「「仮面ライダーがいる！！」」
そう言って二人が目を向けた先には・・・。

「サンキュー！・・・二人とも！！」
剣崎一真がカードを構えて立っていた。

「変身！！」

『Ｃｈａｎｇｅ』

姿を変え、一枚のカードを取り出す。
そしてラウザーをセットする。

そこへエリオとキャロも現れ、それぞれの役割のために動き出す。

「我が乞うは、疾風の翼。青き剣士に、駆け抜ける力を・・・」
『Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ.』
「猛きその身に、力を与える祈りの光を・・・」
『Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ.　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ.』
キャロのデバイス『ケリュケイオン』が輝く。

エリオも、
「一真さん！いいですか！」
「ああ！思いっきり！」
その言葉にうなづいて、電気を剣崎に流しだす。
「ハァァァァァ・・・」

徐々に強さを増していく電気による痛みに耐えながら、剣崎がカードをラウズした。

『Ｋｉｃｋ』

そしてエリオの電気によってラウザーから音声が流れる。

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

「ウウェッ！？」

まさかこうなるとは思わなかった剣崎だが、『自分の予想が正しかった』と笑みを浮かべた（周りからは絶対にわからない笑みである）

「キャロ！」

「はい！ツインブースト・・・『アクセル＆ストライク』！！」

ケリュケイオンから放たれた光が、ラウザーに宿る。

『Ｍａｃｈ』

―『キック』と・・・―

―『サンダー』と・・・―

―『マッハ』・・・―

この三つが揃うことは、

―あの技の『発動』を意味する―

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｏｎｉｃ』

ラウザーから流れる音声・・・

それはノーマルのブレイドでの最強の技・・・

―ライトニングソニック―

これが剣崎の『アイデア』
だが剣崎の予想を超え、ほとんどを再現する事に成功した。

「ハァァァァァァ・・・・ウェイッ！！」
ラウザーBを逆手に持って振り上げ、気合いと共に地面に突き刺す。
その目に赤い光が宿る。

そして赤い光の軌跡と共に駆け出した

あまりのスピードにカプリコーンは呆気にとられる。
「速っ・・・グハァッ！」
そのままカプリコーンに突撃し、相手の体勢を崩す。

だがそれで終わりではない。

相手から少し離れたところで剣崎が高速で切り返す

そこから跳んで、その脚に雷を纏いとび蹴りの姿勢をつくる

それは、彼と同じように戦ってきた数多の戦士達がとってきた『決め技』の構え

「ちょ、ちょっと待った・・・」

「「「「「待つか（待ちません）！！」」」」」

言うと同時に更に力を入れて剣崎がスピードを増す。

そして・・・

「ウェェェェェェェェイ！！」

お決まりの声と共に、その蹴りが相手をぶっ飛ばす！

「グボェァ・・・ガクン・・・」

カプリコーンが意識を失い、ウロボロスのバックルが開いた。

それが意味することは

「俺の・・・いや俺たちの・・・勝ちだ！」

そう言って剣崎は変身を解き、手持ちのカードから『鎖だけが描かれたカード』を取り出すと、カプリコーンに向かって真っすぐに投げる。

―だが投げられたカードは、剣崎の投げた一枚だけではなかった―

「！？」

二枚のカードはどちらもカプリコーンの手前で停まり、緑色の光と共に『封印』を始める。だが剣崎のカードにはカプリコーンが入ったが、もう一枚のカードにはカプリコーンの右腕だった『オーキッドアンデッド』が入っていった。

そして二枚は、それぞれの持ち主のところに戻っていく。

二枚目を受け取ったのは・・・

「は・・じ・・・め？」

そこにいたのは『仮面ライダーカリス』

剣崎の親友であり、そしてジョーカーである『相川　始』の変身した姿。

だがその姿は、ハートのＡ「マンティスアンデッド」のものであり、

そこの彼が始とは限らない。

いや、あった。剣崎の予想を確実にする『言葉』が

―解放したアンデッドはスペードスートのアンデッドのみ―

四年前、この世界に来る直前に『本当の統制者』から教えられた事。

それが剣崎を動かした。

思わず駆け寄ろうとする剣崎・・・だが『今ここで闘争本能が目覚めでもしたら』という思いが彼の足を止める。

だから剣崎は、

「始！・・・皆と、天音ちゃんと仲良くしてるか？」

こんな事しか言えなかった。

―本当は、もっと話したいことがあるんだ・・・―

第十話～決着と再会～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「そうか・・・よかっ・・・た」

キャロ「それよりも・・・一真さんが！」

始「確かに・・・あいつはそういう男だからな」

真司「っしゃあ！」

次回『目撃者達』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（Φ）ハァ・・・めんどくせぇな

（；０冒０）いや、俺の出番だから！どう見ても！

（；ｏｗｏ）ダリナンダアンタライッタイ・・・

（作者）君は気にしなくていい・・・次回もお楽しみに！

第十一話～目撃者達～（前書き）

危うく遅れるところだった・・・。
第十一話です！

今回は『始登場・読者の皆さんに真司チラ見せ・・・等々』です。

アンケートはこれからも受け付けますので、一度感想で書いてくださった皆さんも、ドシドシ書いていってください！

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ始まります。

第十一話～目撃者達～

―本当は、もっと話したいことがあるんだ・・・―

そんな剣崎の思いは、確かに始に届いている。
それは始とて同じだ。
だが『今は』それができない。

（だから・・・お前の質問に答えてやることしかできない）

「皆と仲良く・・・暮らしている・・・」
（仲良く・・・か。昔なら絶対に言わない台詞だ・・・）

「そうか・・・よかっ・・・た」
剣崎はその言葉に安心したように呟くと、始（カリス）に笑顔を向けて、

―そのまま倒れた―

それを確認すると、始はその場から立ち去ろうとする。
しかし
「待てっ！貴様・・・何者だ？」
こちらを見ていた四人の内の一人、ピンクの髪の女・シグナムが自分を呼び止めた。

「俺は・・・仮面ライダーだ・・・」

「一真さんも四年前そう言っていました・・・あなたの『名前』は？」
「それに一真の知り合いのようだな・・・」
そこに金髪の少女？・フェイトも加わり、流石に答えた方がいいと判断した。
ここでも始は、自分がか～な～り甘くなったものだと思った。

「俺の名前は相川　始・・・剣崎の・・・友だ」
それだけ言うと、カリスは一瞬で姿を消した。

「消えた！？」
驚くエリオ、もちろんフェイトやシグナムも驚いている。
だが
「それよりも・・・一真さんが！」
キャロの言葉で一斉に剣崎を見る。
そこには緑の血を流す剣崎の姿があった。
倒れる時こそ笑顔だったが、今の彼は苦悶に満ちた表情だ。

キャロのヒーリングである程度の回復をしていた剣崎だが、先のライトニングソニックによってだろうか、傷がすべて開き、さらに数が増えている。

「一真！しっかりしろ！」
「一真さん！」
シグナムとフェイトが必死の表情で呼びかけるが返事がない。
「ロングアーチ！こちらエリオです！一真さんが！」
「一真さぁん・・・グスッ・・・」
エリオが通信、キャロは剣崎の姿を見て泣いている。

そんな姿を見つめる三人の男
「剣崎さん・・・また無茶して・・・」
「睦月。剣崎に無茶をするなと言って、それを聞くと思うか？」
「確かに・・・あいつはそういう男だからな」

なんとも剣崎にとって可哀想な会話をしている三人。
その中の一人は先程カリスとして現れた『相川　始』現在自称２７歳
最初に発言した少し短めの髪の若い青年『上城　睦月』現在２１歳
二番目に発言した三十代半ばに見える青年『橘　朔也』現在２９歳。
もう一度言おう現在２９歳である。
三人は剣崎と共に『仮面ライダー』として戦った彼の仲間・・・いや仲間以上の絆で結ばれた者たちだ。

「でも・・・やっぱり会っちゃだめなんですか？」
「ああ、しょうがないな・・・」
「だが心配は無い。あいつはここでも、多くの仲間に囲まれているからな」
始の言葉に二人が笑顔になる。

「そうだな（ですね）！」

だが剣崎達を見ていたのは三人だけではなかった。

物陰に隠れてカメラを構える青年。

「っしゃあ！これは金色のザリガニよりもスクープになるはずだ！」
青年の顔が笑顔になるが、すぐに写真を撮ったカメラを叩きつけた。
「・・・な～んてな。あいつもあんな怖い格好してるけど、皆のために戦ってる・・・『仮面ライダー』なんだからな！」
そう言って彼がポケットから取り出したのは、『元の世界にいた時の剣崎』と、『アンデッドと戦う戦士』の写真。

それを一瞥してからしまい、その場を去ろうとした青年を、謎の耳鳴りが止める。
その瞬間、青年がビルのガラスを凝視する。
そこに広がっていたのは明らかにこちら側にいないものが映った世界、そこにはモンスターと、それを相手にする『戦士』がいた。
「蓮はもう戦ってるのか・・・なら俺も！」
そう言って青年が、金の龍のマークが入った黒い箱のようなものを取り出して、ガラスに向かって構える。
そこで剣崎に向かって一言。
「頑張れよ・・・後輩！」
そして右腕を、左斜め上に向けて、『あの』宣言。
「変身！！」

その瞬間、青年を鎧が包んだ。

その姿は、まさに赤い龍。

鏡の中の赤き龍戦士『仮面ライダー龍騎』となった青年は、左手の拳を握ってお決まりの

「っしゃあ！」

そう言うと、友の待つ鏡の世界へ飛び込んでいった。

ちなみに青年『城戸　真司』が、カメラを壊したことで『編集長』にものすんごい怒られたのは、その次の日の話である。

だがしかし、剣崎たちを見ていた人物は他にもいたわけで・・・
「これがジョーカー・・・いや『仮面ライダー』の力か」
その人物は、モニターによって見ていたのだが、そこに映っていた剣崎の姿を見て興奮しているようだ。

「素晴らしい！彼には是非とも研究に協力してもらいたいね・・・」
最初だけ、どこぞの会長かお前は・・・。
「それに・・・『プロジェクトF』の・・・あの二人も」
この人物こそが、これからの事件の中心人物『ジェイル・スカリエッティ』なのだが、まだ舞台の袖で待機してもらおう。

「・・・ウっ・・・ここは？」
剣崎が目を覚ますと、まず見えたのが白い天井。
外は明るい。

（それにしても妙に体が重い・・・）
そう思って視線を横に向けると・・・。
「フェイト・・・シグナム・・・？」

そこには椅子に座りながら剣崎の体に突っ伏して寝ているフェイトとシグナム。

「なんで二人が・・・」

「二人ともあなたを心配してずっと付いててくれたのよ?」

声の主へ顔をむける。

「シャマル・・・ということはここは医務室か・・・」

「そう。あなたが二日も目を覚まさないから、二人とも疲れてるのに・・・」

そう言って軽く睨みつけるようにして剣崎を見る。

「そ、そっか・・・俺あれから二日も・・・」

そしてあの時の事を思い出す。

エリオとキャロに手伝ってもらったら、『ライトニングソニック』ができて・・・。

それであいつ（カプリコーン）を倒して・・・。

封印しようとしたら・・・・・・!!

「始は!あいつはどこいったんだ!!」

「あっ!そんなに大きな声出しちゃっ!・・・」

気付いた時にはもう遅い。

「んっ・・・あれ?」

「いつの間にか・・・眠ってしまったようだな・・・」

二人が起きた。

そして起きている剣崎を見ると・・・

「「一真（さん）！！」」

剣崎の耳がキーンとなった。

「あ～あ・・・起こしちゃったのね」

「耳が・・・痛いってば・・・」

剣崎が耳を押さえると、二人が『しまった』という表情で申し訳なさそうに口を閉じる。

「「ごめんなさい・・・」」

（シグナムが『ごめんなさい』なんて・・・フフフっ）

シャマルがそんなことを考える。

「とにかく・・・サンキュー。俺なんかのために二人とも・・・」

剣崎がそう言うと、

「そんな！私たちがそうしたかったからそうしただけです！」

「それに、自分をそれ以上卑下するのは許さんぞ？」

二人が自分の言動を正そうとしてくれた。

「ああ、わかった・・・！」

二人がそこまで言ってくれることに涙が出そうになるのを耐えながら剣崎が了承の意を告げる。

「ところで・・・皆いるんだろ？」

そう剣崎が言うと、主要メンバーが医務室に入ってくる。

「バレちゃってた？」

なのはが最初に口を開く。

「まぁ・・・アンデッドだし」

心なしか、自分を『アンデッド』という時の剣崎の声が明るくなった気がする。フェイトとシグナムが顔を見合わせて笑みを浮かべる。

「なんでみんな外にいたんだ?」
「「あの・・・お邪魔しちゃいけないと思って・・・」」
エリオとキャロが、口をそろえる。
その真意を理解したフェイト&シグナムが顔を真っ赤にするが、二人の真横にいる剣崎は気付かない。つまり他のメンバーには丸見えであるのだが。

「それより・・・一真さんはもう大丈夫なんか?」
はやてが尋ねる。二日も眠っていたのだ、心配するなというほうが無理な話である。

「ああ!シャマルや二人のおかげだ!」
その言葉と笑顔に二人だけでなくシャマルまで顔を赤くする。
(まさか一瞬でシャマルまで落とすとはなぁ・・・)
はやてはそう思った。
というか何気に剣崎は、自分を除いた家族全員と仲がいいことに気が付く。
そうなると・・・
(あとは私だけやんけ!)
剣崎の影響力に驚愕するはやてだった。
(こうなったら私も!・・・ってどのタイミングでいけばええんや)
そして自分と剣崎の接点が少ないことについて嘆く。

「う~ん・・・難しいわ・・・」
「どうしたんだよはやて?」

「な、なんでもあらへんよ!」

取り繕うとしたそれは、朝から六課中に響きわたったという・・・。

第十一話～目撃者達～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

はやて「一真さんは今日もお休み！で、様子を看るのは私や！」

剣崎（なんだかよくわかんないけど・・・居ずらい！）

フェイト・シグナム「「堂々と会いに行く！！」」

ヴァイス「おっ！一真！どこにいくんだ？」

次回『気付けよ剣崎・・・』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（０Ｈ０）あれだけですか！？出番って

（０Ｍ０）何故だ・・・

（作者）二人ともちゃんといいところに出すから！我慢して！

（；０ｗ０）サブタイの『気付けよ』っていったい・・・

第十二話～気付けよ剣崎～（前書き）

はい！第十二話です！

今回、次回、更には次々回の半分ぐらいは私のおふざけになります。
あんまりテンポよくシナリオを消化すると、『剣崎はハーレムでよくね？』発言が無駄になってしまいますので、所々にこういう話を入れていくつもりです。

アンケートはまだまだ受け付けております～す。
平成主人公でまだ来てないのが、翔太郎＆フィリップですね。
映司は未だ保留。
木場のようなキャラもＯＫですよ～。
サブキャラの場合、全員が出れるとは限りませんがね・・・。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十二話～気付けよ剣崎～

未だに医務室の中・・・

「とにかく！目も覚めたし、早速今日から食堂に戻るか！」
剣崎がそう言うと、よく食べるスバル＆エリオが目を輝かせる。
他のメンバーも二人までではないにしろ、それに同意する。

（（（（！？））））
フェイトとシグナムと、そしてシャマル。
―この三人を除いて―

「駄目ですよ一真さん！まだ起きたばかりなんだし！」
「そうだぞ一真、もう一日ぐらい休むべきだ！そうだなシャマル！」
「ええ！あなたにはもう一日ここにいてもらいます！」

その言葉に周りからブーイングがおこる。
「う～ん・・・三人にはお世話になったし、確かに本調子じゃないけど・・・。はやて、どうしたらいいんだ？」
質問を振られたはやてに視線が集中した。

「そうやなぁ・・・やっぱりシャマルの言う事は聞いた方がええと思うし・・・。」
そう言ってまずシャマルに笑みを向け、
「かといってこれ以上フェイトちゃんとシグナムの仕事を遅らせる

わけにもいかへんし・・・。」

そこで二人に意地の悪い笑みを向けた。

そしてはやてが出した結論は・・・

「一真さんは今日もお休み！で、様子を看るのは私や！」

「「それが一番ダメでしょうが！！」」

「わかった。よろしくな、はやて！」

（（（こいつ！！））））

「ほら！一真さんもええみたいやし！決まりやな」

こうして剣崎の一日は、はやてに握られることになった。

ゾロゾロと部屋を出ていくメンバーのうち、フェイトとシグナムがあからさまに剣崎を恨めしい目で見ていたことは、言うまでもない。

「私はもちろんここにいますからね！」

シャマルが怒り気味で言った。

「ええよ。それぐらいならなぁ・・・？」

はやてが挑発で返した。

（なんだかよくわかんないけど・・・居ずらい！）

そう思った剣崎なのであった

「「ハァ・・・」」

この溜息は剣崎の隣を奪われた二人のもの。

「「まさか（主）はやてまで・・・一真（さん）を・・・」」

そう言いながら先程の事を思い出す・・・。

『わかった。よろしくな、はやて！』

（まさか一真の奴・・・）
（はやてのことが・・・）
「「そんなバカな・・・」」
同時に呟くと、それぞれの顔を窺う。
「シグナム・・・」
「テスタロッサ・・・」
「「とりあえず（主）はやてには負けたくない！！」」

そう言いながら、『剣崎とはやては、今どうしているのか』ということが不安でたまらないようである。

「こうなったら・・・」
「そうだな、我々の仕事を素早く終わらせ・・・」
「「堂々と会いに行く！！」」
そして後ろにいるエリオとキャロの方を向いて、
「「覚悟は・・・できてる？（できているな？）」」

この妙な笑顔の二人に逆らうことなど、エリオとキャロに出来るはずもなく、

「「は、はい・・・」」

そう言って地獄への一歩を踏み出すのであった・・・。

―その頃、当の剣崎とはやては・・・―

「なぁ一真さん?」
「・・・なんだ?」

「遊びにいかへん?」
「・・・・・は?」
いきなり何を言い出すのだ?自分に『休み』だと言ったのははやてではないのか?と思いながら剣崎が首をかしげる。

「今日は休みなんじゃ・・・」
「そう、『休み』や(ニヤッ)」
(そういうことか!)
今の発言で、はやてがどういう意図で自分に『休み』だと言ったのか理解する。だが、せっかくの休みだし、久しぶりに羽を伸ばすのもいいかもしれない。

「・・・どこに行きたい?」
なので剣崎も、これにのることにした。

「とりあえず・・・バイクでのんびりと走るとかかなぁ?」
「はやて、免許はあるのかよ?」
「一真さんが乗せてくれるんやろ?」
「ふっ・・・わかった!なら行くか!」
そう言って立ち上がろうとする剣崎を、

「ちょっと待ってください!」
シャマルが止める。
だが、

「部隊長命令やけど・・・文句あるんかなぁ？」
「うぅっ・・・職権濫用反対・・・」
流石に勝てないようで、渋々道を譲った。

「行こか？一真さん」
「ああ・・・ごめんなシャマル・・・」

「おっ！一真！どこにいくんだ？」
スペイダーを取りに行くと、ヴァイスがヘリの整備をしていた。
「はやてが『遊びにいかへん？』って言うからちょっと遊びに・・・」
それを聞いた瞬間、ヴァイスの顔が固まった。

「・・・？どうしたヴァイス？」
「い、いやっ！なんでもない！・・・楽しんで来いよ？」
そう言ってその場を立ち去るヴァイス。

「変な奴・・・っといけね！遅れるとはやてが何を言いだすか・・・」
剣崎もスペイダーに向かって駆け出した。

そのころヴァイスは、
「いったいどうなってるんだ？ついに部隊長まで一真のことが・・・」
「あいつ何気にいいところあるからなぁ・・・」
「料理もうまいし・・・」

「唯一挙げるとしたら、」
「「「「鈍感・・・だな！あはははは！」」」」
と、整備士たちと話していましたとさ。

「それにしても遅いな・・・あいつなにやってんだ？」
少し早く来た剣崎だが、待ち合わせの時間はとっくに過ぎている。
そうしていると、やっとはやてが来た。
「ごめんなぁ、待った？」
「遅いぞ！なにやってたんだよ！」

きつめに剣崎が言うと、
「一真さん・・・あかんよ。女の子が遅れて来たときは、『大丈夫だ！俺も今来たところだし！』ぐらい言わな！」
逆に説教されてしまった。
「ごめん・・・。俺こういう事に縁がなかったから」
反省する剣崎。
「意外やな～。一真さんてモテるイメージがするのに・・・。まぁ、とにかく行こか！」
「そうだな！」
そう言って剣崎がスペイダーに跨り、はやてがその後ろに乗った。
「ちょっと飛ばすぞ！しっかり掴まってろよ！」
「ええよ！」
はやての反応を確かめると、剣崎がスロットルグリップを回した。
こうして二人は街へ出かけていくのであった。

外で訓練中のスバル&ティアナ
「あれって一真さん？」

「そんなわけないでしょ。はやて部隊長が休みだって言ってたし。」
「二人とも～、よそ見してると危ないよ・・・」
その後、二人の悲鳴が六課中に響いたが、剣崎たちがそれを聞くことはなかった。

バイクで街中を突っ走る剣崎たち。
「一真さ～ん！」
「どうした～！？」
結構なスピードが出ているので、大声でのやりとりになる。
「買い物したいんやけど～服とか！」
「金はあるのか～！？」
「こういう時は～！」
「わかったよ！出せばいいんだろ～！」
こうして手近な店に入っていった・・・。

「これはどうやろ？」
「う～ん・・・」
「これは？」
「う～ん・・・」
「・・・これは？」
「う～ん・・・」
先程からずっとこのやり取りが続いている。はやてのセンスが悪いわけではない。
「私にはどれも似合わないってことなんか・・・？」
はやてが悲しげな目をして尋ねてくる。
「そ、そうじゃなくて・・・こういうことはあんまり・・・」
剣崎の周りにいる女性と言えば、広瀬&栗原親子であり、栗原親子

ははやてとは世代が違う。世代が近い広瀬も、あまりオシャレをするというイメージではない。

「それなら、今日は手取り足取り・・・」
「？どうかしたか？」
「な、なんでもあらへんよ！」

ちなみに、普段何も意識してない時の剣崎は、感覚は普通の人間と変わらない。
便利設定・・・ナンデモアリマセンヨ？

二人のデート（はやての中では）まだ始まったばかりだ・・・頑張れ剣崎！

第十二話～気付けよ剣崎～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「それなら大丈夫だ！」

はやて「そんな事ではいかんよ？ほらほら～」

津上「いらっしゃいませ～・・・って剣崎君！！」

剣崎「・・・津上さん、お久しぶりです」

次回『レストランＡＧＩＴΩ』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（０Ｈ０）鈍感か～、確かに剣崎さんらしいや！

（０ｗ０）どういうことだよ睦月！

（０Ｈ０）！？、居たんですか剣崎さん！？

（作者）次回もお楽しみに～

第十三話～レストランＡＧＩＴΩ～（前書き）

遅れました！
第十三話です！

ここで告知です！
ちゃんと読んでくださいね！！
それで告知なんですが、『来週一週間のお休み』ということなんです。
理由は、『学校のテ・ス・ト』があるからなんですよ・・・。
来週の金曜にテストが終わりますんで、次の投稿は『金・土・日・月』のどれかになります。
すいません・・・それまで待っていてください。

今回はちゃんとレストランのメンバーが登場です。

前回のように名前を間違える場合もありますので、もし妙に不自然なところがあったら教えてください。それが間違いじゃなかったら、それは私の実力の問題になりますので、やっぱり教えてください。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十三話～レストランＡＧＩＴΩ～

「ほな見た感じで『ええかな?』って思ったら、そう言ってな」
「それなら大丈夫だ！」

ホントに大丈夫か不安なので、早速カマをかけてみる。

「これはどうや?」
「いいんじゃないかな?」
（あかん・・・センスがええほうではないわ）

「あ！これなんてどうだ?」
「却下や・・・」
何度かこのやりとりが続いた・・・。

結局はやてが選び、剣崎がお金を払うという状態となり、今の剣崎はただの財布である。
そしてお昼時・・・

「流石にお腹が減ったなぁ・・・」
「確かに・・・」

剣崎も空腹を感じる。それは昔から変わらない。

「お昼・・・そうや！剣崎さんが前に働いとったレストランは？」

「うぇぇ！？」

「決まりやな！ほな行こか～」

―こうして『レストランＡＧＩＴΩ』前―

「やっぱりちょっと・・・」

「そんな事ではいかんよ？ほらほら～」

そう言ってはやてがしっかりと剣崎と腕を組み、扉を開いた

「こんにちわ～！」

はやての声に店内の声が響く。

店内はほどほどの混み具合だったのに、その声はやけに通った。

その声に、厨房から一人の男が出てくる。

「いらっしゃいませ～・・・って剣崎君！！」

「・・・津上さん、お久しぶりです」

「なんだ？一真のやつがどうしたって・・・マジかよ！！」

「士さん・・・」

「一真君！？帰ってきたの！？」

「五代さん・・・それはちが・・・」

「俺はわかっていたぞ・・・お前が帰ってくることはな・・・」

「天道さん・・・ってだから違います」

「お帰りパーティー開かなくちゃ！」

「だから違いますって！」

ついに剣崎も普段の調子を取り戻したようだ。

「そうそう、それだよ一真君！」

「そうじゃないと、イジりがいがないからな！」

店のメンバーに思いっきり振り回される剣崎を見て笑みを浮かべるはやて。

「ところで、その子はお前の彼女か？」
そんなはやてに気付いて、天道が超ストレートに聞いてきた。
「ウェッ！？い、いや違いますｙ・・・」
「そうなんですわ～。今もデートの途中で！」
（はやて！？）

「なるほど、大体分かった」
デートと聞いてニヤニヤしている士（彼女持ち）

「「へ～、そうなんだ～！綺麗な子だね～」」
「ありがとうございます～」
素直に喜ぶ五代・津上（剣崎同様、相手の思いに気が付かない男達）

「おばあちゃんが言ってた・・・子供は宝物だってな」
少々いき過ぎ&格言を短縮する天道（妹たちが幸せなら自分はいい男）

「「・・・・・」」
流石に剣崎もはやても固まった。

「冗談だ。飯を食いに来たんだろ・・・そこの席が空いている」
そう言って天道が示したのは窓際の人のあまりいないテーブル。

「ゴニョ・・・ありがとうございます・・・ゴニョ」
はやてがそう耳打ちすると、天道は頷いて厨房に戻っていく。

二人もテーブルにつき、メニューを開く。

「この店長のオススメって？」
「それは・・・やめた方がいい・・・」
「・・・不味いんか？・・・」
「すごい美味い。けど・・・アハハ・・・」
剣崎のその反応を見て、とりあえず諦める。
（また今度来たときに頼もうかな？）
だがまたここに来る気は満々なのであった。

結局、剣崎が五代の『ポレポレカレー』、はやてが天道の『麻婆定食』を頼むことになった。他愛のない話をしながら料理を待つその姿は、さながら本当のカップルのようだったとか・・・。

五代が料理
「お待たせ～！『ポレポレカレー』と『麻婆定食』、冷めないうちに召し上がれ！」

「「ありがとうございます！」」
声を揃えてお礼を言う。
「それにしても本当のカップルみたいだよね！二人ともさ」
剣崎が水を吹き出した。はやては見抜かれていたことが予想外だったようだ。
「・・・バレてました？」
「一真君の反応を見ればわかるよ。皆もそれがわかってるから、さっきああ言ってたんだよ？」

「うぬぬ・・・まだ不自然やったか・・・」
そんなはやてに五代が耳打ち
「・・・一真君の事よろしくね・・・」
「・・・ライバルが多くてなかなか・・・」

「・・・はやて、料理を冷ますと天道さんが容赦しないぞ？」
剣崎の言葉にはやてが厨房の方を見ると、天道がこっちを見ていた。

「い、いただきます！」
焦ったはやてはまずは一口
「・・・おいしい」
「ふっ・・・当然だ。俺の料理だぞ？」
いつの間にか天道が傍にいた。
（でもなんでやろう・・・すごいうち好みの味や・・・）
そんなはやての心を見抜いたように、天道が『いつものポーズ』で語りだす。

「おばあちゃんが言ってた・・・一人前の料理人は、一目で相手の好みを見抜くもの。・・・ってな」

（すごいおばあちゃんやなぁ・・・）
実はこれ、『ある人物』との豆腐対決で天道が敗北し、それを知ったおばあちゃんが言ったもの。

「それにこうも言ってた・・・食事は一期一会、毎回毎回を大事にしろ・・・だから俺は、客の好みを尊重して料理をつくる」
「大事なことだよね～」
語る天道と、それを聞いてウンウンと頷く五代。

そんな二人に厨房の士から、
「おい！二人ともさっさと戻れよ！店長が『また』どっか行きやがったぞ！」
「またか～、今行くよ！」
「しょうがないな・・・二人とも、ゆっくりしていくといい。だが残すなよ？」

そう言って二人とも戻っていく。

剣崎がふとつぶやく。

「いつも思ってたけど、この料理を残すやつなんているのか？」

「う～ん・・・確かにそうやなぁ」

このレベルの料理は滅多にお目にかかれない。

それに値段もお手軽である。

―『レストランＡＧＩＴΩ』はいろんな意味でとんでもないレストランなのである―

「「ごちそうさまでした～！」」

同時に手を合わせる。

「お前らどんだけ仲がいいんだよ・・・」

近くにいた士がそう言うと、二人は顔を見合わせ笑った。

このシーンを六課の面々が見たら、いったいどうなっていただろうか。（特にあの三人は）

会計の際の五代＆剣崎

「今回はサービスしとくからね」

「ホントですか！？・・・でも津上さんがいないのにいいんですか？」

「大丈夫！店長直々にそう言われてるから！」

「いやっ・・・でもやっぱり・・・」

流石に剣崎が微妙な顔をすると、

五代はサムズアップをしながらこう返す。

「そのかわり、また食べにおいでよ？」

「・・・ウェイ！！」

そんな言葉に元気よく返す剣崎。

すると天道＆土も

「今度は俺の料理を食いに来い。とびっきりの豆腐料理でむかえてやる。」

「こいつよりも俺の方が上に決まってんだろ・・・一真！俺の料理だ！」

「ウェイ！！」

「ええ人達やなぁ・・・」

「ああ・・・。俺が人間じゃないってわかっても、それでも俺を受け入れてくれた・・・大事な先輩だ」

レストランを出て、のんびり歩きながら話す二人。（剣崎はバイクを押しながら）

彼の言葉に、はやてが疑問をぶつける。

「うち等は・・・どうなん？」

「皆・・・俺の大事な・・・『家族』で・・・いいのか？」

「当然や！やっと認めてくれたんやなぁ」

剣崎の申し訳なさそうな言葉に、はやてが笑顔で答えた。

（でも、まだ『家族』なんか・・・）

少々ガッカリするはやて。

なので少しお返しをすることにした。

「でも一真さんは、まだ秘密があるみたいやけどなぁ・・・？」
（ギクッ！！）
「それは後でええよ。家族やから、話したいときに話せば・・・」
「・・・わかった！」
「ほなそろそろ『家』に帰ろか？」
「ああ！」
二人は『家路』についた。

「ところで、みんなエプロンの色とマークが違ったけど、あれどんな意味があるんやろ？」

そう、あのレストランのメンバーは、それぞれ専用のエプロンをつけている。
色・マークの順番で説明すると、
五代雄介は、『黒色で、金の三本角のなにかのマーク』

津上翔一は、『黄色で、黒の六本の角のなにかのマーク』

天道総司は、『赤色で、黒のカブトムシのようなマーク』

門矢士は、『ピンク・・・マゼンダで、黒のバーコードのようなマーク』

ちなみに剣崎一真は『青色に、黒いスペードのマーク』である。

「なんで五代さんだけ金色のマークなんやろ？」
はやてが当然の疑問を述べる。
「エプロンが黒いからっていうのもあるけど、でもみんな曰く、五代さんは特別だから・・・って言ってたな」
そう、みんなにとって五代雄介という男は『特別』なのである。

「あぁ、あと店長の・・・津上さんはどこに行ったん?」
「あの人はよくわかんないんだよなぁ・・・いつの間にか店を飛び出してくんだよ。」

そんなことを話しながら、二人はのんびりと歩く。

こんな感じで、二人のデート（笑）は幕を閉じていった。

第十三話～レストランＡＧＩＴΩ～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

シグナム「？、どうしたシャマル」

フェイト「あの・・・一真さんは？」

翔一「仮面ライダー・・・アギト！！」

士「終わったみたいだな・・・」

次回『光と破壊者』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（作者）先に言っておきますが、まともな戦闘はありませんからね！！

（ｄｌｌｂ）大体わかった

（作者）君の変身は無いよ？

（；ｄｌｌｂ）なんでだよ！？

（０ｗ０）次回もお楽しみに！！

第十四話～光と破壊者～（前書き）

やっと終わったあああああ！！
日に日に減っていくアクセス数にビクビクしながら耐えたこの数日間。
だがもう縛るものなど無い！！

ってことで十四話です。

今回は『店長』が変身。
でもまともな戦闘は無し。

それじゃあ、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十四話～光と破壊者～

―前回の終わりから少し遡った時間の六課では―

「「終わった・・・！！」」

はやてによって剣崎との時間がとれなかった二人の女、フェイト＆シグナム

二人は、本来ならもっと長くなるはずの仕事をさっさと切り上げ、慌ただしく部屋を出て行った。

部屋に残っているのはぐったりして動ける状態ではないエリオ＆キャロがいた。

―そして剣崎がいるはずの医務室―

「「一真（さん）！！」」

部屋に飛び込んだ二人が見たものは、

『誰もいないベット』と、

『机に突っ伏すシャマル』

「？、どうしたシャマル」

「あの・・・一真さんは？」

呼びかけられたシャマルは、二人を見るとこう言った。

「はやてちゃんと・・・デートに行っちゃった」

（（！？））

「今・・・何と言った？」

「はやてが・・・なんて？」

「二人は・・・デートしに行ったのよ・・・」

やっと完全に理解した二人は目を見開いた

「なんで止めなかった！」

「だってぇ・・・『部隊長命令』なんて言われちゃったら、どうしようもないじゃない」

「あぁ・・・やっぱり二人は・・・」

「テスタロッサ！それ以上言うな！」

どんどん重くなる空気。

そんなところに休憩中のなのはが入ってきた。

「一真く～ん、いる～？・・・！？どうしちゃったのみんな？」

「一真ならいないぞ・・・」

「え？なんで？」

訳が分からず首をかしげるなのは。

そんな彼女にシャマルが『あの事』を告げる。

「はやてちゃんとデートに行ったわ・・・」

「あ、そういうことだったんだ・・・って、でででデート！？」

「アハハハハハハ・・・」

魂の抜けた人形のようになっているフェイト。正直怖い。

「と、とにかくこういう時は『あれ』を言うんだよね？」

なのはの謎の発言。

その意味を理解した三人が、なのはとタイミングを揃えて言った。

「「「「嘘だそんな事おおおお！！」」」」

「！？」

『なにか』に反応した剣崎

「一真さん、どうしたん？」

「いや・・・何か聞き覚えのある台詞が・・・そんなわけないな」

こうして二人はまた歩き出した。

―そのころ、店を飛び出していった津上翔一は―

「やっぱりガジェットか・・・」

翔一の目の前には『人型ガジェット』

「でもアンノウンと同じ気配なんて、まさか能力も！？」

翔一の言葉に反応するように、ガジェットの上に光の輪が現れ、そこから武器を取り出した。

「もうアンノウンと戦いたくなんてなかったけど・・・」

だが、人類を信じてくれた『あの男』の思いをぶち壊すようなガジェットに、翔一は怒りを覚えた。

「絶対に、倒さなくちゃ！！」

その言葉とともに、

―翔一は左腕を腰に引き、右手を一瞬だけ添える―

―そして右腕を素早く前に出し、右胸部の前に引く―

―その瞬間、彼の腰に金色のベルト【オルタリング】が出現する―

「ハァァァ・・・・」

―息を吐きながら、ゆっくりと前に出してゆく・・・―

そして彼もまた、こう言うのだ

「変身！！」

そう宣言すると、両腰のスイッチを押す。
すると彼は金色の光に包まれる。
そして光の中から現れたのは龍。
だがそれは龍騎のような赤ではなく、

―金色の龍―

「仮面ライダー・・・アギト！！」

―『偉大な先輩たち』から受け継いだその名前は彼の誇り―

―みんなの居場所を護るために―

仮面ライダーアギトがミッドチルダの地に立ったのだ

―時は進んで六課のロビー―
「「ただいま～」」
はやてと剣崎が帰ってくると、その場の空気が凍った。
「？、みんなどうしたんだよ」
剣崎が問うと、その答えを示すかのように、その場の全員が廊下の奥を見る。
そこにいたのは、
「フェイトにシグナム、それにシャマルまで・・・どうしたんだ？」
先の二人はともかく、シャマルには今朝迷惑をかけていた。
だが剣崎はそれを忘れているようである。

「一真・・・模擬戦だ・・・」
シグナムが口を開いた。
「うぇ？何言ってんだよ、俺はもうやらないって・・・何すんだ！！」
三人がかりのバインド。

いきなりの事で何が何だかわからない剣崎。

「さぁ・・・始めるとするか・・・」
「よろしくね・・・一真さん」
「私は二人のサポートにまわるわ・・・」

「おい！なんで・・・ナズェダアアアア！！」
剣崎の叫びが響き渡った。

その後、剣崎がボドボドになって帰って来たが、他の三人には傷一

つなかった。
結局、攻撃を受けることに徹し、三人に攻撃をする素振りも見せない彼の姿は、更なる好意をよせられる原因となった。
シャマルに治療を受けながら、フェイトとシグナムに肩を貸してもらっている剣崎。なんと羨ましい光景だろうか。
三人とも申し訳なさそうな顔をしているのは、やっと冷静さを取り戻した証拠である。

「すまない・・・つい・・・」
シグナムが口を開いた。

「なんかよくわかんないけど・・・悪い事しちゃったんだな・・・ごめん」
謝る剣崎。
理由がわかってないのは剣崎故の事である。

（（（（ニブい・・・でもそんなところもまた・・・））））
そんな事を考えながら顔を赤らめる三人。

だが剣崎は気付かない。
いや、もしも気付いていたとしても、彼は気付いた素振りを見せる事は無いだろうが・・・。とりあえず今は、彼が気付くことはないだろう。

すると突然、三人の腹が鳴りだした。
「「「…!?」」」

そんな三人を見て剣崎は笑いだした
「ハハハッ…そんなにお腹が減ってたのか?」
剣崎の言葉に更に顔を赤くする三人。

「迷惑かけたみたいだし、夕飯は俺が作るよ！」
剣崎がそう言った瞬間

「「「「「「「「「やった～！！」」」」」」」」」
何故か他のメンバーが飛び出してきた。

「「「！？」」」
「ウェッ！？みんないつの間に・・・」
いきなりの登場に固まる剣崎たち。

「今日は久しぶりに一真さんの料理が食べられるんだ～、やったねエリオ！」
「楽しみですね！スバルさん！」
「あんた達・・・まっ、しょうがないわね。おいしいし」
「私も楽しみです！」
「キュク～♪」
「一真～メニューはなんだ～？」
「リインはなんでもいいです～」
「先輩達に負けへん料理、頼むで！」
「ということで一真君・・・」
「「「「「「「「「よろしくお願いしま～す！！」」」」」」」」」

「・・・よし！今夜はちょっと頑張ってみるか・・・」

（（（おかしいな・・・私の為じゃ・・・））））
三人は声に出すことなく、同じ意見を述べる。
だが剣崎はそれを全く忘れているようで、皆と一緒に今晩のメニューを考えている。

「「「一真（さん）のバカ・・・」」」
誰にも聞こえないように呟くが、それぞれには聞こえていたようで、諦めを滲ませた笑みを向けると、彼女たちもまた剣崎のもとへ向かうのであった。

その晩の食堂は、今までで一番の盛り上がりをみせたようだ。

「ハァ!!」
翔一、いや仮面ライダーアギトの『ライダーキック』がガジェットに炸裂する。

ガジェットは頭に光の輪を浮かべると、そのまま爆発した。
「ふぅ・・・」
それを確認すると、翔一は変身を解いた。なかなかの長期戦だったので、辺りはすっかり暗くなっている。
そんな彼に近寄る青年が一人。

「終わったみたいだな・・・」
「『みたいだな』って、見てたよねさっきから。ところでお店は大丈夫？」
「ああ、五代と天道がいるし、バカの真司も呼んでおいたからな」
青年・門矢士はそう言うと、ガジェットの残骸を手に取る。

「先輩にそれはだめだよ～」
「だが、あいつが一番楽だったからな。倒したときは」
士が言う『倒したとき』とは、かつて彼がライダーの物語を『再生』

するために、自ら破壊者としてライダーを倒しまくっていた時の話である。
「君の使う手が卑怯だから、真司君とかすぐに引っかかっちゃうんだってば」
「結果的に卑怯な俺のおかげで今もこうしてるんだ。感謝しろ」

「とにかく・・・そっちは何か掴めた？」
「手がかり無しだ・・・今回の事件は大体もわかんねぇな」
「う～ん、難しいな～・・・」
「渡の奴もなにも掴んでないみたいだな、探偵コンビも『こっち』に来てない。アホどもの所のオーナーも教えちゃくれねぇ。巧の野郎じゃないが、めんどくせぇな・・・」士があからさまに嫌な顔をする。

「頑張るしかないね。それにしても五代さんはまだ気付いてないのかな～？」
「あいつは唯一俺たちとの接点が無いからな。こっちは知ってるんだけどな」
どちらかが言う事もなく、同時に歩き出す二人。

「剣崎君には？」
「また今度会ったときにでも話す。正体だけはな」
「また『あれ』、言うんでしょ～」
「当然だ。あれは俺の決め台詞だからな！」
得意げに言う士。そしてそんな士を羨ましそうに見る翔一。
「いいな～、俺も決め台詞とかカッコよく決めたいんだけどな～」
それを聞いてあきれ果てた表情をする士。
「お前・・・俺たちの中で最初に『仮面ライダー』って名乗ってるだろうが・・・」
「あっ！そうだった！すいません先輩方！」

ここにいない人物たちに慌てて謝る翔一。

「はぁ・・・とにかく帰るぞ。店長が何度も店を空けてちゃ申し訳が立たないだろ？」

「よし！帰ったらお詫びに新作を振舞おっかな！」

「俺は遠慮するからな・・・」

こうして二人も今の『居場所』へ帰ってく。

こうしてまた、一日が終わる。

第十四話～光と破壊者～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ギンガ「そこまで言うなら、期待させてもらうわよ？」

剣崎「フンフンフ～ン・・・ってまたかよ！？」

渡「わ、わかりました！それじゃあ兄さん、名護さん、行って来ます」

剣崎「カテゴリー９・・・行くぞ！！」

次回『ホテル・アグスタ』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（＾Ｕ＾）ははははは！！もう誰も俺を止めることはできない！！

『？１０・Ｊ・Ｑ・Ｋ・Ａ』

『Ｒｏｙａｌ　Ｓｔｒａｉｇｈｔ　Ｆｌｕｓｈ』

（●ｗ●）ウェエエイ！！

（；＾Ｕ＾）ウワアアアア！！

（；＾Ｕ＾）こ、後悔するぞ・・・俺にこんな仕打ちをしたことを・・・ガクッ

（；ＯＨＯ）剣崎さんが二人いる！！

（；０ｗ０）ダリナンダアンタイッタイ・・・

（●ｗ●）リケーロ（ディケイド）は世界の破壊者だ・・・

（；ｄｌｉｌｂ）やっぱり来やがったか・・・『もう一人の剣崎一真』・・・

（；０ｗ０）話についていけない・・・

（作者）大丈夫、もう一人の君はもう出ないから。

第十五話～ホテル・アグスタ～（前書き）

第十五話です！

今回は『ホテル・アグスタ導入編』
ちょっとしたゲストの登場がありますが、見事にチョイ役だな・・・
ｗ

とにかく、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十五話～ホテル・アグスタ～

あれから数日たった。

あれ以来、六課のメンバーはそれぞれの仕事に新たな情報が浮かび上がったため、慌ただしい数日間だったと剣崎は後に語る。

その中で特に剣崎の印象に残っているのはギンガ・ナカジマとの四年ぶりの再会・・・。

ある事件の為、六課に訪れたギンガ。

フェイトたちとの打ち合わせを終わらせ、妹のスバルに引っ張られて連れてこられた食堂。

「ここの料理ね、すっごいおいしいんだよ！ギン姉も絶対気に入るよ！」

妙にニコニコしながら腕を引っ張るスバル。

「そこまで言うなら、期待させてもらうわよ？」

そう言いながらカウンターの前まで来たギンガは見た。

『あの時』よりも明るい笑顔

だがその顔は、全然変わっていない

『仮面ライダー』・剣崎一真の姿を

「あっ・・・あっ・・・・」
言葉が出てこない。
すると剣崎もこちらに気付くと、少し目を大きく開いてから、ギンガに笑顔を向ける。
「久しぶりだな・・・スバルもそうだったけど人間ってさ、四年もたつとすっかり成長するんだな。あの時の子が、こんなに綺麗になって」
その瞬間、食堂の空気が今までにないほど凍った。
言われたギンガは顔を赤くする。
「あ、ありがとうございます・・・」
「俺、『この時』の名前は剣崎一真っていうんだ。よろしくな！」
「ギンガ・ナカジマです！あの時はありがとうございました！」
そのまま自己紹介までするが、
普段滅多に言わないことを言うのなら、剣崎はタイミングを考えるべきだった。
今、この食堂には『彼女たち』がいるのだから・・・。
「・・・聞き捨てならへんなぁ・・・」
「そう・・・一真さんはギンガみたいな子がいいんだ・・・」
「私には一度もそんなことは言わなかったじゃない・・・」
「つまり私たちには・・・魅力が無いという事なんだな・・・」
その声にギンガが反応し、冷や汗をかきながらゆっくりと首を後ろに回す。
だが剣崎はなにも気付かず調理を続けている。

「フンフンフ～ン・・・ってまたかよ！？」
またもやバインド。
しかもはやても加わって、その力は増している。
「一真さん・・・借りてきます～♪」
はやてがそう言うと、厨房のスタッフも全員首を縦に振る。

「一真さん・・・ああ・・・」
ギンガがものすごく心配しているようだが、
そのままズルズルと引きずられる剣崎。

「いやっ・・・今回は何も悪いことはしてないだろ！？」
「「「フフフフ・・・」」」

剣崎が四人に引きずられていってから数分後、六課中に彼の声が響き渡る。
「お、おい！待てよ！・・・ウソダドンドコドーン！！」
その先の展開は、この前のソレとほとんど同じだったという・・・。

そんな剣崎にとって忘れられるわけの無い再会から数日。

今彼は、シグナムとヴィータを除いた主要メンバーと共に、ヴァイスの操縦するヘリで移動中。

「・・・次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線で捜査を・・・」

先程から隊長陣とフォワード陣で、何やら難しい？話をしている。
まあ、剣崎にとっての難しい（彼はそこまで頭が悪い訳ではないが）なので、ある程度の事情を知っていれば、普通についていける。

「シャマル先生、さっきから気になっていたんですけど、その箱はいったい・・・？」
キャロの発言で、剣崎を含む全員の視線がシャマルと置いてある箱に向かう。

「ウフフ・・・」
シャマルが不敵に笑う。
「これはね、隊長達と一真さんのお仕事着♪」
「俺も！？」
こうして皆を乗せたヘリは、今回の目的地『ホテル・アグスタ』へ向かっていく・・・

「これ、ホントに着なくちゃいけないのか？」
剣崎が、渡された『お仕事着』を指差して言った。
「当然よ？あなたには、はやてちゃんたちの警護があるんだから」
（本当は私と一緒にいてほしかったけど・・・）
「・・・わかった。着ればいいんだろ・・・」
そう言って剣崎は去って行った。

―受付―
「一真さん遅いな～」
はやてたちがそれぞれの『お仕事着』に着替えて剣崎の到着を待つ。

「あれって一真君じゃない？」
なのはが視線を向けたその先には・・・

「あれ・・・たしかに一真さん・・・だよね？」
さっきからキョロキョロしている剣崎らしき人物。
だがフェイトが戸惑うのも無理はない。服装が真面目すぎる。しかも髪型まで変えている。

「行ってみよか、大きな声をだして呼ぶのもあれやし」
とりあえずその人物のもとへ向かう三人。

「う～ん・・・はやてもフェイトもなのはも・・・どこにいるんだ？」
これで確実に剣崎だ。
「一真さん・・・こっちや」
はやてが声をかける、だが・・・
「・・・どちら様？」
何とも予想外の答えが返ってきた。
「こんな美人の顔を忘れたんか？」
「・・・・・・！まさかはやてか！？」
長い沈黙の末、やっと答えに辿り着いたようだ。

「ということはそっちがフェイトで・・・そっちはなのは？」
「「ホントにわからなかったんだ・・・」」
剣崎の発言に二人は苦笑する。
なのははともかくフェイトに至ってはほとんど普段通りな気がしないでもないが・・・。

「だって全然わからなかったからさ・・・どこの美人のお嬢様かと・

・・」
その言葉に全員が赤くなる。
「「「ホントに・・・？」」」
「三人とも綺麗だけど・・・こんな感想じゃやっぱ駄目なのか？」
剣崎が少し申し訳なさそうに言う。

「「「全然！」」」
それを三人が強く否定した。
「そっか、なら行くか！」
そう言って剣崎は歩き出した。
三人は先程の剣崎の発言が余程うれしかったようで、人が見たら一発で虜にされるような笑顔で彼についていく。

こうして彼は三人のハートをがっちり掴んでいったのだった。
なんという男だろう・・・。

―ホテルの外では・・・―

三人の青年が話していた。そのうちの一人はバイオリンのケースを持っている。
「さあ行きなさい渡君。君の実力を思う存分発揮してきなさい」
「お前ならきっと大丈夫だ。行って来い渡」
「わ、わかりました！それじゃあ兄さん、名護さん、行って来ます」
そう言って『渡』と呼ばれたバイオリンの青年がホテルに入っていく。

青年が見えなくなると、どこからともなく金色の蝙蝠と、金色の子龍が飛び出してくる。

「お～い、渡の奴大丈夫かよ～？」

「渡さん！頑張ってくださいよ～！」

どちらも日本語を話しているが、残った青年二人が驚くことはない。むしろ呆れているようだ。

「やはりついてきていたのか・・・」

「留守番だとあれほど言ったのに・・・」

どうやら知り合いのようである。

「だってよ～、渡の晴れ舞台なんだぞ？」

「そうですよ！」

二体もおとなしく帰る気はないらしい。

「いいでしょう・・・ついてきなさい」

「ただし、変に目立つようなことをしたら・・・」

「わ、わかったって！」

「大人しくしますよ～・・・」

そう言って二人と二匹もまた、ホテルへと入っていく。

―会場内のはやて＆なのは―

「会場内の警備は、流石に厳重っと・・・」

「一般的なトラブルには、十分に対処できるだろうね」

辺りを見渡しながらそれぞれの感想を述べる。

「そういえばオークションの前に、ちょっとしたコンサートがあるみたいだね」
「そう、いまミッドで評判のバイオリニストの人が来てくれるんやって。前から聴いてみたかったんやわ～。」
「でもその人って本当はバイオリンを作る側の人らしいね」
「とにかく、どんな人か楽しみやな～♪」

ここでなのはは、剣崎がいないことを思い出す。

「ところで一真君は？」
「あれ？どこいったんやろう・・・フェイトちゃんと一緒かなぁ・・・」
そこまではやてが言うと、二人は同じ答えに辿り着いた。
「「フェイトちゃんの抜け駆け！？」」

「オークションはまだ始まらないのか？」
『Ｆｏｕｒ　ｈｏｕｒｓ　ａｎｄ　ｔｗｅｎｔｙ－ｓｅｖｅｎ　ｍｉｎｕｔｅｓ』
「サンキュー、バルディッシュ・・・ってそんなにあるのか！？」
剣崎だってこれぐらいの英語は理解できる。

「オークションの前にコンサートがあるらしいから、それで少し遅くなるって」

「そっか・・・暇だなぁ・・・」
「私と一緒じゃ・・・おもしろくないかな？」
フェイトが不安げにこちらを見上げる。
「い、いやっ！そんな事無いって！でもやっぱり待ち時間が・・・」

剣崎がそこまで言ったと同時に、全員に通信が入る。

『ガジェットドローン陸戦?型・機影３０、３５!』
『陸戦?型、２、３、４!!』
『あと・・・これは!アンデッド・・・カテゴリー９です!』

「一真さん!」
「ああ!行ってくる!!」
剣崎が駆け出す。

外に出ると、小型の通信機を手に取って、シャマルに連絡を取る。
「シャマル!アンデッドの場所は!?」
『そこから真っすぐ行った森の中だけど・・・動きが速い!?』
「それだけわかれば大丈夫だ!任せろ!」

剣崎が森に入る。
そこから少し走ると、彼は立ち止り周囲の気配を探る。

（・・・・・来た!!）

剣崎が目を見開くと、５メートルほど先に砂塵が巻き起こる。
そこから現れるのはもちろん・・・

―オレンジ色の毛に手についた三本の爪―

―その姿はまさにジャガー―

―スペードカテゴリー９・ジャガーアンデッド―

「カテゴリー９・・・行くぞ!!」

すかさずジョーカーラウザーを出現させ、『スペードＡ・ｃｈａｎｇｅ』を構える。

「変身っ！！」

剣崎の変身と同時に、戦闘が開始される・・・

第十五話～ホテル・アグスタ～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ヒビキ「よしっ！今日も絶好調！」

ジェイル『新しいオモチャも2タイプほど試してみるから、そちらも・・・』

ルーテシア「ガリュー？どうしたの？」

カブト「俺は天の道を往き、総てを司る男・・・」

次回『響く鬼と天の道』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（０Ｙ０）ついに俺の出番か・・・

（；ｄｌｌｂ）おい！なんであいつは変身して俺にはないんだ！

（　作者）だってぇ・・・君の変身は多分ラスト付近までないし・・・

（；ｄｌｌｂ）嘘だろ・・・

（０ｗ０）次回もお楽しみに！

第十六話～響く鬼と天の道～（前書き）

はい、第十六話です！
本当は０時投稿がしたかったんですけど、いろいろあったからしょうがないな・・・。

今回はサブタイの通りあの二人の話になります。
京介はまだ鬼の名前をもらってないという勝手設定ですが気にしないでください。
そして感想の返信でも言いましたが、今回は剣崎はお休みですね。

ここで発表があります。
ついにお気に入り登録が１００件を超えました！！
もううれしくてたまりません！！

これからもリリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳをよろしくお願いします！！

ということで今回も、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十六話～響く鬼と天の道～

ホテル・アグスタから少し離れた森の中。
ここに1人の青年がいた

「～♪」
何やら上機嫌で歌を歌っているようだ。
所々『魔化魍』だの『鍛える』だの、なんだかよくわからない歌である。

「よしっ！今日も絶好調！」
青年の名はヒビキ、これはコードネームのようなものであり、本名は日高仁志という。

―彼もまた、戦士の1人―

「それにしても、ここは空気がいいな～」
ヒビキは大きく深呼吸。

彼がこの世界に来たときの感想は、『う～ん・・・自然が少ないな～』だった。だが、探せばあるもので、今はこうやって自然を満喫している。

「屋久島みたいな森もいいけど、こういう明るい森もなかなかいいじゃない♪」
そう言って更に歩を進めるヒビキだった。

ヒビキから少し離れた場所に、一人の男と少女がモニターで誰かと話していた。

『御機嫌よう。騎士ゼスト、ルーテシア』

モニターの向こうの人物はジェイル・スカリエッティ。

「御機嫌よう・・・」

「何の用だ・・・」

挨拶を返した少女がルーテシア・アルピーノ、素気なく返したのがゼスト・グランガイツである。

『冷たいね・・・近くで状況を見ているんだろう?』

『あのホテルにレリックは無さそうなんだが、実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ』

『それに、仮面ライダー君のデータも欲しいからね・・・こちらからも一体、差し向けてみたんだよ』

そう言うと、ジェイルはゼスト側のモニターに剣崎と、ブレイドジョーカー、そしてジャガーアンデッドを映し出す。

『少し協力してはくれないか?君たちなら、実に造作もないことのはずなんだが』

ジェイルの頼みを、

「断る」

ゼストがすぐさま拒否する。

どうやら互いにある決まり事があるようで、今回はレリックがらみでは無いため、ゼストたちが協力する必要も義理もないのだ。

だが少女は違った。

「いいよ・・・」

『ありがとう、でも今回は骨董よりも彼のデータの方が優先だからね、こちらのペットのデータも送るよ』

『それと、新しいオモチャも2タイプほど試してみるから、そちらのデータも頼みたいんだ』

「わかった・・・それじゃあ、御機嫌よう・・・」

『ああ、御機嫌よう・・・』

モニターが消える。

「いいのか？」

ゼストが尋ねる。

「うん・・・ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、わたしはそんなに嫌いじゃないから・・・」

「そうか・・・なら少し俺は別行動をとる。気をつけるんだぞ・・・」

「うん・・・大丈夫、ガリューがいるから・・・」

ルーテシアの言葉と共に、彼女のデバイス【アスクレピオス】から黒い光が迸り、光の球が飛び出す。そしてそれは彼女の目の前に落

ちると、そこから『人型の虫』が出現する。

「ガリュー・・・よろしくね」
その言葉にガリューは頷くと、彼女を護るように隣に立つ。
それを確認したゼストはその場を去って行った。

「う～ん・・・そろそろ帰ろうか・・・どうしよう？」
ヒビキはまだのんびりと歩いていたが、顔には少し焦りが見える。
「明日夢にも京介にも早く帰るようにって言われてるしな～・・・」

『明日夢』と『京介』は彼の弟子のことである。
正確に言うと、明日夢は今ヒビキとは師弟関係ではない。
だが、二人ともヒビキの大切な弟子であることに変わりはない。

「今夜は俺の奢りって言っちゃったし・・・」
しょうがないか、と言ってヒビキは歩き出した。

「ガリュー？どうしたの？」
突然ガリューが動き、ある一点を見つめている。
そこから出て来たのは・・・

「あれ？帰る道ってこっちであって・・・ってうおっ！？」
ヒビキであった・・・。

「新しい魔化魍か・・・？それにしてはあんまりそういう気配じゃないけど・・・それになんかカッコいいし・・・」
ガリューを見て少し驚いていたヒビキだが、すぐに自分の感覚を頼りに正体を探る。なんだか無駄な感想も入っているようだが・・・。

「お～い、そこのお嬢ちゃ～ん、大丈夫か～？」
とりあえず襲っているようは見えないが、念のため目の前の少女に尋ねてみる。

（・・・・・・？）
ルーテシアの方は、目の前の男の『表面』と、彼からにじみ出る『中身』に疑問を抱く。普通の人間ではない。だが魔導師やその他ルーテシアの知っているものにも該当しない。

とにかく謎な男である。
本来なら特に気にせず見逃すところだが、今はミッションの最中で、ガリューも見られた。

「見られちゃったから・・・ガリュー・・・」
彼女の言葉にガリューが一歩前に出る。

「いや、俺は悪い人じゃなくて・・・」
そう言ってヒビキが前に出るが、ガリューがそれに反応し、拳を突き出す。
だがヒビキはそれを躱す。
「おっと・・・帰る道が知りたいだけ・・・って聞いちゃくれないか・・・」
その後もガリューの攻撃を躱すヒビキだが、避けきれなかった攻撃を受け止めた時、そのパワーに吹っ飛ばされる。

だがヒビキはすぐさま体制を立て直す。
そんな彼にルーテシアも少々目を見開いた。
（ガリューの攻撃が・・・効いてない）
更なる攻撃を繰り出そうとするガリュー、だがその動きが止まり、
顔を森へ向ける。
ヒビキの方もなにかを感じ取ったようで、ガリューとはまた別の方
向を睨む。

「ドクターの・・・新しいオモチャ・・・」
ルーテシアの指に、彼女の使役する小さな『虫』がとまり、『ソレ』
の接近を知らせる。

数秒後、二人と一体の前に『ソレ』が現れた。

「機械の・・・魔化魍か・・・」

―ヒビキの発言の通り、その姿は機械でできた『魔化魍』―

「どれも小さいけど、う～ん・・・やっぱり機械は嫌だなぁ・・・」
機械音痴のヒビキに機械の相手をするのはなかなか大変な事である。
だが考えてみれば、『扱う』訳ではない。『倒せばいい』のだ。
つまり・・・

「単純でよろしい！」

そう言うとヒビキが『何か』を取り出した。
それを一振りすると、折りたたまれた『ソレ』が開き、『音叉』と
なる。

―変身音叉【音角】―

ヒビキが左手に軽く当てる。

―キィィィィィィィィン・・・―

高く、それでいて清らかな音が響き渡る。

―次にヒビキは、音角を額にかざす―

彼の額に模様が浮かび上がる

―すると彼の体を紫色の炎が包む―

気合いと共に彼の体が変化していく

「ハァァァァァ・・・タアッ!!」

―そして右腕で炎を振り払った―

そこにいたのは人間の男『ヒビキ』ではなかった。

その姿は正に

―鬼そのもの―

―人知れず魔化魍と戦う者―

―その鍛え上げられた体と音は、全てを清める―

「青年達みたいな言い方をすれば・・・仮面ライダー響鬼!!」

「仮面・・・ライダー？」
ルーテシアが首を傾げる。

（そういえばドクターが言ってた・・・）

頭の中に、先程のモニターに映っていた男と、青い異形の姿が浮かぶ。

「さてと・・・行きますか！！」
響鬼はそういうと、腰から二本の撥を取り出す。
これが彼の武器
【音撃棒　烈火】
「タアッ！ハッ！オリャアッ！！」
響鬼は烈火を使って次々とガジェットを破壊する。

このガジェットは本来、通常攻撃（魔法を含む）で止めを刺すことは容易ではない。
これは元である魔化魍と同じである。
だが運が悪いことに、ここには音撃を扱う『鬼』である響鬼がいる。
それに響鬼の実力は関東一、いや日本一であるだろう。
つまりせっかくの新型も、彼の前では敵ではないのだ。

「ラストォ！テアァッ！！」
ついに最後の一機も破壊し、一息つく響鬼。
「ふ～・・・まっ、こんなもんかな？」
「なんで・・・そこまで強いの？」

突然ルーテシアが話しかけてきた。
響鬼は一瞬目を見開くと（相手にはわからない）、得意げに語る。
「それはもちろん・・・俺、鍛えてますからっ！」
―シュッ―
彼の決めポーズとともにそう言う響鬼。
ルーテシアは首をかしげると、響鬼のポーズをマネしてみる。
だがこれがなかなか上手くいかない。響鬼のように滑らかにならないのだ。
それを見て少し笑ってしまう響鬼、だが彼の雰囲気が再び変わる。

「おいっ！いつまでそこに隠れてるつもりだ？」
彼が見ている木の陰から、人がでてくる。
その姿は・・・
「・・・？」
ルーテシアそのものだった。

「いくらそっくりになっても、お嬢ちゃんと気配が違いすぎる」
響鬼がそう言うと、ルーテシア（偽）が姿を変えた。
その姿は『虫』を模したガジェット。

「魔化魍の次は『虫』か・・・とにかくやってみるか！」
響鬼が構えると、ガジェットの姿が消えた。
「へ？・・・うおっ！」
間の抜けた声を出す響鬼だが、直後に体に衝撃が走る。
その後も何度も見えない攻撃を食らい続ける響鬼。
「そういえば忘れてたな・・・確かすんごい速いんだっけ・・・」

『ある人物』から聞いていた情報を、今は見えないガジェットの動

きに当てはめる。
その間も攻撃は続き、ついに響鬼が膝をついた。

そんな響鬼に飽きたのか、なんとガジェットは擬態した相手、つまりルーテシアに攻撃をしかけようと体の向きを変えた。
だが二人とガリューはそれに気づかない。
それをいいことに、ガジェットが腕を振り上げ、それを叩きつけようとした瞬間・・・

『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』
電子音が鳴り、それと同時にガジェットの腕が地面に落ちる。
ガジェットは突然の事態に動きをとめる。そのため全員からその姿を捉えられる。
するとガジェットが、先程までの響鬼のようにのけ反る。
よく見ると、ガジェットの周りを赤い閃光が駆け巡っている。
それを確認した響鬼が安堵する。
「来てくれたか・・・青年！」

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』
再び電子音が鳴ると同時にガジェットは爆発。
晴れた煙の中から出て来たものは・・・

―赤い鎧に赤き角―

―その姿からは何故か太陽を彷彿とさせ―

―人差し指を天に向けたそのポーズは―

―『彼』がとるポーズと同じであった―

「おばあちゃんが言っていた。『子供は宝物・・・この世でもっとも罪深いのは、その宝物を傷つけるものだ』とな・・・」
以前剣崎たちにむけて言った言葉の全文である。

「あなたも・・・仮面ライダー？」
「確かにそうだが・・・違うな・・・俺は天の道を往き、総てを司る男・・・」

この赤い戦士の正体は・・・

「天道・・・総司！」

第十六話～響く鬼と天の道～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

カブト「なにせこの世で一番強いのは俺だからな！」

ルーテシア「大丈夫・・・ゼストやドクターに言うつもりはないから・・・」

響鬼「それじゃあ、よろしくなっ！青年！」

剣崎「ナニスンダ！ルラギッタノカ！？」

次回『剣崎に誤射は付き物』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（；ｏｗｏ）サブタイからして嫌な予感しかしない・・・

（ｏＹｏ）作者・・・俺の活躍はまだ続くんだろうな？

（作者）ｂ　次回も結構出張ってるから大丈夫

（＾Ｕ＾）絶対見てくれよな！！

（；作者）それ（今のニーサンの発言）の元ネタわかる人はいるだろうか・・・。とにかく！次回もお楽しみに～

第十七話～剣崎に誤射は付き物～（前書き）

はい、第十七話です！

珍しく土曜日なのにパソコンが自由に使えたので0時を狙って投稿してみましたw

今回も響鬼&カブトが出張ってますが、ちゃんと剣崎も出てきますから安心してくださいw

ここで皆さんに一つアンケートがありまして、『サウンドステージ01編』なんですが、あれはあった方がいいですか？
知らない人に超大雑把に説明しますと、
・なのは原作6話と7話の間（ホテルアグスタの前）
・海鳴市への出張任務
・ザフィーラを除く主要メンバー全員出動
なんですよ。

とりあえず書いてはいるんですが、書き始めが遅くて投稿はいつになるかわかりまえんが、もしかしたらアグスタ編のすぐ後に閑話として行けるかもしれません。

皆さんのお返事待ってます。

あぁ・・・仮面ライダーがアニメになってなのはとのクロスものが映像化されないかなぁ・・・
それか、ニコ動でこの作品が動画にならないかなぁ・・・。

作者が欲望を解放したところで、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十七話～剣崎に誤射は付き物～

「天道・・・総司？」
ルーテシアが呟くと、戦士・『仮面ライダーカブト』は言った。
「覚えておいて損はない。なにせこの世で一番強いのは俺だからな！」

「いや・・・それはないでしょ・・・」
カブトの言葉に響鬼が返す。
「なんだと・・・？」
「だって青年は魔化魍倒せないじゃんか」
「ふっ・・・それぐらい造作もないことだ・・・」
「そんなこと言って、前特訓してたけど芳しくなかったってカメラの青年言ってたぞ？」

「門矢の奴・・・余計な事を」

いつまでも続きそうな感じだったが、
「とにかくだ・・・」
カブトは無理やり話を終わらせて、真面目な声で響鬼に話す。
「俺たちの事は知られてはいけない・・・その子も例外ではないぞ？」

そう言ってルーテシアを見る。
だが彼女は言った
「大丈夫・・・ゼストやドクターに言うつもりはないから・・・」
彼女のそんな言葉に天道は何故か納得したようで、左手を空に掲げた。
その瞬間、何もないはずの空から『銀色のカブトムシ』が飛んできて、カブトの手に収まる。

「いいだろう・・・なら『ドクター』には、忘れてもらうとするか・・・」

そう言うと、銀色のカブトムシ【ハイパーゼクター】をベルトの左側に装着し、ゼクターホーンを倒す。

「ハイパーキャストオフ・・・」
『Ｈｙｐｅｒ　Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』
するとカブトの姿が変わっていく・・・。
銀のアーマーが追加され、角が一回り大きくなる。

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｈｙｐｅｒ　Ｂｅｅｔｌｅ』
これがカブトの第三の姿『カブト・ハイパーフォーム』。通称『ハイパーカブト』である。

「それじゃあ、よろしくなっ！青年！」
「任せておけ・・・」
「あ！あと今日は店に明日夢たちを連れてくから、それについてもよろしくな～」

「いいだろう・・・」

話が終わると、Hカブトはハイパーゼクターのスクラップスイッチを叩いて宣言する。

「ハイパークロックアップ！」

『Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ゼクターから先程よりも高い音声が発せられると、Hカブトのアーマーが展開し、背中からは光の羽のようなものがでてくる。

そして彼は光と共に消えた。

「それじゃ、俺たちの事は秘密だぞ～」

響鬼は走りながら、顔だけ変身を解いて言った。

ちなみに彼等『鬼』は、変身時に服が燃えるなど、とにかく身に着けていたものがすべてなくなるため、全体の変身を解いてしまうと、ただの変質者となってしまう。まあ顔だけ変身を解いても変なことに変わりはないが、『全裸で捕まる』には替えられない。

「うん・・・」

ルーテシアが頷きながら返事をすると、ヒビキは走り去っていった。

しばらくするとゼストが帰って来たが、彼はこの場の不自然さに気が付いた。

（ガジェットの残骸・・・これが例の『新しいオモチャ』か）

だがおかしい、何故ここに残骸があるのだろうか。

それにルーテシアとガリューもおかしい。

「しゅっ・・・・・しゅっ・・・」
ルーテシアは手首を何度もクルクルさせているし、
「・・・・・・・」
ガリューは何故か人差し指を天に向けてポーズをとっている。

「・・・・なにをしている」
堪らず聞いてみると、
「・・・・秘密・・・・・・」
そう返って来た。
「ミッションは終わったのか・・・？」
更に聞いてみると、ルーテシアの動きが止まった。

「・・・・・・忘れてた・・・・」

その後、急いでインゼクトを召喚、残ったガジェットを操作し、更に数機を転送。
これによって、物語は正しい流れを少しだけ取り戻した。
だが『骨董』のほうは、前線から下がったエリオ・キャロというイレギュラーの存在があったため奪取を中止。

―ジェイルラボ―

「・・・・・・・？」
『・・・・・・・？』
今ラボではジェイルとウーノがモニター越しに顔を見合わせながら首を傾げている。
「いったい何をしていたんだろうね・・・」
『わかりません・・・』

「新しい『オモチャ』について話していたのは覚えているんだが・・・」
『はい・・・ですがデータが途中から抜け落ちています』
「赤いカブトムシが謎の機械を持って目の前に立っていたような気がするんだが・・・」
『私もです。ですがその姿はカメラに映っていませんでした』
「う～ん・・・気になるねぇ・・・気になるんだが、なんだかこれ以上その事について調べると、とても大変なことになりそうな予感が・・・」
『ここは・・・』
「引き下がるしかないようだね・・・ハァ・・・」
流石のジェイル・スカリエッティも、天の道を往く男には敵わないというのか!?
だがジェイルが新たに出したモニターには、明らかにライダーとは異なる『１２の異形』の姿が映っていた。
―あれはいったいなんなのだろうか―
―ここでやっと戦闘中の剣崎―
「こいつっ・・・こんなに速かったか!?」
戦闘中の剣崎は、ジャガーの速さに戸惑いを隠せない。

とにかくこちらの攻撃は当たらず、相手の攻撃を食らい続けることになっている。
相手がジャガーなので、マッハのカードは手元になく、残された手段は、

（キャロしかいないな！）

「キャロ！今どこにいる！？」
通信機に呼びかける。
『えっと・・・ホテルの裏口です！』

「裏か・・・今からそっちに行くから、俺のスピードを上げてくれ！」

『わかりました！』

通信を切って裏口を目指して走り出す剣崎。
ジャガーもそれについてきたため、攻撃を受けながら走ることになる。

「我が乞うは、疾風の翼。青き剣士に、駆け抜ける力を・・・」
『Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ.』
剣崎の通信を受けて、キャロが早速詠唱をする。

すると剣崎が走ってきた。
「キャロ！頼む！」
「はい！ブーストアップ・アクセラレイション！」

キャロの放った光が剣崎に当たる。その瞬間剣崎のスピードが飛躍的に上がった。

「「頑張ってください！」」

「サンキュー！」

エリオとキャロの応援にこたえながら、剣崎は再び戦闘に入った。

（これなら少しはついていける！）

剣崎の思っている通り、戦況はかなり五分に近くなった。

彼の戦闘経験が、足りないスピードを補って、相手にダメージを与えている。

ジャガーの攻撃も、ほとんどを避けられるようになった。

森を駆け抜けながら戦闘は続く

一方、ルーテシアが転送したガジェットと戦うティアナ＆スバル

「スバル！クロスシフトA、行くわよ！！」

「おお！！」

ティアナの指示が出ると、スバルが『ウィングロード』でガジェットたちの注意を引きつける。

その間にティアナはカートリッジを四発ロード、彼女の周りには十数個の魔力スフィアが展開、

「私は・・・ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

その間もスバルが陽動を続け、相手の攻撃を防ぎながら『その時』を待った。

『ティアナ！四発ロードなんて無茶だよ！それじゃあティアナもクロスミラージュも！』

「撃てます！」

『Ｙｅｓ．』

注意を揃って無視し、ティアナがクロスミラージュをガジェットに向ける。

「クロスファイアァ・・・シュートッ！！」

ティアナが腕を振ると、スフィアがガジェットに向かって飛んでいき、次々と撃ち抜いていく。だが更に追加で発射するティアナ。

―それがいけなかった―

最初に展開したスフィアの数は、既に彼女の限界の手前だった。しかし彼女はその後も更に追加し、ついに彼女の制御から外れた。

ガジェットを落としていくスフィアだが、その中の一発が避けられる。

それは一直線に・・・

―スバルへと向かっていった―

「！？」
だがスバルは本来の流れと違う動きをとっていた。
低空を移動していたのだ。

つまりここに間一髪で来るはずのヴィータは間に合わず、そのままスバルに当たる・・・はずだった。

だがここで更なるイレギュラーが発生する。
「待てよ！おいっ！」
ここで戦闘中の剣崎＆ジャガーアンデッドが入ってくる。どちらも木の枝から枝へ飛び移ることで、相手の攻撃が当たらないように素早く移動していた。

それが剣崎にとって仇となる。
どういうことかは理解いただけると思う。

―明らかに低空を移動するスバル―

―間に合わないヴィータ―

―木を飛び移って移動する剣崎―

以上の事から導き出されることは・・・

「待てって！！・・・！？ウエアッ！！」
「「・・・えっ！？」」

―スバルの前に出て来た剣崎に命中である―

「ナニスンダ！ルラギッタノカ！？」

滑舌が戻ってしまうぞ剣崎！！
だが確実に嫌な思い出がよみがえっているのだろう。
口調はあれだが顔が下を向いているし、肩も下がって今にも心が折れてしまいそうである。

「ティアナ！この馬鹿！」
ここでヴィータも到着。どうやらこの流れは見ていたようで、ティアナに怒鳴る。

「無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！一真がいなかったらどうなってたと思ってんだ！！」

その言葉を聞きながら、ティアナは愕然としている。

「あの、ヴィータ副隊長・・・本当は私がちゃんと防ぐまでがフォーメーションで・・・」

「ふざけろタコ！！仲間巻き込んでなにがフォーメーションだ！！」

スバルがフォローしようとするが、ヴィータは更に怒り出す。

「もういい！二人ともすっこんでろ！！」

だが戦闘はまだ続くのだ・・・

第十七話～剣崎に誤射は付き物～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

はやて「それでも・・・私らは家族やろ！？助け合って当然やないか！！」

ギャレン「久しぶりだな・・・剣崎！」

剣崎「見ててくれ・・・」

剣崎「変身！！」

次回『ブレイド』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（０Ｍ０）やっと俺の出番か・・・

（作者）この小説の構想の時点で橘さんはここに出ること確定だったからね

（０Ｈ０）そして次回は遂に剣崎さんが！！

（＞・・・Ｖ・・・＜）待っていたぞ・・・

（０ｗ０）ノまた見てね！！

第十八話～ブレイド～（前書き）

はい、第十八話です！

今回はやっと！十八話目でやっとですよ！！

まあジャックフォームはすぐなん（ｒｙ

ネタバレはいいとして、ライトさんから『サウンドステージ編』についてのお返事をいただいたので、やることにしました。

・大体、２～３話の予定。
・ゲストは少なめ
・剣崎がかわいそう

だいたいそんな感じです。

誰も反応してくれなかったらどうしようかと思ってましたよ・・・ｗ

感想についてですが、２～３回ぐらいはまだありのレベルですので、感想送ってくださいね。

言い方が不味かったかなぁ？

とにかくまずは送ってみてください。

ダメだったらその時言います。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十八話～ブレイド～

「ぐっ・・・とにかくあいつを封印しないと・・・」
腹部を押さえながら剣崎は言った。
どうやら先程のティアナの『クロスファイアーシュート』が、彼になかなかのダメージを与えたようだ。

だがさらなる違和感に気付く。
「まさか・・・スピード戻ってる!?」
ダメージでブースト魔法が解けてしまったのだろうか？
「俺がダメージ受けても・・・解けるのかコレ!?」
だがそれを気にしている暇はない。

「しょうがない・・・このまま行くぞ!」
再び姿を現したジャガーに宣言する。

―そんな彼の姿を見ている男が一人―

「・・・これを渡すときがきたか・・・」

そう言って『謎の男』は剣崎の後を追う。

（シャマル、こちらの戦闘は終わった・・・他はどうだ？）
？型との戦闘を終えたシグナムが思念通話でシャマルに尋ねる。

（ヴィータちゃん達も終わったそうよ。あとは・・・）

（一真か・・・）

（えぇ・・・ティアナが一真さんに当てちゃったらしくて・・・苦戦しているみたい）

（そうか・・・私が援護にまわる。囮程度にはなるだろう）

（そんなことしたら、一真さん怒るわよ？）

（・・・だろうな。仕方ない、この案は無しだ）

「やっぱ・・・辛いな」
剣崎が膝をついた。結局スピードが元に戻った彼は、ジャガーから一方的に攻撃を受けるはめになり、現在苦戦中である。

「一真！無事か！？」
シグナム達が駆けつけるが、あまりのスピードに目で追う事も出来ず、結局は剣崎とジャガーの一騎打ちという状態。

そしてついに剣崎が人間の姿に戻ってしまう。

「「「一真さん（くん）！」」」

ホテルからはやて、なのは、フェイトも出てくる（もちろんバリアジャケットで）

さらにはフォワード陣もそれぞれの持ち場から駆けつけ、六課のメンバーが揃う。

だが以前剣崎は防戦一方で、自分達ではどうしようもできない。

「あっ・・・もう一回ブースト魔法をかければ！」

キャロがもう一度詠唱を始めようとするが、

「キャロ！避けろ！！」

「え・・・キャッ！！」

すでに一度、魔法をかけるシーンを見ているジャガーによってそれもままならない。

「なら私が！」

「僕も行きます！」

スピードタイプのフェイトとエリオが出ようとするが、

「ダメだ！二人とも出てくるな！！」

今度は他ならぬ剣崎からストップがかかる。

「どうして・・・」

「この前のカテゴリーQのことを忘れたのか！？お前たちを危険な目に遭わせたくない！！」

確かに、この前のカテゴリーQ・カプリコーンアンデッドとの戦いは、相手の本気の前に手も足も出なかった。

「それでも・・・私らは家族やろ！？助け合って当然やないか！！」

はやてが言葉に、剣崎の動きが止まった。

「そうだよ！一真君だけ戦わせるなんて、それじゃあ家族失格だよ！」

「主はやてや、なのはの言うとおりだ・・・私達は家族ではないのか？」

「一真さんだけ戦わせたら絶対に無茶するじゃない？」

「私は・・・一真さんに一人で無茶してほしくない！」

なのは、シグナム、シャマル、フェイトがはやてに続く。

「私だって一真さんの役に立ちたい！！一真さんのおかげでここにいるんだから！」

「あの！さっきは・・・すいませんでした！！」

「僕たちだって・・・戦えます！」

「これ以上一真さんが傷つくのは見たくありません！」

「お前、こんなに心配してくれる家族を裏切るのか！？」「そんなこと嫌です！！」

フォワード陣とヴィータ、リインもそれに続いた。

「お前は・・・もう一人ではない」

ザフィーラが最後に言った。

「皆・・・」

剣崎がメンバーたちの方へ顔を向ける。

―その瞬間、ジャガーが彼の後ろに現れ腕を振り上げた―

「！？　くそっ！！」

剣崎が防御しようとするが、明らかに間に合うレベルではない。

メンバー全員が叫ぶが、その声も空しく、ジャガーの爪は真っすぐ剣崎に振り下ろされる・・・

―はずだった―

『Ｂｕｌｌｅｔ』

剣崎のラウザーと同じ音声が流れるとともに、銃声と甲高い金属音が響き渡った。

「グウゥ・・・」

ジャガーの爪は、根元から見事に折られていた。

「うぇ？・・・バレット・・・まさか！！」

剣崎が辺りを見渡すと、

「その通りだ！」

彼にとって、とても懐かしい声が聞えてきた。

剣崎が振り返って声の主を探すと、一本の木の後ろから出て来たのは、

「久しぶりだな・・・剣崎！」

―赤いクワガタムシを模した緑の目の戦士―

「橘・・・さん？」

『仮面ライダーギャレン・橘朔也』であった・・・。

「橘さん！！「受け取れ剣崎！！」・・・ってウェ！？」

ギャレンが何かを投げる。
咄嗟に受け取った剣崎は、受け取った『ソレ』を見て驚いた。

「これは・・・ブレイバックル・・・」

剣崎が受け取ったもの、それは剣崎の『仮面ライダー』としての証。
幾多の戦いを、これと乗り越えてきた。

「『変身』しろ剣崎！お前の護りたいものの為に！！」

橘の言葉に、剣崎は六課のメンバーを見た。
その隙を狙って再びジャガーが攻撃を仕掛けようとするが、
「邪魔をするな！！」
ギャレンによって後退させられる。
「今だ！！」
ギャレンがこちらを向いて頷く。

「・・・はいっ！！」
そしてついに、彼は動き出す。

―剣崎は？Ａ『Ｃｈａｎｇｅ』を取り出してバックルに入れた―

「皆・・・」

―それを腰に当てると、バックルから自動的にバルトが伸びて巻かれる―

「見ててくれ・・・」

―待機音が鳴り響き、剣崎は『いつも通り』腕を動かす―

「これが俺の・・・本当の」

―そして手首を素早く返し『宣言する』―

「変身！！」

宣言と同時に彼はベルトの『ターンアップハンドル』を引いた。

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

すると音声と共に、彼とジャガーの間に青色の光の壁『オリハルコンエレメント』が放出される。

剣崎はそれに向かって駆け出した。

（この力は・・・皆の・・・大事な家族のために！）

そして彼が壁を通った瞬間、

―彼は再び『護るための力』を手にした―

―紫紺の体に銀色の鎧―

―ヘラクレスオオカブトを模した角―

―燃えたぎる真っ赤な目―

『仮面ライダーブレイド』が・・・ついに帰って来た

「剣崎！これを使え！！この世界で封印したカードだ！」
ギャレンの手から『一枚のカード』が投げられる。

そのカードは・・・

「『サンダー』・・・これなら！！」

ブレイドは腰のホルスターから一本の剣を取り出す。
これが彼の本来の剣『醒剣ブレイラウザー』

すかさずオープントレイを展開し、カードを一枚取り出す。

カードを取り出した瞬間、ジャガーが本能的に逃げる体制に入ろうとする。

だが・・・

「グッ！？」

その体には数多くのバインドが掛けられていた。
掛けたのはもちろん六課のメンバー達。それぞれがブレイドを見て頷く。

「・・・サンキューみんな！！」

感謝の言葉と共に、二枚のカードをラウズする。

『Ｋｉｃｋ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

「ハァァァ・・・ウェイッ！」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｂｌａｓｔ』

ブレイドのマスクが赤く光り、必殺技の体勢をとる。

「皆につくってもらったこのチャンス・・・一撃で決める！！」

決意と共にブレイドが跳んだ。

「・・・フッ・・・やはりブレイドはお前しかいないな」

ギャレンは森の中へ姿を消した。

「ウェェェェェェイッ！！」

「グゥ・・・ガァァァッ！！」

ブレイドの『ライトニングブラスト』が決まり、ジャガーアンデッドは爆発した。

だが死んでいるわけではない、奴らは不死身の生命体なのだから。

そしてジャガーのバックルが開いた。

「これで・・・」

ブレイドはプロパーブランクを取り出して投げた。
すると緑色の光とともに、ジャガーアンデッドがカードの中に『封印』される。

そして封印を終えたカードは『プライムベスタ』となってブレイドの手に戻ってくる。

―これで残りのスペードスートのアンデッドは二体―

ブレイドは変身を解き、剣崎一真に戻る。
だが、
（あれっ・・・また意識が遠のくような・・・）

剣崎はそう知覚すると、

―またもや気を失った―

「一真さん・・・また気を失って・・・」

「前の戦闘よりはましだがな」

「とりあえず・・・私は一真さんを連れて先に帰ってますから」

「シャマル～抜け駆けはいかんよ～」

「ティアナ、一真君について行ってあげて」

「えっ!?でも・・・」

「いいから行きなよティア～」

「スバル、お前はもちろん残るけどな。ザフィーラは・・・ついでに残れ」

「心得た・・・」

「エリオとキャロも事後調査です～」

「「はい！」」

こうしてホテル・アグスタでの出来事は終わりを告げる・・・

ちなみに、紅渡のバイオリンコンサートは大成功だったようだ。

第十八話～ブレイド～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「・・・ここは・・・ってまた医務室か」

ティアナ「やっぱり私のせいで・・・」

剣崎「・・・皆も聞いてたよな？」

シャーリー「わ、わかってますって！」

次回『無理するな』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（；ＯＨＯ）一人だけまだ出番が・・・

（作者）ちゃんと出番はある、だから心配するな！

（ＯＭＯ）今回は俺がでるから皆が読んでくれたはずだ！

（作者）どうなのかな～？

（＞：：Ｖ：：＜）では、また見てくれ

第十九話～無理するな～（前書き）

はい、第十九話です！

今回は特に戦闘も無し、次回も無し（ここからサウンドステージ）、次々回はなんだか怖くて、さらにそれプラス二話あるっていうこの先の展開。（まさかのサウンドステージ四部編成）

つまり、『模擬戦編』は当分先になるという事です。

ここで一つ案がありまして、『サウンドステージの時系列をホテル・アグスタより後にしたい』というものなんですけど、よろしいでしょうか？
これについてのコメント待ってます。
正直認めてくださると助かります。

あとですね、言い忘れていましたが、ＰＶが１０万超えました！！（現在１１万）
ユニークもあと少しで２万！！
これも皆んさんのおかげです、ありがとうございます！！

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第十九話～無理するな～

「・・・ここは・・・ってまた医務室か」
剣崎が目覚める。
時計を見る限り、今回は二時間程度で起きることができたので、特に誰かに迷惑をかけることもないと安心していた剣崎。
だがそれは間違っていた。

「あっ・・・」

剣崎が目線を向けると、そこには本来いるべきシャマルではなく

「ティアナ・・・なんでここに？」

申し訳なさそうな顔をしてこちらを見るティアナの姿があった。
ティアナはベットの真横まで来ると、
「あの・・・すいませんでした！！」
深々と頭を下げた。

「うぇ！？な、なんのことだ？」
いきなりのことで頭がついていってない剣崎。

それを聞くとティアナは顔を俯けて言った。
「あなたに・・・当ててしまって」

「ああ、あれの事か」
剣崎もようやく理解したようである。

「私があんな事しなければ、もっと楽に封印できたのに」
自分の行為をちゃんと反省しているティアナを見て、剣崎は起き上がり声をかける。

「ティアナ」

ティアナが顔を上げると、剣崎の手が目の前にあった。
咄嗟に目を瞑ってしまうティアナだが、

―ポンッ―

「えっ？」
剣崎はティアナの頭を軽～く叩いただけであった。

「お前はちゃんと反省してるし、アンデッドはティアナを含めた皆のおかげで封印できた。」
キョトンとしているティアナを見て、剣崎は笑顔を向ける。

「それに、あの時ちゃんと謝ってくれただろ？それで十分だ！」
そして剣崎はふと遠くを見るような目をすると、ティアナに尋ねた。

「あの時いた人の事覚えてるか？」
「あ、はい。『橘さん』って呼んでた・・・」
ティアナはアグスタで剣崎を助けた謎の赤い男を思い出していた。

「あの人俺の『仲間』でさ、元の世界で一緒にアンデッドと戦って

たんだ。」
剣崎はあえて『先輩』ということを伏せた。
言ってしまったら、『あなたはアンデッドなのに先輩とはこれいかに』などということになってしまうだろうし、そうなると自分の秘密を話すことになる。
今はその時ではないと思った剣崎は、これを伏せることにした。

「でも、最初はなかなか互いの思いが噛み合わなくてさ、何度も戦ったし、いきなり攻撃されることもあった」

「そんな・・・」
ティアナはショックを受けた。
自分の仲間と思っていた相手にいきなり攻撃されることは、どれほど悲しいことだろうか

「一緒に戦いだしてからも、他の仲間の事とかでぶつかった」

「一番酷かったのは、俺がピンチなのにずっと陰で見ててさ、何を言っても全部無視するんだよな～」

―ＭＯ）＜・・・　　Σ（０ｗ０；）＜オンドゥルルラギッタンディスカ!?

「ならなんで・・・あんなに信頼し合ってるんですか?」
ティアナは言った。
あの時の二人は、どう見ても『信頼できる仲間』だったからだ。

「やっぱり、同じだったからかな？」
「はい？」

「人々の為に戦いたいって思いは・・・皆同じなんだよ」

「俺たちは皆の為にいるんだ。自分が護りたいと思ったから・・・」

そしてティアナを見ながら言った。
「今俺が護りたいのは、『六課（ここ）』だ。そのためなら、俺は何度だって戦う！グッ・・・」

言った瞬間剣崎の顔が歪んだ。

「大丈夫ですか！？」
「なんだ・・・傷の治りが遅い・・・」
「やっぱり私のせいで・・・」
「いや、あの傷は比較的いつも通りなんだけど、でもカテゴリー９から受けた深めの傷がちょっと・・・」

そう言って剣崎が胸元を見ると、そこからは緑色の血が滲んでいた。

「戦いが終わった後も妙だったし・・・ブレイバックルのせいか？・・・いや橘さんじゃないんだからそれはないか・・・」

一人の世界に入りだした剣崎。
だがティアナの疑問が引き戻す。

「そういえば、『あれ』はいったい・・・」
ティアナが言っているのは剣崎が変身したあの姿のことだ。

「あれは・・・『仮面ライダーブレイド』」

「仮面ライダー？あれもライダーなんですか？」

ティアナや六課のメンバーからすれば、『仮面ライダー』は剣崎がいつもなっている『ジョーカー』または『ブレイドジョーカー』のことを指す。

『カリス』については、「ちょっとアンデッドっぽいから」という理由で特に気にしてはいなかった。（実際にそうなのだから不思議ではない）

だが今回の橘と呼ばれた男、それに『ブレイド』は、明らかにアンデッドではない。どう考えても『システム』だ。

これは避けることはできないと思った剣崎は、ついに『秘密の一片』を語る。

「仮面ライダーっていうのは、ジョーカーのことを指す言葉じゃない。」

「俺が変身した『ブレイド』そして橘さんが変身した『ギャレン』は、『ライダーシステム』っていって、それを使って変身、そしてアンデッドと戦う者を『仮面ライダー』っていうんだ」

「そして俺は、元の世界で仮面ライダーブレイドとして戦っていた」

「始・・・カリスはハートのカテゴリーＡの姿を借りたやつだったけど、今でもあいつは正真正銘の仮面ライダーだな」

「あともう一人、睦月ってやつがいて、そいつは『レンゲル』に変身してた。」

「っていうのが俺が言ってないことだ・・・皆も聞いてたな？」

「皆？」

剣崎が最後にそう言うと、ティアナは訳がわからず首を傾げるが、

「やっぱりばれちゃった？」

「前もこんなことあっただろ・・・」

隊長陣とフォワード陣、さらにはシャーリーまで入ってくる。

「皆はいいとして・・・シャーリーはこれだな？」

剣崎はそう言ってブレイバックルを取り出した。

「あ、それもバレてました？」

「お前がわざわざ俺の見舞いなんてくるとしたら、こういうやつが絡む時ぐらいだろ？」

「そんなことないですよ～！っと・・・いいんですか？」

剣崎は既にブレイバックルを投げ渡していた。

「なんだか体も動かないし、今日はゆっくりする。でも、変な改造は無しだぞ」

「わ、わかってますって！」

（すべてお見通しかぁ・・・）

一通り話が終わると、ここからは彼女たちのターン

「一真さん、今日は休むつもりなら私がお世話を・・・」

フェイトが積極的にでた。

「いや私がやろう！」

シグナムも続いた。
「ここはまた私やろ？」
はやてもでてくるが、
「はやてちゃんはだめだよ。一真君は私に任せて！」
なのはが阻止＆自分推し
「医務室は私の職場です！だから私が！」
やはりシャマルも出てくる。

なんだか以前の医務室でのソレの時より一人多いが、やることは同じ。

「うれしいけど、仕事は終わったのか？」
だが剣崎の一言は絶対である。

聞いた瞬間シャマルを除く四人がダッシュで部屋を出ていく。
もちろん自分の部下達を連れて・・・なぜかティアナは置いて行かれた。
というか午後の訓練は無いはずなのにいったい何をしに行ったのだろうか・・・スバルたちが可哀想でならない。

シャマルがガッツポーズをするが、一分と経たないうちに呼び出しをくらって泣く泣く出て行った。

こうして再び医務室には剣崎とティアナだけになる。
するとティアナも立ち上がり、

「少し、練習してきます・・・」
そう言って出ていこうとする。

「ティアナ、無茶はするなよ？」

その姿を見て少し不安になった剣崎が言うと、
「あなたに言われたくないです・・・」
呆れ半分でそう言って出て行った。

「確かに・・・無茶ばっかりだな俺・・・」
いきなり空港火災に巻き込まれ、子供を二人（ナカジマ姉妹）救出。
それからはミッドの事件や事故に首を突っ込み続けた四年間。
いきなり六課に入って（入れられて）いきなりシグナムと模擬戦。
カプリコーンとの戦闘。
そして今回のジャガー戦。
いろんなことがあったが、自分の無茶に剣崎は後悔していない。（シグナムとの模擬戦は除く）
今までも、そしてこれからも後悔しないように無茶をする。
それが剣崎の決意だ。
だが自分が無茶をして傷つくことを悲しむ者達がいることを、彼は考えているのだろうか・・・

（とりあえず、皆に怒られない程度に頑張るか・・・）

どうやら、少しは考えていたようである。

剣崎が一人になってから二時間以上経つが、未だにシャマルは帰ってこない。

そして彼の傷もいい加減治った。

（そろそろ動いてもいいだろ・・・）

だが、シャマルやフェイト、そしてなのはに見つかれば、すぐさま医務室に逆戻り。

シグナムは何を言いだすかわかったものではないし（模擬戦とか）、はやてに会ったら今度は何処に行かされるか・・・。

「ティアナだな・・・」

結局ティアナのもとへ向かうことにした。

「ハァ・・・ハァ・・・」医務室をでてから、ずっと特訓をしていたティアナ。だか、あまり長い時間ではないにしろ、その激しさは注意を受けてもおかしくない程のものであった。（実際、ヴァイスから既に注意を受けた。）

「やっぱり無茶してるじゃないか」

いきなり聞こえてきた声に振り向くと、そこにいたのは剣崎。

「私みたいな凡人は、これぐらいのことをしないと・・・」

「凡人？俺はそうは思わないけど」

「気休めはよしてください・・・どうせ私の気持ちなんてわからないんだから」

「ティアナ・・・」

「もういいですよね・・・帰ってください！」

「見てるだけなら？」

「もう・・・勝手にしてください！！」

ということで見学することになった剣崎。
ティアナの訓練を見ていたが、

（ティアナって橘さんよりすごいんじゃ・・・・・・！？）
な～んてことを思っていると、後ろから気配を感じた。
すぐに振り返るが、だれもいなさそうだ・・・。

だがどうしても気になるので、ボソッと呟いてみた。

「橘さん・・・まさかまた見てるんですか・・・？」

―剣崎の回想パート？―
―ＭＯ）＜ジー・・・　（０ｗ０；）＜ナズェミテルンディス！？

この世界に来てから、いったい何度この光景を思い浮かべたことか・・・。

だが言った瞬間、『ガサッ』という音と同時に木の一本からギャレンの角が見えた。
すぐに木の後ろに回り込むが、そこには既に誰もいなかった。

「ジェミニを使ったな・・・」

剣崎がそう言っていると、ティアナはとりあえず終了することに決めたようで、既に歩き出していた。

「ちょっと待てって！置いてくな～！」

剣崎も急いで後を追う。

この日から、ティアナの個人練習には剣崎が付き添うようになり、ティアナもそこまでの無茶はしなくなる。

だが、こうなっても物語は本来の流れで進んでしまう。

それは剣崎の思いつきによる『ある一言』が原因であるとは、誰も予想しなかっただろう。

第十九話～無理するな～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎＆スバル「「へ？派遣任務！？」」

なのは「答えは聞いてない♪」

アリサ「二人とも全然連絡寄越さないと思ったら・・・そういうことだったのね！！」

リイン「わあ～すごいです～！」

次回『ようこそ海鳴へ！』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（；ｏｗｏ）俺前回の時点で『可哀想』って言われてるんだけど・・・

（作者）ホントだよ？一番大変なのは君だから

（ｏＭｏ）どうだ剣崎！俺の完璧な作戦は！！

（；作者）あなたはもうストーカーってことでいいよ・・・

（ｏＨｏ）次回も見てくださいね！

ちなみにこの小説、ＯＰが『ＳＥＣＲＥＴ　ＡＭＢＩＴＩＯＮ』で、

EDが・・・『辛味噌！』もとい『ｒｅｂｉｒｔｈ』だったりします。（うわ～EDのチョイスが・・・）

なのは「あれ？私の曲は！？」

作者「あの曲君ばっかりじゃん」

なのは「いや、一真君はもちろん入れるつもりで・・・」

作者「また次回～」

第二十話～ようこそ海鳴へ！～（前書き）

う～ん・・・記念すべき第二十話がこんな話でいいのだろうか・・・。

なんて思ったので今回は二話連続投稿でもしましょうか！！
ということで、第二十話と第二十一話を２１日の間に両方投稿します。（多分夜中の内に）

ストック？なんだかこの頃異様に調子がいいので、この二十話を入れて七話分のストックがありますよ？
ということで全然余裕な私なので、本日は出血大サービスですよ！

今回は導入編、次回と次々回は『ある方』の誕生日のわがままということでオリキャラが出演ですね～。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十話～ようこそ海鳴へ！～

―『ホテル・アグスタ事件』から数日たったある日の事―

「「へ？派遣任務！？」」
スバルと剣崎の間の抜けた声が響いた。
「しかも異世界に？」
ティアナも聞き返す。

「うん。決定事項」
なのはが言った。
「緊急出動がなければ二時間後に出発だから、スバル、ティアナ、一真君も仕事を片付けたら準備しといてね」

「「はい！」」
スバルとティアナは返事をするが、
「俺も・・・行かないとだめなのか？」
剣崎は乗り気ではない。
「当然一真君も行かないとだめだよ？隊長たちでもう決めちゃったから」

（いつの間に・・・って俺の意見は聞かないのかよ・・・）

剣崎が心の中でツッコむと、
「答えは聞いてない♪」
心を読んだのだろうか、なのはが笑顔で返してきた。
「へ～い・・・行きますよ、行けばいいんでしょ・・・」
ちょっぴりイジケる剣崎なのでした。

「まあ、前線メンバー全員出動だし・・・か、一真さんもいるし、あんまり変わらないよ」
ライトニングでも任務についての話がされていた。
「え、エリオもきゃ、キャロも、平常心でね」
「「はい！」」
（（フェイトさんが一番平常心になった方がいいです・・・））

―ヘリポート―
「あっ！エリオ、キャロ！」
「スバルさん、ティアさん」
「すみません、お待たせしました」
「まだ時間あるわよ・・・って一人いないけど」
「一真さんなにやってんだろ～」

そんなことを言っていると、当の人物がやってきた。
「皆！遅れてごめん！！」
「だからまだ時間はあるってば・・・隊長たちもまだ来てないしね」

「そっかぁ・・・よかったぁ」

するとヘリポートに八神家が到着
「まっ、ギリギリやったけどなぁ？みんなお揃いやね～」
「はやて部隊長に、ヴィータ副隊長？」
「おうっ」
「シグナム副隊長に・・・シャマル先生も」
「ああ」
「ハ～イ♪」
「私もいるですよ～」
「リイン曹長も・・・」
フォワード陣&剣崎は、集まったメンバーに戸惑う。
「まさか・・・この全員で出動ですか？」
エリオが問う。
その問いにはやてが答える。
「うん、部隊はグリフィス君が指揮を執って、ザフィーラがしっかり留守を守ってくれる」

さらにそこになのは、フェイトも到着する。
「詳細不明とはいえロストロギア相手だし、主要メンバーは全員で出撃ってことで」
「あとは、行き先も・・・ちょっとね」

「やっぱり俺も留守番してた方がいいんじゃ・・・」
「「「「却下」」」」
「ハイ・・・」
「ということで一真君も出撃♪」

「それで、行き先はどこなんですか？」
ティアナが話を戻す。

「第９７管理外世界、現地惑星名称『地球』。そこの小さな島国の小さな町『海鳴市』」
「地球！？それに島国って日本か！？」
「そう、一真さんも日本に住んでたんやろ？」
ちなみに言っておくが、ここにいるメンバーは剣崎が『人間』だったということは知らない。剣崎は『日本に住んでた』と以前言った（というか名前が日本名の）ため、このような会話になるのだ。

「それに地球って、フェイトさんが昔住んでた・・・」
「そう、私とはやて隊長も、そこの生まれ」
「私たちは六年ほど過ごしたな」

「まぁ、行く前から話し込んでても仕方ねぇな。全員、準備はいいか？」
「「「「はい！！」」」」

「それじゃあ、出発♪」

こうしてメンバーを乗せたヘリは飛び立った。

ヘリの中ではキャロとティアナが地球についての情報を集めていた。なかでも『魔法文化がない』ことについては驚きを隠せなかったようで、スバルが自分の父も魔力がないと告げる。
だがティアナが『なぜそんなところでなのは達のような魔導師がでてくるのか？』という疑問を口にしたところ、はやてが『突然変異というか・・・』と返し、ティアナは焦って謝った。
そんな彼女に『気にしなくてもいい、それに魔法と出会ったのは偶然だから』と当の本人たちが言うと、フォワード陣と剣崎が隊長たちについての新たな情報に『へ～』と声を揃える。

そんな中シャマル何かを取り出しこう言った。
「はい、リインちゃんのお洋服」
「あ～、シャマルありがとです～」
だがシャマルが渡した服は明らかにサイズがおかしい。
どう考えてもリインよりも大きく、小さな人間の子供が着るような服だったからだ。
流石にキャロがおかしいと思ったのかそのことをリインに尋ねると、リイン曰く『はやてが子供のころ着ていた服』とのこと。

「いや、それはどう考えてもサイズがおかしいんじゃないか？」
ストレートに剣崎がそう言うと、リインは少し考えてから
「そういえばフォワード陣と一真さんには見せたことかったですね」
と言った。剣崎たちがよくわからないという顔をすると

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ」

リインがそう言うと同時に、彼女の体が普通の子供のサイズになる。
「ウェッ！？」
「でかっ！」
「いや、それでもちっちゃいけど・・・」
「普通の女の子のサイズですね」

それぞれが反応すると、ヴィータが補足を入れる。
『向こうの世界にはリインサイズの人間もふわふわ飛んでる人間もいない』
とのこと。
でもミッドにもいないと思うとティアナが言うと、スバルもそれに同意する。

とにかく、ヘリの中は話題が尽きる事は無かった。

「八神部隊長・・・そろそろ」
「うん、ほんならなのは隊長、フェイト隊長、私と副隊長たちは寄るところがあるから」
シグナムの言葉に、はやてやヴィータが動き出す。

「うん」
「先に現地入りしとくね」

「「「「お疲れ様です！！」」」」
「じゃあな」

「は～い♪」

「はい、到着です♪」
転送された剣崎たちが目を開くと、そこは湖の畔。

その良い景色に、それぞれが思い思いの感想を口にする。
確かに、見たところ環境はほとんどミッドチルダと変わらない。

「というか、ここは具体的にはどこでしょう・・・なんか、『湖畔

のコテージ』って感じですが・・・」

ティアナのごもっともな疑問にリインが答える。
どうやら『現地の住民が持っている別荘』で、『使用を快く許諾してくれた』らしい。

「現地のかた・・・」
キャロが呟くと、タイミングを合わせたように、一台の車が走ってくる。

「あっ、自動車・・・こっちの世界にもあるんだ」
ティアナがそう言うと同時に、車の中から一人の女性がでてくる。

「なのは!!フェイト!!」

「アリサちゃん!」
「アリサ!」

どうやら二人の知り合い、いや友人、いや親友?のようだ。多分はやてたちとも知り合いなのだろう。

だがなんだろう、剣崎には『このアリサという少女?の声に聴き覚えが・・・よくよく考えてみれば今まで会ってきた人達の声もなんだかアニメとかで・・・』という謎の感覚が芽生えていたが、

(まぁ同じ『地球』だから、声ぐらい同じの人がいたっておかしくはないな・・・)

と片付けてしまった。
あまりアニメを見ない剣崎だからこその反応である。相川始ならど

のような反応を示しただろうか？いや、彼の場合は『同じ顔で同じ声の人間』と会っているのだから、余計気にしないだろう。天音ちゃんと『そういうアニメ』等を見ていそうな気はするが・・・。

ここでフェイトが紹介に入る。

「紹介するね、私となのは、はやての友達で幼馴染の」

「アリサ・バニングスです！よろしく！」

「「「「よろしくお願いします！！」」」」

「よろしくな！」

フォワード陣と剣崎が返す。

するとアリサの目が剣崎でとまり、次の瞬間なのはとフェイトの首根っこをつかんでどこかに引きずっていった。

「・・・？なんなんだ？」

「ちょっと、あの人誰なのよ！！」

建物の陰で二人に問い詰めるアリサ。

「ま、まぁアリサちゃんちょっと落ち着いて・・・」

「そ、そうだよ・・・」

二人ともアリサの勢いについていけてない。

「二人とも全然連絡寄越さないと思ったら・・・そういうことだったのね!!」
「「へ・・・?」」

「とぼけないで!どうせ二人とも、はやてもあの人とよろしくやってたんでしょ!」
「そ、そんなことないよ!フェイトちゃんは別だけど・・・」
「なのは!?」
あくまで何もないと主張するなのは。だがもう手遅れだ!!

一方生贄として差し出されたフェイトは焦り、アリサからの視線を浴びて更に焦る。

「わ、私は・・・あの・・・その・・・」
「はっきりしなさい!どういう関係なの!?」

「どういう関係といわれても・・・ライバル多いし・・・シグナムとか・・・なのはだって」

「はやてちゃんなんてデートに行ってきた~なんて言ってたね」
「え?いろんな人に手出してるの?」

「そうじゃなくてね、一真君が気付いてないだけなの♪」
「あ~確かにそんな感じがするわね」

「とにかく!一真さんとはまだ何もないから・・・」
「じゃあ、私にもチャンスがあるってことね?」
「そ、それは!!」
「冗談よ、ライバルが多すぎて勝てる気がしないわ・・・はぁ、残念・・・」

一方別行動をしていたはやて達も、アリサ同様三人の共通の友人『月村すずか』と再会した。これだけ。

―再びなのは達―

「さて、じゃあ改めて今回の任務を簡単に説明するよ」

「「「「はい！！」」」」

説明を受けているフォワード陣。

剣崎はやることが無くて石を投げている。

「5回撥ねた！・・・って誰も聞いてない・・・」

「わあ～すごいです～！」

悲しげな剣崎だが、リインはちゃんと見てくれていたようだ。

「グスッ・・・サンキューなぁリイン・・・」

剣崎はそう言いながらリインを撫でた。

リインも嬉しそうに撫でられている。

チラッとそれを見たその場の全員が『あっ、ちょっといいなぁ』と思っていたとはつゆ知らず。

第二十話～ようこそ海鳴へ！～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「こ、この歳で迷子！？」

ヴィータ『シャマル・・・今なんつった？』

剣崎「ジョーカー・・・いや、俺・・・？」

未来「あ、『この世界の君』とは初めましてだね」

次回『本能　ジョーカー』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（作者）次回、なんと全く入れるつもりのなかったオリキャラが登場。もちろんライダーですが、変身するのは既存のライダーです。ちなみに、私が考えたキャラではないんですよね～。

（ｏｗｏ）ある人の『わがまま』ってやつだ！そのおかげで執筆スピードが物凄く上がってこいつ→は喜んでるんだけどな。

（ＯＨＯ）俺よりもそっちの方が優先・・・

（作者）他の二人（橘＆始）は『模擬戦編』でも出てくるのにねｗ

（ｏｗｏ）それじゃあ次回も見てね！！

第二十一話～本能　ジョーカー～（前書き）

連続しちゃった第二十一話です！

今回はオリキャラの『夜闇　未来』君が登場です。
彼は意外と後の話にも登場するんですよ。
ちなみに彼をこの世界に呼んだのはほかでもない黒剣崎と渡。
士も、もちろん知ってます。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十一話～本能　ジョーカー～

それぞれが仕事をしていく中、なのはがふと気づいた。

「あれ？一真君は？」

「そういえば、さっきから見てないです～」

「大丈夫ですよ！一真さんだって子供じゃないんですから！」

「スバルの言うとおりだね、じゃあ私たちは作業続けよっか！」

（どうしてこうなった・・・）

剣崎は・・・迷っていた。

なのは達について歩いていたのだが、いつの間にやらはぐれてしまったようだ。

「どうする、とりあえず一旦引き返せば・・・ってここはどこなんだ・・・」

引き返そうにもここがどこかわからないのでどうしようもない。

「こ、この歳で迷子！？」

状況からすればそうなる。

「ソンナ・・・ウソダドンドコドォォォン！！」

―ここからは全員念話による会話―

『ロングアーチから、スターズとライトニングへ。さっき、教会本部から新情報が来ました・・・』

シャマルからの説明を聞く面々。

だが最後にシャマルが放った一言は、全員を驚愕させた。

『一真さんの反応を・・・つい先ほどロストしました、多分・・・迷子です』

『シャマル・・・今なんつった？』

ヴィータが『理解できなかった』という表情をしながらシャマルに尋ねる。

『一真さん・・・迷子になっちゃったみたいなの♪』

シャマルが何故かテンションが高いのは放っておいて、今一度確認したメンバーたちは、エリオとキャロを除いて笑いを我慢していた。

それもこれも、剣崎のことを信頼しているが故に、『トラブルに巻き込まれたわけではないだろう』と思っているからである。

『皆さん、一真さんに悪いですよ』

『そ、そうですよ』

『まあ、一真のことだ。迷子になったぐらいで心配することもないだろう』
シグナムがそう言うが、既に顔があちこちを探していた。
『一真さんなら大丈夫だよ・・・』
フェイトも同じ動きをしているようだ。

（二人とも探してるだろうな～大丈夫だと思うんだけど・・・）
なのははそう思う。

『こっちは今手が離せえへんから、シグナム副隊長に探してもらおか？』

『はやて、なら私も・・・』
はやての言葉にフェイトが反応する。

『フェイト隊長はエリオとキャロ、それにスターズを送ってもらわな』

『くぅ・・・』

『あはは・・・よろしく、フェイトちゃん』

こうして迷子の捜索（笑）はシグナム、他は待機所に戻るという事になった。

「うぬぬ・・・探すことにはなったが・・・方法が・・・」
シグナム大苦戦中である。
最初こそ心の中で喜んだものだが、肝心の剣崎がいつまでたっても見つからない。

シャマルが言った通り、剣崎の反応はロストしたまま。
結界などが張られているわけでもなさそうだ。

「一真・・・どこに行ってしまったんだ?」

「皆・・・どこだ・・・」
剣崎の心が折れそうである。

何故なら・・・

「なんで街中から一瞬で海岸なんだよ・・・」

皆を探すためにキョロキョロしていた剣崎が次に正面を向いた時には、彼の目の前には海が・・・。

いきなりの事に戸惑う剣崎なのである。

それにこの海、どう見てもおかしい。
剣崎を除いた全てが灰色で、海は黒い。
辺りには霧が立ち込め、先が見えにくい。

向こうに灯台がなんとか見えるが、人の気配は全くない。

先程までいた世界とは違う場所。
つくづくそういう事に縁があると思う剣崎だった。

だが彼は異変に気付く。
（ここにいると・・・嫌な事ばかり考える・・・）

すると頭の中に、自分と同じ声が響いてきた。

―なんで自分はこうなることを望んだんだ?―

―・・・始の為だ―

―だが後悔してばかりじゃないか―

―違う・・・俺は後悔していない―

―あの頃に戻りたくないのか?―

―・・・―

―どうした?戻りたくないのか?―

―・・・戻りたい―

―やっぱりそうじゃないか―

―でもな・・・今の俺には家族がいるんだ―

剣崎の頭の中に、六課のみんなの顔が浮かんだ。
「家族の為に・・・俺は戦う！！後悔なんてする暇は無い！！」
迷いを振り切った剣崎が決意を新たにすると、声は消えた。
「とにかく・・・こんなところからは早く出た方がいいな」
言いながら、どうにかしてどうにかしてここから出ようか考える剣崎。
だがこの世界はどうやら彼を帰す気がないらしい。
（！？）
突然感じた殺気に、剣崎はすぐさま身構える。
すると霧の向こうから、『何か』が近づいてきた。
だんだんとハッキリしてくるその姿は、剣崎を驚愕させる。
―ベースは黒く、所々が青い―
―体中が鋭く、肩からは大きな棘が生えている―
―カミキリムシのようなフォルム―
―その姿はまるで・・・いや正真正銘の―
「ジョーカー・・・いや、俺・・・？」
―剣崎自身だった―

「どういうつもりだ・・・」
剣崎が問いかけるが、『自分』は答えようとしない
それどころか、武器である黒と青のブーメランを持って、更にこちらに迫ってくる。

それを見た剣崎はブレイバックルを取りだし、カードを入れる。
「そっちがその気なら・・・俺もこうする!!」

いつもより素早く腕を動かす。
「変身!!」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

オリハルコンエレメントを駆け抜け、すぐに切りかかる。

だが、

―ガキンッ!―

ブレイラウザーは呆気なく止められた。
ジョーカーはそのままブーメランを振り抜き、ブレイドがぶっ飛ばされる。

「これならどうだ!!」

『Ｔａｃｋｌｅ』

？『タックルボア』をラウズし、ラウザーの切っ先を相手に向けて低く構える。

そして突進・・・なのだが、剣崎は覚えていないのだろうか。
―自分の使ったタックルが、一度も成功していないという事に―
「ハッ！・・・ウェッ！？」
どうやら忘れていたようである。

ブレイドは勢いよく砂浜へ突っ込んだ。
ジョーカーは、それを冷たく見下ろす。

「ならこれだ！！」
ブレイドは一気に勝負に出た。
これ以上戦っていると、おかしくなりそうな気がしたのだ。

『Ｋｉｃｋ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

『Ｍａｃｈ』

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｓｏｎｉｃ』

「ハァァァァ・・・ウェイ！！」
相手を睨みつけるが、ジョーカーは全く動じてない。
「ハッ・・・ウェェェェェイ！！」

この技なら、ジョーカーに大ダメージを与えることができる。
別の世界の彼は、この技で相川始を封印したのだ。

だが

―バシッ―

「なっ!?」

ライトニングソニックも・・・受け止められた。

現状で最高の技であるこれが止められたということは、

（勝てないのか・・・？）

普段の剣崎ならこんなことは考えない。

だがこの世界は、自分が考えたくないことまで考えてしまう。

―恐怖が・・・近づいてくる―

投げ飛ばされ、起き上がったブレイドが見たのは、

―振り上げられた腕―

「ガハッ・・・」

必殺技を受け止められてからというもの、ブレイドは一方的に攻撃を受けている。

何度も何度も顔を殴られ、ただひたすら受けるだけ。

そしてジョーカーもそれを楽しんでいるのだろうか、開いた口は狂気を含む。

（ジョーカーの・・・本能・・・か）

以前、剣崎自身がこれに似たような状態になったことがある。

ブレイドの最終形態『キングフォーム』これは剣崎の融合係数の高さが相まって、誰もが予想しなかった『13体のアンデッドとの融合』を果たし、剣崎に力を与えた。

だが、それによって剣崎は『ジョーカーに等しい存在』となる。

―そして・・・暴走―

キングフォームでの暴走という、タチの悪い事この上ない状態となる。

その時は、仲間・・・特に始によってなんとか自我を取り戻した剣崎だったが、それをもとに『ある事』を思いついた剣崎は、バトルファイトの継続の為に、最終的には自らジョーカーになる道を選んだ。

ジョーカーとしての本能は、今まで必死に抑え込んできた。

このジョーカーが本当に自分だったとしても、今日だって引き込まれるほどのことはしていないはずだ。しかしそんなことを考えている間にも、攻撃をうける剣崎の意識は少しずつ遠のいてゆく。

はずなのに、剣崎の意識はだんだんはっきりしてくる。

（おかしい・・・）

―乗っていたジョーカーの重さを感じない―

―それどころか自分が乗っているような感覚―

―勝手に動く腕―

―何かを『殴りつけているような感覚』―

完全に意識を取り戻した剣崎が見たものは、

―殴られるジョーカーの姿―

そしてそれを殴っているのは・・・自分自身。

（腕が・・・止まらない!!それどころか・・・俺は楽しんでるのか!?）

自分に湧き上がってくる感情に恐怖する剣崎。

それでも腕は止まらない、ただひたすら『自分を』殴っている。

拳についている緑色の血、それはどちらの血だろうか・・・わからない。

―オマエハケッキョクバケモノダ―

頭に再び響く声が剣崎を壊していく。

（やめろ・・・ヤメロヤメロッ!!）

心で叫んでも、とまらない。

―ニンゲントシテナンテイキラレナイ―

―ダレモオマエトイキテハクレナイ―

「・・・・アァァァァァッ！！！」

剣崎が拳を振り上げ、相手の頭を潰そうとした瞬間・・・

『Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ』

「オォォォォォォォン！！」

謎の音声と響く咆哮。

それに気づいた剣崎が気を失う直前に見たものは、

―青黒い炎と黒い騎士―

「うっ・・・」

「気が付いた？」

目覚めた剣崎の目に最初に映ったのは、

―こちらを心配そうに見る青年―

「へ？だ、誰なんだ・・・」

「あ、『この世界の君』とは初めましてだね」

（この世界？）

剣崎の疑問はよそに、青年は立ち上がってこう言った

「僕の名前は・・・夜闇（よるやみ）　未来（みらい）」

「仮面ライダーリュウガなんだ」

「夜闇・・・未来・・・リュウガ・・・」

「よろしくね」

「あ、ああ！よろしく」

よろしくと言われて、更に手を出されたら、剣崎はたとえそれが罠でも応じる。それが長所であり短所でもあるのだが、今回は普通の握手のようだ。

「なぁ・・・えっと・・・「未来でいいよ」」

「なぁ未来・・・」

「ん？」

「俺は・・・何してた」

剣崎の問いに、一度声を詰まらせる未来。だが彼はちゃんと伝えた。

「君は、君自身を殴ってた・・・」

それを聞いて顔を俯ける剣崎。

『なぜ自分の正体を知っているのか』などということは気にならない。

自分は・・・本能（ジョーカー）に負けたのだ

第二十一話～本能　ジョーカー～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

未来「君はまだ戦ってる・・・運命に勝つためにね」

シグナム「一真！目が覚めたのか！？」

剣崎「ひ、膝枕・・・？」

はやて「一真さんは、私のコレでもあるんや～」

次回『新しい友達・異世界編』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（作者）ちなみに、今回剣崎が飛ばされたのは『デジモンアドベンチャー０２』の『暗黒の海』です！

（；ｏｗｏ）いやそこは少しぐらい誤魔化せよ！！

（作者）だってデジモン好きだから！今考えてる小説だって『デジモン』か『ウルトラマンティガ』の二択だよ！？

（；ｏｗｏ）知らないよ・・・

（作者）さて次回の剣崎君は誰に膝枕してもらってるのだろうか！？正直書いててイライラしてましたよ。

（；ＯｗＯ）予告に思いっきり書いてあるううう！？順番的にバレバレだろ！！

（　ＯＭＯ）次回も見てくれないと・・・オレノカラダハボドボドダァ！！

（　作者）（次回からラストはこれでいこう・・・）

第二十二話～新しい友達・異世界編～（前書き）

なんだか妙なテンションになってきたのでここで三つ目も投稿。

さすがに四つ目は三日後にしますね。

ここでしっかり言っておきますが、オリキャラの『夜闇　未来』は私の考えたキャラではありません。

未来ライダーさんが考えて、それをプレゼントとして出演させているんですよ。

ちなみに、設定上ドラグブラッカーは喋ります。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

自分は負けた、それも一番負けてはいけないものに負けたのだ。

これから先の自分のことを考えると、体の震えが止まらない。

だが、

―ポンッ―

唐突に肩におかれた手が、不安を取り払ってくれた。

「未来・・・」

「大丈夫、君は弱くないし、まだ負けてない」

「でもっ！俺は・・・」

「負けてたら・・・君はこうして僕と話していたかな」

その言葉に剣崎は衝撃を受けた。

「まだ・・・負けてないのか？」

「うん、君はまだ戦ってる・・・運命に勝つためにね」

やっと剣崎の目が覚めた。

自分は始に言ったではないか、『俺は運命と戦う・・・そして勝ってみせる』と。

ここでやめるわけにはいかない。

「サンキュー・・・お前のおかげで、俺は大事なことを思い出した。」

「うん、よかった！」

未来は笑顔になると、ポケットから防犯ブザーのようなものを取り出した。

「なんだそれ？」

「これはね・・・こうやると・・・」

未来がボタンを押すと、突如灰色のオーロラが現れる。

「ウェッ！？」

「大丈夫だよ、僕もこれを通ってここに来たんだ。これを通っていけば、元の世界に帰れるよ」

「ホントか！？」

剣崎の言葉に未来が頷くと、剣崎に隣に立つように促す。

「これを使ってオーロラをだすと、何故か道を通らないといけないんだけど・・・」

そう言って一歩踏み出した。

剣崎もあとに続いて

―二人はオーロラの向こうに消えた―

誰もいなくなった海岸に、再びジョーカーが現れる。
だが消えたオーロラがあったところを見つめるだけで動くことはなかった。

「なぁ、未来も仮面ライダーなんだよな？」
「うん、そうだよ？」
二人は今オーロラの道を歩いている。
あの世界を出た瞬間から剣崎の心も落ち着き、今はこうやって話しながら歩けるようになった。

「よく見えなかったんだけど・・・どんなライダーなんだ？」
「やっぱりそうだよね・・・君が気付いた瞬間に蹴りが入っちゃったし・・・」

そう言いながら、未来はポケットから黒い箱のようなものを取り出す。

それは、以前に城戸真司が使ったものと同じだが、剣崎はそんなことは知らない。

真司のものとの相違点といえば、

―龍の紋章の形が違うこと―

「ちょっとこれを僕に向けてくれるかな？」
未来がそう言って差し出したのは、小さな鏡。
「なんで鏡なんか？」

「普段は持ってないんだけど・・・ある人が渡してくれて」
「いやそういう事じゃなくてさ・・・」

「まあ、見ててくれればわかるよ」

言いながら、未来は黒い箱『カードデッキ』を鏡に向けた。
すると突然未来の腰にベルトが巻かれる。
そして真司とまったく同じポーズをとり、

「変身」

宣言と同時にデッキをベルトに差し入れた。
未来の体を鎧が包み、次の瞬間には変身が完了していた。

―その姿はまるで―

―黒い龍騎―

「これがリュウガなんだ」
未来(リュウガ)が告げるが、
「・・・」
剣崎は言葉を発しない。

「・・・どうしたの？」
「・・・かっこいい」

「え？」
「かっこいいなそれ！！」
剣崎が突然大きな声で言うのですこし後ずさるリュウガだが、本音

を言えば少し嬉しかった。

するとどこからか黒い龍も現れる。
「ドラグブラッカー・・・出てきて大丈夫なの？」
リュウガが黒い龍『ドラグブラッカー』に話しかけるが、相手の反応は剣崎の予想をはるかに越していた。

「フンッ・・・この空間の中ならば、我を縛るものはなにもない」

「しゃ・・・」
「こ、今度はどうしたの！？」
震える剣崎を見て焦るリュウガなのだが、

「龍がしゃべったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

某ハンバーガーショップのＣＭのようなリアクションを見せる剣崎。呆気にとられる一人と一体だが、こういったリアクションをとってくれるというのは嬉しい。

「なんだその龍、超かっこいいな！！」

リュウガとドラグブラッカーの姿は、龍騎を知っているものからしてみれば、どう考えても『悪』。自分の世界ではそうではなかったのだが、ほかの世界でのリュウガは敵なのだ。

そんな彼らの姿を見ても、剣崎は『かっこいい』と言ってくれた。

「ありがとう・・・」

「えっ！いや、俺はなにも感謝されることなんて・・・」

「未来が感謝しているのだ、その気持ちを大人しく受け取るがいい」

そんなこんなで二人と一体は歩く（一体は飛んでる）。

「それじゃあ、僕たちはここで」
急に未来が言ったことに驚く剣崎。
そして明らかに落ち込んでいる。

「一緒に来てくれるんじゃないのか！？」

「うん、君と一緒に戦いたいけど・・・僕にも守るものがあるから・・・」

「そうだよな・・・ライダーだもんな！」
剣崎は右手を差し出し、握手を求める。
未来もその手をしっかりと握り返し、こう告げた。

「一緒には戦えないけど、僕と君はもう友達だよ・・・君のピンチにはいつでも駆けつけるから」

そう言うと、未来とドラグブラッカーは新しいオーロラの向こうに消えた。

二人？を見送った剣崎も、自分の世界へのオーロラの向こうへ消え

た。

「んっ・・・ここは・・・・」
目を覚ました剣崎。
頭にはなんだか柔かい感覚が・・・。

「一真！目が覚めたのか！？」

「シグナム！？」
シグナムの顔が空をバックに目の前にあって、さらに横向き・・・。

（まさか！！）

「ひ、膝枕・・・？」
剣崎が問うと、シグナムが少し顔を赤らめながら頷く。

「迷子になったお前を探していたら、公園で気を失っていたお前を見つけて・・・それで・・・」

「これに至ったのか・・・」

（公園で気絶って・・・しかも膝枕・・・いい歳して・・・やっぱり迷子だし）

なんだかいろいろ相まって剣崎も恥ずかしくなってきた（それと同時に悲しくなってきた）。

「いまさっきテスタロッサに連絡をとった。あと少しでここに着くと思うんだが・・・」

シグナムが辺りを見渡すと、ちょうどフェイトの車が到着したところだった。

「一真さん！」

フェイトが車から飛び出してくるが、剣崎の今の状態を見て表情が固まった。

流石の剣崎もそんなフェイトの表情で気付いたようで、急いで飛び起きた。

その時のシグナムの表情が少し寂しげだったのは言うまでもない。

とにかく、立ち直ったフェイトやシグナムと共に公園から出ようとする剣崎だが、いきなり聞こえてきた咆哮に足を止める。だがフェイトとシグナムはそのまま歩き続けている。

（フェイトたちは聞えなかったのか！？）

剣崎はとにかく出場所を探した。すると・・・

（あそこか！）

鏡を用いた遊具、その鏡の向こうにドラグブラッカーの姿があった。未来の姿はないが、彼？はこちらを見てもう一度咆哮すると、その姿を消した。

（夢じゃなかった・・・『あのこと』も未来たちのことも）

今は会えない新しい友の姿を思い浮かべ、剣崎は笑顔で一言。

「またな！」

「一真さ～ん？」

「帰るぞ」

二人が呼んでいる、剣崎はもう一度鏡を見てから駆け出した。

こうして剣崎の、苦しくも得るものがあった出来事が終わった。

「・・・腹減ったな・・・」

帰りの車の中の剣崎。

「確かに・・・」

シグナムも同意する。

「そうだね・・・」

フェイトも同意。

「「「はぁ・・・・」」」

三人を乗せた車は待機所へ向かう。

―ジュワアアアアッ―

待機所に到着した三人を迎えたのは、なんとも食欲をそそる音。

「これは・・・まさか！」
剣崎がいち早く答えに達する。

「あっ、三人ともおかえり～」
はやてが気付いて出迎える。

『おかえりなさ～い！』
あまりに人数が多く、鉤括弧では足りない！！

「はやて・・・なんで鉄板焼きなんだ！？」
はやてがやっていることを見た剣崎がツッコむと、はやてが笑いながら言った。

「一真さんはそこにツッコむんやなぁ・・・フォワードのみんなは私が自分でやってることに驚いとったわ～」

「まぁ、そこも気になるけど・・・」

「そんな事よりシャマル、お前は手を出してないだろうな？」
シグナムが突然シャマルに問う。
その場のほんの少し（剣崎＆フォワード陣）は意味を理解していな

いが、ほかのメンバーは正しく理解できていた。

「ああ！シグナムひどい！」
「ちょっと手伝ってくれたよな～、材料きりとか」
「はいっ♪」

シャマルとはやてが話していると、ヴィータとシグナムが顔を見合わせる。

「まあ、切るだけなら・・・」
「大丈夫だな・・・」

そんな光景を見ていると、流石に剣崎達も気付いたようで

「シャマル先生・・・もしかして」
スバルが代表して尋ねると、

「違うもん！シャマル先生お料理下手なんかじゃないもん！」
必死に否定するシャマル。

だが、
「今のやりとりはどう考えてもお前がヘタだってことだろ・・・」
剣崎の止めの一撃。

「ち、違うも～ん！ヘタじゃないんだも～ん！！」
シャマルはどこかへ走り去っていった。

「シャマルの奴・・・」
「逃げたな・・・」
ヴィータとシグナムは最初から彼女を援護する気はない。

「「「アハハハハ・・・」」」
隊長三人もシャマルの酷さがわかっているため、はやてでさえも援護できない。

「気を取り直して・・・フォワード一同、食器だしと配膳、お願いしていい？」

「「「「はいっ！！」」」」

「一真君も作るの手伝ってね」
「わかった！」

「ふふふ、元気だ」
「みんなかわいいね～」

「そういえば・・・ダリナンダアンタライッタイ・・・あとそこの子供」

「子供じゃねェ！」

「う～ん・・・食事と飲み物は行き渡ったかな？」
はやての言葉に一旦静まる。

そしてここから自己紹介タイム・・・は省略。

剣崎のくだりだけを抜粋。

「ああ・・・俺は民間協力者ってことでいいのか？・・・うん、民間協力者として六課にお世話になってる、剣崎　一真だ！よろしくな！！」

―パチパチパチパチ～―

「一真さんは、私のコレでもあるんや～」

小指を立てるはやて、流石の剣崎も意味は知っている。

「・・・は？何言ってんだお前・・・」

「「「「今の言葉は・・・聞き捨てならない（ね・よ・わ・です）」」」」

括弧の右から、なのは・フェイト・シャマル・シグナムである。

「アハハハハ・・・冗談やってば・・・」

この四人を同時に敵に回すのは無理な話だ。

『自分達の身内がここまで剣崎にほれ込んでいるとは・・・』というのが、見ていたアリサやすずか達の感想である。

次回、サウンドステージ編ラスト！！

第二十二話～新しい友達・異世界編～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「全然食い足りない！！」

浅倉「ならこれ・・・食うかぁ？」

矢車「まさかこんな光が満ちた場所で、あんないい目をしたやつに会えるとはな・・・」

影山「さすが兄貴・・・俺、どこまでも兄貴についていくよ・・・」

次回『銭湯へＧＯ！』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（；ｏｗｏ）こんな歳で膝枕なんて・・・

（　作者）うるさい！これを読んで、いったい何人の人が拳を握りしめたと思ってるんだ！！もっと喜べこのバーカ！！

（　ｏｗｏ）バカとはなんだバカとは！・・・ヘシン！！

（；作者）えっ、ちょっとタンマ・・・ギャアアアアアアア！！

（；ＯＭＯ）次回も読んでくれないと・・・俺と作者はボドボドダァ！！

第二十三話～銭湯へＧＯ！～（前書き）

はい・・・今度こそ第二十三話ですよ。

やってしまった・・・。

ネタバレに加えて一話分まるごと無駄にしてしまった！

や、やってられないんだぜ！！

後書きの予告等はカット。

パソコンが使えるようになった段階で追加。

今度こそ、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ第二十三話、始まります・・・。

携帯なんて嫌いだ！

第二十三話～銭湯へＧＯ！～

―自己紹介後、食事中の剣崎達―

「はやて！それ取ってくれ！」
「はいはい～」

「なのはとフェイトはそれ！」
「「は～い」」

「シグナムはそれ・・・とシャマル！今なんか入れようとしたな！」
「わかった・・・シャマル・・・（ギロッ）」
「うう～・・・」

なんだか物凄い勢いで剣崎がかっ込んでいた。

「今日の一真さん・・・どうしたんだろうね」
「さあ・・・」
あのスバルとエリオが負けている。

「全然食い足りない！！」

「ならこれ・・・食うかぁ？」
叫ぶ剣崎に一人の男が串に刺さった『何か』を差し出した。

「サンキュー！・・・ってなんだこれえええええ！？」

ありがたく受け取った剣崎だが、食べる直前に気付いた。

男が差し出したもの・・・それは
「トカゲの丸焼きだが・・・流石に食わんか」

「当たり前だ！っていうかなんでわざわざトカゲなんだよ！？」
剣崎も軽くキレながらツッコんだ。

するとアリサがこちらに駆け寄ってきて、
「浅倉！トカゲは無しってなんど言ったらわかるのよ！」
男・浅倉の首根っこを引っ掴んでさらに引っ張った。

「こいつアリサの知り合いか？」
剣崎が浅倉に指をさしながら問う。

「浅倉はね・・・うちの使用人なのよ・・・」
アリサがため息をつきながら言った。

（マジか・・・）

「浅倉（あさくら）　威（たけし）だ・・・何故かイライラしないから使用人をしている・・・」

彼を知っている人（真司たち）からしてみれば、『浅倉にいったい何があったんだ！？』と言われること間違いなしである。

（これが使用人・・・大丈夫なのか？）
剣崎だけではなく他のメンバーも同じことを考えていた。

『ごちそう様～！！』
またもや鉤括弧が足りない！！

「さ～て、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか？」

「「「「はい！」」」」

「風呂って・・・」

「スーパー銭湯や♪」

聞いた途端に剣崎のテンションが上がる。
「ホントか！？久しぶりの銭湯かぁ・・・楽しみだなぁ！」

「一真さん子供みたいやな～」
「それが一真君の魅力でもあるよね」
「うん・・・一真さんのそんなところが・・・ね」
隊長たちの各々の感想

「アイツはガキかよってんだ」
「それが一真のいいところなんだがな」
副隊長・Ｓの感想

「やっぱりああいうところがいいわね～」
「です～♪」
八神家の残りの二人の感想

「一真さん子供みたいだね～」
「どんだけ嬉しいのよ・・・」
「なんだか僕も楽しみになってきました！」
「私もです！」
「キュク～」
「「「「でもスーパー銭湯って・・・？」」」」
フォワード陣の感想

『みんな楽しそうだな～』
全体を見た協力者たちの感想

こうして一行はスーパー銭湯へと出発した。

銭湯に着いた一行は、
『思わず人外一人と言いそうになった妙にテンションの高い剣崎』
『エリオを女湯に誘うキャロ』
『すごい焦るエリオを助ける剣崎』
『自分まで誘われる剣崎』『結局自分も焦る剣崎』
『なんとか回避して男湯に入る剣崎＆エリオ』

などのアクシデントはあったが、とにかくそれぞれ落ち着いて・・・

―カポ～ン・・・―

―男湯サイド―

「「ハァ～・・・」」

思わずため息をつく二人、湯船にのんびり浸かってはいるのだが、先程の事件（笑）ですでに疲れ果てていた。

「まさか皆さんがあんなことを言ってくるなんて・・・」

「まさか俺まで連れていかれそうになるなんて・・・俺がいったら犯罪だ・・・捕まるのはいやだ・・・」

「「ハァ～・・・」」

「苦労するな・・・エリオ」

「一真さん・・・頑張りましょう」

そして再びため息。

そんなため息ばっかりの二人を見ている二人組がいた。

「まさかこんな光が満ちた場所で、あんないい目をしたやつに会えるとはな・・・」

「兄貴・・・どうする？ガキンチョはまだ目に光があるよ」

「ならあの男だけでも新しい兄弟にする・・・あいつの心にも闇が見える・・・」

「なら俺の弟になるのかな？」

「そうだな相棒・・・とにかく、闇に・・・身を任せればいいんだよ・・・」

「さすが兄貴・・・俺、どこまでも兄貴についていくよ・・・」

そんな事を話ながら頭を洗うこの二人、怪しすぎる・・・。

もちろん勧誘は失敗した。

―女湯サイド―

「ダメだったね～、一真君とエリオ」

「あと少しやったんやけどなぁ・・・」

なのはとはやてが残念がっている。いやおかしくないかソレ!?

「残念ではあるけど・・・楽しもう?」

「テスタロッサの言うとおりだな・・・ここはゆっくり」

「ほんとシグナムはお風呂が好きよね～」

すでに諦めてくつろぐ気満々の三人。

そんな上司・友達・身内たちを見て苦笑いなフォワードコンビとアリサ達。

だがスバルとティアナの二人はあることに気付いた。

「「あれ?キャロは・・・?」」

―再び男湯―

やっといつもの調子を取り戻し、テンションが上がってきた二人

「さ～て、次はどうする?」

「どうしましょうね一真さん！」

だがここで思わぬ声が入り込む

「次はどうするんですか？」

（（・・・・・！？））

同時に、だがカクカクさせながら二人が首を回すとそこには・・・。

「キャ、キャロ！！」

「なななななんでここに！？」

女湯で行方不明になっていたキャロがいた。

剣崎はまだいいが、エリオの慌て具合が半端ないものになっている。

どうやら先程エリオに言ったことを、自分でやることにしたらしい。

無下に追い返すわけにもいかないので、剣崎はエリオ&

だがそれが間違っていた。
「「エリオ、キャロ・・・!?」」
自分以外に二人を呼んでいる人物がいた。
「フェ、フェイト・・・」
「かかか、一真さん・・・」
見合せた瞬間に、互いの頭の中は真っ白になった。
ちなみに剣崎もフェイトもちゃんとタオルを巻いている。だがそれでもこんなところで鉢合わせることになるなんて聞いてない!
二人は同時に後ろを向いて、手短にエリオとキャロに要件を伝える。
「ああ、エリオとキャロ!二人は絶対にいいコンビになれるから、が・・・頑張れよ!」
「ふ、二人とも、こっちにもおいでよ。み、みんな待ってるからね」
「「は・・・はい!」」
「二人は純情だなぁ」
フェイトと一緒に来ていたアルフがしみじみと語ると、剣崎とフェイトは逃げるようにさっていった。
結局、エリオは女湯へ連れていかれ、代わりにリインが剣崎に頭を洗ってもらいに男湯へ。

リインも戻り、今度こそ露天風呂でのんびりしていた剣崎。だが、こちらも子供用と同じように、どちら側からも行けるようになっていた。

既にどちらの湯にも六課関係者以外のお客が居なかったため、結局全員で露天風呂。

剣崎（主に精神）が休まることは無かった・・・。

その後、ついにロストロギアの反応を確認。

確保に向かうメンバー達だが・・・

「ウェイ！ってまた増えた！！」

「うわっ！またかよ！」

「このっ！」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｏｎｉｃ』

「ウェェェェイッ！！・・・もうダメだ、お終いだ・・・」

剣崎が凄まじく足を引っ張った。

が、フォワード陣のコンビネーションと、立ち直った剣崎の感覚に

よって封印を完了させることに成功。

アリサ達との挨拶も済ませ、剣崎達はミッドへと帰って行く。

こうして、機動六課の波乱の出張任務は終わりを告げたのだった。

ちなみにその後、六課隊舎の風呂が『スーパー銭湯風』にバージョンアップされたらしい。

第二十三話～銭湯へＧＯ！～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「ティアナはさ、接近戦とかやらないのか？」

ティアナ「逆に不安になってきたわ・・・」

なのは「一真君も・・・私のやりかたを否定するの？」

剣崎「いくぞ・・・変身！！」

次回『例の模擬戦』

―運命の切り札をつかみとれ！―

（作者）次回は皆さんお待ちかねのあの話

（；ｏｗｏ）『次回』って・・・これ（後書き）付け加えたの次話投稿の直前だろ！！

（；作者）き、気にしない！！

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第二十四話～例の模擬戦～（前書き）

いろいろ吹っ切れたので結局いつも通り投稿です！

ミスって消してしまった話も、無駄に長くなって復活しました。

今回から『例の模擬戦編』で、この話を含めて四話編成です。
すでに書き終わってますからね。

ここで報告です。知っている方もいるかもしれませんが、目標（お気に入り２００人）達成まであと５８人となりました！！

これも皆さんのおかげです！ああ・・・涙出てきた・・・。

まだまだ人気とは言えない小説ですが、これからもよろしくお願いします！！

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十四話～例の模擬戦～

地球での出張任務も終わり、剣崎がティアナの個人練習を見学するようになって数日。
最初はあまりいい顔をしなかったティアナも、次第に剣崎を受け入れるようになり、この頃は剣崎も参加している。

相棒のスバルも練習に参加するようになったが、本来なら物語は既に別の道を歩み、この後に起きる出来事は回避されるはずだった。

しかしそれは、剣崎がふと思ったことを口にすることによって、再び元の道へ戻ってしまう。

「ティアナはさ、接近戦とかやらないのか？」

剣崎がこう言った理由は、仲間の一人『橘　朔也』の戦闘スタイルが、

『どう考えても射撃型なのに接近戦で相手に挑む』

というものであったためである。もちろんそのスタイルによって橘は何度も危機に陥っているが、『必殺技が蹴り』『最終的にはゼロ距離射撃』などで、重要な戦闘ではそれによって勝利をつかみ、一概に『何のためのギャレンラウザー（射撃武器）だよ』とは言えないのだ。

だが逆にジャックフォームになると、ギャレンラウザーが銃剣とし

ての機能も手に入れているのに、彼は遠距離からの攻撃ばかりである。

『単なる天邪鬼(あまのじゃく)では？』などとは言ってはいけない。

「違う！俺の戦い方は完成されているんだ！！」

どこからか声が聞こえたが、気にしてはいけない。

とにかく剣崎が言いたいのは、『近接攻撃も織り交ぜれば、もっと戦い易くなるのでは』ということ。

「一真さん！それナイスアイデア！」

スバルがいち早く同意する。

「だろ！？そう思うよな！？」

剣崎もテンションが高くなってきている。

「ちょっと、本人を差し置いて二人で勝手に決めないでよ！」

ティアナが半分怒った様子で口を挿むが、

「でもティアもいい考えだと思うでしょ？」

というスバルの言葉が返ってくると、

「確かに・・・いい考えだとは思うわよ・・・」

と、勢いがなくなってしまう。

「なら決まり！！私と一真さんがいるんだから、何にも心配いらないよ！！」

「逆に不安になってきたわ・・・」

「どういう意味だよ！？」

そんなやり取りであったが、結局ティアナは接近戦の練習にも力を入れ始め、それに伴って新たなフォーメーションを考えるが、

―それが間違っていた―

―数日後―

いつも通りの練習風景・・・だった。

「さーて、じゃあ午前中のまとめ、２ｏｎ１で模擬戦やるよ！まずはスターズからやろうか。バリアジャケット、準備して！」

「「はい！！」」

「エリオとキャロはあたしと見学だ」

「「はい！」」

スバルとティアナが並び構える

「いくわよスバル！」

「うん！」

模擬戦が始まってしばらくすると、
「もう始まってるのか？」
「ごめん！遅れちゃった！」
剣崎とフェイトが遅れて到着した。

「フェイトさん！」
「一真さん！」

「私も手伝おうと思ってたんだけど・・・」
「今はスターズの番」

「ほんとはスターズの訓練も、私が引き受けるつもりだったんだけどね」
するとヴィータがなのはを見ながら言った。
「なのはもここんところ訓練密度濃いぃからなぁ・・・少し休ませねえと」

「ヴィータも結構優しいところあるんだな～」
「うるせぇよ！！」
剣崎の発言にヴィータが軽くキレる。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ、訓練メニューつくったり、ビデオでみんなの陣形を確認したり・・・」

「頑張ってるんだな・・・」
「なのはさん、訓練中もいつも僕たちの事を見ててくれてるんですよね」
「本当に・・・」

剣崎たちの言葉に少しだけ顔を緩ませるヴィータだが、すぐにその顔を引き締める。

「おっ、クロスシフトだな・・・」

その言葉に全員の注意がティアナに向かう。

「クロスファイアァァ・・・シュゥゥトッ！！」

ティアナの周りの魔力スフィアがなのはに向かっていく・・・が、

「なんだかキレがねぇな」

「コントロールはいいみたいだけど・・・」

ヴィータとフェイトが気付く。

確かにコントロールはいいが、スピードに欠ける攻撃だ。

しかしそれはすべて計算の内。

「！！」

攻撃を避けながら飛んでいたなのはの前に、ウイングロードが展開される。

「フェイクじゃない！？本物！？」

前から突っ込んでくるスバルが本物だと分かると、咄嗟に展開していた魔力弾を放つが、

「ウオオオオッ！！」

スバルは一点集中の防御によってそのまま突破。

「ウリャァァァ！！」

更にリボルバーナックルでの一撃を狙う。
だがなのはは容易く防ぎ、スバルを弾き飛ばした。
「こらスバル！駄目だよ！そんな危ない軌道！！」
一言一言の間に、目視せずに魔力弾をかわしながら説教をするなのは。
スバルもなんとかウイングロードの上で体制を立て直すと、
「すいません！でも、ちゃんと防ぎますから！！」
と返す。
「！？ティアナは・・・」
なのはが気付いてあたりを見渡すと、離れたビルの上に光が見える。
そこではティアナが砲撃の体勢をとっていた。
「砲撃！？ティアナが！？」
フェイトが驚愕の声を上げ、ポインターによって捕捉されているなのはは眉をひそめると、スバルの動きを窺う。
（特訓成果、クロスシフトC・・・いくわよスバル！！）
「おうっ！！」
気合いの声とともにスバルが猛スピードで再びなのはに突っ込んだ。
なのはもまた、同じように防御する。
だが、今回はスバルが粘る。
「・・・！！」

（ティア！！）

なのはが後ろに目を向け、スバルが念話で呼ぶと、砲撃の構えをしていたティアナが消えた。

「あっちのティアさんは幻影！？」

「本物は！？」

キャロが驚き、エリオが辺りを探す。

本物のティアナはウイングロードを走り、クロスミラージュから魔力刃を発生させながら、なのは達の真上を目指す。

（バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける！）

そして真上に来た瞬間、

―タンッ！―

「・・・一撃必殺っ！！」

真っ逆さまに飛び込んだ。

「テェェェェイッ！！」

―そして歴史は避けられない―

「・・・レイジングハート・・・モードリリース」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

―ドゴォォォォォォン・・・・・―

「っなのは！？」

遠くから見ていた剣崎たちのもとにも衝撃が届き、フェイトはなのはの安否を心配する。

そして煙が晴れると・・・

「おかしいな・・・二人とも、どうしちゃったのかな？」

「「えっ・・・」」

ティアナとスバルの攻撃を素手で受け止めているなのはの姿。

そして魔力刃を握っている右手からは血が流れる。

「～・・・～～・・・」

なのはの声が小さいため、フェイトたちからは何を言っているのかわからない。

だが剣崎には聞こえていた。

（なのはが怒ってる・・・いや、そんなレベルじゃない！！）

「私のやってること、私の訓練・・・そんなに間違ってる？」

ティアナは後ろに退いて、涙を浮かべながら叫ぶ

「私は！もう、誰も傷つけたくないから！失くしたくないから！！」

「だから・・・強くなりたいんです！！」

そんなティアナを見るなのはの目は、明らかに普通の目ではなかった

「少し・・・頭冷やそうか・・・」

そう言うと、右手の人差し指をティアナに向ける。

「クロスファイアー・・・」

「ファントムブレ・・・！！」

「・・・シュート・・・」

なのはから放たれた光は、攻撃に入る前のティアナに直撃する。

ちなみに、もとより滑舌の悪い自身と仲間に囲まれた剣崎以外には、『パンツめくれぇ！！』と聞こえていたため、なのはが撃つまでは首を傾げていた。

「ティア！　！？バインド！？」

スバルがティアナのもとへ向かおうとするが、なのはのバインドによって身動きがとれない。

「じっとして・・・よく見てなさい・・・」

―フェイトたちは・・・―

「一真さん!?」

いきなり飛び出していった剣崎にフェイトが反応するが、すでに彼はビルからビルへ飛び移り、一直線に三人のもとへ向かっていく。

「ハッ!なのはさん!!!」

さらに一撃を加えようとするなのはにスバルが叫ぶが、その声は彼女には届かない。

放たれた光は再びティアナに直撃する・・・

―はずだった・・・―

激しい爆発、だが煙の先には・・・

「一真さん!!」

ブレイバックルを装着した剣崎が、オリハルコンエレメントを展開しながらなのはを睨みつけていた。

「なのは・・・お前!!自分が何してるのかわかってるのか!?」

「それは・・・私がこの二人に言いたいよ・・・」

なのはの言葉に剣崎の到着を喜んでいたスバルの肩がビクッと震え

る。

「それでも！お前はこうするしかなかったわけじゃないはずだ！！」
剣崎の勢いは止まらない。

「一真君も・・・私のやりかたを否定するの？」
なのはが悲しげな表情で剣崎を見る。

「今回のことは絶対に否定してやる！！お前は間違ってる！！」
剣崎が一歩ずつ前に出る。

「そう・・・なら一真君も・・・少し頭冷やそうか・・・」
なのはもレイジングハートをもう一度構え直し、戦闘態勢に入る。

「いくぞ・・・変身！！」

そして剣崎がオリハルコンエレメントを通り抜け、ブレイドに変身する。

「いくら一真君でも・・・容赦しないよ・・・」
「こっちの台詞だ！！」

二人が同時に跳びかかる。

こうして・・・誰も望まなかった戦いが幕を上げた

第二十四話～例の模擬戦～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ブレイド「空は飛べない・・・でもスピードだけなら負けてないはずだ！！」

なのは「後一回分の時間を凌げば私の勝ち」

始「いや・・・剣崎の思うままにさせればいい」

剣崎「運び方まで指定するか！」

次回『変わらない思い』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　作者）次回で速攻決着ｗ

（；ＯＨＯ）まだ出番がない・・・

（　作者）君が出るのは六話ぐらい先になるから。始でさえ二回目の登場なのにね～

（；ｏｗｏ）楽しんでる・・・性質悪い作者だ・・・

（　作者）そんなこと言ってると、君が赤面するイベントの回数増やすよ？

（；０ｗ０）勘弁してください・・・

（作者）皆さんは期待してるかもしれないから、これからの感想に一つでもあったら決定♪それじゃあ橘さん、いつもの。

（；０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダトムツキノココロハボドボドダァ！！

第二十五話～変わらない思い～（前書き）

今回も携帯で投稿です。
ですが後書きは追加しました。（朝７時）

今回は『剣崎ＶＳなのは決着編』、剣崎が頭を使いますね。
彼が使った方法、わかっても、答えは次回まで言いませんからね～。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十五話～変わらない思い～

始まってしまった二人の戦い。

「そんな・・・一真さんとなのはが戦うなんて・・・」

フェイトが出ようとするが、それはヴィータに止められる。

「やめとけ。あの二人がマジになったら、お前もただじゃ済まないし、止めたらこの問題は解決しない」

「で、でも！」

「これはあの二人の戦いだ！！他人が入っていいわけねえだろ！！」

その言葉にフェイトもこれ以上何かを言う事をやめ、二人の戦いを見守ることに決めた。

（二人とも・・・大丈夫だよね・・・？）

「くっそ・・・ウェイッ！」

先程からブレイドがブレイラウザーを叩きつけるが、防御を一点集中型にしたなのはには届かない。いや、普通なら届いているはずの攻撃だ。

だが、それができないのは、なのはが戦いに集中していることに加えて、剣崎自身の中に生まれた迷いが原因であった。

（さっきはああ言ったけど、俺のやってることも・・・なのはと一

緒じゃないのか？）

「どうしたの？そんな攻撃じゃあ、二人の二の舞だよ！」

「グッ・・・」

突然の魔力弾による攻撃で怯むブレイド。

なのははそのまま空に上がり、飛行手段のないブレイドに容赦のない攻撃を食らわせてゆく。

だか、ブレイドに手が無いわけではない。
スバルが残し、剣崎のために解除しなかったウイングロードがある。
流石にもう迷っていられない。
今は戦いに勝つことしか、なのはを止める方法が無いのなら・・・。

「空は飛べない・・・でもスピードだけなら負けてないはずだ！！」

言葉と共に、一枚のカードを取り出しラウズする。

『Ｍａｃｈ』

アグスタでの事件で封印した　９『マッハジャガー』が、ブースト魔法では得られないスピードをブレイドにもたらす。

「消えた！？」

なのはがそう言うと同時に、真横からブレイドが姿を現した。

「もらった！！」
「まだまだ甘いよ！！」

当たったと思った攻撃はまたもや防がれてしまう。
だがブレイドは再び高速で移動を開始する。
（流石にやるね、一真君も・・・）

確かに攻撃は防いだが、スピードによって勢いの増した斬撃は何度も受けきれるものではない。
だがもう目でも追える。
そこでなのはは更に上へと飛び上がり、ウイングロードが展開されていないところからブレイドに攻撃する。

するとブレイドの動きが少しおかしいことに気付く。
ずっと走り回っていればいいのに、二度ほど止まっていたのだ。
それを見たなのはは『あること』に気付く。

（そういうことなの・・・それなら！！）

なのはは攻撃をやめないが、放つ魔力弾はスピードこそあるものの、威力はさほどでは無くなった。それは『ブレイドが警戒して回避すること』を狙っているかのように・・・。

（そろそろ『時間』だな・・・）
高速で避け続けていたブレイドが動きを止める。
そしてカードを抜こうとすると、

「そこっ！！」

「な？・・・ウェアっ！！」

止まっていたブレイドになのはの攻撃が直撃する。

「な、なんで攻撃が・・・」

「一真君・・・そのカードの効果・・・時間制限がついてるでしょ？」

（!?）

「・・・よくわかったな・・・」

「だってずっと走っていればいいのに、二回も不自然なタイミングで止まったらさすがに気付くよ？」

剣崎は心の中で舌打ちした。なのはの言う通り、マッハを含めたラウズカードには効果に時間制限がついていた。

同じカードは、『効果が消えた後に再びラウズする』という方法でしか使えない。

「それに、ひたすらカードを使うにも・・・限界があるんでしょ？」

「なんでそこまで！・・・シャーリーか・・・」

この数日の間に剣崎は、『ブレイバックル及びブレイド』の解析を手伝い、ブレイドの能力について話していた。

その時話した『ブレイラウザーの能力』の事をシャーリーは、多分なのはや他の隊長達にも話していたのだろう。

カードをラウズすると、その力を解放し、ライダーに力を与えるラウザー。しかしカードをラウズするにも限界がある。

ラウザーには『初期ＡＰ』という数値が設定されており、カードのラウズに伴い、そのカードごとに決められた数値を消費していく。

そのため、ラウザーの初期ＡＰとカードの消費ＡＰとの差が０より小さくなる場合、そのカードは使えない。

つまり、差が０より小さい場合と、初期ＡＰが０になった場合、ライダーはカードの力を借りることが出来ないのだ。

それを補うために、ラウザーは武器として使えるようになっているのだか、正直それだけでは心許ない。（剣崎の場合はカード無しでカテゴリーキングを倒したが、その時は彼の強い思いと、相手の剣『オールオーバー』を利用したことによる勝利であった。）

「なのはの言う通りだ。ブレイラウザーの初期ＡＰは５０００、でもマッハの消費ＡＰは一回で１６００。つまり・・・」

「後一回分の時間を凌げば私の勝ち」

「でも俺は最後まで諦めるつもりはない！この戦いには、絶対に負ける訳にはいかない！！」

ブレイドは再び構えた。

「いいよ・・・そこまで言うなら、正面から一真君を倒して、その考えが間違ってることを教えてあげる・・・」

そう言いながらなのはは高度を下げた。

「それはこっちの台詞だ！！」

明らかに怒っているように見える剣崎。

だが仮面の下では、

―笑みを浮かべていた―

その笑みはいったいどういう意味なのだろうか・・・。

「アクセルシューター・・・シュート」

なのはがアクセルシューターによる物量&誘導でブレイドを落としにかかる。

だがブレイドは迫る魔力弾をすべて切り落とした。

「これぐらい、避ける必要も無かったな・・・」

ブレイドが呟いたその言葉は、なのはの心に火をつけた。

「そこまで言うなら・・・私も全力全開!!」

なのはがレイジングハートを構えた。

「あ～・・・確かにちょっとマズイかもな」

流石のヴィータも額に汗をかいた。

「やっぱり止めた方が・・・」

フェイトが言うと、エリオとキャロも頷いた。

するとそこにある人物が入ってくる。

「いや・・・剣崎の思うままにさせればいい」

（（（（（！？））））

「な、なんだてめえ！？どこから入ってきやがった！！」

ヴィータが驚き半分で怒鳴る。

だが、フェイトやライトニングのフォワード二人は違った。

「その声は・・・まさか！」

「カテゴリーQの時の！！」

「相川・・・始さんですよね？」

三人の言葉に、謎の男・相川始は頷く。

「無視すんじゃねえ！いったいどこから・・・ってここは外か・・・」

「そういう事だ」

「ところで、どうして『あのまま』でいいんですか？」キャロが質問すると、始は戦闘中の二人（特にブレイド）を見ながら言った。

「あいつがああいう行動に出た時は、周りのことが見えなくなっている。迂闊に近づくと危険だ」

『それに』と付け加えて始は続けた。

「俺達は、ああして互いの思いをぶつけ合ってきた。時には殺す気で戦ったこともあったが、それが全て今に繋がっている」

（二人の関係は、少しだけ私達に似てる・・・）
フェイトはそう思った。
しかしこの時点でもフェイトたちは知らない。剣崎一真の本当の・・・強さを。

「ほら・・・いつまでそうやって避けられるかな・・・」
先程からなのはの攻撃が誘導系から砲撃系にシフトしてきている。

「どってことない！！」
剣崎もマッハを使わず回避する。それもウイングロードが縦横無尽に展開されているからこそ。

だが、

「ディバイィィン・・・・」

なのはの機動力でも、ブレイドを捉えることはできる。

「マジかよ！？」

「バスターァァァァ！！」
「くそっ！」

『Ｍａｃｈ』

ついにブレイドも最後の一回を使った。
だが彼の手には、マッハだけではなく、

―もう一枚のカードがあった―

「後は待つだけ・・・ううん、一気に決める・・・」

マッハを使ったブレイドから、これ以上カードによる攻撃はこない。

スピードを上げただけの攻撃は、もう自分には成功しない。

確かにその通りなのだが、彼女は先程の『もう一枚のカード』に気付いていなかった。

―それがこの戦いの勝敗を握っているのだ―

『Ｋｉｃｋ』

「・・・え？」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

「そんな！？」

突然聞こえてくるあり得ないはずの音声に、戸惑うしかないなのは。

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｂｌａｓｔ』

「ウェェェェイッ！！」

今だ消えない粉塵の中から、ブレイドが足に電撃を纏って飛び出してきた。

（うそ・・・）

―ドォォォォン・・・・・―

「なのは!?・・・なんで止めるんです!!」

フェイトが思わず飛び出そうとするが、それを始が止めた。

「心配するな・・・剣崎(あいつ)は、決して力を振るう事で物事が解決するとは思っていない（例外はあるがな）・・・」

「『相手が誰であろうと思いは伝えることができる』・・・らしい」

―煙が晴れていく―

「それが・・・」

―影が二つ―

「あいつの・・・」

―あと少しではっきり見える―

「変わらない思いだ」

―二人とも・・・無事―

「「「「ハァァァ・・・寿命が縮むかと・・・」」」」

始を除いた四人が一斉に安堵する。

そんな光景と、変身を解いている剣崎をみると、始は去って行った。

「なんで・・・」
「当てるわけないだろ、家族に傷なんて負わせてどうすんだよ」

「でも・・・私は・・・」

―コツン―

「ふぇっ!?」
「お前にはお前なりに、なにかあったんだろ?」
「・・・うん」

剣崎は少し呆れた様な表情で続ける。
「ティアナの目が覚めたら、ちゃんと説明しろよ」
「でも・・・」
「わ・かっ・た・な!?」
「は、はい・・・」

剣崎の言葉に、思わず返事をしてしまうなのは。

(やっぱり一真君には敵わないよ・・・)

「ふう・・・じゃあ戻るとするか!」
「あの・・・一真君?」
歩き出そうとする剣崎をなのはが止めた。

「なんだよ？」
「脚が・・・動かないなぁ・・・」
やけにわざとらしく脚を震わせるなのは。
「はぁ・・・わかったよ・・・運べばいいんだろ？」
「できれば・・・お姫様抱っこで・・・」
「運び方まで指定するか！」
「・・・ダメ？」
流石の剣崎とて鬼ではない。目の前の人が動けないと言っているのだ、どうであろうと運ぶしかないだろう。
「わかった・・・よっと」
「重く・・・ない？」
不安げになのはが尋ねてくる。
（やっぱり気になるもんなのか？）
剣崎は広瀬の事を思い出した。そういえば彼女も、よく体重計とにらめっこをしていた。
「これぐらいなんでもない」
実際そうなので自然に返した剣崎だが、なのはは疑っている。
「ホントに・・・？」
「ウソなんかついてどうすんだよ」
「ふふっ・・・ありがとう♪」
そう言ってなのはが思いっきり抱き着いてきた。

危うく倒れるところだった剣崎。
「んなっ！危ないだろ！」
「大丈夫なんでしょ～」

というか、なにやってんだこの二人・・・

フェイトが物凄く恨めしそうな顔で見ていたことは、言うまでもないだろう。

この後、剣崎はちゃんとスバル（バインドをかけられたまんま）と、ティアナ（気絶中）を運びましたとさ。

もちろん二人ともお姫様抱っこで！！

第二十五話～変わらない思い～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「なのは・・・お前も外れるべきだ」

なのは「以上が・・・私の失敗の記録・・・かな？」

橘「これは・・・剣崎が・・・まだ『人間』だったころの話だ」

士「俺は・・・通りすがりの仮面ライダーだ！！だがお前は覚えなくていい・・・」

剣崎「覚えなくていいって・・・無理な話だろ・・・」

次回『真実と、これからと』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回、ついに剣崎のすべてが明かされる・・・正直自信がなくて困ってる。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）時間はある・・・納得できるものを作れ

（ｄｌｉｌｂ）やっと俺もへんし・・・ってやっぱり変身ねえじゃねえか！！

（；０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第二十六話～二人の真実～（前書き）

サブタイ大幅変更！！
そして第二十六話です！！前回のトリックが書いてあるので気になる人は前書きを読んでください。

なんで連続か・・・なんとなくです！・・・すいません！！

前回剣崎が使った『トリック』・・・それは、？Ｑ『ＡＢＳＯＲＢ』の効果『ラウザーのＡＰチャージ』を使ったものです。
調べてみたところ、『ライトニングブラスト』が一回２２００、『マッハ』を三回使った後に残るＡＰは２００、そして『アボソーブ』でのチャージは２０００・・・つまりぴったり『０』になるんですよ。
あの時剣崎が外していたらそこでアウト！ギリギリでありながらしっかり不意をついたいい作戦（自画自賛）な訳です！！

今回はサブタイの『これからと』の部分が全然無かった・・・なので変更です。

次回で『模擬戦編』は終了で、私が一番楽しみにしていた『遅れて来たファーストアラート編』に突入です！

このごろ感想が少ない・・・ような気がしてさびしいです・・・。
いつでも書いていってくださいね。
話数を指定してくだされば、どの話の感想を書いてもらってもいいので、今回みたいな、間がほとんど空いてない時などはどうぞ。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十六話～二人の真実～

―医務室―

「んっ・・・あ、あれ？」
目を覚ましたティアナ、だが自分がどこにいるのかまだ理解できていないようだ。

「あらティアナ、起きた？」
するとそこにシャマルが入ってくる。

「シャマル先生・・・えっと・・・」
「ここは医務室ね、昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

ここでようやく理解がいったようだ。
顔を俯けてあの時の状況を思い出す。

（あのとき・・・なのはさんに・・・あっ！）

「あの！剣崎さんは・・・」
ちなみにティアナは剣崎の事を唯一『剣崎さん』と呼んでいる。

剣崎が二発目から護ってくれたところから記憶がないティアナは、シャマルにその後のことを尋ねる。

「あの後ね、一真さんがものすごい怒って、なのはちゃんに戦いを

挑んでいってね・・・」

シャマルが一旦止めるので、てっきり剣崎も負けてしまったのではないかと考えていたティアナだが、

「普通に勝っちゃったの・・・一真さんが♪」

「・・・・・・え？」

「だから、一真さんがなのはちゃんに勝っちゃったの♪」

（うそ・・・あのなのはさんに？）

「それで、終わった後に一真さんがあなたを運んだってわけなのよ」

「そんなことまで・・・・・・ん？」

なんだか『何から何まで剣崎にお世話になっている』と思ったティアナがふと視線を下に向けると・・・下着しか穿いていなかった。

「／／／／・・・・」

まさかの事で顔を赤くするティアナ。それに気づいたシャマルがズボンを渡す。

「大丈夫よ、一真さんが出た後のことだから」

「は、はい・・・」

その後ティアナが時計で現在の時間を見て驚き、少ししてから医務室を出た。

行き先はもちろん剣崎のところなのだが、どこを探しても彼の姿はなかった。

そしてそれぞれが複雑な思いを秘めながら夜は過ぎていく・・・は

ずだった。

―サイレンが鳴り響く―

海上にガジェット?型が出現し、はやてとリイン以外のメンバーがヘリポートに集まる。そこにはどこにいるかわからなかった剣崎の姿もあった。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

今回の出撃についての説明をしていく。

「ああ、それからティアナ・・・ティアナは出動待機から外れとこうか」

なのはの言葉にフォワードメンバーが驚く。

そんな中、ついに剣崎が口を開いた。

「なのは・・・お前も外れるべきだ」

今度は隊長陣が驚いた。

「そんな・・・一真さん!?」

フェイトが抗議の口調を混ぜながら剣崎を見るが、彼はなのはしか見ていなかった。

「はやてにも許可はとった、ティアナもだけど・・・お前も十分集中できてない」

「そんな・・・私は」
『そんなことはない』と言いたかったなのはだが、剣崎の目を見るとそんなことは言えなかった。

「部隊長の許可があるのなら仕方ないな・・・高町隊長」
シグナムがすぐに気持ちを切り替えてなのはに言った。

ヴィータも頷いている。フェイトだけはまだ微妙な顔をしているが・・・。

とにかく二人だけで出撃した。

「なのは・・・ティアナ」
ヘリを見送った後に再び剣崎が口を開く。

「話し合い・・・ちゃんとやれよ。なのはは・・・俺を含めた皆に説明してくれ」

そこまで聞いていたシグナムが流石に口を挿む。
「一真・・・それは・・・」
「なのはが話さないと意味がないだろ・・・皆、ロビーに行くぞ」
そう言って剣崎が全員を促す。

だがここで再びサイレンが鳴る。

『街中にガジェット反応！どうやら人型のようです！』

『一真さん、出撃お願いな！』

はやてから指名された剣崎は、なのはを見て言った。
「俺が帰ってくるまでに、ちゃんと話しておけよ！」

「わかったよ・・・いってらっしゃい一真君・・・」
「ああ、行ってくる！！」
剣崎は駆け出して行った。

残されたなのは達は、剣崎に言われたとおりにロビーで話すことになった。

―海上のフェイトとヴィータ―

「なのは・・・」
「くよくよしたってしょうがねぇだろ・・・一真の言うとおりだったんだ」

『もうすぐ戦闘空域です！』
通信が入る。あとすこしで目視できる距離になるだろう。

「いくぞ！」
「・・・わかった！」

―六課ロビー―

「以上が・・・私の失敗の記録・・・かな？」

なのはが語り、補足の為にシャーリーが映像を入れる。だがこの映像はどこで手に入れたんだ！？

とにかく、フォワード陣の空気は暗く、誰一人としてなのはと目を合わせることができない。

だが、そんな中でティアナが顔を上げる。

「なのはさん！・・・ごめんなさい・・・！」

その顔は涙で濡れていた。

なのははそんなティアナを見てから、クロスミラージュを受け取って、リミッターを一段階解除する。

さらになのはの口から語られる話が終わったとき、フォワードメンバーはなのはに抱き着いていた。エリオは物凄い遠慮がちにだが。

だがここでシャーリーがある疑問を口にする。

「でも・・・なんで一真さんはここまで私たちの事・・・」

その疑問に答えたのは、誰もが予想だにしない人物だった。

「それは・・・剣崎自身の過去に関係がある・・・」

突然聞こえてきた声に全員が正面ドアを見る。

そこにいたのは・・・『ホテル・アグスタ』で見た赤いライダー。

「あなたは・・・」
「仮面ライダーギャレン、橘　朔也だ」
ギャレンは変身を解いて入ってきた。誰も止めはしない。

「一真さんの過去・・・？」
「本来ならあいつ自身が話すことだが・・・絶対自分では言わないだろうな」
橘はため息をつく。そして顔を上げて語りだした・・・。

「これは・・・剣崎が・・・まだ『人間』だったころの話だ」

その言葉に、全員が立ち上がった。

―街での戦闘を終えた剣崎―

「はぁ・・・こんなもんか」
六課に心配事を残したままの剣崎は、すぐにブルースペイダーに跨って走り出そうとした。だが彼は動きを止め、ビルの角を見る。

「誰なんだ・・・でてこい！」
剣崎が吠えると、そこから一人の男が・・・

「流石にお前からは隠れらんねぇな・・・」
「士・・・さん？」
出て来たのは『レストランＡＧＩＴΩ』での先輩・門矢　士だった。

「やっぱりお前はブレイドのほうが似合ってるぜ」
「あ、ありがとうございます・・・ってなんでブレイドのことを」
『似合ってる』といわれて思わず礼を言う剣崎だが、ブレイドの存在を前から知っていたかのような士の発言に眉を顰める。

「落ち着け・・・まああれだな、『仮面ライダー』はお前だけじゃないってことだ」

士の言葉に、剣崎は以前であった『リュウガ・未来』の事を思い出した。

「未来のみたいなやつのことなんですか?」
「アイツにもう会ったのか・・・間違ってはないが・・・あいつリ・イマジネーションの世界出身だ」

突然の士の言葉に、頭の上に『?』を浮かべる剣崎の表情を見て、士はイラッときた。自分の説明不足を差し置いて。

―再び六課ロビー―

「以上が・・・『人間・剣崎一真』の真実だ・・・」

橘が話し終えたが、ロビーにはなのはの時よりも暗い空気が漂っていた。
現在ロビーには最初からいたメンバーのほかにも、任務を終えたフェイト&ヴィータ、橘の提案によって呼ばれたはやてを筆頭としたロングアーチのメンバー、そして既に真実を知っているザフィーラがいた。

「うそでしょ・・・友達の為に人であることを捨てた・・・？」
シャーリーが問うと、橘は頷いた。

「あいつは・・・残された者の気持ちを考えなかったが、今できる最善の方法をとったんだ・・・」

言いながら、橘は拳を強く握りしめていた。
そこには、彼の悔しさが滲み出ていた。

「もとはと言えば・・・俺が迂闊な行動をとったばかりに・・・くそっ！」

「橘さん・・・一真君・・・」
なのはは目の前の男と、いまここにはいない男の二人を心配していた。

「これで大体わかったろ？」
「いや、全然わかんないんですけど・・・」
士の要所を端折った意味不明な説明ではなにも理解できない。

「はあ・・・同じ剣崎でもこんなに違いがでるもんなのか・・・」
「同じ俺って・・・未来も同じことを・・・」
剣崎の言葉に士が珍しく焦った表情をする。

「とにかく！世界は無限に広がってるってことだ！！」
「う～ん・・・」
頭を抱える剣崎を見て、士が自分のバイクに跨る。
「じゃあな！士先生のお勉強会はお開きだ！」
そんな士の言葉に、剣崎は大事なことを聞いていなかったと声をかける。
「結局！あんたはいったい・・・」
「その言葉を待ってたぜ・・・」
問われた士は『ニヤッ』と笑みを浮かべると、剣崎に向かって堂々と言った。
「俺は・・・通りすがりの仮面ライダーだ！！だがお前は覚えておかなくていい・・・」
そう言って士はバイクに乗って走り去っていった。
「覚えておかなくていいって・・・無理な話だろ・・・」
剣崎もまた、スペイダーに乗って『家路』についた。
―六課ロビー―

「ただいま～・・・って橘さん!?」
隊舎に帰って来た剣崎の目に最初に入ってきたのは橘の姿。
当の橘は『しまった!』という顔で剣崎を見ている。
それに六課のメンバーがなんでこんなところに揃っているのだろうか。

「橘さんがここにいるのもあれだけど・・・皆もどうしたんだ?」
剣崎が問うが、誰も反応を返さない。

(橘さん・・・皆の状態・・・まさか!!)

「橘さん!言ったんですか!?」
剣崎の言葉に、橘はゆっくり頷いた。

「なんで言ったんだ!!皆が聞く必要なんてなかった!!」
思い切り声を荒げる剣崎、だが大声で非難したいのは彼だけではなかった。

「なんで・・・なんでそんなこと言うんや!!」
涙を流しながら声をあげるはやてに剣崎が固まった。
「はやて・・・?」

「一真君のバカ!!人には『話しておけ』なんて言って、自分はなにも話してくれないなんて!!」

「なのは・・・」

「一真さん・・・酷いよ!なんで隠すの!?」

「フェイト・・・」

「一真!!私たちは・・・秘密を言う必要もない存在だったのか!?」

「シグナム・・・それは違う!」

「どこが違うの!?あなたは私たちにずっと言わないつもりだったんでしょ!?」

「シャマル・・・そうだ、本当はザフィーラ以外のみんなに話すつもりはなかった!」

「最初はみんなに話すつもりだった・・・けど、みんな俺に優しいから・・・俺がこんなこと言ったら・・・皆に心配かけると思ったから!!」

「だから・・・俺の事は『人間みたいな化け物』でもよかったんだ!!!」

―バチン!!―

今回は、ここでお終い。

第二十六話～二人の真実～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「お前らこそわかってない・・・」

橘「友達といえば、剣崎・・・あの二人からメッセージを預かっている。」

剣崎「『友達』だって・・・言ってくれたんだ」

ヴァイス「だからぁ！皆お前のことが・・・ウワアアアア！！」

次回『友達』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；作者）やっと次回でこの件も終わりか・・・頑張ったなぁ・・・。

（ＯＨＯ）ならもうすぐ俺の出番なんですよね！？

（作者）そう、いままで全然登場しなかった君が、もうすぐ目立つことになるよ。

（；ｏｗｏ）いや次回の話はどうしたんだよ！？

（作者）確かにこの小説では大事な話になる・・・だから逆に触れたくない・・・。

（＞‥‥V‥‥＜）自信がないんだな・・・

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第二十七話～友達～（前書き）

まさかこんな時間になるとは・・・第二十七話です。

思いっきり会話回になってしまった・・・この話は修正効かなかったなぁ・・・。

今回で『模擬戦編』が終了で、次回からは『遅れて来たファーストアラート編』にようやく突入ですね。

ちなみにファーストアラート編・・・六話編成です。長い！！

今は最後の一話を書いてるところですよ。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十七話～友達～

―バチン！！―

剣崎の体めがけて飛んできた手のひらの数は、『その場にいた全員』―橘＆ザフィーラ『という物凄い状態。

それで更にタイミングがピッタリだったため、流石の剣崎も尻餅をついた。

現在剣崎の前に広がっているのは、

―涙を流して自分を睨みつける六課の面々―

「え、あっ・・・どうした・・・」

「どうしたではない！！」

剣崎の言葉にシグナムが返す。シグナムの目からもまた、例外なく涙が流れている。

「私はお前に言った！『これ以上自分を卑下するな』と！なのに・・・お前は！！」

「シグナムの言うとおりだよ！一真さんは・・・わかってない！！」

フェイトも叫ぶ。

「人間じゃないのは私たちも一緒よ！一真さんとどこが違うの！？」
シャマルの言葉にも剣崎はなにも返せない。

「皆いろんな過去があった・・・でもそれでも前を向いて、自分と向き合って生きてるんや！！」

はやての言葉の意味にに何人かが気付く。

「一真君はいまこうして皆といるでしょ・・・何も気にする事なんて・・・」

「・・・お前等こそわかってない・・・」
剣崎の言葉に全員が固まった。

剣崎は立ち上がり・・・叫んだ。
やはりこれだけは、彼にとってどうしようもできなかった。

「俺は化け物だ！！こうしていられるのもいつまでかわからない！！・・・ジョーカーに飲み込まれて皆を傷つけるかもしれない！殺すかもしれないんだぞ！？」

その激しさに、剣崎の体はジョーカーと人間を繰り返す。

「今まではなんとかなった！！でも・・・皆を・・・家族を傷つけるぐらいなら・・・俺はここにいない方がいい！！」

剣崎、いやジョーカーはドアに向かって駆け出した・・・が、

―それは止められた・・・『家族に』よって―

ジョーカーのその体を、あるものは掴み、あるものは抱き着いて止めた。

一瞬だけ振り払う仕草を見せたが、剣崎はその場に座り込んだ。

「なんで・・・なんで止めるんだよ・・・俺なんか・・・」

ここで突然ヴァイスが喋りだした。

「一真!そんなの決まってるだろ!隊長たちを始めとしたこのメンバー（女性オンリー）」はな、皆お前の事がだいす・・・」

明らかに核心に触れそうだったヴァイスの台詞を、

『ヴァイス（くん・さん）!!』

女性陣が止めた。

「すいません・・・なんでもないです・・・」

流石に敵に回せない。

「あぁ・・・あれだ!みんなお前の笑顔が好きってことだな!」

なんとか回避しつつ、言いたいことは言ったとヴァイスは一歩下がる。

ここでなのはが前に出てくる。

「家族が重いなら・・・友達でもいいから・・・ううん、友達になりたいな!」

「なのは・・・いいのか?俺が友達で」

「うん!」

そこで橘がモニターを操作しはじめる。

「友達といえば、剣崎・・・あの二人からメッセージを預かっている。」

そう言ってモニターに映像を出した。

そこに映っていたのは、剣崎の大事な、とても大事な二人の友達の姿だった。

『『剣崎くん!』』

「虎太郎・・・?広瀬さん・・・?」

『これを見てるって事は、橘さん達に会えたのね!』

「睦月とはまだ会えてないけどな・・・」

『ちゃんとした生活してる?また追い出されてない?』

「ここではまだ大丈夫だって・・・虎太郎」

決して通信ではない、なのにこの三人はあたかも顔を見合わせて会話しているように見える。それほど自然なのだ。

『そうそう、友達はちゃんとできた?』

「・・・・・・」

『剣崎君のことだから、またいろんな人に迷惑かけてるんでしょう

けど』
（ギクッ！）
『でもきっと大丈夫だよね！剣崎君にはいいところがいっぱいあるんだし！』
「虎太郎・・・」

『心配しなくても大丈夫よね！』
「広瀬さん・・・」

『最後にこれだけは言っておくから』
『ちゃんと聞きなさいよ？』

「？」

『剣崎君は・・・』
『いつまでも私たちの・・・』

『『大事な友達だ（よ）！！』』

それを最後にメッセージは終了した。
剣崎は二人の顔が映っていたところから目を逸らそうとしない。
だがその肩は・・・震えていた。

「一真さん・・・今の人たちは」
スバルが剣崎に尋ねる。

すると剣崎は振り向くことなく言った。
「二人は・・・俺の最初の友達だ・・・」
「そうなんだ・・・」

「俺さ・・・始以外のみんなに・・・何も言わなかったんだ」
剣崎は語りだした。

「皆に言ったらさ・・・絶対止めると思ったから」

「虎太郎の家を飛び出したとき、俺は二人に・・・皆に『さよなら』って言わなかった!!」

「でも・・・それなのに、なのに!!」

剣崎は皆の方へやっと顔を向ける。
その顔は、涙でグシャグシャになっていた。

「『友達』だって・・・言ってくれたんだ」

「こんな俺を・・・まだ友達と思ってくれてるんだ・・・」
膝をつき、涙を流す剣崎。

すると橘も語る。
「あの後・・・勝手にいなくなったお前のことを皆が責めた・・・もちろん俺もだ」

「だが二人は言った・・・『剣崎君はきっと帰ってくる』・・・とな」

顔を上げた剣崎の目をしっかりと見て橘は言った。
「お前は一人じゃない・・・二人は、いや皆が、今でもお前の帰りを待っている」

「橘さん・・・」

「だが、今のお前にはやらなければならないことがあるな」
橘の言葉に、剣崎は六課のメンバーを見る。
「・・・はい」

「なら最後まで・・・いや、言うまでもなかったな」
「はい！俺は・・・ここにいる皆の・・・この世界のすべての人の為に戦う！！」

剣崎の言葉を聞いた橘は、笑顔を向けてから歩き出した。

「橘さん！・・・ありがとうございました！！」

「大事にしろ・・・お前の家族を」

「はい！！」

こうして橘は六課を去った。

橘を見送った後、剣崎が言いにくそうに口を開く。
「あの・・・その・・・そういう訳で・・・これからもお世話になります」

その瞬間、なのは達が剣崎に駆け寄った。

『こちらこそよろしく！！一真（君・さん）！！！』

―その後の会話―

「そういえば一真」
「ん？なんだシグナム？」
シグナムは剣崎に笑みを向けると言った。

「私は老いることが無いからな・・・一生お前のそばにいてやれる」
「シグナム・・・サンキュー！」

その言葉を『友達として』という意味でとらえた剣崎だが、その気持ちがとても嬉しかった。

するとそこにシャマルとリインも入ってくる。
「私も！同じくず～っと一緒にいれますよ？」
「リインもです～」
「シャマル、リインまで・・・サンキュー！」

「三人とも主を裏切りおった～！」
八神家の三人に抜け駆けされたはやてが叫ぶと、

「私はまだまだ若いから、当分は一緒にいられるよ♪」
なのはが剣崎の腕に抱きつき、

「私も・・・まだ大丈夫だから・・・」
フェイトもおずおずと前に出る。

負けじとスバルが前に出るが、
「それなら私はなのはさん達よりもわか・・・ヒイッ！！」

隊長三人に睨まれて最後まで言わせてもらえない。

「私が一番若いです！！」
まさかのキャロの乱入に剣崎が驚くと、
「僕もです！！」
とエリオも参加する。

「一人にしておけるわけないでしょ・・・か、一真・・・さんを！」
ティアナがついに『一真』と呼んで剣崎を笑顔にし、

「ティアもついに一真さんと仲良しだね・・・ゴメン！だからクロスミラージュ向けないで！！」

スバルがまたもや余計なことを言って自分から危険に飛び込もうとしてしまう。

「でもなんで皆そんなに・・・」
剣崎が再び同じ質問を繰り出すと、

「だからぁ！皆お前のことが・・・・ウワアアアア！！」
ヴァイスが再び口を滑らそうとして、それを女性陣が阻止する。

とにかく、剣崎には一晩で『信頼しあう正真正銘の家族』と、『たくさんの友達』ができた。

この日は剣崎にとって、忘れられない大事な一日となったのだった。

第二十七話～友達～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

エリオ「皆、遅いなぁ・・・」

はやて『ほんなら、機動六課フォワード部隊・・・出動！！』

剣崎「そう、皆がついてるんだ！」

なのは「でも・・・この高さは・・・」

次回『ファーストじゃないファーストアラート』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回は戦闘なし・・・次々回からがお楽しみ。

（０Ｍ０）・・・

（作者）あれ？ガジェットの事で暴れると思ったんだけどな～？

（０Ｈ０）お、俺の登場はまだですか？

（作者）次の次さ～

（０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

（；０ｗ０）そこは普通なんだ・・・

番外編～そうだ、プールに行こう～（前書き）

番外編パート2です。

『番外編』とは言っていますが、時系列的にはファーストアラート編の前ですので、ムッキーは出て来ません。

今回は自分で『今までの流れ的に大丈夫なのか!?』と不安になった話。

プールならではというかなんというかなアクシデントが起きます。

いつものノリですがやってることはアレ。

それでは、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ番外編、始まります。

番外編～そうだ、プールに行こう～

これは、機動六課とブレイドメンバーの休日の出来事・・・。

「暑い・・・」
「そうですね・・・」

「暑い・・・」
「クーラーは壊れとるよ・・・」

「暑い!!」
「うっさいわね!こっちだって暑いのよ!!」

ずっと『暑い』を繰り返しているのが剣崎、律儀に答えたのがエリオ、希望が無いことを再認識させたのがはやて、キレたのがティアナである。

「ティア～、そんなに怒らなくてもいいじゃ～ん・・・」

スバルがテーブルに突っ伏しながらティアナを諌めようとするが、ティアナは剣崎との口論が白熱しているため聞いていない。

「ここにはアイスもないの！？」

「あったけど！なんか一晩で消えたんだからしょうがないだろ！！」

二人の口論の中に『アイス』『一晩で消えた』という二つのキーワードが出てきた。

そうなると犯人はただ一人・・・

「ヴィータちゃん、どこ行くのかなぁ？」

後ろに黒いオーラが見えるなのは、そんな彼女に呼ばれたヴィータは今にも食堂から逃げ出そうとしていた。

「し、知らねぇよアイスなんか！それにな、あんだけの量一人で食い切れるか！！何本かは残しておいたはずだ！！」

思いっきり自白した彼女の後ろには既になのはが立っていた。

「それが・・・知ってるって言うんだよ？」

「あ、ああ・・・・ごめんなさぁぁぁい！！」

あまりにもヴィータらしくない、尚且つどこぞの赤鬼のような叫びが響き渡った。

その後、口論はさらに激化し、六課主要メンバーのほとんどを巻き込んだモノへと発展していった。

そんな中・・・

「プールは・・・どうかな？」

フェイトが放った一言によって、あれほど激しかった口論が一瞬で止まる。

そして剣崎が言った。

「そうだ・・・プールに行こう！」

―プール・ゲート前―

「ミッドにもプールってあったんだな・・・」

自分で『プールに行こう』なんて言い出したにも関わらずの剣崎のこの発言。

「この前オープンしたばかりだそうだ」

シグナムが答える。

ちなみに、主要メンバー全員集合―（やはりザフィーラはいないが）である。

『任務でもないのに大丈夫なのか？』という疑問がでてくるが、はやてがどうにかしたらしい。

とにかく、『出張任務』と大体同じメンバーである。

「おい一真、準備はできてんのか？」
既に浮き輪を準備しているヴィータ

「早く行きましょう一真さん！」
「楽しみです！」
すごいワクワクしている様子のエリオと、ヴィータと同様浮き輪を準備しているキャロ（流石にフリードは留守番）。

「よし、行くぞ！！」

『お～！！』

入場料を払う際、またもや剣崎が『人外一人』と言いそうになったり、ヴィータが子供料金にするかどうかでひと悶着が起きたり、エリオが女性更衣室に引っ張られそうになったりと、やはり出張任務を意識させる騒動があった。

―男性更衣室では―

「また俺まで巻き込まれそうになった・・・」
げんなりしながら着替える剣崎と、同じようにげんなりしているエリオ。

「とにかく行くか・・・」
「はい・・・」

―女性更衣室では―

「楽しみだね～」
「う、うん・・・／／／」
なのはとフェイトが着替えながら話している。
フェイトの顔が赤いのは言わずもがな。

「フェイトちゃ～ん、恥ずかしがっとったらいかんな～♪ってシグナムもやなぁ？」
「わ、私は！そのようなことはありません・・・／／／」
はやては至って普通であり、シグナムはフェイトと同じ状態。

「楽しみね～♪」
「はい！」
「そうです～♪」
既に楽しむ気満々なシャマル・キャロ・リイン。

「おい！早くしろよ！！」
入り口で皆を急かすヴィータ。

―シャワー―

「冷たっ！」
「やっぱりプールはまずこれだよな～」

プールの定番、『冷たすぎるシャワー』に驚くエリオと、それを楽しむ剣崎。

続いて女性陣も到着する。

「冷たい！」

「なのは、ちゃんと浴びないとだめだよ？」

「あ、ヴィータ！シャワーから逃げるな！」

シャワーの時点で騒がしい面々、そしてシャワーを浴びて遂にプールを見渡せるところまで来た。

そう『見渡せる』、つまりこのプールは・・・

「広い！！」

途轍もなく広かった。

「ほんなら・・・機動六課フォワード部隊・・・出動！！」

「それ言うタイミング間違ってるだろ！？」

はやてと剣崎のやりとりを合図に全員が動き出した・・・大半が剣崎のところへ。

「うぇ！？ちょっと・・・ああもう！！」

あまりに多いので、剣崎はすぐ近くのプールに飛び込んで逃げた。

もとより始たちの前から泳いで姿を消すつもりだった剣崎、泳ぎは得意だ！

だが彼の場合、泳ぐというより潜水がほとんどを占めているが・・・。

「一真さん速っ！！」
スバルが呆気にとられていると、

「逃がさへんよ・・・フフフ」
「行こうフェイトちゃん！」
「うん！」
「私たちも行きましょう！」
「はいです～」
「私も行くか・・・」

既に『彼女たち』が準備万端・・・リインは何故ついてきた！？

「私たちも行くわよスバル！！」
「ええ？ちょ、引っ張らないで～」
ティアナが自分の中の『なんだかわからない感情』に突き動かされ、
スバルがそれに付き合わされるハメになる。

そうなると・・・
「僕たちは・・・普通に楽しもうか・・・」
「そうだね・・・」
取り残されたエリオとキャロ、二人は他のプールに向かう。

ちなみにヴィータは一人で楽しんでいる。

（ここまでくれば・・・）
「大丈夫だな」
ようやく長い潜水をやめた剣崎、だが彼の息はきれていない。

（それにしても・・・）
剣崎がゆっくり泳ぎながら考えていたのは六課メンバーの水着姿。
彼に限ってアレなことではない、断じてない。

なのはは薄いピンク、フェイトは黒。
はやては白で、シグナムは少々派手なデザインで腰にパレオを巻き（本人はかなり渋っていた）、シャマルは薄い緑でシグナム同様パレオを巻いている。

―残ったメンバーの水着姿はご想像にお任せします―

「やっぱりこういうのを楽しむ気満々だよな」
いきなりの出発だったというのに水着を準備していたという点を見れば、彼女らも普通の女の子（女性）であるのがわかる。

「ついつい逃げたけど・・・やっぱりわがままを聞いた方がよかったか？」

剣崎がふと呟いた言葉。

「ほんなら・・・付き合ってもらおか？」

はやてが聞いていた。

「ごめん、やっぱり撤回で」
なのは達ならまだしも、よりにもよってはやてが聞いていたとなると話は別だ。
すぐに逃げる体勢に入る剣崎だが、

「逃げんでもええやんか～♪」

はやてに抱き着かれる。
もちろん胸も当たっているわけで、剣崎の顔が真っ赤になった。

「わかったから・・・はやく離れてください・・・」

思いっきり下手にでた剣崎に、半分満足、半分残念そうな顔をして離れるはやて。

だがその手はしっかりと握られていた。

「行こか～♪」
（はぁ・・・）

その後二人は波のプールで揺られに揺られ、体の接触が多くて剣崎が何度も逃げ出そうとした。

遂にはやてから解放された剣崎。
次の人物は・・・

「あ！一真君見～つけた♪」

なのはである。
剣崎的に言えば、『こういう時、二番目に厄介な人物』である。

「今度はなのはか・・・」
「あれ？その様子だともう誰かに捕まってたの？」
「はやてだ・・・」

なのはは『ああ～大変だったね♪』などと言いながらしっかりと腕に抱き着いた。
剣崎がやはり真っ赤になって俯き、それをなのはが引っ張っていく。

「レッツゴ～♪」
（はぁ・・・）

なのはは、はやてのように一点集中ではない代わりにいろいろなところに連れまわすタイプだった。

（橘さんじゃないけど・・・俺の体はボドボドだ・・・）

そんなことを考えながらのんびり泳いでいると、次が来た。

「あの・・・一真さん・・・」
「フェイトか・・・」

来たのはフェイト、その腕にはやけにデカい浮き輪が・・・。
それを見た瞬間かなり嫌な予感がした剣崎が逃げようとするが、

「待って・・・」

フェイトに思いっきり抱き着かれてしまった。
普段の彼女からすればありえないほど積極的だが、これには裏があったわけで。

―抱き着いたら一真さんは絶対に逃げへんよ♪―

はやての入れ知恵であった。
しかしフェイトに抱き着く加減がわかるはずもなく、結果的に一番しっかりと抱き着いていた。

「わかった！わかったから早く・・・」

その後、流れるプールで浮き輪の中に二人で入ってのんびり流された。

二人で入るための大きな浮き輪、これもはやての入れ知恵。

剣崎はもちろん、フェイト自身も真っ赤になっていた。

「もう（精神的に）疲れた・・・」

ふらふらになってプールサイドを歩く剣崎、だがすぐに捕まった。

「あ、一真さん見つけた♪」

「です～♪」

「今度はお前らか・・・」

うなだれる剣崎だが、予想以上にあっさりしていた。

今回も少々大きくなっているリインだが、やはりその身長はまだまだ小さいため、子供用プールで遊ぶことになった。

実は単にシャマルが泳げなかっただけらしいが・・・。

傍から見ればちょっとした親子のようであったそうな。

―その頃エリオ&キャロは―

「エリオ君・・・お腹すいたね」

「そうだね・・・何か食べに行こうか？」

「うん！」

二人は近くにあった屋台に向かって行ったが、

「混んでるね・・・」

「うん・・・」

その屋台はなかなか繁盛していた。

いろいろな着ぐるみを着た四人組が客寄せをしている効果だろうか。

違うところに行こうとする二人だったが、

「気にすることはない、寄っていくといい」

聞き覚えのある声に歩みを止めた。

「始さん！？」

「どうしてここに！？」

声の主は相川始、しかも彼は今たこ焼きをつくっていた。

「たこ焼き屋だ、この世界で生活するためにはある程度の稼ぎが必要になる」

そう言いながらもたこ焼きをひっくり返す始。

彼は店員らしき青年にテーブルと椅子を出させると、二人にそこに座るように促した。ちなみにその店員が何故か何度もテーブルを壊してしまったので地味に時間がかかったが。

二人は遠慮したが、結局始の好意を受けることにした。

少し経つと、始が自分でたこ焼きを持ってきた。

「始さん、こっちに来ても大丈夫なんですか？」

キャロの言葉に始が視線を屋台に移す。

つられて見た二人の目には、なにやら危なっかしげにたこ焼きをひっくり返す先程の店員の姿が映った。

「アレに持たせたらすべて台無しになるだろうからな」

（（確かに・・・））

「とにかく食べてみろ、自信はある」

その言葉に、二人はたこ焼きをそれぞれ一個ずつとり・・・一気に口の中に入れた。

「お、おい！大丈夫か！？」

流石の始も焦る。

たこ焼きはか～な～り熱いはずだ。

だが二人は・・・

「「はひ、ほっへほほひひへふ！（はい、とってもおいしいです！）」」

口をハフハフさせてはいるが普通に食べている。

「そ、そうか・・・ゆっくりしていくといい・・・」

「「はひ！（はい！）」」

（俺はまだ・・・人間についてわからないことが多いな・・・）
驚きを隠せない始だが、屋台を見た瞬間に眉間に皺を寄せ、目を見開いた。

原因は店員の青年ではない。その隣でずっとたこ焼きを見ている男のほうだ。
「あ、え・・・あの・・・ちょっと」
青年も男がずっとたこ焼きを見ていることに戸惑っている。

そして無言だった男がついに口を開いた。

「・・・・コレクッテモイイカナ？」

シャマルとリインからも解放された剣崎。
楽だったとはいえ、それまでの精神的疲労が抜けるわけでもなく、誰にも見つからないように移動していた。

―その結果―

「ま、また迷った・・・」

―再び迷子である―

まさかまた（サウンドステージ編参照）迷子になるとは思っていな

かった剣崎はうなだれた。

あまりにもプールが広いためどこがどこだかさっぱりわからない。
マップもない。

「もうだめだ・・・お終いだ・・・」

ものすごいネガティブになった剣崎がベンチに腰かけていると、突然声がかかった。

「フッ・・・一真、また迷子か？」

その声に顔をあげるとそこには・・・

「し、シグナム・・・」

そういえば一度も遭遇していないシグナムだった。
彼女は迷子の剣崎を探す天才なのだろうか？

「ほら・・・」

差し伸べられた手を、少し涙を流しながらとろうとする剣崎だったが。

「今度は私に付き合え」

手を差し伸べながら言ったそのセリフが、剣崎を再びネガティブにした。

シグナムが剣崎を引き連れて向かったのはウォータースライダー。
このプールの一番の目玉だけあって・・・

「でかいな・・・」
デカかった。
それにかなり入り組んでいて、見間違いだろうか・・・途中から何もないモノまである。

「怖気づいたのか？」
鼻で笑いながら横目で剣崎を見るシグナム。
そんなことを言われたら、男として退くわけにはいかない。

「そんなわけないだろ、行くぞ！」
剣崎は自分から階段を上がっていった。

―カン、カン、カン―

ひたすら階段を上る二人だが、一向に着く気配がない。
それでも上る剣崎だが、後ろのシグナムが全くしゃべらないのが気になっていた。

「どうしたんだよ、もしかして・・・怖いのか？」
先程のお返しにとからかってみる剣崎、だがシグナムは下を向いて何もしゃべらない。

彼女がそんな状態なので剣崎も喋ることがなく、二人は静かに階段を階段を上る。

そしてついに一番上まで到着した二人、下を覗いてみると、『落ちたら俺以外助からないな・・・いや俺でもマズイか』というほどの高さだった。

そんな高さだったが、客はほどほどに並んでおり、二人もそれに従う。

それにしても、シグナムは一向に喋る気配がない。下を覗こうともしない。

「シグナム・・・お前まさか高いところがダメなんじゃ・・・」

「・・・そんなことはない・・・だが無防備な状態でこの高さは・・・」

（それがダメってことだろ・・・）

実際シグナムは高いところは大丈夫だ。そうでなければ『今までの戦闘はなんだったのか』ということになる。

だが『魔法も何も無し』・『予想以上に高かった』・『今の格好水着で恥ずかしい（剣崎がいる）』・『正直これ本当に安全？』などのなんともアレな理由が相まって現在に至る。

そうこうしているうちに二人の番になった。

ちなみに二人とも違う列に並んでいたため、同時ではあるが別ルートを滑ることになる。

係員の合図を待ちながら、剣崎が視線をシグナムに移すと、彼女の眼にはほんの少しだけ怯えがあった。

それを見ていた剣崎は、係員に『ある事』を尋ねる。
その質問に係員は頷き、剣崎は自分の列を離れた。

一方シグナムは、係員の合図がこないことを願いながらも待っていた。
すると・・・
「はい、どうぞ～」

遂に係員の合図がきた。
だがシグナムはなかなか滑り出せない。
そんな彼女の肩に、誰かが手を置いた。

「一真!?お前・・・どうして」
「怖いんだろ?一緒に滑ってやるからさ」

剣崎が先程係員に聞いていたのは、『二人で滑ってもいいのか?』ということ。

そして彼は、シグナムの返事を聞く前に彼女の体を押した。
「え?ちょ・・・」

シグナムはゆっくりと滑り出し、剣崎が後ろから手を回した。

「か、一真!?」
「一人で滑るより、こっちの方が楽しいだろ」

抱き着かれたら赤くなる剣崎だが、こういう時は世話を焼く方に熱心なのでなにも気にしない。

（楽しいだろとは言ったものの・・・）

滑りながら剣崎は後悔していた。それはシグナムと一緒に滑っていることではない。もっと根本的な事・・・そう、『ウォータースライダーなんか逃げればよかった』ということである。

道中?は二人の想像以上の激しさだった。

曲がる・・・落ちる（と錯覚するぐらいのモノ）・・・そして放りだされそうになる。

まだ半分も行っていないだろうに、二人はかなり疲れていた。

「大丈夫かシグ・・・ってウェッ!?」

声をかけようとした瞬間、突然出現した段差によって飛び出しながら落下する。

そしてなんとか続きのルートに落ちることができたが、ここでついに剣崎がやってしまった。

―ムニュ―

→でお解かりになられただろう・・・先程の段差による落下の衝撃で、剣崎の回していた腕がずれた。

そう・・・彼は・・・

シグナムの胸を鷲掴みしていた。

「ご、ごめん！！」
気付いた剣崎がすぐに腕を引こうとするが、それをシグナムが止めた。

「バカ！何してるんだ・・・って」
顔を真っ赤にしながら大声で言う剣崎だが、シグナムの肩が震えているのを見て言葉を止めた。

シグナムは怖がっていた・・・しかもかなり。

彼女自身も、今の状態はよくわかっている。現に彼女は耳まで真っ赤になっている。
だが剣崎の腕を離してしまうことは、恐怖を感じている彼女にとって不可能に近い。

その怖さをすこしでも和らげるために、シグナムは剣崎の腕をしっかり掴んで離さないのだ。

剣崎もどうしたらいいのかわからない。
このままはもちろん駄目だが、怯えている彼女から離れるのもまた駄目なのではないかと思う。

そうこうしている間にも、段差やその他諸々による衝撃のせいで何度も揉んでしまっているのだが・・・。

（もうどうにでもなれ・・・）

手を開いた状態で力を入れ、これ以上のソレを防ごうとしながら剣崎は諦めた。

だが二人は知らなかった。

―自分たちの滑っているコースのラストにあるもの・・・いや無いものを―

「ん？なんで先に空しか見えないんだ！？」

剣崎の言葉にシグナムも顔を上げた。

確かに自分たちの滑っていくその先には・・・空しか見えない。

ここで二人は思い出した。

最初に見上げた際にあった・・・『途中から何もないモノ』の存在を。

「そ、そんなバカな・・・」

シグナムが更にしっかり剣崎の腕を掴み、

「ウソだ・・・」

剣崎は『アレ』を言う準備をしている。

「ウソダドンドコドォォォン！！」

剣崎の叫びと共に二人は本当に放り出された。

ジョーカーになればどうにかなるが、ここでそれはできない。

（下は水か・・・）

だがいくら水とはいえ、この高さでは完璧な着水をしないとかなりのダメージになる。シグナムは剣崎に抱き着いているし、それも期

待できない。
そうなると・・・自分を犠牲に庇うしかない。
「そっちの方が簡単でいいな！」
剣崎は何時ぞやの模擬戦の時のようにシグナムをしっかりと抱えると、そのまま飛び込んだ。
「・・・ブハッ！・・・今回は大丈夫だったな・・・」
体のあちらこちらが痛むが、なんとか気絶は免れたようだ。
「し、死ぬかと・・・思った・・・」
シグナムも息を切らしながら上がってきた。
「流石のシグナムも怖いものがあったんだな」
「そんなことはない！・・・それより・・・」
シグナムが自分の胸を隠すようにして剣崎を睨みつける。
剣崎もその意味に気付いた。
「あれは事故だって！！それにお前だって離そうとしなかったじゃないか！！」
「そ、それはあの状態ではしょうがなかった・・・から・・・」
顔を赤くし俯くシグナム。

それを見た剣崎はシグナムの手をとって歩き出した。

「行くぞ、せっかくのプールなんだからな！」

「一真・・・責任はとってもらうぞ？」

「まだ言うのか！？」

今の発言はいったいどのような意味があったのかは別として、結局この後は二人でいろんなところを周り、剣崎はともかくシグナムはとても楽しんだようだ。

ちなみに、スバルとティアナは剣崎を見つけることはできなかった。

ヴィータは剣崎同様迷子になり、放送までかかる始末。

なのはとはやてがフェイトを連れまわし、フェイトがダウン。

シャマルとリインは最後まで遊んでいた。

エリオとキャロはたこ焼きを皆の分まで買ってきた・・・というか貰ってきた。（始にはいろいろと口止めされた）

こうして、機動六課の楽しい休日は終わりを告げる。

だが忘れていた・・・

「クーラー壊れたまんまじゃないかぁぁぁぁっ！！」

お終い

第二十八話～ファーストじゃないファーストアラート～（前書き）

はい、第二十八話です！

闇色の月さん、陽炎丸さん、感想が返せませんでした。すいません！後でしっかりお返します！！

携帯投稿なので後書きは朝にでも付け足しておきます。

今回から私が一番やりたかった話が始まるわけです。なので六話編成なんですよ。

番外編の二つもよろしくお願いしますね！

それでは、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十八話～ファーストじゃないファーストアラート～

橘から真実が語られ、剣崎にとって忘れられないあの日から数日。

六課は今までに無いほどにまとまっていた。

それもこれも、剣崎が変わったことが原因？なのだ。
あれ以来、剣崎の態度は直角に曲がり、隠し事をすることは無くなった。（性格はそのままのため、１８０度ではない）

変わったのは剣崎だけではない。

なのはとティアナも変わった。

なのはは自分の思いをしっかり伝えるようになった。
ティアナは自らの成長を実感しながら、なのはの教導をうけている。

三人の変化は六課全体に良い影響を与え、部隊長のはやても毎日が楽しくなったそうだ。

まあ、はやての『楽しい』は職員の『迷惑』になったりするのでアレなのだが・・・。

とにかく、今の六課はかなり良い状態であることに変わりはないの

だ。

―本日の剣崎達は―

はやてとフェイトは外出中。はやてが聖王教会に用があるそうで、フェイトは彼女を6番ポートまで車で送っている。

フォワード陣は、朝練を終えて現在シャワー室。

エリオは早く出たため、今は剣崎やフリードと残りの三人を待っている。

「皆、遅いなぁ・・・」

「キュウ・・・」

「広瀬さんやはやてが言ってた。女っていうのは、時間がかかるもんだって・・・自分は人を急かすくせに・・・」

―グウ～・・・―

「一真さん・・・お腹空きましたね」

「もう我慢できない！行くぞエリオ、フリード！」

「はい！」

「キュク～♪」

―聖王教会―

現在はやては、機動六課の後見人であり、自身にとってお姉さん的な存在でもある『カリム・グラシア』と話していた。

「これ・・・ガジェット・・・人型？」

カリムがモニターに出したのは、今までに何度も確認されている人型ガジェットの姿。

その中には、スバルが剣崎と再会した時のガジェットや、つい先日剣崎が一人で撃破したものも入っていた。

だが、さらに目を走らせていくと、はやてが見たこともないガジェットが二体。

「クワガタと・・・なんやろコレ・・・孔雀？」

はやてが疑問符をつけるのも無理はない。

二体の内の片方には、特徴的な『顎』がある。クワガタをモチーフとしているのは一目瞭然だ。

だがもう片方はというと、肩についている羽のようなものしか判断材料がない。
形状が孔雀のソレなので、はやてはとりあえず孔雀にする事にした。
もしはやてが剣崎達ライダーにこれを見せたらどうなっていただろう。

一人（０Ｍ０）↑が確実に暴れるか、叫びだすだろう。
そして更に気付いた特徴。

「バックルまでついとる・・・」

二体の腰には『横長の六角形のバックル』があった。
「コレ、アンデッドが元なんちゃうか？」

この二機に共通しているのは、今までに無かった『存在する生物が基となったフォルム』そして『ウロボロスでは無いにしろ、同じ形状のバックル』

以上の事から連想されるのは、この四年間剣崎が封印し続けてきたアンデッド達の姿。

はやてと同じ見解だったカリムも頷く。
「教会や私自身もそう考えているわ、そうなると・・・」
「戦闘能力・・・魔導士ランクで表すと？」

「孔雀型の方は飛行もできるらしいわ、だから・・・空戦・・・ＡＡ以上が見込まれているの」

―『正確な情報はまだ・・・』―

そう付け加えたカリムだが、それでも十分なレベルだ。

「孔雀のほうから話すってことは・・・」

はやての言葉にカリムはゆっくり頷き、クワガタの方をアップする。

「ええ・・・こちらが空を飛んだという報告はまだないわ。だから陸戦・・・低く見積もって・・・ＡＡＡ」

はやては絶句した。

はやて達の考えが正しければ、剣崎やカプリコーン戦での相川始、そして橘朔也が封印した１２体以外、そこに更にジョーカーを除いた４０体のアンデッドのどれかをコピーして作られた二機。

つまり基になったアンデッドの強さは・・・

「これと同じ・・・またはそれ以上ってことなんやな？」

「ええ・・・」

部屋に重い空気が漂う。

―フェイトｉｎマイカー―

「うん、はやてはもう、向こうに着いてる頃だと思うよ」

『はい、お疲れ様です』

現在グリフィスと通信中。

この後は公安地区の調査部に寄っていくらしい。

だが事件というものはいきなり起きるものだ。

「！？」

『！？』

―六課内食堂―

いきなり鳴り響くアラート

食事中（主にスバルとエリオが）だった剣崎達も一斉に顔を上げた。

「なんだ！？」

「このアラートって・・・」

「一級警戒体制！？」

「グリフィス君！！」

『はい！教会本部から出撃要請です！』
応答したグリフィスに続いて、フェイトとはやても参加する。
『状況は？』
『教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった』
話によれば、レリックらしきものはリニアレールで『移動中』、侵入したガジェットによってコントロールを奪われているらしい。
確認されたガジェットの数は３０体、しかしどのタイプがいるかなどは確認されていないらしい。
『ハードな出撃やけど・・・皆いけるな！？』
『私はいつでも！』
「私も！」
「「「はい！！」」」
「任せろ！」
メンバーたちの返事にはやては頷き、宣言する。
『ほんなら、機動六課フォワード部隊・・・出動！！』
―剣崎＆なのは＆リイン＆フォワード陣ｉｎヘリ―

「部隊長の言うとおり、かなりハードな出撃だけど、練習通りで大丈夫だからね」

「「「はい！」」」

「はい・・・」

フォワード陣が返事をするが、キャロの返事は芳しくない。

フリードの制御のことが心配なのだと察した剣崎は、キャロの前にしゃがんだ。

「キャロ、よく聞けよ・・・」

「一真さん・・・」

一息おいて剣崎は言った。

「何も心配なんていらない・・・お前は、いやお前たちはなのはの『あの』教導をこなしてきたんだ」

その言葉にフォワード陣は苦い顔になり、なのはとリインは苦笑い。

ヴァイスに至っては『違いねぇな』と笑いだす始末。

「それに、隣を見て見ろ・・・誰がいる？」

全員がそれぞれ隣を見る。

「エリオ君に・・・スバルさんやティアさんがいます・・・」

キャロの答えに頷くと、さらに付け加える。

「なら前には誰がいる？」

「リインさんになのはさん・・・一真さんがいます！」

「そう、皆がついてるんだ！」

剣崎の言葉に全員がハッとなる。

「キャロ！僕もついてるから絶対大丈夫！ですよね一真さん！」

「ああ！」

「エリオ君、一真さん・・・はい！私・・・頑張ります！！」

そんなやり取りを見て、なのはは安心した。

（やっぱり一真君には勝てないよ・・・）

自分よりも教えることに長けている剣崎を複雑な表情で見るなのは。

そんな彼女の表情とその真意に気付いた剣崎は、少し怒ったような表情でなのはに言った。

「なのは・・・お前バカだろ」

「ふぇ！？」

「お前意外に誰がこいつらに魔法を教えてやれるんだ・・・誰が自分と同じミスをしないようにできるんだ？」

「それは・・・」

「お前しかいない・・・皆わかってるんだぞ？」

「そうですよなのはさん！」

スバルが同意すると、ほかのメンバーも次々に頷く。

「だから・・・これからもお前が教えていくんだ」

「・・・うん！！・・・でも一真君に『バカ』って言われるなんて・・・ショックだなぁ」

「なんだと！？」

「確かになのはさんの言うとおりね・・・それだけは言われたくないわ」

「ティアナまで！？」

剣崎が他のメンバーを見ると、全員が視線を外す。

「どうせバカですよ・・・」

落ち込む剣崎だが、そんな中ロングアーチから新たな情報が入る。

『市街地にアンデッド出現！・・・カテゴリーＪです！！』

『現在はフェイト隊長が交戦中！！』

『一真さん！行ってくれるな！？』

はやても通信に入り、剣崎に出撃を要請する。

「わかった！ヴァイス！ハッチを開けてくれ！」

「了解！」

剣崎の頼みにヴァイスが後部ハッチを開けるが、剣崎や開けた本人であるヴァイスを覗いたメンバーは首を傾げる。

「一真さん・・・まさかここから飛び降りる気じゃ・・・」
スバルの問いに剣崎は素早く返す。
「当たり前だろ？はやくフェイトを助けにいかないと！」

「でも・・・この高さは・・・」
戸惑うなのは達を見て、剣崎は不敵な笑みを浮かべる。

「こんな時に言うのもアレなんだけどな・・・一度やってみたかったんだ！ダイブしながらの変身！！」

（（ええ～・・・））
なのはとティアナの反応はコレ。
だが他のメンバーは期待の眼差しで見つめている。

「ま、まあとにかく！フェイト隊長をよろしくね！」
「頑張ってくださいね！」
「無茶はしないでよ！」
「僕たちも頑張ります！」
「気を付けてください！」
「頑張るです～」
「行って来い一真！」

「ああ！！」
皆の声を背に、剣崎がハッチに立つ。

「剣崎一真、仮面ライダーブレイド！・・・行ってくる！！」

そして剣崎が跳んだ。

落下しながらバックルにカードを装填する。
腰にベルトが巻かれると、素早く腕を動かし宣言した。

「変身！！」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

オリハルコンエレメントが真下に放出され、落下しながら通り抜けた。

「よし、成功だ！」

『おお～！』
ブレイドに備え付けられている通信機からヘリのメンバーの声が聞こえてきた。

「・・・」
だが剣崎は黙ってしまった。

『どうしたの一真くん？』
「忘れてた・・・」

『忘れてたってなにを・・・まさか！？』
ティアナが気付いた。

「着地のこと忘れてたぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

『えぇぇぇぇぇぇっ！？』

剣崎はいったいどうなってしまうのか！？

次回もお楽しみに！！

「そんな悠長なこと言ってる場合かあああああ！！」

第二十八話～ファーストじゃないファーストアラート～（後書き）

（；ｏｗｏ）遅れすぎたけど次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ブレイド「俺・・・実は頭良かったのか？」

イーグル「人間もここまで飛べるのか・・・」

フェイト「無・・傷・・？」

イーグル「これが人間が見落としたものだ・・・モノに頼ってばかりで・・・」

次回『鷲の実力』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（＾Ｕ＾；）申し訳ございません、このような作者で

（；作者）ホントにすいません！！追加した気になっていてすっかり忘れてました・・・。

（；ｏｗｏ）次回はフェイトがピンチだ！でも俺もピンチだ！！

（；ｏＭｏ）そして次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第二十九話～驚の実力～（前書き）

はい、第二十九話です！

今回も二話連続でいきたいと思います！
番外じゃなくて本編を二話連続です！！

何故かと言えば、この話が短いから！！
ですがちゃんと次回予告は入れておきます。

ムッキー登場までこれを入れてあと【二話】・・・つまり次回！！

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第二十九話～驚の実力～

「あああああああああ！！」

『一真君落ち着いて！深呼吸だよ・・・ス～ハ～・・・』

「お前がやってどうすんだあああああ！？」

『な、なにか使えそうなカードとかないの！？』

そこでやっと剣崎の頭の中に『カードを使ってこの状況を乗り切る』という考えが浮かんできた。

「どれだ・・・どれだ・・・こいつなら！！」

そう言ってブレイドが引き抜いてラウズしたのは・・・

『Ｍａｇｎｅｔ』

？８『マグネットバッファロー』の磁界を操る能力を応用し、弱く斥力を発生させる。

するとどうだろう、落下に伴う重力を斥力が少しだけ殺し、スピードが緩やかになっていくではないか。

そしてなんとか着地したブレイド。
「俺・・・実は頭良かったのか？」
いや、君はもとから『頭脳明晰・文武両道・努力を努力とおもわず、人並み以上の能力を発揮する天才系』・・・らしいんだが。
この世界・・・さらには元の世界でさえ、そんな印象が全くなかった・・・。

「おいそこ！黙ってろ！」
誰に言ってるのかな？

『頭よかったら、最初からそんなバカな真似はしないわよ！』
ここでティアナからのツッコミが入る。
『それも言ったそばから無茶するし！』

「す、すいません・・・」
謝りながら剣崎は思い出した。

「そうだ・・・フェイト！」

急いで呼んでおいたスペイダーに跨る。
そしてスペイダーに搭載された簡易型カードリーダー【モビルラウザー】に一枚のカードをラウズする。

『Ｍａｃｈ』

そして行く前に皆に通信を入れた。
「皆、ピンチになったら無茶するなよ！俺がきっと助けに行く！」
『うん！でも一真君もだからね？約束だよ？』
「わかってるって！」
言葉と共に急発進。
ブレイドの姿はあっという間に見えなくなった。

―市街地―

高原ことイーグルアンデッドは感激していた。
この世界の魔導士と呼ばれる者達の中には、空を飛ぶことができる者もいるのは知っていた。
実際に戦ったこともあった。
だが、目の前の少女は別格だ。
「人間もここまで飛べるのか・・・」
イーグルが感激している、つまり余裕の戦いをしている反面、フェイトは焦っていた。

（攻撃が・・・当たらない）
それに加えて手加減されていた。

向こうからの攻撃は確実に防げるものしかこない。だが、こちらがどのような攻撃を仕掛けても全て避けられてしまう。

つまり、相手は当てる余裕も避ける余裕も持ち合わせているということ。

（強すぎる・・・勝てないかもしれない・・・）

フェイトの諦めるかのような考えが、徐々にスピードを鈍らせていく。

―再びヘリ―

「そんじゃなのはさん、気を付けて」
ヴァイスの言葉と共に再び後部ハッチが開く。

「うん、それじゃあ皆、練習通りに・・・だよ？」

「「「「はい！！」」」」
「リインも精一杯サポートするです～」

剣崎がアンデッドの方に向かった後、ロングアーチから『ガジェット?型の出現』との報告があった。

そこでなのはが先行して叩き、後にカテゴリーＪを剣崎にバトンタッチしたフェイトもそこに参加するという作戦になった。

『なのは隊長・・・くれぐれも気を付けてな?』

「無茶はしないって一真君と約束したからね」

『そうか、それじゃあ出撃や!』

「うん!」

なのはも剣崎同様にハッチから跳んだ。

『ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ』

待機状態のレイジングハートがキラリと光る。

「レイジングハート・・・セェェットアップ!!」

ピンクの光の球体がなのはを中心に広がり、彼女は瞬時にバリアジャケットに身を包む（多分剣崎と始なら見える）

「スターズ1、高町なのは・・・行きます!!」

こうしてなのはが空を駆け、戦地へ赴く。

―その数分後―

「そんじゃ新人ども！一真のバカが余計な緊張感をぶち壊してくれたが、気を引き締めて、無理せずビシッと決めてこい！！」

「「「「はい！！」」」」

ハッチが開き、スバルとティアナが先に降下した。

「行くよ、マッハキャリバー！」

「頼んだわよ・・・クロスミラージュ」

「「セットアップ！！」」

そしてエリオとキャロもまた、

「二人で・・・一緒に！」

「うん！」

互いの手を握りあって跳んだ。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「セットアップ！！」」

フォワード陣も、覚悟を胸に出撃した。

（ハァ・・・やはり人間はこの程度・・・ということか）

今度は落胆するイーグル。原因はもちろん相手であるフェイトだ。
突然動きにキレがなくなり、攻撃もがむしゃらなものになってしまっていた。

「人間は進化をやめた生物・・・という考えは知っていますか？」

フェイトは一瞬だけ動きを止めたが、すぐに攻撃を再開する。

「せっかく頂点に君臨できたというのに、進化するためにかけたのは、ほんの少しの時間だけ」

流石にフェイトも首を傾げた。
フェイトの知る限り、人類の進化はかなりの時間がかかったはずだ。

それを『ほんの少しの時間』と言うのはどういう意図があってのことなのだろうか。
言葉には出さないが、フェイトがそのような事を考えていると、それに気付いたイーグルが答えた。

「納得いかない・・・という顔をしていますね。ですが、植物や私達鳥類と呼ばれる生物は、人類よりも前から存在し、進化を続けてきた・・・哺乳類自体は私たちよりも早くから存在していますが」

互いの得物をぶつけながら話は続く。

「人間は空を飛べない、それは分かり切ったことだった」

「だが、空に憧れた人間は様々な方法を生み出した、いずれは一人で飛ぶために・・・」

一旦距離を置き、フェイトを指さして言った。

「そして手に入れた・・・だが！」

その瞬間、イーグルのスピードはフェイトのそれを遥かに上回り、『消えた』と錯覚させるほどのものとなった。

そしてフェイトが気付いた時には、

―彼女の腕から血が流れていた―

「グッ・・・」

「その程度では私や『カリス』には到底及ばない」

「カリス・・・相川さんのこと！？」

フェイトの意外な返答に、イーグルは動きを止めた

「君はカリスを知っているのか！？・・・いやそんなはずはない・・・封印が解かれたのは十三体だけのはず・・・」

独り言を言っているだけでなにもしてこないイーグル。
流石にこれを逃すほど、フェイトは諦めきってはいない。

「今しかない・・・プラズマランサー！！」

フェイトの周囲から金色の閃光が次々と放たれ、それは全てイーグルに直撃した。
（手応えはあった・・・でも）

正直フェイト自身これで墜とせたとは思っていない。
そして煙が晴れると、そこにはやはりイーグルがいた。
だが、イーグルの状態はフェイトの予想をはるかに超えていた。

「無・・傷・・？」

「これが人間が見落としたものだ・・・モノに頼ってばかりで・・・」

そう言いながら、再びイーグルは姿を消した。

そして次に現れたのはフェイトの真後ろに、

―腕を振り上げて―

「自分自身の『力』を求めない・・・」

第二十九話～驚の実力～（後書き）

今回のイーグルの『モノに頼ってばかりで』は、もちろん魔法も含まれています。
彼にとっては『自分の身一つ』が大事なようです。カリスをライバルと認めているのもその為かと（本物のカリスはラウザー未使用）。
・・・魔法も十分自分の力だとは思うんですがねｗ

ザフィーラとか見たら感激しそうｗ

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

フェイト「無茶はするな・・・でしょ？」

ブレイド「お前がピンチになったら・・・俺の名前を呼んでくれ」

はやて「・・・あかん・・・このままじゃみんなが・・・」

？？？？「剣崎さん！今です！！」

次回『三つ葉と蜘蛛の戦士』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　０Ｈ０）やった・・・ついに出演だぁ！！

（　０ｗ０）やったな睦月！

（；作者）ごめん・・・次回の台詞あれしかない・・・

（；０Ｈ０）そんなぁ・・・

（；０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

第三十話～三つ葉と蜘蛛の戦士～（前書き）

はい、記念すべき第三十話です！
なんかこの前の二十話からたいして時間が経ってないような・・・。
ま、まあそんなことは置いといて、今回はついにオッペケテンムッキー！！
でも台詞は一言しかないとｗ
次回も活躍するのは『あの人』ですし。
それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十話～三つ葉と蜘蛛の戦士～

「『力』が足りない・・・」

フェイトが振り向く間もなく、腕は振り下ろされた・・・が、

―ブォォォォン―

突然現れた『何か』にイーグルは弾き飛ばされる。

「何だと!?」

「フェイト・・・下がってろ」

―カチャ―

「カテゴリーJ・・・相手は俺だ!!」

「一真さん!!」

ブレイド・剣崎がようやく到着した。

「大丈夫かフェイト！！」
降りてきたフェイトに駆け寄るブレイド。

「私は大丈夫・・・ウッ！」
「怪我してるのか・・・でも・・・」

「わかってる、大丈夫だから・・・なのはの援護だけでも・・・」

フェイトの眼には、先程まで消えかけていた強い意志があった。
剣崎の到着と親友を助けたいという気持ちが、彼女の心に再び力を与えた。

その眼を見た剣崎（ブレイド）も頷いた。

「わかった・・・でも・・「無茶はするな・・・でしょ？」・・・その通りだ」

無理をした笑顔のフェイトを見て、ブレイドは彼女に言った。

「フェイト、お前がピンチになったら・・・俺の名前を呼んでくれ」

「え？」

「その時は・・・俺が絶対に助けに行く！！」

フェイトは内心驚いた。今の剣崎（ブレイド）の言葉は、十年前彼女自身がなのはに向けて言ったことに酷似していた。

「本当に・・・？」
だがこの相手（イーグル）を見ると、それが叶わないかもしれないという不安が出てきてしまう。だがブレイドは力強く頷いた。

「ああ、約束だ！！」
そう言って小指をだすブレイド。意図を理解したフェイトも、同じように小指を出す。

そして二人は短い指切りを交わした。

「ありがとう・・・行ってくるね」

フェイトは飛び立った・・・親友の待つ戦場に。

「待っててくれたんだな」
ブレイドは、ずっとこの会話を見ていただけだったイーグルに言った。

するとイーグルは肩を竦めて言った。
「約束を交わす二人を・・・邪魔してはいけないと思ってね」

そして同時に構える二人

「俺は他の皆も助けに行かないとならないからな！」
「護れない約束をするべきではないと思うんですが・・・」

それぞれの発言が場の空気を緊張させる。

「お前は俺が封印する！！」
「私もカリスとの約束を果たさなければならない！！」
「「行くぞ！！」」

―リニアレール上―

現在リニアレールの上では、スバルたちフォワード陣とガジェットとの戦闘が行われていた。
その中で、ついにキャロの『竜魂召喚』が発動。
真の姿となったフリードの炎が次々とガジェットを破壊していく。
そして炎が通用しない？型には、
「行くよ・・・エリオ君！」
「了解、キャロ！」
エリオがフリードから飛び降りる。
そこにキャロのブースト魔法
「ツインブースト！スラッシュ＆ストライク！！」
「一閃必中！！デェェリャァァァッ！！」

ブーストによって強化され、魔力刃を発生させたストラーダで相手を貫き、そのまま切り上げた。

―ドゴォォォン―

?型は爆発し、キャロを乗せたフリードがエリオに近づく。

「やったねエリオ君！」

「うん！キャロのおかげだよ！！」

こうして二人のコンビネーションで見事に撃破。

一方のスターズコンビも、

「クロスファイアー・・・シュート！！」

ティアナが周りの?型を殲滅し、

「リボルバァァシュゥゥゥット！！」

スバルが本命の?型を撃破する。

「フォワードの皆、しっかり成長してるです～♪」

こうして『複数の?型』という状況を見事に切り抜けたフォワード陣は合流し、レリックの確保に向かう。

だが、ジェイル・スカリエッティが送り込んだのは・・・これだけ

ではなかった。

『Ａ ｍｏｖｅｍｅｎｔ ｒｅａｃｔｉｏｎ ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ，ａｔ ｔｈｅ Ｇａｄｇｅｔ Ｄｒｏｎｅ.』

ケリュケイオンが反応を察知する。

「え！？・・・皆さん！ガジェットはまだいます！！」

キャロが告げるが、スバルたちは怯まずに一歩前に出た。

「何が来ても、皆がいれば大丈夫！！」

「ええ！」

「はい！」

キャロも、そんな三人に続いて前に出る。

すると前の車両、レリックがあるであろう車両の屋根が中から壊されていく。

―ガンッ・・・ガンッ・・・ガンッ！！―

そして中から出て来たのは、

―所々が金色のボディー―

―特徴的な二つの、いや体中の『顎』―

―手に持った二振りの剣―

「人型・・・？」

「アンデッドみたいな姿・・・」

―六課指令室―

「なんやて!?」
フォワード陣の前に現れたガジェットの姿を見て、はやてが立ち上がる・・・その顔は真っ青だった。

「どうされたんですか!?」
グリフィスやロングアーチのメンバーも、はやての顔を見て『ただ事ではない』と悟る。

するとはやては通信でフォワード陣とリインに呼びかけた。

「みんな!そこからすぐに退却や!!」

『え?部隊長・・・それって』
ティアナが眉を顰めて尋ねようとするが、

「ええから早よ逃げるんや!!ソレだけは相手にしたら・・・」

はやてが言葉を続けようとすると、突然の通信妨害で現場とシャットアウトされた。いや、こちら側から戦闘の様子を見ることはできる。
だがフォワード陣だけでなく、なのはとフェイトの二人にも連絡がとれない。

「・・・あかん・・・このままじゃみんなが・・・」
はやては糸が切れたようにイスに崩れ落ちた。

「いったいどういうことなんですか!?あのガジェットにはどれほどの・・・」

グリフィスの言葉に、はやてがゆっくりと話し出した。

「あのガジェットはな・・・」

その後続いたはやての言葉にロングアーチが騒然となった。

「フェイトちゃん!」
「なのは!」

並んだ二人が、それぞれの砲撃を放つための体勢に入る。

「ディバイィィン・・・」
「プラズマ・・・」

二人の行動に、ガジェット?型が回避行動に移ろうとするが、

「バスター!!」
「スマッシャー!!」

二色の砲撃から逃げ切れるものは無く、ガジェットの殲滅に成功する。

「ふう・・・フェイトちゃん、怪我は大丈夫？」
「ちょっと・・・無茶しちゃったかな・・・一真さんに怒られちゃうよ」

二人が帰投しようとすると、一機のガジェットがそれを止めた。

「人型がこのタイミングで！？」
「あのガジェット・・・まるで・・・」

二人の前に現れたのは、はやてが見た『もう一機』

―青い爪のようなものが所々に付いているボディー―

―鳥を意識したような顔―

―肩からについた孔雀の羽―

「油断は・・・」
「禁物だね・・・」

「おい！降りてこい！！グッ・・・」

一方、イーグルと戦闘中のブレイドだが、その状況は『ホテル・アグスタ』での戦闘と似たようなものになっていた。

つまり、

「飛んでたら当たらないだろ！！」

ということである。

「わざわざ降りて戦うほど・・・甘くはない！！」

放たれた羽手裏剣がブレイドに襲い掛かる。

その数とスピードにブレイドはついていけず、結局ほとんどが当たってしまう。

しかもその中の数本の羽が、あろうことかブルースペイダーに直撃した。

―ボンッ！―

煙を上げる愛機を見て焦るブレイド。

（なにか・・・なにかないのか！？）

この前なのはとの戦闘で使った戦法は無意味だ。あれはスバルがウイングロードを残していてくれたからこそできたこと。

自分も空を飛ぶ・・・これは不可能だ。ブレイドの『あのフォーム』なら同等、いやそれ以上の戦いができる。だがそもそも、それに必要なカードがまさに今戦っている相手を封印したものである。それに強化変身のための『アレ』が手元にない。

（始もいないから・・・フロートも使えないな・・・）

前の世界での対イーグル戦は、初めから？４『フロートドラゴンフライ』を借りて、一時的ながら相手と同等の立場に立つことができた。

だが今この場に始はいない。

『フロート』を借りることは不可能だろう。

「万策尽きた・・・といったところかな？」

「うるさい！」

声には威勢があるが、やはり攻撃は当たらない。

ブレイラウザーを振りきったその一瞬の隙に、イーグルは的確に攻撃を与えてくる。

（・・・あれなら！）

何かを閃いたブレイドが引き抜いたのは、ヘリから飛び降りた時に使用した、

『Ｍａｇｎｅｔ』

今回は斥力ではない。相手が攻撃の当たらないところにいるのなら、それを引き寄せる・・・つまり重力を使う。

「なんだと・・・！？」

（なのはの時に使えばよかったな・・・）

そんな事を考えているうちに、イーグルはこちらに引き寄せられている。
ブレイラウザーで、相手が間合いに入った瞬間に切ろうと構えるブレイド。

―だがそう簡単にうまくいくわけもなく―

「甘い！！」
「へ？ウェアッ！！」

イーグルは引き寄せられる重力にあえて逆らわず、自分のスピードを上乗せしてきた。

ただでさえ速いイーグルに重力加速が加わり、ブレイドがついていけるものではなくなってしまったのだ。
その結果ブレイドは逆に深手を負うことになり、地面に膝をついた。

「う、そだろ・・・」
「いい考えだったのだが・・・詰めが甘かったようだ」

『マグネット』の効果も消え、再び空に舞い上がるイーグル。
そしてある程度の高さまでくると、自分の爪を真っすぐブレイドに向けて突撃の体勢となる。

「これで・・・終わりだ！」

そのまま一直線に急降下するイーグル。
ブレイドも避けようと体を動かそうとするが、痛みでそれもままならない。

ブレイラウザーも振り上げることのできない体。

（無理・・・か？）

諦めを滲ませた目を上げた・・・次の瞬間、ブレイドの聴覚がとらえた音があった

『Ｂｉｔｅ』

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ』

『Ｂｌｉｚｚａｒｄ　Ｃｒｕｓｈ』

「ハァァァッ！」

突然ビルの屋上から飛び出した影がイーグルと重なる。

「睦・・月・・・？」

「ウワァァァッ！！」

ブレイドからは少し離れた位置に落ちたイーグル。

その羽は粉々に砕かれていたが、まだバックルは開いていない。

すると先程の『影』も着地した。

―緑の体に黄色の鎧―

―紫色の複眼―

―手に持った槍―

「やっぱり・・・睦月！！」

最後の一人『仮面ライダーレンゲル・上条睦月』がついに参戦した。

「剣崎さん！今です！！」

レンゲルが指差したのはもちろん未だ立てないでいるイーグル。

それはブレイドも同じ・・・はずだったのだが、既に彼は立ち上がり、カードを『三枚』引き抜いた。

「サンキュー睦月！！」

『Ｋｉｃｋ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

『Ｍａｃｈ』

「ハァァァ・・・ウェイ！！」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｏｎｉｃ』

以前カプリコーンに決めた時のような突進はせず、助走だけで跳びあがった。

「ウェェェェェイ！！」

「アアアアアアアア！！」
渾身のライトニングソニックはイーグルに直撃し、爆発と共にバックルも開いた。
ブレイドはすぐにカードを取り出し、投げた。
光を放ちながら封印されていくイーグル
「カ・・リス・・・約束は・・・果たせなかった」
彼が最後の言葉を言い切るとともに封印は完了する。
「終わった・・・」
崩れるようにその場に膝をつくブレイド・・・だが、
『まだ終わってへん！みんなが！！』
通信機からはやての声が響いた・・・

第三十話～三つ葉と蜘蛛の戦士～（後書き）

（０ｗ０）次回のリリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

？「思い出すんだ！君を動かすのは『それ』じゃないだろ！！」

ブレイド「俺を、俺の体を動かすものは義務とか使命なんかじゃない」

？「そうだ・・・それだよブレイド！！」

レンゲル「剣崎さんは気付いてなかったけど、俺もなれるようになったんです！」

橘「カテゴリーＫを模したガジェットか・・・おもしろい！！」

次回『黄金の翼』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　０ｗ０）次回はついにあのフォームが登場！

（；０Ｈ０）俺の台詞もちゃんとでてきます！

（　作者）あぁ・・・これが一番やりたかった！

（；０Ｍ０）次回は特にちゃんと見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

第三十一話～黄金の翼～（前書き）

ついにこの時がきました！！

剣崎がブレイドに変身したのが十八話、あれからここまでくるのが楽しみでたまらなかったですよ！

今回、次回、次々回でファーストアラート編は終了です。
ここからの流れは見逃せない！（って自分で何言ってんだ・・・）

突然ですが、みなさんは『電磁戦隊メガレンジャー』『救急戦隊ゴーゴーファイブ』『魔弾戦記リュウケンドー』をご存知ですか？
先の二つはクウガより前ですね（ゴーゴーファイブの次『未来戦隊タイムレンジャー』の年から平成ライダーシリーズスタート）
実は次の小説はデジモンでもウルトラマンでもなく、この三つの中からにしたいと思ってるんですよね。
二つは子供のころの憧れ、もう一つも普通にカッコいいですし！！
どれも宇宙に行けるところがまた・・・いい！！（何かしら宇宙イベント有り）

まあそれはまた今度にするとして、
それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十一話～黄金の翼～

『まだ終わってへん！みんなが！！』
通信機からはやての声が響いた。
その声は尋常ではない程に焦っていた。

「どうしたはやて！みんながどうしたんだ！？」
剣崎も通信機に向かって叫んだ。

『なのはちゃんとフェイトちゃん・・・そしてフォワードのみんなとリインのところに人型のガジェットがでてきて・・・』

なのはとフェイトを普段の呼び方で呼んでいるということは、それほどはやてが焦っている証拠。

「どうした・・・どうなったんだ！！」

『フェイトちゃんが撃墜・・・』

『・・・連れ去られたんや・・・』

「な・・・なんて言った・・・？」

だがはやては答えなかった。

通信機の向こう側では、ははやてが嗚咽を漏らしていた。

「フォワードは・・・スバルたちはどうした!?」

剣崎の問いに答えたのははやてではなく、シャーリーだった。

『フォワードのみんなのところには橘さんが来てくれました・・・

ですが更にガジェットの増援があり・・・戦況は厳しいようです』

『一真さん・・・みんなを・・・みんなを助けて!!』

はやての言葉を最後に通信は切れた。

「クソッ!どうすればいいんだ!!」

地面に拳を打ち付けるブレイド。

先程から何度もそれを繰り返し、彼のブレイドアーマーからにじみ出るほどの血が地面を緑に染めていた。

「俺が・・・俺がしっかりしてれば・・・」

「俺がみんなを・・・クソォォォ!!」

叫び終わったブレイドはふらふらと立ち上がり、煙を上げ続けるスペイダーの隣に立った。

「動け・・・お前が動けばみんなを助けに行けるんだ・・・」

「動け・・・動いてくれ!!」
スペイダーはそれでも煙を上げ続ける。
「俺が・・・俺がみんなを護らないといけないんだ!!」
叫ぶ剣崎(ブレイド)
―だがその叫びは―
「それは違う!!」
―『誰か』の一言で止まった―
「なにが違うんだ・・・」
聞いたことがあるのに思い出せない。
そんな声の主に向かって剣崎は問う。
その問いに『声の主』は答えた
「思い出すんだ!君を動かすのは『それ』じゃないだろ!!」
(俺を・・・動かすもの・・・そういえば昔・・・誰かに・・・)
剣崎の頭の中に過去の記憶が流れ込む。
―どうしても・・・どうしてもこいつには勝てないのか―
―君は戦うことを自分に与えられた義務だとか使命だと考えている―

―使命感か・・・くだらない―

―逃げて・・・早く―

―わかった・・・俺の体を動かすものは―

『あの時』の事を思い出した剣崎はゆっくりと、だがしっかりと立ち上がった。

「思い出した・・・」

「俺を、俺の体を動かすものは義務とか使命なんかじゃない」

「俺は・・・俺は今でも・・・」

剣崎は顔を上げた

「今でも人を愛しているから戦ってるんだ!!」

そして剣崎は決意する

「皆を『護る』ことは、決して俺の義務じゃない・・・でも俺は!!」

剣崎の頭の中に、六課の皆の顔が浮かぶ。

そしてなのは達や・・・フェイトと交わした約束を思い出す。

「家族の・・・皆と交わした約束を『守りたい』から戦うんだ！！」

「俺の・・・俺自身の気持ちで！！」

―そんな彼に与えられる『翼』―

「そうだ・・・それだよブレイド！！」

「剣崎さん！！」

掛けられた声に振り向いた先には・・・

「睦月・・・嶋さん！！」

自分の仲間と、自分に大切な事をわからせてくれた恩人の姿。

「剣崎さん！これを！！」

睦月が投げたものをキャッチするブレイド。

「それは、「烏丸所長から預かった物・・・だろ？」・・・はい！！」

『ソレ』を一目見ただけで、彼は次に何をすべきかよくわかった。

―ブレイドは受け取った『ソレ』を左腕に取りつけ―

―ラウザーから『二枚』のカードを取り出す―

取り出したのは？Q『ＡＢＳＯＲＢ』と、今さっき封印した？Ｊ『ＦＵＳＩＯＮ』

そして受け取ったのは、強化変身のためのアイテム

【ラウズアブゾーバー】

―一枚をアブゾーバー中央のインサートリーダーセットする―

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｑｕｅｅｎ』

鳴り響く待機音

「俺に・・・守るための翼をくれ！！」

―そしてもう一枚をラウズした―

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

ラウズした直後、ブレイドの目の前に黄金の鷲のオーラが現れ、それが翼を大きく広げながらブレイドと重なった。

その瞬間、ブレイドが・・・変わった

―体の所々の鎧が銀から金に変わり仮面の色も金色になる―

―胸部にはスペードを象った鷲が刻印され―

―ブレイラウザーの切っ先に黄金の刃【ディアマンテ・エッジ】が追加された―

そして唯一、もとの変化とは違うものがあった。

―背中に六枚の翼【オリハルコンウイング】が出現する―

―だがその色は銀と赤ではなく、仮面と同じ『金』と赤―

―これが剣崎一真の『守る』ための新たな力―

「ジャックフォーム・・・」

ブレイド・ジャックフォームは二人のほうを向いて言った。

「ありがとう嶋さん・・・大事な事を思い出させてくれて」

「いいんだ・・・君には迷惑をかけたからね」

「サンキュー睦月・・・助けてくれて」

「俺は剣崎さんに助けられてばかりでしたから・・・そんなことより」

睦月の言葉にブレイドは頷き、翼を広げた。

「それじゃあ・・・行ってくる！約束を守るために！！」

次の瞬間、ブレイドの姿は金色の閃光を残して消えた

「やっぱり剣崎さんは凄い人だなぁ・・・ジャックフォームを進化させるなんて」
睦月がそう言うと、
「君だってたくさん特訓したじゃないか」
と嶋が返した。

その言葉に睦月は頷き、後ろを振り向いた。
そこには大量のガジェットが迫ってきていた。

「行こうか睦月君」
「はい！」

睦月は【レンゲルバックル】を取り出して、？Ａ『ＣＨＡＮＧＥ』を装填した。
するとギャレンやブレイドと同じようにベルトが巻かれる。

右手を、甲を前に向けながら顔の前に構え、左はそれを支えるように右肘まで持っていく。

そして両手を同時にそれぞれの腰まで引いた

「・・・変身！！」

『Ｏｐｅｎ　Ｕｐ』

レンゲルのシステムは、ギャレンやブレイドよりも後に開発されたため、変身時の音声も異なるのだ。

紫色のオリハルコンエレメントが放出され、彼に向かってくる。

それを通った瞬間、睦月は『仮面ライダーレンゲル』となる。

「剣崎さんは気付いてなかったけど、俺もなれるようになったんです！」

レンゲルの腕には、ブレイド同様にアブゾーバーがつけられていた。

トレイが展開し、二枚のカードを引く。

「俺と・・・一緒に戦ってください！」

念じるようにカードを額に当ててレンゲルは言った。

そしてセットし、ラウズする。

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｑｕｅｅｎ』

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

レンゲルの前に黄金の象が現れ、レンゲルと一体になる。

輝きが消えるとそこには、

―肩には象の牙がついた【オリハルコンタスク】―

―凄まじい力を秘めた腕―

―そして胸部刻印されし象―

「剣崎さん、これが俺のジャックフォームです！」

ディアマンテ・エッジの追加されたレンゲルラウザーを構えてレンゲルＪＦは言った。

まあ当の剣崎には聞えていないだろうが。

そして隣の嶋も『元の姿』に戻る。

嶋昇、その正体はクラブのカテゴリーＫ『タランチュラアンデッド』

「ここから先には行かせない！！」

「剣崎君の邪魔をするというなら・・・容赦はしない」

―時間を遡ったレールウェイ―

ここでは人型ガジェット（ギラファ）とフォワード陣の戦闘が行われていた。

「マッハキャリバー！！」

「ストラーダ！！」

「「うおぉぉぉぉ！！」」

―ドォォォォォン―

「今度こそやった！？」

だが煙の中から出てくる相手（ガジェット）は無傷。

「どうなってんのよ！あのバリアは！！」

ティアナは大声で言った。

そこに先程突撃したスバルとエリオが戻ってくる。

「ティア、あれはちょっと・・・」

「僕たちの力じゃ・・・」

戦闘開始の時点からずっと攻撃を与え続けているが、敵の強力なバリアの前に為す術が無かった。

相手がＡＭＦのようなフィールド系統のものを使うならまだ勝算はあった。だがあのバリアはいかなるものも通さない。

リインの『凍てつく足枷―（フリーレンフェッセルン）』のように

相手の真下で直接発動する魔法なら効果がある・・・はずだったのだが、相手はそれを物ともせずに向かった来た。

その力はまさしくカテゴリーK『ギラファアンデッド』のもの。

「このままじゃ・・・」

「危ないです・・・」

そうこうしている間にも、相手は近づいてくる。

「部隊長の言うとおり退却するべきかも・・・」

「キャロ、フリードに皆を・・・!?」

ティアナがキャロに指示を出そうとしたときには既に・・・

―目の前―

「ティア!!」

スバルが手を伸ばそうとするが、次の瞬間、そこにいるものは例外なく動きを止めることになる。

「カテゴリーKを模したガジェットか・・・おもしろい!!」

―突如現れた男によって―

「「「「「橘さん!!」」」」」

第三十一話～黄金の翼～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

キャロ「いくら橘さんでも！！」

スバル「橘さん・・・なんで・・・」

ティアナ（わかった！あの人が狙ってるのは・・・）

エリオ「ティアさん！？」

ギャレン「フッ・・・この時を待っていた」

次回『この距離なら、バリアは張れないな！！』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）あんまり活躍なかったような・・・

（；作者）ごめん、次々回は完璧だから・・・

（ｏＭｏ）次回の主役は俺だ！

（ 作者）次回はまさにサブタイの通りｗ

（；ｏＭｏ）だから次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十二話～この距離なら、バリアは張れないな！！～（前書き）

はい、第三十二話です！

今回からこの小説の題名が『リリカルギャレン』に変わりそうで・・
・やっぱり変わらない！！

まぁそれぐらい今回は橘さんが主体な訳です。
この頃の平均から見ると少し短いですがねｗ

この前の次回作の話、乗ってくれた人はメガレンジャー推しですね。
なので決まってもないのに見直している最中ですよｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十二話～この距離なら、バリアは張れないな！！～

「「「「「橘さん！！」」」」」

ティアナの危機に現れた橘。

彼は動きを止めたガジェットに向かって躊躇いもなく走り出した。

「変身！！」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

ギャレンバックルから放出されたオリハルコンエレメントが、ティアナの目の前にいたギラファガジェットを弾き飛ばす。

そのまま列車の上から消えるギラファガジェット。

「あ、ありがとうございます！」

「礼はいい・・・それより・・・」

ギャレンがメンバーを集め、『ある指示』を出した。

「そんな！？」

「いくら橘さんでも！！」

彼の出した指示に反対しようとするエリオとキャロ。ほかの三人の反応も同じだ。

「俺は大丈夫だ、あれが本当にカテゴリーKを模しているのなら勝算はある」

そう言って振り向くと、ギラファガジェットがちょうど上ってきたところだった。

「とにかく言った通りにするんだ！いいな！」

ギャレンラウザーを連射しながら走り出すギャレン。

それをすべてバリアで防ぎ、そのまま歩いてくる。

そのままギャレンの前まで歩いてくると、二本の剣を同時に振り抜いた。

「グハッ！！」

その衝撃にギャレンが呆気なく飛ばされる。

「橘さん・・・なんで・・・」

スバルが駆け寄ろうとするが、こちらを向いたギャレンの目は『来るな』と告げている。

―『なにが起きても動くな・・・あいつは俺一人で倒す』―

それが橘の出した指示。

だがこのままでは橘は負ける、歴戦の戦士である彼が相手の実力を見誤るとも思えないが、スバルたちから見れば無謀だ。

しかし、この中で唯一表情を変えない人物がいた。

（橘さんには『確信』があった・・・あいつに勝つ方法があるはず・・・）

ティアナだけは、橘の行動の理由を考えていた。

そして気付いたのだ

（わかった！あの人が狙ってるのは・・・）

「やっぱり我慢できない「待ちなさいスバル！」ティア！？」

「ティアさん！？」

「なんで・・・」

「このままじゃ橘さんが・・・」

前に出ようとしたスバルをティアナは止めた。

そんな彼女の行動に驚くメンバー達。

だがギャレンはそんな彼女に頷く。

すでに相手はすぐ後ろにいる。

今にも剣を振り上げようとしているというのに、彼の自信はどこからくるのか。

それがわかっているのはティアナと橘自身だけ。

「「「「橘さん！！」」」」

相手が剣をゆっくりと上げだしたのを見てティアナを除いた四人が叫ぶ。

「フッ・・・この時を待っていた」

そしてついにギャレンが動いた

―素早く後ろを振り返りギャレンラウザーを相手に付きつけ―

―そして叫んだ―

「この距離なら、バリアは張れないな！！」

―相手が振り下ろすよりも速く引き金を引く―

怯むギラファから離れず、何度も弾を撃ち込んでいくギャレン。

ここで、ようやくティアナ以外のメンバーも真意に気が付いた。

―相手に近づけないなら、相手から近寄らせればいい―

本体から少しだけ離れたところに展開されるバリアなら、至近距離・・・いやゼロ距離から攻撃するしかない。

以前彼がギラファアンデッドに対してとった行動だが、今回食らった攻撃は一発だけ。大きく進歩している。

次々と撃ち込まれる弾丸によって蜂の巣にされるギラファガジェット。そのボディーの限界が近いと分かった瞬間、ギャレンは相手を蹴り飛ばし、自分たちの近くから遠ざけた。

少し離れたところで爆発したガジェットと、それを背に変身を解く

橘。

「「「すごい・・・」」」

「かっこいいです～♪」

フォワード三人とリインが彼の強さに感心している中、橘はティアナに問うた。

「よくわかったな・・・どうしてだ？」

「一真さんが言ってました、『橘さんはよく無茶をする』・・・それが私に似てるとも言ってました」

少々ムスッとしながら答えるティアナ。

「ふっ・・・そうか」

そんな彼女を見て橘は苦笑すると、真面目な顔になって言った。

「なら、女の子の君に言うのもなんだが・・・覚えておいて欲しいことがある」

その言葉にティアナだけでなく、ほかのメンバーも耳を傾ける。

「俺が覚えておいて欲しい事・・・それは」

「・・・愛する人は、自分の命に代えても守り抜け・・・ということだ」

「えっと・・・それは・・・」

何故そのような事を言うのか、聞いてはいけないとわかってはいる

のだが、それはここにいる全員がきになった。

「俺は愛する人を守れなかった・・・『あるアンデッド』に利用されていた俺を救い出そうとしてくれた彼女は・・・そのアンデッドに殺された」

語る橘と沈黙する五人。

「俺は再び立ち上がった・・・彼女の命を引き換えに・・・だ」

「だから覚えておいて欲しい、自分の為に愛する人が死んでいくなどということを・・・君たちには味わってほしくない」

(私の愛する人・・・お兄ちゃん・・・)

ティアナの中に浮かんだのは、すでにこの世を去った兄。

「私には・・・その・・・」

「いや・・・君にもいるはずだ」

ティアナが言おうとすることを理解した橘は言った。

そう言われて再び考えるティアナ。

するとどういう訳か、最初に浮かんできたのは剣崎だった。

(うそ・・・そんなはずは!)

「ちちち違います!私は一真さんのことなんて全く・・・・あっ!!」

思いっきり言わなくてもいいことを口走ったティアナが急いで口をふさぐが、時すでに遅し。

「ティア・・・ライバルは多いよ?」

「だ、だから違うって言ってんでしょ！！」

（まさかそうなるとは・・・）

正直予想外の展開にどうしたらいいかわからない橘。

場には少しだけ穏やかな空気が流れる・・・が、

「皆さん！あれを見てください！」

キャロの言葉に全員が振り向いた。

そこにいたのは、

「今度はカテゴリーＪ・・・伊坂か！！」

そこにいたのはピーコックガジェット、だがその数は・・・。

「こんなに・・・うそでしょ・・・」

ティアナがそう言ってしまうのも無理はない。

相手の総数は・・・少なくとも３０。

この数はいくら橘でも・・・。

「大丈夫だ・・・俺に任せろ」

そう言って橘はギャレンバックルを取り出し、カードをセットする。

ブレイド達と同じように腰にベルトが巻かれ、待機音が鳴り響く。

「伊坂・・・貴様だけは・・・貴様だけは俺の手で倒す！！」

橘は右手を腰に引き、左手を開きながらゆっくり右胸の前にもっていく。

そして胸の前に来た瞬間、開いた手を握りしめて宣言した。

「変身！！」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

オリハルコンエレメントが放出され、橘はそこに向かって駆け出した。

通り抜けた瞬間、彼の体は鎧に包まれる。

―ＢＯＡＲＤによって開発されたライダーシステム第一号―

―『仮面ライダーギャレン』―

「あいつにはバリアはない・・・援護を頼む」

「「「「「はい！！」」」」」

―一方のなのはとフェイト―

同じく時を少し遡ったここでは、ピーコックガジェットとなのは、フェイトの戦闘が行われていた。

―戦況は・・・―

「このままじゃ・・・」

―最悪だ―

もともとなのははは高速戦闘は得意ではない、だからフェイトとコンビを組んだときは、『フェイトが切り崩し、なのはが砲撃で支援する』という戦闘スタイルをとる。

だがそこで肝心になる『高速戦闘』を担うフェイトの動きが鈍い。ガジェットのスピード自体はイーグルよりも遅い。

だが攻撃の度に、イーグルにつけられた腕の傷が痛み、押し切ることができない。

そして激しさを増していくソレが、フェイトの動きを鈍らせる。

なのはがフェイトを下がらせようとするが、相手がそれを許さない。アクセルシューターは対剣崎戦のように手に持った剣で落とされ、ディバインバスターは当たらない。

「フェイトちゃん！」

なのはの叫びも空しく、フェイトは攻撃を受ける側に回ってしまう。

「グッ・・・ハアァァァァ！！」

―『なんとか一太刀だけでも・・・』―

そう、たった一回の攻撃さえ当たれば活路はある。

だがそれが当たらないのだ。

―ギンッ！！―

切り結ぶフェイトとピーコックガジェット。

「なのは！今！！」

「アクセルシューター！」

フェイトの言葉と同時に攻撃するなのは。

切り結んでいる今なら剣で落とされることもない。

だが相手とて伊達にピーコックを模しているわけではない。

肩に付いた羽が一斉に飛び出し、なのはの放った魔力弾を次々に撃ち落としていく。

そしてそれは、なのはとフェイトにも襲い掛かった。

第三十二話～この距離なら、バリアは張れないな！！～（後書き）

（ｏｗＯ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

なのは「待って・・・フェイト・・・ちゃん」

フェイト（今でも・・・来てくれるかな・・・）

ブレイド「俺を・・・呼んだか？」

ギャレン「サヨゴォォォォォォッ！！」

次回『終わるアラート』

―運命の切り札をつかみ取れ！！―

（作者）次回はフェイトが目立つ、剣崎と一緒に目立つ。

（；ＯＭＯ）とにかく次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十三話～終わるアラート～（前書き）

いきなりですがここでアンケート～♪

内容はズバリ、『リリカルブレイドの続編』について！！

・『やって欲しい』または『別にいらない』の二択。
・『今はまだ早い』は無しです！だってスタートはこれが終わってからになりますし。

順当に行ったら、多分題名は『リリカルブレイドＶｉＶｉｄ』になります。舞台も四年後、ＶｉＶｉｄの時代ですね！

ペースは物凄く遅くなります！まだ原作が終わっていない作品ですから。

その点は『新作』のほうでカバーします。こちらはこのまま行けばメガレンジャーですよ。

ホントにいきなりですが、ご協力よろしくお願いします！

さ～て、この三十三話でついにファーストアラート編終了です。

もう六話終わったのか・・・早かったなぁ。
今回はフェイトがマジヒロイン？ｗ
ヒロインの座はまだ決まってないんですけどねｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十三話～終わるアラート～

「ウァァァ！！」

「フェイトちゃん！！」

至近距離からの攻撃を受け続けたフェイトが、ゆっくりと落ちていく。

なのはが助けに行く前に、彼女の体をガジェットが捕えた。

そのまま飛び去っていくガジェットをなのはが追おうとするが、再び放たれた羽によって、彼女も傷ついていく。

「くっ！数が多過ぎる！」

ギャレンもまた、多数の敵に囲まれ傷ついていた。

波のように次々と加えられる攻撃が、彼にカードを引かせる時間を

与えない。
ティアナ達も、多過ぎるガジェットから身を守るのに精一杯で、ギャレンのサポートに回れない。

なのはとフェイト、ギャレンとフォワード、どちらも一刻を争う状況だ。

「待って・・・フェイト・・・ちゃん」
攻撃を受けながらも必死に追いかけたなのはにも、ついに限界が・・・。

（目が霞んで・・・前が見え・・・ない）

既に前を見ることもままならない。

ここで止まる訳にはいかない、だが体が言うことをきかない。

―親友がピンチなのに何もできない―

悔しさに拳を握りしめるが、最早その拳にも力が入らない。

「だ・・・れか・・・助・・・けて」

やっと絞り出した言葉、それを言うと同時に、なのはは落ちていく。

だが遂に、

―翼が舞い降りた―

―パスッ―

（なんだろう・・・すごい明るい）

閉じた瞼を通して伝わる光。

（この抱っこの仕方・・・ああ、来てくれたんだ）

そしてなのはは目を開き、『その人物』の名前を言った。

「遅いよ・・・一真君」

「ごめん・・・」

なのはを抱き抱えながら謝るブレイド。

「すぐにヘリまで連れていく」

「私よりも・・・フェイトちゃんを・・・」

なのはの言葉を無視して、ブレイドはヘリまで飛んだ。

「ヴァイス！なのはを収容してくれ！！」

『任せろ！お前は早く行け！！』

ハッチからヘリの中に入り、ゆっくりなのはを寝かせると、ブレイドは再び飛び立った。

（あれ・・・私は・・・何をしてるんだろう）

はっきりしない意識の中でフェイトは思った。

そして気付く。

（そっか、私は落とされたんだ・・・）

―そして自分は敵に捕まった―

そこまでたどり着いた瞬間、フェイトを恐怖が襲った。

自分はいったいどうなってしまうのか、行き先はジェイル・スカリエッティのアジトに違いない。

そこで何をされる？想像ができない。だが逆にそれが恐怖を駆り立てる。

そしてもう・・・

（皆に・・・会えないのかな・・・）

次々に思い浮かぶ、今まで会ってきた全ての人の顔。
（なのは、はやて・・・）
そして最後に、だがはっきりと思い浮かんだのは・・・

（一真さん・・・）

自分が想いを寄せる人物の顔。

（まだ・・・何も言えてないよ・・・）
閉じた目から流れる涙。そして思い出す約束。

―お前がピンチになったら・・・俺の名前を呼んでくれ―

―その時は・・・俺が絶対に助けに行く!!―

―約束だ!!―

（今でも・・・来てくれるかな・・・）

望みが無いのはわかっている。

だが自分が縋れるのは・・・これしかない。

フェイトはゆっくりと口を開き、その名前を呼んだ。

―一番会いたい彼の名を―

「か・・・ずま・・・さん・・・一真・・・さん」

「・・・一真さん!!」

次の瞬間にフェイトが知覚したのは、

―ちょっとの衝撃と―

―浮遊感と―

―自分から少し離れたところで起きた爆発と―

―『誰かに抱き抱えられた感覚』―

「呼んだか?」

声が聞こえる。自分が最も聞きたかった声が。

フェイトは目を開く。相手の顔は影になって見えない。だが間違いなかった。

「俺を・・・呼んだか?」

もう一度かけられた問いに、フェイトは涙を流しながら答えた。

「うん・・・うん!・・・呼んだよ・・・」

「一真さん!!」

彼の名前を呼んで抱きついた。

ブレイド・・・いや剣崎も、そんな彼女をしっかりと抱きしめた。

「大丈夫・・・じゃないよな」

「・・・ううん！もう大丈夫だから」

フェイトはあくまで『大丈夫』と言うが、彼女の体は震えていて、涙は止まることをしらない。

そんなフェイトを見て剣崎は仮面の下で顔を顰めた。

自分がもっと早く来ていれば、こんなことにはならなかったはずだ。

「ごめん・・・ごめん・・・」

いつの間にか口にしていた謝罪の言葉。

フェイトはそんな彼を見て言った。

「約束を守ってくれた一真さんが謝る事なんて・・・ないよ？」

「・・・サンキュー！」

精一杯の明るい声でブレイドは答え、もう一度彼女をしっかり抱きしめた。

だが次の瞬間には彼の纏う空気が変わっていた。

「どうしたの・・・！！」

フェイトも、ブレイドの赤い目が見据えるモノを見て体を固くする。

そこにいたのはピーコックガジェット。

橘たちのところと同様に、こちらにも複数送り込まれていたのだ。

「フェイト・・・しっかり掴まってろよ・・・」

「・・・うん！」

ブレイドの言葉に、フェイトは腕の力を強くした。

それを確認したブレイドは、左手だけでフェイトを抱えると、右手でブレイラウザーを引き抜いた。

すると、ラウザーのトレイが自動で開き、ブレイドが思い描いたカードを二枚射出する。

射出されたカードはひとりでにラウズされた。

『Ｓｌａｓｈ』

『Ｓｈｕｎｄｅｒ』

『Ｌｉｈｇｔｎｉｎｇ　Ｓｌａｓｈ』

ブレイラウザーが雷を纏い、切れ味を増した刃が輝く。

金色のオリハルコンウイングが更に光の強さを増すと同時に、ブレイドの姿が消えた。

―シュンッ―

そして再び現れたのはガジェット達のすぐ後ろ。

ブレイドが振り返ることなくラウザーを納めると、次の瞬間ガジェットは全て真っ二つになり、爆発した。

そしてブレイドはフェイトを両手で抱え直し、その場から飛び去った。

―移動中の二人―

ヘリまでフェイトを送り届け、更に橘達の援護に向かう為に、ブレイドはかなりのスピードを出していた。
だが傷ついて弱っているフェイトが、これに耐えられるのか不安になったブレイドが声をかけたが、

「フェイト、体は大丈夫なの・・・・・!?」

彼は突然喋ることを止めた。

「どうしたの?・・・・!!」

何があったのか気になったフェイトが訊ねた・・・そして気付いた。

―自分のバリアジャケットの状態に―

気を失う程の攻撃を受けたフェイトのバリアジャケットは・・・か～な～りボロボロだった。

言ってしまえば・・・際ど過ぎるぐらいだ。

「バ、バルディッシュ!修復を・・・」

『Ｓｏｒｒｙ．Ｔｈａｔ　ｗｉｌｌ　ｔａｋｅ　ａ　ｌｏｔ　ｏｆ

time to do.』

どうやら時間がかかるらしい。
バルディッシュもかなり損傷していたので、フェイトは渋々ながら納得していたが、実際はそれぐらいの事はすぐにできた。

なら何故か？バルディッシュが気を利かせてくれた・・・と考えるのが妥当だろう。
フェイトからすれば早く修復することに越したことはないのだが・・・。

こうなると、剣崎は迂闊に下を見ることは出来ず、だがしっかり抱えないといけないという物凄く困った状況になる。

「「／／／・・・・」」

―無言のまま飛び続ける―

ヘリまであと少しとなったところでブレイドが通信でヴァイスに呼び掛けた。

ヘリのハッチが開ききると、フェイトのバリアジャケットが一瞬で修復された。
ここに来ての修復にフェイトが怪訝な顔をするが、

「フェイトちゃ～ん！一真く～ん！」

ヘリからこちらを呼ぶなのはを見ると表情を明るくする。
ブレイドは逆に、あまりにも元気ななのはの姿に首を傾げる。
だが彼のソレは、ヘリの中に入った瞬間驚愕に変わった。
そこにいたのはなのはだけではなかった。
「は、始!?」
仮面ライダーカリス・相川始がいたのだ。
だがこれでなのはが元気な理由がわかった。
カリスが持つハートの13枚の中には、回復を司るカードがある。
剣崎が知る限りでは使用者を回復させるはずのものだが、実際に始がこのカードを使ったことはない。
多分使用者の意志で回復対象を選んで使うことが出来たのだろう。
「始・・・」
「剣崎、お前は橘のところへ行け。まだ俺達は・・・一緒にはいられない」
始(カリス)の言葉に顔を俯ける剣崎(ブレイド)だが、彼は顔をすぐに上げて言った。
「ああ・・・でも覚えておいてくれ、俺は今でも・・・運命と戦ってる」
頷き合う二人。

そしてブレイドは飛び去った。

「まだいるのか・・・クッ！」

相手は残り6機。だが疲弊仕切ったギャレンには十分すぎるほどだ。

それにフォワードのこともあり、下手にジャックフォームになろうものなら、空を飛んでいる間に彼女らが攻撃を受けてしまうかもしれない。

（この状況を乗り切るにはやはり『アレ』しかないか・・・）

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｑｕｅｅｎ』

ギャレンが自身の『切り札』を掴もうとした時、目の前にいた2機が爆発した。

「橘さん！！」

「剣崎！！」

ブレイドが到着したことによって、ギャレンは切り札ではなく、もう一枚を取り出してラウズした。

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

ギャレンの仮面と鎧も金に変わり、皮肉にも孔雀を模した羽がついた。

そう、ダイアのＪはピーコックアンデッド、彼は宿敵でもあるアンデッドの力を使ってジャックフォームになるのだ。そのためだろうか、勝率は・・・アレだ・・・低い。

「行くぞ剣崎！！」
「はい！！」

二人は同時にトレイを開き、ブレイドは二枚、ギャレンは『あの三枚』を取り出した。

『Ｄｒｏｐ』
『Ｓｌａｓｈ』
『Ｆｉｒｅ』
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』
『Ｇｅｍｉｎｉ』
『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｌａｓｈ』
『Ｂｕｒｎｉｎｇ　Ｄｉｖｉｄｅ』

「ハァァァァッ！！」

まずはブレイドが『ライトニングスラッシュ』で４機のうちの２機

を撃破する。

―そして橘は・・・―

「サヨゴォォォォォッ!!」

言った、ついに言った。

分身し、空から炎を纏った爪先蹴りで残った2機を破壊する。

おかしいぐらいに気合いが入っていたが、しょうがないことだ。

「や、やりましたね橘さん!!」

ブレイドが少々視線を外しながら降りてきた。

「ああ・・・どうやらまだ俺は、過去を捨てきれないようだ・・・」

「で、でも!捨てるべきじゃ・・・ないと思います」

「そうか・・・そうだな」

ブレイドとギャレンがそんなことを話しているのを見て、スバルとティアナは思った。

(橘さん・・・結婚できなさそう)

エリオとキャロ、そしてリインはそんなギャレンの一途さ?に感激していたが・・・。

橘と結婚するような人はいろいろ苦労しそうだ。

まあ、食事に関しては問題ないだろう。

『みんな！無事か！？』

通信機からはやての声が響いた。どうやら通信妨害はなくなったようだ。

「あぁ・・・その・・・」

正直大丈夫とは言い難い戦闘だったので言い淀むブレイド。

『私達も大丈夫だよ』

だがフェイトが通信に入ってきた。その声の明るさに胸を撫で下ろす。

「始は？」

『フェイトちゃんの傷を治したら、すぐに飛んでいっちゃったよ？』

なのはの言葉に『そうか』とだけ返し、ブレイドは翼を広げた。

「先に帰ってるからな」

誰の反応も確かめずに彼は飛び立った。

六課メンバーが首を傾げるなか、ギャレンだけはブレイドの後ろ姿をしっかり見つめていた。

―隊舎前―

降り立ったブレイドは変身を解き・・・膝をついた。

（内臓が潰れたか・・・）

進化したジャックフォームのスピードは物凄い。だが同時にそれは剣崎の体にも強い負担がかかる。

「ゴフッ・・・・・！？」

口から血を吐く剣崎、だが血を見た瞬間に彼は驚愕した。

「そんな・・・馬鹿な・・・」

その言葉を最後に、剣崎は意識を手放した。

―ジェイル・スカリエッティのアジト―

モニターには今回の戦闘、特にジャックフォームになった三人の姿が映っていた。

「素晴らしい！！やはり仮面ライダーはどこまでも興味深い存在だ！！」

またもどこぞの会長のような大声で、魔少年のような好奇心に駆られる大犯罪者（笑）。

『ドクター、まさかそれで研究が遅れているのでは・・・』

この頃の遅れはそういう事かと理解した長女(ウーノ)。

「そ、そんなことはない！いや・・・仮面ライダー・・・」

否定はしているが、全く意味をなしていないソレがウーノの悩みを増やす。

ただでさえ研究が遅れているのに、これ以上遅れていては『評議会』が何と言ってくるか分からない。

そこでウーノがとった行動は・・・

―ピッ―

「な、何をするんだ！仮面ライダーが！新しい姿がぁぁぁぁ！！！」

今回の戦闘のデータと今までのライダーに関するデータをすべて消すことだった。

『問題ありません、すでにコピーしてあります』

そう言って一つのデータファイルを画面上に表示させるウーノ。

まだ完全に消されてなかったことに喜ぶジェイルだが、こちらがいくら操作してもそのファイルを開くことができない。

「おや？ウーノ、ファイルが開かないんだが・・・」

『開く必要はありません。ドクターが研究を終わらせるまでは絶対に見せませんので』

「なんと！？」

『頑張ってください。ちなみに、遅い場合は消去しますから』

「や、やめてくれ！わかった、頑張って研究するから！！」

自分の娘（ちょっと違うか）に土下座して頼み込む父親。
ウーノはそれを見て思いっきり楽しんでいるようだ。

『それでは、ご研究の終了をお待ちしております』
最後はワザとらしいほど丁寧に言って、ウーノは通信を切った。

ジェイルはすぐに自分の研究に取りかかるため、モニターに『異形』を映し出した。

―白い体に金の四本角の異形―

―獅子の顔をした異形―

―青く刺々しい体で羽の生えた異形―

―灰色のバッタのような異形―

その他にも、『あまりにも大きすぎる何か』や『蝙蝠のような人型』などの異形の姿が映し出される。

「それに『聖王』や・・・『剣帝』についても・・・」
そう言って彼がモニターに出した二枚の画像。
そこに映っていたのは、『オッドアイの女性』と『いつの時代かもわからない古い戦場に立つ、金色の鎧と剣を持った剣士』だった。

「待っていたまえ、私の仮面ライダー映像集・・・ハッハッハッハッハッ！」

アジトに彼の笑い声が響き渡った

第三十三話～終わるアラート～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「か、仮面ライダー・・・料理対決？」

士「ふっ・・・この俺に抜かりはない！！あれを見ろ！！」

未来「麻婆豆腐です！！」

ギャレンｘ２「「その味噌の正体は・・・」」

次回『仮面ライダー料理対決ｉｎ六課』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回は閑話兼本編！その次は正真正銘の閑話！

（；ｏｗｏ）今回は、思いっきりフェイトを抱きしめちゃったけど・・・。

（作者）いいと思うよ？読者の方の何人かにサービスできたと思うし。

（；ＯＭＯ）俺の『？フォーム』はどうした？

（；作者）今出すのはアレだよ・・・。ちなみに今回のジェイルの発言と画像ですが、続編が決定したらそのまま使います。どういう事なのかは、ＶｉＶｉｄを読むと分かりますよ！

（；ＯＭＯ）とにかく次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十四話～仮面ライダー料理対決ｉｎ六課～（前書き）

危ない危ない・・・ハリーポッター（謎のプリンス）見てたら投稿時間を逃すところだった。
七巻はいつ見に行こうかな?何度も読み返して内容も覚えてしまった・・・。

※感想でハリーポッターについて言うのは禁止ですよ。知り合いと四人で見に行く予定立てて楽しみにしてるんですから。書いたら問答無用で消しますからね。伏せても駄目ですよ。

今回は完全な閑話ではないので、ちゃんと話数をカウントしますよ。次回は・・・どうしようかな?季節イベントじゃないからカウントかもしれないです。

ところで例の続編についてですが、これ多分決定ですｗ
四年後の話が待ち遠しい方もいらっしゃるとは思いますが、この『ＳｔｒｉｋｅｒＳ編』が終わるまで待っててくださいね。

とにかくこれで前回のちょっとした伏線もしっかり使える・・・よかった。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十四話～仮面ライダー料理対決ｉｎ六課～

「どうしてこうなったのか・・・一真さんもわからんのやな？」

「はい・・・それでシャマル、検査の結果は？」

「体はほとんど以前と変わらないわ・・・でも血の色は『赤い』のよ」

「一真さん・・・」

「とにかく寝よう？まずは休むことが大事だよ」

「うん・・・おやすみ」

―ＡＭ１１：００―

「寝すぎたな・・・」

カテゴリーＪとの戦闘、及びその後の戦闘の翌日。

剣崎一真はまたもや医務室で目覚めた。

描写のある戦闘の後には必ず医務室にいる男・・・それが彼である。

時計をみれば１１時、だが一向に剣崎は動こうとしない。

その眼は一点に向けられている。

繋がれた管から体の中に流される『赤い血液』

今の彼が一番考えているのはこのことだ。

昨日はやて達がベットの横で話していたことを聞く限り、『自分はジョーカーだが体に流れる血液は赤い』・・・らしい。

多分、普通の人間と同じ血なのだろう。

だがどうしてこうなった？

何が原因で・・・

「ジャックフォームか・・・？」

思い当たるものとすればそれだ。

だが考えてみれば、『ホテル・アグスタ』で自分が気を失ったときの変な感覚、あれも何か関わっているのではないだろうか。

アグスタでの事件の後、自分で『ブレイバックルのせいか？』という疑問を除外したが、どうやら間違いでもないようだ。

「橘さん・・・烏丸所長・・・」

このようなことができるのはあの二人しかいない。

そして最終的には、

「俺を人間に戻すために？」

嬉しいはずなのに、なぜだか全く嬉しさが込み上げてこない。

それどころか、失敗するような気がしてならない。

二人の事だ、剣崎が普通にこのままブレイドとして戦い続けたら、きっと彼は人間に戻ることができるだろう。

しかし剣崎には二人の思いを全て無駄にしてしまうかもしれない『姿』があった。

―ブレイド・キングフォーム―

今の剣崎なら、融合係数は更に上がっているだろう。

仮に人間に戻れたとしても一瞬で再びジョーカーとなってしまう。

「先の事考えても仕方ないか・・・」

管を引き抜き、剣崎は着替えて食堂に向かった。

だがおかしい。

いつもなら絶対に誰かに会う廊下で誰にも会わなかった。

それどころか、物音ひとつ聞こえてこない。

剣崎は次第に早歩きになり、それが走りに変わる。

そして食堂へとたどり着いた彼が見たものは・・・

―謎のセット―

アイテムなどを一纏めにしたものではない。テレビの収録で使う方のセットだ。

「なんだコレ・・・？」

恐る恐る近づく剣崎。
そして彼の指がセットに触れた瞬間、

―パンパカパ～ン―

あからさまに古いメロディーが流れる。

「遅いぞ一真！俺をどんだけ待たせるつもりだ！！」
「士さん・・・何故ここに！？」
どこからか突然現れた士に驚く剣崎。

「何故だと？・・・それはな、こういうことだ！！」

そう言って士が指をさしたのは、

「か、仮面ライダー・・・料理対決？」

なんともダメな予感しかしないタイトルの書かれた厳かな木の板。

「剣崎くんには俺達と対決してもらうからね」
「つ、津上さんまで！？」

またもや驚く剣崎。だが『仮面ライダー料理対決』の場に彼がいるということは・・・。

「そう、俺は仮面ライダーア「こいつも俺達と同じだ」・・・ヒドイっ!!」

自己紹介（何か違うが）をしようとした翔一の言葉を士が遮った。
その後天道まで登場し、剣崎は身近にライダーが多く居たことに衝撃を受けた。
「僕も・・・連れて来られたんだけど・・・」

「未来まで!?」

そこにはいかにも司会者が着るような格好をした未来の姿。

「あいつには司会者兼審査員をやってもらう」

士が補足を入れる。全て彼が企てたようだ。
だが士、翔一、天道、そして剣崎が対決するのなら、審査員が未来だけなのはどうにも・・・。

「ふっ・・・この俺に抜かりはない!!あれを見ろ!!」

自信満々に剣崎の後ろを指差した士。剣崎は後ろを見て・・・ズッコケた。
そこにいたのは、

「コレクッテモイイカナ?」
「橘さん、まだ何も出てきてませんよ・・・」

「・・・」

「なんで三人ともここにいるんだよ！！」

こんなところでブレイドライダーズが揃ってしまった。

『まあ気にすんな』と士は言うが、剣崎は嫌な予感しかしなくなった。

全員知り合いだが、確実にチョイスミスだ。

まともなのは未来と・・・睦月ぐらいで、ほかの参加者と審査員はどうかしてる。

そして剣崎は士、翔一、天道の三人に勝てる気がしない。

「六課（ここ）の奴らにはちょっと外出してもらったからな、さっさと始めるぞ！」

一体何をしたのか気になるところだが、士に説明を求めるだけ無駄だろう。

「そ、それじゃあ始めましょうか・・・」

おずおずと申し出た未来の言葉で、『第１９３回・仮面ライダー料理対決ｉｎ機動六課』がスタートした。

「第一勝負は・・・デザート対決です！」

「いやなんで最初にデザートなんだよ！？」

「ルールは・・・」

剣崎のツッコミをスルーして未来はルールを説明する。

いじけている剣崎をよそに、三人は作業を始めた。

その結果は・・・

審査員は『橘・始・睦月・未来』の順番

『津上翔一　１０・１０・６・６』

デザートに野菜を用いたものを作り、橘はともかく、始に『これなら天音ちゃんも嫌いな野菜を食べてくれる』と１０点。

しかし睦月と未来は『おいしいけど・・・野菜・・・』というイメージが評価を下げた。

『天道総司　１０・７・７・８』

翔一と同得点。

なかなかのものを作り上げたのだが、始と睦月には『普通よりちょっと上ぐらい』と言われる。喫茶店に住んでいる始と、彼女持ちの睦月には通用しなかった（愛の力？）。

『門矢士　１０・８・８・１０』

二人を超えるポイントを獲得。さすがレストランのオールラウンダー兼ランクの高いデザート担当者。その実力は伊達ではなかった。

本人は『当然だろ』と胸を張っていた。

そして

『剣崎一真　１０・９・９・１０』

まさかの全員越え。士が『身内贔屓かよ！！』と流石に文句をつけたが、実際に食べると『確かに・・・』と引き下がった。流石この機動六課で働いているだけあって、様々なものを作れるようになっているようだ。翔一は自分の事のように剣崎の成長を喜んでいた。

「正直予想外な一真の勝利でしたが、気を取り直して最終勝負です

！」
「うぇ！？たった二戦で終わりなのか！？って予想外って言うな！！」

「最終勝負は・・・」
またもや剣崎をスルーした未来。
そして彼の口から発せられた言葉が、『ある人物』以外の参加者をどん底に突き落とす。

「麻婆豆腐です！！」

「「「そんな！？」」」
目を見開いて叫んだのは剣崎・翔一・士の三人。
この勝負、負ける気しかしない・・・。
ここで士が未来に言った。
『確か天道の得意料理は外したはずだ！！』
そう、士は企画するにあたって、一番手ごわいであろう天道の得意料理系は外したはずだ。
なのに何故麻婆豆腐が入っているのか。
士が天道のほうを見ると、彼の周りを飛び交う赤いカブトムシがいる。

「天道てめぇ変身しやがったな！！」
「フッ・・・なんのことだ？」

もう謎は解けた。
天道は未来が次の勝負の内容が書かれた紙を、変身してクロックアップで取り替えたのだ。
これは以前彼が元の世界にいたライダー『仮面ライダーガタック

加賀美新』とのババ抜き勝負でやったことと同じ。
そして証拠を飛び回らせながらしらを切る天道・・・なんという奴だ！！

しかし今更変えようにも、元の紙は天道が既に処分していたため、結局麻婆豆腐で勝負を始めることになった。

動きが鈍い翔一・士に対して、天道はカブトゼクターにも手伝わせてテンポよく進めていく。

「そ、それ（カブトゼクター）はあり！？」
「愚問だな、俺とこいつは一心同体だ。ルールにこいつを規制するものはないしな」

翔一が未来に質問すると、天道自身がそれに答えた。
天道の言った通り、『アイテムの使用禁止』等のルールは設定されていない。

だが彼以外にああいったものを所持している者はいない。

このまま天道が勝利するのだろうか

だが剣崎には『秘策』があった。
この不利な状況を打開できるかもしれない博打レベルの『秘策』が・・・。

「それでは・・・審査に移ります」

『津上翔一　１０・９・９・９』
なんとここで翔一が高得点を叩きだした。

実は翔一にも秘策はあった。
自分が育てた野菜たち・・・それを使うことによって、食材という点で一歩リードすることに成功する。
それに彼自身のレベルも高く、店長の名に恥じない麻婆豆腐だった。

『門矢士　１０・６・６・６』
すでに諦めムードだった彼が作った麻婆豆腐は、実は彼を慕っていた未来でさえも『う、う～ん・・・』となってしまった。

『天道総司　１０・１０・１０・１０』
遂に満点を叩きだした。
彼は翔一のように、自分が選んだ豆腐を持参していた。最初から入れ替えることを想定していたようだ。

そして自他ともに認める一流の料理人である彼の麻婆豆腐は一線を画していた。

勝利を確信し、腕を組み目を閉じる天道。
だが彼の余裕の表情は次の瞬間驚愕に変わった。

『剣崎一真　１０・１０・７・７・８』

「なんだと！？」
読み上げられた点数に目を見開き、審査員席を見る天道。その目に映っていたのは、分身したギャレンが１０点と書かれた札を二枚上げている光景。

どんなリアクションをすればいいのかわからない参加者の三人。
だが剣崎だけは得意げな顔をしていた。

どんな手を使ったのだと詰め寄る天道に、剣崎は小皿に乗った『何か』を見せた。

「それは・・・味噌か？」

「そうです、でもこれはただの味噌じゃない・・・」

剣崎の言葉を聞いた瞬間、始と睦月も納得した顔になる。

「「その通りだ！」」

分身しっぱなしのギャレンが声を揃えて言った。

「「その味噌の正体は・・・」」

すると突然曲が流れだした・・・そう、『あの曲』が。

『「「辛味噌！！」」』

流れた音楽を含めて計三人の橘の声が重なった。

剣崎の『秘策』、それは・・・『隠し味に辛味噌を使い、橘に１０点以上出させる』ことだった。辛味噌は実際に隠し味としてもほどほどの効果を発揮していて、他の審査員の評価もほどほど。

橘がジェミニを使うとは限らないし、もし他の三人が気に入らずに点数がずば抜けて低かった場合は勝てなかった。

だが秘策は実を結び、こうして剣崎は圧倒的大差で勝利することができた。

さらに終わってみれば剣崎が二勝しており、彼の優勝も決定した。

「すごいね剣崎くん！俺たち全員を超えたんじゃない！？」
「そんなことはないですよ、皆さんは今でも俺の目標なんですから！」
「一真のくせに生意気な事言いやがって！！」
「だが今回は完全に俺たちの負けだったな」

「一真！あの人たちに勝つなんて凄いよ！！」
「サンキュー・・・って橘さんたちは？」
「『美味かった（おいしかったです）』って言ってすぐに帰っちゃったよ？」

「そっか・・・俺橘さんに聞かなくちゃいけないことがあったのに」
ブレイバックルやジャックフォーム云々の話をしようと思っていたのに、勝負に夢中になるあまり忘れてしまっていた。

「じゃあな一真、片付け頼んだぜ」
「ごめんね！店を五代さんに任せて来ちゃったから帰らないと！」
「頼んだぞ・・・」

そう言って三人は去っていった・・・というか逃げた。

「うぇ！？ちょっと・・・」
「あ、ごめんね一真！こっちももう帰らないと！」

未来もオーロラをくぐって去っていった・・・いや逃げた。

「そんな・・・ウソダドンドコドン・・・」
剣崎の目の前には、それぞれが使った料理器具・皿・そして極めつけはセットがあり、剣崎は膝をついてうなだれた。

こうして『第１９３回仮面ライダー料理対決』は幕を閉じた

第三十四話～仮面ライダー料理対決ｉｎ六課～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

シャマル「そう、私とリインちゃんと一真さんで、遊園地に行きましょ♪」

剣崎「もうダメだ・・・三回目なんて・・・」

翔太郎「で、奥さんに娘さんと一緒に遊園地に来たら、娘さんのテンションに置いてかれて、さらには完全に置いてかれたって訳か」

フィリップ「しょうがないね、始めよう・・・」

次回『遊園地でも迷子は迷子』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）俺の三日後がすでに決定済み・・・。

（作者）いや、ストックがあるからいつも君たちの三日後は決定してるんだけどねｗ

（ｄｌｉｌｂ）今回は久しぶりに俺たちの登場だったな

（作者）ホント今後は空気だもん・・・数人を除いて。

（；ｏＭｏ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十五話～遊園地でも迷子は迷子～（前書き）

落ち目だ・・・落ち目小説なんだ・・・。
何故かというと、お気に入りが三日で三件も無くなってしまったから！！
２００まであと少しだというのに・・・クゥッ！！

とにかく、今回は閑話第二弾。
剣崎が遊園地に行って迷子になるお話。
何故かティアナがお休み貰って参戦してますが、そこは『閑話だから』ということで。

ここで少し報告がありまして、
も～しかしたら更新スピードが遅くなるかも・・・ということです。
三日が四日になったりするかもしれません。
すいません・・・この頃何故か難産で・・・。

それでは、気を取り直して
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十五話～遊園地でも迷子は迷子～

「遊園地？」
皿を洗っていた剣崎が顔を上げた。

「そう、私とリインちゃんと一真さんで、遊園地に行きましょ♪」
シャマルが両手を合わせながら満面の笑みで誘う。隣にはリインが、これまた同じ状態でこっちを見てる。

「『行きましょ♪』って・・・」
（遊園地なら『あんな事』も起きないだろうけど・・・）
剣崎一真は何時ぞやのプールでの出来事を思い出す。

遊園地ならあんなことは起きない！！
それに二人も行きたがってるし、休みなのは多分三人だけなのだろう。

それに本音を言えば、少し行ってみたい。

遊びからかけ離れた剣崎の生活と性格は、こっちに来てからかなり

普通のレベルに近いぐらいに改善されたのだ。

「よし、行くか！」

「やった～♪」

「です～♪」

喜ぶ二人と、『やれやれ』と首を振る剣崎。

だが三人は気付いていなかった。

『フフフフ・・・』

物陰に隠れて様子を窺っていた『人物達』がいたことを・・・

「いや・・・遊園地もあるのか・・・」

『行く』と言ったくせに剣崎のこの発言・・・最早定番である。

「この前オープンしたばかりだそうよ」

「楽しみです～♪」

三人がゲートに向かって歩き出す。ちなみにリインは、例によって

例のごとくチビッ子サイズである。

そしてその少し後ろから、数人がついてきていた。

「まずはどうするんだ？」
「え～っと・・・あれはどうかしら？」
「それがいいです～♪」

シャマルが指差したのは、大きくそびえたつ塔。
ゆっくり上がっていって、一番上から一気に落ちるアレである。

「よし！」

剣崎も了承して歩き出す。

そんな三人をやはり物陰から見ていた例の数人・・・というか五人。

（なのは・・・まさかあれについていくの？）
（怖がっちゃダメだよフェイトちゃん！）
（そうや！遊園地はな、いつでも男女の仲が深まるチャンスで溢れとるんやで？）
（主はやての言うとおり、高いところというのは何が起きるかわからん）
（あ！皆さん、三人が行っちゃいますよ！）

「緊張するわね～」
「は、はいです・・・」
「リイン、心配すんなって。大丈夫だからさ！」

並んで座り、固定された三人。
リインは少々怖がっていた。

このアトラクション、塔の形状が直方体で一面に五人座れるようになっている。
そう、反対側には彼女たちがいるのだ。

「なのは・・・やっぱりやめようよ・・・」
「今更む～り～」
「諦めや・・・ってシグナムもかいな！」
「わ、忘れていました・・・」
「でもこれじゃあ向こうの様子がわからない・・・」

「「「「「う～ん・・・」」」」」

「？なんか聞こえたような・・・」
「私はなにも？」
「多分空耳です～」

（なんか引っかかるんだよな・・・）

そうこうしている間に、八人と他のお客が乗る座席が徐々に上に動き出す。

リインは慣れてきたようだが、反対側の二人はそうはいかない。

フェイトはなのはの、シグナムははやての腕をしっかり掴んでいた。
だが二人は内心思っていた。

（（隣が一真？（さん）ならもう少し・・・））

それは当然五人全員の総意であるのだが。

「は～！結構楽しかったな！」
「そうね♪」
「リ、リインはもう無理ですぅ・・・」

少々足元が覚束ないリイン。
剣崎はそれを見て、次のアトラクションをどうするか迷う。

こういうところに来ることは、彼の人生においてほとんど無かったことだ。
あまり多くない知識で、今のリインが大丈夫そうなものは・・・。

「メリーゴーランドだな！」

（次はメリーゴーランドっと・・・フェイトちゃん、今度は大丈夫だよ）
（うん・・・）

「楽しいです～♪」
「流石一真さん、リインちゃんのこと考えて選んでくれたのね」
「やっぱりこうところに来たらさ、子供は目一杯楽しまないとな」

一人はしゃぐリインを見ながら話すシャマルと剣崎。
もちろん二人も乗っているし、剣崎は気付いてないようだが、実はシャマルがしっかりと腕を組んでいる。

「リインは子供じゃないですよ～！」
聞えていたようで、リインが後ろの二人のほうを向いて、少し頬を膨らませて言った。
その言葉に『子供だろ～』と返しながら笑う剣崎と、同じように笑うシャマル。
少々家族感が出て来た三人。

こんな光景を見ていた『五人』が拳を握りしめているのとも知らずに・・・だが。

「「「「「・・・仲がよろしくて大変結構」」」」」

「!?」
「どうしたの一真さん?」
「な、なんでもない・・・」

（今の気配は・・・まさかな。休みは俺達だけのはずだし）

「二人とも、早くしないと置いてくですよ～？」

その後は調子を戻し、さらに上乗せされたリインが先頭に立って、いろんなアトラクションを回っていった。
最初こそ三人が一緒に行動していた。

しかし、あまりにテンションを上げ過ぎたリインのせいで・・・。

「もうダメだ・・・三回目かよ・・・」
剣崎は『また』迷子になってしまったのである。

「あ、一真君がどこかいっちゃった！」
「なんやて！？」
一方、三人を見張っていた五人も、ようやく剣崎がいないことに気が付いた。
まあ今までのパターン上、剣崎がどうなったかと言ったら・・・。

「迷子・・・だね」
「もう三回目じゃない・・・」
ティアナがため息をついた。
だがここで、唯一元気になった女が一人。

「迷子の一真なら私が！」

そう、迷子の剣崎を見つけ出す者といえばシグナムである。
彼女の申し出に全員が頷く。
迷子の剣崎を迷子の状態のまま見つけ出すことによって、剣崎をシャマルとリインから引き離し、自分たちの思うがままに・・・。
・・・？思うがまま？

「いえ、私が最初に見つけます！」
突然立候補したティアナ。
他の四人も、ティアナの意図するものに気付いたようだ。
結局五人全員がバラバラになって、園内のどこかにいる剣崎を見つけ出すことに。

そして最初に見つけ出した者は、

「一真さんとデートや！」

という事になってしまった。
本人の知らぬ間に・・・である。

「うぇぇ・・・どうすれば・・・」
一人とぼとぼと歩く剣崎。

最後にシャマルとリインと来たアトラクションに戻ってくるが、もちろんそこにいるはずもない。

絶望感に包まれる剣崎、そんな彼に救いの声が掛けられた。

「そこのお兄さん、迷子かい？」

突然剣崎に掛けられた声の主は・・・帽子をかぶって係員の制服を着た青年であった。

「だ、ダリナンダアンタイッタイ・・・」

「俺は・・・いや『俺達』は、二人で一人の係員さ」

「一人しかいないよな・・・」

「で、奥さんに娘さんと一緒に遊園地に来たら、娘さんのテンションに置いてかれて、さらには完全に置いてかれたって訳か」

「なんか最初のほうが間違ってるけど、大体あってるな」

遊園地内の建物、通称『迷子センター』のなかで二人は話していた。

「名前は剣崎一真・・・でいいよな？ちょっと素性を調べさせてもらうぜ」

「え？ああ・・・」

（できるのか？俺の素性なんて・・・）

「フィリップ！頼んだぜ！」

係員、ネームプレートには『左　翔太郎』と書かれていた青年は後ろを向いて、別の部屋にいた青年に声をかけた。
『フィリップ』という名前なので、外国・・・というかミッドの人間かと思った剣崎だが、部屋からでてきたのは、少々不思議な雰囲気を放つパーカーの青年・・・日本人だ。

「しょうがないね、始めよう・・・」

フィリップと呼ばれた青年が目を閉じると同時に、部屋がなにやら妙な雰囲気になる。

「なあ、何やってんだあいつ」
「アレがもう一人なんだけど、まあ見てなって。フィリップ！キーワードは、『剣崎一真』『滑舌』あとは・・・『ウェイ』」

「うぇ！？」

「これはスゴイ・・・見事に絞り込めたよ。主に最後の『ウェイ』で」
フィリップが目を開き、持っていた本のページをパラパラと捲り始める。

最初こそ普通の表情だったフィリップだが、本のあるページから表情が一変した。
それが気になった翔太郎が尋ねると、フィリップは本から視線を外して翔太郎に告げた。

「翔太郎、彼が・・・『ブレイド』だ」
「へ～・・・ってマジか！？」
「なんでわかったんだ！？」

これまでのクールな姿勢から一変した翔太郎と、見事に言い当てられた剣崎がフィリップに詰め寄る。

そこで剣崎は二人から、『フィリップの能力』について説明された。どうにも信用できない剣崎だったが、その後も色々な事を（前の世界のことまで）当てられたので、信じざるを得なくなった。

「この世界に来てからというもの、どの世界の『本棚』にもアクセスできるようになった・・・しかし」

フィリップは突然剣崎を指差して言った。

「こうも様々な世界に『本』を持った者も珍しい・・・ゾクゾクするねぇ」

（なんだこの笑顔・・・嫌な予感しかしないぞ・・・）

「あー、落ち着けフィリップ。今はこの依頼人を家族に会わせることが先決だ」

「見つかるまでならいいのかい？翔太郎？」

「ほどほどにしろよ・・・ハァ」

嫌な予感をさらに掻き立てる会話をする二人。

それを見た剣崎は、心の底から思った。

―『誰か早く来てくれ』・・・と―

剣崎の素性を調べ終わった翔太郎は、すぐにマイクを取って放送をかけようとする。
『なんのための素性調査だったんだよ！』と焦った剣崎が言ったことで、なんとか剣崎にとっての最悪の事態は避けられた。

すると何故か『やっぱり聞き込みが一番だな』と言って翔太郎が飛び出して行ったので、現在迷子センターには剣崎とフィリップの二人だけになった。

「今帰ったぞ・・・ってどうしてこうなった！？」
帰って来た翔太郎が見たものは、物凄く散らかった迷子センターであった。
呆然と眺めていると、隣の部屋から剣崎が物を後ろに投げながら走ってきて、その後ろから『ちっこくて白い恐竜』が飛んでくる物を次々と蹴散らしながら飛び出してくる。
そして少し遅れて好奇心を全開にした目のフィリップが付いて来る。
翔太郎は、声をかける程度では止まりそうにないフィリップのパーカーのフードを引っ掴んで止めた。

そして状況を聞いたところ、

・剣崎のことを更に調べると、彼が人間じゃないことが判明
・本人に聞くと、彼は不死身の存在

・それは・・・実に興味深いよ！！

とのことで、自分の持つ恐竜型ガイアメモリ『ファングメモリ』を用いて剣崎を捕まえようとしたら、当然のように彼は逃げるのでこうなった・・・らしい。

あまりにも普段通りの相棒に頭が痛くなるが、とりあえずは彼を（というか追いかけるファングメモリ）止めて剣崎を助けるのが優先だ。

「で、聞き込みの結果・・・」

ようやくその場を鎮めることに成功した翔太郎は、剣崎に聞き込みの結果を報告する。

「あんたの奥さんに該当するのが『六人』、その中で子供を連れたのが一人・・・ってどういうことだよ！！」

報告の途中でいきなりキレだす翔太郎。

無理もない、彼には女運というものが欠けているのだから、『奥さんが六人』もいる剣崎に対して怒りを感じてしまったのだ。

翔太郎の勢いに体を引く剣崎だが、その報告が明らかにおかしいことに気付く。

「ちょっと待てって！俺と一緒に来たのは二人だけだぞ！？」

『奥さん』の時点で十分おかしいが、それが『六人』とはこれいかに？

「そんなハズはねぇ！それに中学生くらいの子までいたんだぞ！」
「それは穏やかじゃないね・・・少し検索してみよう」

翔太郎とフィリップが『ここでは一夫多妻が許されているのかどうか』について話し出している間に、剣崎は自分の奥さんを名乗る六人、いや正確には五人について考えていた。

そう、一人はシャマルに違いない。
子供連れが一人いた時点で、六人の内の一人は彼女だ。

なら残りの五人は？
実は大体予想がついている。
メリーゴーランドで聞こえた声の主、あれがその五人なのだろう。
どこかで聞き覚えのある声と殺気だったが、ここまでの事をしそうな五人といえば・・・。

（なのは、フェイト、はやてにシグナム、あとは・・・ティアナか？）
中学生ぐらいの子だとスバルも入ってくるが、なんだかティアナのような気がした。

それにしても、なぜ自分の奥さんだと名乗ったのか・・・それだけはどうしても理解できなかった。

だが今優先すべきなのは、この迷子センターからの脱出。
なので、未だに一夫多妻制について調べる二人に声をかけた。

「あのさ、とりあえずその六人・・・リインも入れて七人を連れてきてくれ」

―数分後―

迷子センターに揃った七人。
リインとセットだったシャマル以外の五人・・・ドンピシャなのであった。

「聞きたいことはいろいろあるけど・・・なんで付いて来た」

椅子に座って横目で五人を見ながら剣崎が問うが、全員視線を逸らして答えようとしない。
剣崎はため息をつくと、『俺は納得いかねぇ！』という表情をしている翔太郎に言った。

「もう一度言っとくけど、全員奥さんじゃないし、俺は結婚するつもりなんてないから」

その言葉に、シャマルも含めた六人が涙目になる。
それに気付かない翔太郎は渋々ながらも頷き、同じく気付いてない剣崎も『よしっ』と言って立ち上がる。

「さて、時間もあれだし帰るか・・・な、なんで皆泣きそうなんだ？」

涙目の六人におろおろする剣崎を見て、翔太郎はボソッと言った。

「やっぱり納得いかねぇ・・・」
「諦めるのはまだ早いよ翔太郎。僕の見つけた出会いの方法の中に『合コン』というものがあってだね・・・」
「また変なもの調べてきやがって・・・はぁ」

「ところで・・・」
帰り道、皆でゆっくり歩いて帰る中で剣崎が口を開いた。

「なんでみんな『奥さん』だって言ったんだ？」

その場の時が止まった（剣崎以外）

「な、なんでもないよ！その場の勢いっていうか・・・」

「そそそそんなことよりも！結婚しないっていうのは・・・」
「そうそれ！それが一番気になるよ！」
なのはとフェイトが、あたふたしながら問いを返す。
剣崎は一瞬呆けた顔をすると、すぐに『ああ、あの事か』と手をポンッと叩いた。
「だってさ、この前みんなが『一緒にいれる』って言ってくれたりしたけど、やっぱりこの体じゃ自分が納得いかないっていうか・・・」
「自分が好きな人とは・・・正真正銘の人間として一緒にいたいんだ」
『それじゃあ結婚は一生無理なんじゃないか』と思い、落ち込む六人。
だがその後の剣崎の言葉で一斉に顔を上げた。
「今橘さんのおかげで、ちょっとずつ人間に戻ってるみたいだからさ、このままいけば血だけじゃなくて体も人間になれるかもしれない」
「だからその内・・・俺も恋とかするのかもしれないな」
何の気なしに言い放つ剣崎だが、六人の心は喜びに溢れていた。
まだチャンスはあるのだとわかったことが大事なのだから。

だが剣崎は嘘をついていた
理由がわからないその場の暗い空気を払うための、先程の発言。
だがそれは自分が戦い続けることによって、どちらに転ぶかわからないもの
もしキングフォームになってしまえば、彼が人間に戻ることは先の話になるだろう。
それどころか、一生このままの可能性も十分にある。
―自分に恋など、最初から無理だったかもしれない―
（なんか・・・みんなに酷い嘘ついちゃった気分だ）
―でもこの体になった時点で、そういうことは全て捨てたじゃないか―
自嘲気味に笑う剣崎の顔に、誰も気付きはしなかった

第三十五話～遊園地でも迷子は迷子～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「ん？お休みをもらった？よかったな！俺も頼んでみようかな」

はやて「冗談や♪一真さんも今日一日のんびりしてくるとええよ」

スバル「ならゲーセンの後はバッティングセンターにけって～い！」

橘「基礎訓練を、ここのマシンを使ってやろうと思ってな」

次回『嵐の前の基礎訓練』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）剣崎のバカ！

（ｏｗｏ；）確かに嘘ついたのは悪いと思ってるけど！アンタにまで言われる筋合いはないだろ！！

（；ｏＨｏ）まあスタンスは変わらない訳ですけど・・・。流石に酷いですよ剣崎さん！

（ｏＭｏ）次回はまた俺の出番のようだな！

（ｏＨｏ；）橘さんは出過ぎなんですよ！？

（；ｏＭｏ）この小説のタイトルが『リリカルギャレン』になるま

では出続ける！ということで次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十六話～嵐の前の基礎訓練～（前書き）

久しぶりに携帯なので、後書きは書ける時がくるまでカット。

そして執筆状況は最悪。

ス～ラ～ン～プ～・・・ハァ。

戦闘はありませんが、予告の通りネタありです。

悩みが多くて困ります。

例えば全然執筆が進まないこととか。

ストックが残り少ないこととか。

とにかく、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十六話～嵐の前の基礎訓練～

それはいつも通りの朝の光景。
なのはの指導の下、フォワード陣の気合いの入った声が響く。

そして朝の訓練が終了。
なのは、フェイト、ヴィータの前に並ぶフォワードの四人。
全員が体操座りで、疲れた表情をして顔を俯けている。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了、お疲れ様！」
だがなのはが言いたいのはこれだけではなかった。

「でね？実は何気に、今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

「「「「え？」」」」
まさかテストだったとは思わなかった四人が目を見開く（始ほどではないが）。

「どうでした？」なのはが後ろにいたヴィータとフェイトを振り返って言った。
するとフェイトは笑顔で言った。

「合格」

「「速っ！」」

見極めの大事なテストなのにあまりにも呆気ない結果発表に驚く四人（特にスバルとティアナ）。

更にヴィータが『こんなにやっててダメだったら大変だ』という発言をし、エリオとキャロは苦笑い。

なのはからもよい評価を受け、第二段階を終了させた四人は喜んだ。

この後やるべきことを伝えるフェイトと、『明日』のことを伝えるヴィータ。

「以上だ。わかったな」

「「「「はい！！」」」」

「・・・え、明日？」

しっかり返事を返す四人だが、ヴィータの『明日』発言にキャロが疑問を持つ。

普通なら今日からの訓練の話になるはずだが、ヴィータは間違いなく『明日』と言った。

「今日は私たちも、隊舎で待機する予定だし」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

なのは達三人の言おうとすることがいまいち理解できないフォワード陣が顔を見合わせる。

「ま、そんなわけで」

「今日は皆、一日お休みです」

フォワード陣の表情が一気に明るくなった。

「街にでも出かけて、遊んでくるといいよ♪」

「「「はい！」」」

「は～い！！」

―機動六課の休日が始まる―

「ん？お休みをもらった？へ～、俺も頼んでみるか」

皆での朝食の場での剣崎の発言である。

ちなみに彼はチラッとはやてを見て休みがもらえそうか窺っている。

もちろん今日の朝食を作ったのも剣崎である。

先日のライダー料理対決終了後、彼の料理にはさらに気合いが入った。

本来なら獣の姿で食事をとっていたはずのザフィーラも人型である（何度か話に出ているが、これも全て剣崎のたっての頼みである）。

『当日は、首都防衛大隊の代表、レジアス・ゲイズ中将による管理局の防衛思想に関しての表明も行われました』

流れるニュースに剣崎以外の全員が顔を向ける。

そしてモニターに映るなにやら熱く語る男から、誰も目を離さない・・・と思いきやシャマルとヴィータは食事を再開した。

「このおっさんはまだこんなこと言ってんのな」

食べているだけのようで、実はしっかり聞いていたヴィータが言った。

「レジアス中将は、古くから武闘派だからな」
隣のテーブルのシグナムも話にのる。

「皆知ってるみたいだけど・・・ダリナンダコノオッサン・・・」
剣崎が『さっぱりわからない』という表情で尋ねた。
その発言に全員が苦笑する。
まあ元から管理局に詳しくもなかった剣崎が、自分と全く関わりのない人物の事を知らないのも致し方ない。

「一真さん、あの人はやなぁ・・・」

はやてが代表で説明を始める。流石部隊長だけあってなかなか詳しい。ついでに途中で画面に映った三提督の説明も加える。
だが剣崎の表情はポカーンとしていた。
その顔にさらに苦笑しながら説明は続いた。

「あれだな・・・危なっかしいおっさんと・・・偉〜い人達ってことだな」

一人納得しながら剣崎が頷いている。

『あんたに（あなたに）が言えることか（ですか）！？』

それがその場にいた皆の感想だ。もちろん口にはしていないが。
人に『危なっかしい』と言えるほどの安定感も無い彼にそれを言われたらかなりショックだ。

「で、はやて・・・休みの事なんだけどさ」

剣崎は期待の眼差しではやてを見る。

そんな彼には逆らえないのがはやてだが・・・からかうことはできる。

「う～ん・・・そうやなぁ・・・でもな～やっぱりこの頃無茶が過ぎるからなぁ」

「うぇぇい・・・」

「冗談や♪一真さんも今日一日のんびりしてくるとええよ」

「サンキュー！」

そのころモニターには、

『イクササ～イズ♪俺は正しい！付いてきなさ～い』

教育番組だろうか、『７５３』と書かれたＴシャツを着た青年が、子供たちの前でノリノリで踊っている。子供たちも、彼の意味不明な動きについていこうと頑張っていた・・・何人かはダウンしていたが。

―格納庫前―

現在ヴァイスが自分のバイクをティアナに貸すためにチェック中。

ティアナはそれを横から見ていた。

今の話題は『この頃の訓練中のティアナの動き』について。

「センターらしい動きになってきたんじゃないか？」

「皆さんのご指導のおかげで」

「それもあるけどよ、やっぱりきっかけは一真・・・だろ？」

「そんなことは！・・・ありますけど・・・」

ニヤっとしながら尋ねるヴァイスに、少々顔を赤くしながら否定しようとするティアナ。実際にその通りだったのだが。

ティアナはシャッターの隙間から見えるブルースペイダーを見つめる。

「一真さんのバイクって・・・元の世界で作られたものなんですよね？」

「そうなんだけどさ、アレの性能はどうかしてんぞ。最高時速・・・操作性・・・どれもミッドじゃ再現できねえ」

「それに自動走行まで完璧にできると来たもんだ・・・一真の話によると人工知能も搭載されてるかもしれないって言ってたな」

「それじゃあもうデバイスレベルじゃないですか！？」

ティアナの言葉に『だよな～』と頭をかきながら返すヴァイス。

そうこうしているうちに、ヴァイスのチェックも終わった。

ヴァイスに聞きたいことがありそれを口にしたティアナだが、ヴァイスの『相棒が待ってんだろ』という言葉でスバルを思い出し、礼を言ってから走り去った。

「ハンカチ持ったね・・・IDカード、忘れてない？」
「えと・・・大丈夫です」

こちらではフェイトによるエリオのチェック中（笑）

隣で見ていた剣崎も苦笑いするほどに、フェイトは過保護だった・・・。

「僕ももうちゃんとお給料を頂いてますから・・・」
「エリオの言う通りだぞ・・・お前は過保護すぎる」

フェイトがあまりにもアレなので、エリオと剣崎も口を挿んだ。
それに対して『でも・・・』と言うフェイト。
剣崎は一息ついてから言った。

「お前が心配する気持ちもわかる、俺だって心配だ・・・でもな、お前が心配ばかりするってことは、悪く言えばエリオとキャロを信用してないってことじゃないか？」
「そんなことは・・・」
「二人は確かに子供だ、でもお前が信用しないと二人は成長できないぞ」

「うん・・・」

「ごめんなさい！お待たせしました」

ここでようやくキャロが到着。
剣崎はキャロの頭を撫でて『似合ってるな』と言うと、後ろの二人に目くばせする。

「それじゃあ、エリオもキャロも気を付け・・・じゃなかった楽しんできてね」

「「はい！行ってきます！」」

二人がならんで出ていくと、フェイトの顔が再び不安げなものになる。
剣崎はそんな彼女の肩をポンッと叩き、『大丈夫だろ』とあっけらかんに言った。
フェイトも渋々ながら頷いて、剣崎と共に二人を見送った。
それを『ちょっと羨ましい』と見つめるなのはがいることに気付かずに。

その後剣崎も一人で出発。なのはとフェイトが申し出たが、『二人は待機や♪』という部隊長のお言葉に引き下がらざるを得なかった。

―そのころ街では―

「やっぱりここのアイスは見た目から素敵だ～♪」
スバルが盛られたアイス（驚異の五個、コーンもデカい）を見て感激していた。
ティアナも呆れ半分で自分のアイス（二段。ティアナのアイスは普

通だがスバルのは重ねていない、盛られている）を買い、近くのベンチに腰かけてアイスで乾杯（ちょっとやってみたい）

ティアナが普通に食べるのに対して、スバルは一口で一個ずつ食べる。もちろんお決まりの『キ～ン』に見舞われる。

「アイス食べたらさ、ゲーセン行かない？」

「いいわね～、でも久しぶりにバッティングセンターでスカッとするのも・・・」

「ならゲーセンの後はバッティングセンターにけって～い！」

そのころデート中のエリオとキャロも、ベンチに腰掛けて六課に来る前の話をしていた。

もちろん二人の共通の保護者であるフェイトに関した話になる。

キャロが昔行った遊園地の事を話すと、エリオがその時の彼女の気持ちに共感する。

そして二人とも、忙しい合間をぬって会いに来てくれるフェイトに対する感謝の気持ちが溢れる。

そんな中、ストラーダに通信が入る。

相手はスバルとティアナ。どうやらこれからバッティングセンターに向かうそうだ。

スバルたちが今後の予定を尋ねると、エリオがスケジュール表を見ながら答えていく。

実は今回のエリオとキャロのデートの行程はすべてシャーリーが組んだもの。そして当の本人たちには『デート』という意識は全くない。

そんな二人に少々苦笑しながら、スバルたちは通信を終えた。

―バッティングセンター―

スバルたちは通信を終えたすぐ後に到着した。

どうやらあまり人はいないようだ。

だがなんだろうか、出てくる人といえば全員がどこか戸惑った表情をしており、スバルとティアナはそれを見て首を傾げる。

結局中に入り、それぞれ思い思いのバットを手にゲージでお金を入れる。

ちなみにこのバッティングセンター、地球のそれを基にしてはいるが最高スピードが段違いだ。

ティアナは手始めに１３０ｋｍ・・・いや手始めでやるスピードではない。

スバルはなんと１５０ｋｍのものに挑戦する。（ここの最高は１８０ｋｍ、誰が打つんだか・・・）

周りで見ている人も驚いてたが、その中に一人だけそんな二人を静かに見ている男がいた・・・そう・・・『彼』だ。

―カキンッ、カキンッ！！グアッキ～ンッ！！―

次々にボールを打ち返す二人。
そのほとんどがホームランゾーン（入ると景品等がもらえる。入った回数はその人のステータス）へ一直線に飛んでいく。

ティアナもスバルも調子がいいため、かなりノッてきている。

次に備えて構える二人、そしてボールが飛び出した。
それを打ち返そうとバットを振ろうとするが、二人のボールにそれぞれ書かれた数字のようなものに目を奪われる。

「さ、3！」
「な、7！？」

ついつい二人がそれを見ることに集中してしまい、バットではなくその数字が口から飛び出した。

落ちて転がっていくボールを見ながら首を傾げる二人。
すぐに次の球に備えようとするが、今の球が最後の一球のようで機械は動かなくなった。
最後の一球を見逃してしまったことを少々悔やむ二人だったが、

「見事な動体視力だな・・・おもしろい！」

後ろからかけられた声に振り向いた。
そこにいたのは、

「「橘さん！！・・・ってなんでここに？」」

もう何度目かの登場だろうか、橘朔也である。
彼が何故こんなところにいるのか、既にほとんどの方々がお解かり

だと思う。
向こう（元の世界）にはなかなか無い『剛速球を放るマシン』があるこのバッティングセンターでやることと言ったら・・・。

「基礎訓練を、ここのマシンを使ってやろうと思ってな」
「「基礎訓練？」」

何の基礎訓練なのかさっぱりだが、二人は橘についていく。
すると彼が入っていったのはここの最高１８０ｋｍを叩きだすゲージ。
周りの観衆もつられて覗き込む。
だが彼はバットを持っていなかった。

「橘さん！バットバット！！」
「必要ない、俺はボールを打ちに来たわけではないからな」
「それってどういう・・・」

お金を入れる橘。そして彼は飛んできたボールが当たるか当たらないかぐらいの場所に立つ。

「危ないですよ橘さん！！」

スバルが止めようとするが、その前にボールが発射された。

橘はそれを・・・

「３！！」

―バシッ！―

何故か数字を言ってから素手でキャッチした。
打ったわけでもないのに周りから『おお～』という歓声が聞こえる。
すると彼は捕ったボールをスバルたちに向けた。
そこには数字の『３』が書かれている。

「１８０ｋｍのスピードボール、それに書いてある数字を読み取る。」

彼の言ったことが本当なら、あのボールに書かれた数字をその眼で見切ったことになる。
流石に訝しむスバルや観衆たちだが、ティアナだけは『この人ならこれぐらい普通にやりそうね・・・』などと考えていた。

その後も彼は次々とボールの数字を当て、その都度素手でキャッチしていた。
ここまでくると認めざるを得ない。
彼が数字を当てるたび、全員が歓声を上げるようになった。

終了後、橘はスバルとティアナに何の基礎訓練だったのかを話していた。

「あれはギャレンになるための基礎訓練だ。動体視力を鍛えるためのな・・・やってみるか？」
「あ、あんなことしないとなれないんですか・・・ライダーって」
「流石にちょっと・・・」

「いや、二人には素質がある。ライダーシステムでなくとも、戦闘で十分に発揮されるはずだ」

そう言われた二人はこの前の橘の戦闘を思い出す。

ガジェットから発射された羽手裏剣を、彼はバックジャンプをしながらすべて撃ち落としていた。（描写無し）

射撃タイプのティアナでなくとも憧れる場面だった。

それに戦闘において動体視力は不可欠。

敵を撃つにも突撃するにも、相手の動きが見えていないとどうにもならない。

「「やります！」」

同時に言った二人に笑顔で頷くと、橘は3ゲージ分を調整してもらい、それぞれが中に入っていった。

「準備はいいな・・・」

「「はい！！」」

決意に満ちた目でマシンを見る二人。

橘も身構えた。

―ガッシャン―

「「「3！！」」」

バッティングセンターに3人の声が響き渡った

第三十六話～嵐の前の基礎訓練～（後書き）

（ｏｗｏ）次回のリリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「ちょ、おい！待てって！！」

未来「た、たっくん！？」

巧「誰だいま『たっくん』って言ったやつ！」

木場「乾君、今誰と話してたんだい？」

剣崎＆始「「変身！」」

次回『鬼ごっこと謎の少女』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；作者）遅れてしまった・・・

（；ｏｗｏ）気にするなって、そのまま次話投稿したわけじゃないんだから

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）次回は俺の出番だな

（　作者）君には頑張ってもらわないとね

（；ＯＭＯ）俺は出てこないが次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十七話～鬼ごっこと謎の少女～（前書き）

またまた携帯しかも予約投稿・・・そしてスランプ。
お休み・・・貰ってもいいですか？・・・1週間くらい。
真面目に。

ま、まあとにかく！
今回はやっとヴィヴィオが登場。
そして始も登場。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十七話～鬼ごっこと謎の少女～

スバルとティアナが橘と基礎訓練。
エリオとキャロがデートしている頃、剣崎は街中をぶらぶらしていた。

昼は『例のレストラン』でとった（この前のことについて文句も言っておいた）

しかしその後、全くやることが無いことに気付いた。
ここに誰か（六課メンバー等）と一緒にいたなら、それに付き合えばいい。

だが剣崎には特に行きたいところも無い、やりたいこともない。

これではお休みをとった意味がないではないか。

「意外と隊舎にいたほうが楽しいな・・・」
そう言ってブルースペイダーに跨ろうとした剣崎の目に映るものがあった。

剣崎は自分の目を疑った。
そこにいた人物は彼にとって予想外すぎた。

「始!?」

剣崎はスペイダーに乗るのをやめて、始らしき男の後を追った。
だが流石剣崎、静かについていけばいいものを・・・

「始!!」

大声で呼んでしまった。
呼ばれた方は肩をビクッとさせると、ゆっくり後ろを振り向いた。

「やっぱり・・・」

その男はやはり相川始本人だった。
始は剣崎を見て目を見開くと・・・走って逃げた。

「ちょ、おい!待てって!!」

逃げようとする彼を追うために剣崎も走り出す。
二人のスピードは半端なかった。
だが二人とも誰にもぶつかることなく、壮絶な鬼ごっこを繰り広げていた。

―とある公園―

「いったい・・・どうしたらいいのかな・・・?」

青年・夜闇未来は迷っていた。
いや、剣崎のような迷子になったわけではない。
彼はこれからどうすればいいのか迷っているのだ。

『ライダー料理対決』後、元の世界で生活していたところに士が現れ、『一真がピンチらしいからお前が行って来い』などと言われて強制的に連れてこられたところまではまだいい。

だが実際に来てみれば何も起きておらず、士も『あんのくそバイオリニストぉ！！』とキレだす始末。

結局『大体わかった、待ってればその内事件なりなんなり起きるだろ』と言って士はいなくなり、未来は『何か』が起きるまで何もやることが無いのだ。

ベンチに腰掛けため息をついた彼はすぐ隣のベンチに目を向けた。
そこには一人の青年が数人の子供たち相手に会話をしていた。

だがその青年の顔に彼は見覚えがあった。

「た、たっくん！？」

自分がいた元の世界での友人、『乾巧』と酷似・・・いやそのまんまな人物がいたことに驚く未来。ちなみに彼の世界の巧は『怒ると襲い掛かってくる（アレな意味ではない）』ため、未来は『その』巧と会うたびに身構えてしまう。

「誰だいま『たっくん』って言ったやつ！」

先程のアレが聞こえていたようで、青年・乾巧は眉間に皺を寄せな

がら未来の方に顔を向ける。

ここで未来は気付いた。彼の世界の巧は誰に『たっくん』と呼ばれても何も気にしないはず・・・つまり彼は別世界の『乾巧』なのだ。

「ご、ごめんなさい！友達に似ていたのでつい・・・」

慌てて謝る未来。巧のほうも『そういう理由ならしょうがねぇな』とあっさりひいた。

すると巧の周りにいた子供の一人が言った。

「ねぇねぇ！次は僕の夢聞いてよ！」

「・・・ったく、わかったよ・・・お前の夢はなんだ？」

「あのね！あのね！僕の夢はね・・・」

面倒くさそうににしながらも、しっかりとその子が語る夢を聞く巧。その後もいろんな子供たちが自分の夢を彼に言った。

そして彼はその都度『めんどくせーな』といいながらも、やはりしっかりと聞いていたのだった。

子供たちがいなくなると、巧はベンチで少々ぐったりしていた。

「君はやさしいんだね」

その声に顔を向けると、先程自分を『たっくん』と呼んだ青年がこちらを見ていた。

「んなこと言われるようなことはしてねぇよ」

「そんなことない。だって文句を言ってる割に、ちゃんと聞いてたよね？」

「フンッ・・・」

見事に見抜かれていたので顔を背ける巧。
だが不意に彼は未来に話しかけた。

「なぁ・・・お前の夢はなんだ？」
「僕の？」
「お前意外に誰がいんだよ」

巧の言葉に、未来は数瞬考えてからゆっくりと言った。
「・・・誰も・・・もう誰も戦わなくて済む未来を守る事・・・かな？」

普通に聞いたら『？』となるような質問だが、巧は何も言わずに立ち上がった。

「そうか・・・ならその夢・・・大事にしろよ」
「・・・うん！」

巧が歩き出しながら言ったことに未来がしっかりと応えるのを確認すると、彼はその場を去った。

「乾君、今誰と話してたんだい？」
公園を出た巧に一人の青年が話しかけた。

「木場か・・・っておい！お前どこ行ってたんだよ！！」
巧は青年・木場勇治に『ちょっと待っててくれるかな？』と言われたので公園で待っていたのだが、一向に木場は戻ってこなかったため、近くにいた子供たちに夢を尋ねながら待っていたのだ。

「アイスを買いに行ったんだけど、予想外に混んでて・・・で、彼は知り合いかい？」
未来を見ながら巧にアイスを渡す。

「初対面・・・でも『仲間』だった・・・それだけだ」
「『どっち』の意味・・・かな？」

巧の意味の分からない説明だが、木場はそれである程度理解したようだ。

「『こっち』じゃねぇぞ」
巧は自分の手を見ながら言った。
木場はその言葉で安心したようで、『そっか』と言って歩き出した。
巧は歩き出す前に公園のほう・・・未来を一瞥して歩き出した。

―一方鬼ごっこをするジョーカー二人は・・・―

「待てよ！この世界ならまだ大丈夫じゃないのか！？」

剣崎は前を走る始に向かって叫んだ。
まだなんとかアンデッドが三体いるこの世界なら、二人が会っても大丈夫なのではないだろうか。

始もその考えに至ったようで、一瞬だけ足を止める。
だが『やはり不味いのではないか?』ということで再び走り出した。

「やはり俺たちは・・・会ってはいけないんだ!」
「いや多分そんなことはないって!!」

周りの人たちに怪しまれながら二人の鬼ごっこは続く・・・と思われたが。

―ゴトッ・・・―

二人の耳が微かな音を聞きつけた。
同時に足を止めて顔を見合わせると、二人は近くの路地に向かって走り出した。

路地に入った二人が目にしたのはマンホール。
どうやらそこから音が聞こえてくるようだ。

―ゴトッ・・・ゴトッ!―

だんだん大きくなっていく音に二人は警戒心を強めていく・・・すると次の瞬間

―ゴトンッ!!―

大きな音とともにマンホールの蓋が開いた。
二人はすぐにカードを取り出して身構える・・・が、そこから出て来たのは小さな手、そして・・・。
「子供・・・？」
―小さな女の子だった―
「なあ始・・・この子・・・」
「ああ、『ただの』子供ではないな・・・」
出てくると同時に気を失った少女を抱えながら剣崎は問う。
どうやら始も同じ考えだったようだ、剣崎の問いに同意する。
「それにこのケース、レリックだな・・・」
「鎖が千切れている・・・つまり、本来の数は『２つ』・・・ということか」
「あ！一真さん、相川さん！！」
「その子はいったい・・・」
声に二人が振り向くと、路地の入り口にエリオとキャロが。
その後、キャロからの全体通信で六課メンバーに状況が伝わった。
結果、フォワード陣は全員少女とレリックの確保＆保護。
剣崎と始はその警護にまわることになった。

―十数分後―

「エリオ！キャロ！」
「一真さんに、相川さん！」

四人のもとにスバルとティアナが到着。
エリオとキャロが説明をした。

更にその後なのは・フェイト・シャマル・リインが到着。
少女の容体をシャマルが確かめる。

「一真さん、この子ヘリまで運んでいってくれる？」
「ああ、わかった」

剣崎が少女の横にしゃがみ、ゆっくり抱き上げた。
すると、少し苦しげだった少女の表情が少しだけ楽になった。

―指令室―

「ガジェット来ました！」
シャーリーが地下で複数のグループに分かれて移動中のガジェットの反応を確認。
そしてそれに連なるように海上にもかなりの数の？型が確認された。

その多さに対応を決めかねているはやて、だがそこにヴィータからの通信が入った。

『スターズ2からロングアーチへ、こちらスターズ2』

海上で演習中だったヴィータだが、既に許可を得て現場に移動中。

『それにもう一人』

ヴィータのその言葉に続き、通信に入ってきたのは、

『108部隊、ギンガ・ナカジマです』

ギンガは別件での捜査をしていたのだが、そこで発見された『破壊されたガジェットの残骸』と『壊れた生体ポッド』、その二つと今回の事案に関係があると考え、協力を申し出た。

ヴィータとギンガ、同時にきた戦力の増加。

それによってはやてからも指示が出る。

『ほんならヴィータはリインと合流。協力して海上の南西方向を制圧』

「南西方向、了解です！」

『なのは隊長とフェイト隊長は北西部から』

「「了解！」」

『ヘリの方は、ヴァイス君とシャマルに任せてええか？』

「お任せあれ！」

「しっかり守ります」

『ギンガは地下でスバルたちと合流』
「はい！」

『一真さんと相川さんにもそっちに向かってほしいんやけど』
「わかった！」
「ああ」

全員に指示が行き渡り、まずはフォワード陣が動き出す。
「さて、みんな！短い休みは堪能したわね！」
「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れていこう！！」
「「はい！！」」

四人が同時に待機状態のデバイスを突き出した。

『『『『Ｓｔａｎｄｂｙ』』』』

そして同時に掲げる。
「「「「セットアップ！！」」」」

次の瞬間には、バリアジャケットに身を包んだ四人がいた。

「始・・・俺たちも」
「そうだな」
二人の男もそれぞれカードを取り出した。

剣崎がバックルにカードを装填、ベルトが巻きつくと同時に腕を動かしていく。

始がカードを構え、ベルトを出現させる。

「「変身！」」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

『ｃｈａｎｇｅ』

【仮面ライダーブレイド】

【仮面ライダーカリス】

―二つの切り札の戦士―

「よし！みんな行く『待ってください！』・・・なんだよ！？」

『カテゴリーキング出現です！』

通信の内容に全員が驚いた。

カリスは少し考える仕草を見せると、顔をブレイドに向けて行った。

「剣崎、お前はカテゴリーＫのところに行け・・・こっちは俺一人がついていれば十分だ」

「・・・わかった、任せたぞ始！」

二人は頷きあうと、ブレイドはスペイダーを呼び出し、カリスはマンホールから一気に飛び降りた。

フォワードの四人もブレイドに声をかけながら次々に飛び降りてい

く。

「よし・・・行くぞ！！」

ブレイドは反応があった場所に向けて走り出した。

そこで待っているのは、

―『スペード最強のアンデッド』―

第三十七話～鬼ごっこと謎の少女～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

キング「そんなに騒がなくてもいいじゃんか・・・ブレイド」

巧＆木場「「変身！！」」

剣崎「そんな事・・・！！」

巧「俺には夢ができた、でもな・・・俺はいつでも」

巧「夢を守るために戦う！」

次回『最強の金と二本のベルト』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）おい！思いっきり五時直前に追加してるじゃないか！

（；作者）・・・ウトウトしてたらいつの間にか・・・。

（；ｏＨｏ）ただでさえ一週間ぐらい休むって言ったのに、これ以上迷惑かけてどうすんですか！

（；作者）面目ないです・・・。

（；ｏＭｏ）遅れはするが次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

第三十八話～最強の金と二本のベルト～（前書き）

すいませんでした！！
お休み貰ったのに全然進まなかったです・・・。

八月は『一週間に一話以上』というスタンスを取っていきたいと思います。

（＾Ｕ＾）＜申し訳ございません。このような作者で。

返す言葉もないです・・・すいません。

今回はたっくん＆木場コンビと、ブレイドＶＳコーカサス。

え？キングフォーム？当分先ですよｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十八話～最強の金と二本のベルト～

「人造魔導師って・・・」
「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に投薬とか、機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力をもたせる・・・それが人造魔導師」
「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっていろんな部分に無理が生じる・・・」

スバル、ティアナ、キャロの三人が人造魔導師について話している。

だがエリオだけは顔を俯けていた。

理由は彼自身の出生の秘密だ。

そんな彼の様子に気づいたカリスは、エリオの肩に手を置き、振り向いた彼に頷いた。
言葉を発していないにも関わらず、エリオには『お前は正真正銘の人間だ』と言っているように見えた。

「あ、ありがとうございます」
「己を信じることができなければ、守るべき者を守ることもできな

い。己を信じることが、全ての困難を切り開くカギになる」

「はい！」

「シャーリー、ここら辺でいいんだよな？」

『はい、間違いないです』

スペイダーから降りたブレイドが辺りを見渡す。

街中だというのに人がいない。

戦闘が始まっているわけでもない、それに避難するにしては早すぎる。

「どこだ！でてこい！！」

「そんなに騒がなくてもいいじゃんか・・・ブレイド」

声の主がブレイドの前に姿を現した。

見た目は一般人と変わらない。

だがその体から発せられるモノは異常だ。

「カテゴリーキング・・・お前を封印する！！」

「できるのかな?君如きの力でさ」

首を横に振りながら言う青年・キングに、ブレイドはカチンときた。

「やってみなくちゃ・・・わからないだろ!!」

言うと同時に走り出し、ブレイラウザーを引き抜いた。

「しょうがないなぁ・・・いいよ、かかってきなよ」

そう言いながらも姿を変えようとしないキング。

絶好の攻撃チャンスを逃すまいと、ブレイドはトレイを展開、カードを引き抜きラウズした。

『Ｍａｃｈ』

高速移動でまずは姿をくらます。

「ふ~ん、やっぱり速いんだね」

キングは周りを見渡し始めたが、ブレイドの姿は見当たらない。

そして次の瞬間、

「もらった!!」

『Ｓｌａｓｈ』

真後ろに現れたブレイドがラウザーで切りかかった。

それでも身動き一つとらないキングに、ラウザーの刃が届く・・・

と思いきや。

―キンッ！！―

刃は直前で盾に止められた。
何もないはずの空間から出現したこの盾こそ、彼を封印するにおいて最大の壁

―【ソリッドシールド】―

「・・・だから言ったのに」
「うるさい！！」

それぞれが距離を置く。
するとキングが額から剣を取り出した。
それと同時にキングが『元の姿』に戻る。

―黄金の体―

―手に持った最強の剣と盾―

―スペード１３番目のアンデッドにして―

―すべてを統べる最強の王―

―コーカサスビートルアンデッド―

「こっちも本気だ！！」
相手が元の姿に戻ったのを見て、ブレイドもすかさずアブゾーバーからカードを引き抜いた。

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｑｕｅｅｎ』

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

黄金の鷲がブレイドと重なり、黄金の翼が六枚・・・のはずが

「き、金じゃない！？」

翼の色は『銀』と赤・・・普通。
まさかと思いブレイラウザーを突き出してみたが・・・当然カードが射出されることはなかった・・・やはり普通。

完璧に、

―『普通のジャックフォーム』だった―

「ハァ・・・この前のやつはもっと金色で強そうだったのに、なんか拍子抜けだね」
コーカサスがあからさまなため息をついた。
ブレイドのほうも、驚愕が勝って言い返すことができない。

「どうする？こっちは流石に飛べないから、逃げてもいいけど？」
「この・・・バカにするな！！」

怒りに任せたブレイドの斬撃。

だがただ正面から切り続けているだけのソレは、呆気なく盾に防がれ、その度に弾き返される。

そして弾かれて体勢を崩したブレイドは、その後すぐに振り出される剣に対応することができず、何度も攻撃を食らってしまう。

「君はさぁ、僕を封印してどうするの」

「今の『半端』な君が僕を封印したら、ジョーカーであるカリスが勝者になるんじゃない？」

「そんな事・・・！！」

『Ｓｌａｓｈ』
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｌａｓｈ』

迷いを振り切るようにブレイドは翼を広げて飛びあがった。

そしてそのままコーカサスを目掛けて、更なる進化をせずとも十分なスピードで飛びかかる。

キングはそれを見てゆっくり盾を構えた。

ブレイドがそれすらも破りそうな勢いで飛んできているのに、キングは動揺した素振りを全く見せない。

ここでブレイド本編を見たことのある方は思い出してほしい。

この後、ブレイドがどうなるのか。

見たことのない方は、このあとすぐ大まかな答えが出るのでそのままに。

一気に距離を縮め、雷を纏った強化ブレイラウザーを後ろに引くブレイド。

「食らえ！！」

そう言ってブレイドがラウザーを振り切る・・・その前に、

「フンッ！！」

コーカサスの剣、【オールオーバー】が先に振り抜かれた。

「な、グアッ！」

先程の盾はフェイク。

自分の動きを隠すと同時に、ブレイドに目標点を示して誘導するためのもの・

そして無駄にスピードを上げてしまったブレイドに対するカウンターは、そのスピードの分一撃が重い。

ブレイドは相手の思惑にまたも乗せられてしまったのだ。

「やっぱ無理だったね」

「まだ・・・まだだ！！」

与えられたダメージは多すぎると言っても過言ではないのだが、ブレイドはラウザーを杖代わりにして立ち上がった。しかし、変身は解かれなかったが、ジャックフォームは解除されてしまっていた。

「へ～、まだやれんだ」

あの一撃でダウンしなかったことに感心しつつ、コーカサスは止めを刺すためにゆっくりと歩き出した。

しかし、彼はすぐに足を止めた。

「・・・邪魔しないでくれる？」

―突然の『黒いライダー』の登場によって―

「僕は君を邪魔するために呼ばれたからね」

「・・・未来！！」

―とある海沿いの道―

そこでは二人の青年が、はるか向こうの海から迫るガジェットの大

群を見ていた。
その二人とは、例の公園にいた青年たち・・・乾巧と木場勇次。

「門矢の野郎に言われて来てみれば・・・こういう事かよ」
「なんとかしたいけど・・・空を飛んでる敵は流石に・・・」

巧は憮然と、木場も顔を顰めながら空を見つめていた。

「アレがあればいいんだけど・・・」
「あってもめんどくせぇだけだろ・・・って」

話していた巧が、木場の後ろの方を見ながらムッとした表情になった。
前を向いていた木場にも、巧のその表情の原因となった『音』が聞こえてきた。
それは何かが猛スピードで『飛んでくる音』

―ガチャン―

「・・・ったく、タイミングが悪いんだよ」

そんな事を言いながらも、巧は着地した『ソレ』の方へ向かっていく。
木場も苦笑いしながらそれに続いた。

『ピロロ　ピロロロ』

まるで二人に『早く受け取れ』と言っているかのような電子音を発するソレ・【オートバジン】が持っていた二つのケースの片方を巧が受け取り、もう片方を木場が受け取った。

「サンキュー」
「使わせてもらうよ」

―カチャ―

ケースを開いて中に入っていた『ベルト』と『携帯電話』を取り出す二人。

そしてすぐにベルトを腰に巻き、携帯電話【ファイズフォン】を開いて巧が『5』を、【オーガフォン】を開いた木場が『0』を三回ずつ押し、更に『ＥＮＴＥＲ』と書かれたボタンを押した。

―『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』―

それぞれ別々の音声が発せられると同時に二人はフォンを閉じた。

そして巧がフォンを持った右手を突き上げ、木場はそのまま遠くのガジェットを見据える。

「「変身!!」」

―『Ｃｏｍｐｌｅａｔｅ』―

宣言と同時に手に持ったフォンをベルト【ファイズドライバー】と【オーガドライバー】に差し込み、適合者の証である音声が流れた瞬間、二人の体を二色の光が包んだ。

そして光の中から現れたのは

―闇を切り裂く赤き閃光―

―頂点に立つ黒き王―

―【仮面ライダーファイズ】―

―【仮面ライダーオーガ】―

「これなら！」

まずはオーガが短剣のようなものを取り出し、オーガフォンから引き抜いた【ミッションメモリー】をセットした。

『Ｒｅａｄｙ』

音声とともに短剣【オーガストランザー】が長剣に変化した。

そしてオーガフォンを開いて再び『ＥＮＴＥＲ』を押した。

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

オーガストランザーから、流体エネルギー【フォトンブラッド】で作られた刃が伸びる。

「ハァァァァッ！！」
オーガがそれを振ると同時に刃が更に伸びていく。
それは止まることをしらないのだろうか、伸び続けた刃ははるか遠くのガジェットにも余裕で届いてしまうほどのものになった。
そしてオーガはそれをガジェット群に思いっきり叩きつけた。
ガジェットもいきなりの攻撃に回避が遅れてしまい、次々と刃の餌食となっていく。
かなりの長さだというのに、オーガは自在にそれを操っていく。
「俺必要ないだろ・・・」
ファイズが何もしないで突っ立っている。
いや、『何もしない』のではなく、『何もできない』というのが正しい。
『通常のファイズ』では空中、しかもかなり距離がある敵に対する攻撃手段がない。
そう、『通常のファイズ』では・・・
『ピロロロ』
再び音声を発したバジン。
それに気付いて振り向いたファイズに、バジンは『ある物』を渡した。
「お前・・・なんで持ってんだ」

『ピロロ』

「うっせえな！・・・いくぜ！！」

渡された物とは、ファイズを最強の姿に変えるためのツール【ファイズブラスター】

それにもボタンがついていて、ファイズは再び『5』を三回、そして『ＥＮＴＥＲ』を押す。

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

ベルトからファイズフォンを取り外し、ファイズブラスターにセットした。

『Ａｗａｋｅｎｉｎｇ』

「知ってるか？」

先程公園で会った青年を思い浮かべながらファイズは言った。

「夢ってのはな、時々スッゲー熱くなって、時々スッゲー切なくなる・・・俺も思い知ったぜ」

―ファイズはその体を黒から赤に変える―

「俺にも・・・『夢』ができたからな」

―完全に赤に染まった体から光が溢れ出る―

「俺には夢ができた、でもな・・・俺はいつでも」

「夢を守るために戦う！」

全身をフォトンブラッドが駆け巡り赤く染まった体

これがファイズの最終形態

―【ブラスターフォーム】―

すぐにファイズブラスターのボタンの『１・０・３』と『ＥＮＴＥＲ』を押す。

『Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ』

音声が流れると同時にファイズブラスターを手動で変形させ、【フォトンブラスターモード】という形態に変える。

「木場！こいつで一気に決めてやる！！」

「任せたよ！」

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

銃口に光が溢れるように溜まっていく。

「食らえ！！」

ファイズの声とともに発射されるフォトンブラッドの閃光が、遥か彼方のガジェット群に、減衰することなく直撃した。

「意外とあっけねぇ奴らだったな」
「た、確かにね」

海上で煙を上げているガジェットを見やりながら、二人のライダーは変身を解いた。

そしてすぐに自分の体を調べる。
だが、本人たちが危惧することが全く起こってないことがわかると、顔には出さないが安堵した。

「あのクソコンニャク、俺たちの体に細工までしやがって・・・」
「でもそのおかげでこうやって生活もできるし、守るための戦いができるんだ。感謝しないと」

二人はすでに『二回死んでいる』
それももと居た世界で二回。
二度目の生は短いことを知っていながら、それでも戦った。
その結果、木場は最後の戦いで、そしてなんとか戦い抜いた巧も・・

・そう時を置かずに死を迎えた。

二人が・・・正確には巧がこの世を去った時、二人は真っ白な空間に飛ばされた。
そこで二人が出会った白い捻じれコンニャク『本当の統制者』によって、二人は『戦うためだけの生』をうけた。

そして多くのライダー達と臨んだ、『世界の破壊者』つまり『門矢士』との大戦。

全てが終わった時、戦うために生き返った二人は三度目の死を迎えるはずだったのだが・・・

―『お前たちには、まだやって欲しいことがあるのでな』―

統制者のその言葉で、二人は生きながらえることになった。
しかも『心配するな。死ぬことは無い』などと言われて飛ばされた二人は、正直半信半疑の生活をミッドで送ってきた。

これではっきりした。
二人は正真正銘の『生』をうけたのだ。
しかも、『二度目の生の時の力』をそのままにされている。
こちらは二人にとって迷惑この上ないモノだったが、これでまた、『守るために戦える』

「また一緒に頑張ろう」

「フンッ！面倒くせぇけどな・・・」

木場が差し出した手を、眉間に皺を寄せながら見る巧だったが

「やってやるよ！！」

しっかりと、その手を掴んだ

第三十八話～最強の金と二本のベルト～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

コーカサス「・・・やりすぎだよ」

リュウガ「君にはこれぐらいじゃないとね」

カリス「何者かと思えば・・・子供か」

アギト「こ、子供だとぉ！？言っとくけどな、アタシはテメェよりも長く生きてんだよ！！」

ティアナ「よりにもよってこの人に言わなくても・・・ねぇ？」

次回『不死身のカリスと烈火の剣精』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；ｏｗｏ）なぁ、ストックはあるんだろ？なんで投稿しないんだよ。それにカテゴリーキングをボコボコどころか逆にボコられたしさ。

（作者；）執筆スピードが追いつかないの！かといって不定期にするとそれこそ酷いことになりそうだし・・・。あと今回の戦闘はしょうがない！こんなところでＫＦ解禁してもかっこよくない！！

（ｏＨｏ）すいません。この人が落ち着くまでご迷惑をお掛けします。

（；ＯＭＯ）とにかく次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第三十九話～不死身のカリスと烈火の剣精～（前書き）

ついに達成した『お気に入り登録２００件』を記念して～、
ここでアンケートタイム！素晴らしいっ！！

お題は『やって欲しい閑話』
基本なんでも来いですよ！！
十五日までに感想やメッセージでリクエストをしてくだされば、大概のそれを書きたいと思います。
普段は見れない剣崎達の姿・・・どんどんリクエストしてください！！

それにしても危ない危ない。
ほかの人の小説読んでそのまま一夜明かしてしまうところでした。

そんなこんなで三十九話！
特に大した変化がない、ある意味平凡なお話。
だってこれを書いてた時は絶賛スランプ中で・・・。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第三十九話～不死身のカリスと烈火の剣精～

「ブレイドを助けることがどういうことか・・・わかってんの？」
「わかってるよ。それでも僕は信じてるからね」

リュウガはデッキからカードを取り出してベントインした。

『Ｓｗｏｒｄ　Ｖｅｎｔ』
飛んできた剣をしっかり掴むと、更にもう一枚を取り出した。

『Ｇｕａｒｄ　Ｖｅｎｔ』
両肩に盾が装備されるとさ～ら～にもう一枚。

『Ｓｔｒｉｋｅ　Ｖｅｎｔ』
ドラグブラッカーの頭だけが飛んできて（何か違うが）リュウガの右腕に装着された。

「・・・やりすぎだよ」
「君にはこれぐらいじゃないとね」

全ての武器を装備したリュウガがコーカサスと対峙する。

―その頃海上のなのはとフェイトは―

敵機の殲滅に成功したのだが、突然の増援とそのあまりの多さに手こずっていた。
いや、彼女たちを手こずらせる最たる理由が、

「幻影と実機の混成編隊・・・」

そう、実機と同じ反応だというのに、いざ攻撃を当ててみればそれは幻影。
だがそちらに気を取られると、本命の攻撃を避けるのが厳しくなってしまう。

これほどの事をするのは相手の主力が、地下またはヘリに向かっている証拠だと踏んだフェイトが、なのはと別の場所で同じく戦闘中のヴィータに先に行くように言った。
だがなのははもちろんそれを良しとしない。

「限定解除すれば、広域殲滅でまとめて墜とせる」
「それはそうだけど・・・」

「地下はまだしも、一真さんが戦闘中だからヘリのほうはがら空き。なんだか嫌な予感がするんだ」

「でも、フェイトちゃん・・・」

そんな二人に、はやてからの通信が入った。

『割り込み失礼。ロングアーチからライトニング１へ、その案も、限定解除申請も、部隊長命令で却下します』

「はやて！？」

「はやてちゃん！？なんで騎士甲冑！？」

突然の通信の内容もアレだが、それ以前に二人を驚かせたのははやてが騎士甲冑を纏っていたこと。

だがすでに彼女は自身の限定解除許可をとっており、『空の掃除は私がやるよ』とかなりやる気である。しかし、彼女が限定解除できるのは後見人の二人、カリムとフェイトの義兄『クロノ・ハラオウン』が出せるそれぞれ一度ずつ。

つまりここで使えば、はやての限定解除は残り一回しか使えないのだ。

「使える能力を出し惜しみして、後で後悔するんは嫌やからな」

というはやての言葉に後見人サイドも了承したようだ。

はやての１２０分間の限定解除が始った。

「さあて、久しぶりの広域魔法、いってみよか！！」

―地下のフォワード&カリス―

「空の方は大変みたいね」

「剣崎も苦戦しているようだな」

粗方のガジェットを撃破した五人と一匹が空や地上の様子を案じていると、

「ケースの推定位置までもう少しです！」

「うん」

キャロの言葉で、自分たちの任務に再び集中しなおす。

そんな五人のすぐ近くの壁がいきなり爆発した。

『！！』

全員が警戒して構えるが、壁に開いた穴から出て来たのは、

「ギン姉！！」

スバルの姉、ギンガだった。

（彼女もそうか・・・）

ギンガを見た瞬間、始（カリス）はその体が『普通』ではないことに気付いた。

もちろんスバル、もっと言えばエリオやフェイトなどの六課のメンバーにはどこか『普通』ではない者達が多い。

彼が気付いていることはもちろん剣崎も気付いている。

（剣崎があの場所を離れないのはこういう理由もあったからか）

家族という繋がりだけではなく、剣崎的には『放っておける訳ないだろ』という気持ちもあるのかもしれない。

彼のそういうお節介なところは、四年前・・・いや五年前からよく知っている。

先程の『人造魔導師』の話でのエリオの表情からして、彼はまだ自身の出生を気にしているようだ。

多分他のメンバーも同じであろう。

（・・・あいつがいるなら、心配はいらないか）

きっと剣崎なら、自分にしてくれたように、全員の心のつかえを取り去るだろう。

―リュウガＶＳコーカサスの方は―

「ハアァ！！」

―キンッ！―

「無駄だって言ってんじゃん」

「まだまだ！」

先刻から続くリュウガとコーカサスの戦闘。
だが戦況はコーカサスに傾いたままだ。
全ての武器を装備したリュウガだが、肝心の攻撃が届かず、更にはドラグシールドも破壊されてしまった。

―バキンッ!!―

「あ・・・折れた・・・」
折れたドラグセイバーを思わず凝視するリュウガ。
コーカサスはその隙を見逃さなかった。

「はい、これでお終い!!」

横一線に振られたオールオーバー。
だがそれが、リュウガに届くことは無かった。

「・・・どいつもこいつも邪魔ばっかり」
「アンデッドの邪魔は、俺の得意分野だ!!」

再び立ち上がったブレイドだが、この調子ではあまり長くは持たないだろう。
本人もそれをわかっていた。

だからブレイドはこの場を切り抜けるために、

―力を合わせる―

「行くぞ未来!!」
「うん!!」

ブレイドはラウザーから三枚のカード、リュウガはデッキから必殺の一枚を抜いた。

『Ｋｉｃｋ』
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』
『Ｍａｃｈ』

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｏｎｉｃ』
『Ｆｉｎａｌ　Ｖｅｎｔ』

「「ハァァァァ・・・」」

ブレイドが雷を纏い、リュウガが呼び出したドラグブラッカーがゆっくりと彼を中心に回っていく。

「ハッ！」
まずはリュウガが空へ飛んだ。
回るドラグブラッカーの中で姿勢を変えていくリュウガ。
そして彼が空中で蹴りの体勢に入った瞬間、ブレイドも超スピードで走り出した。

『オオォォォン』

ドラグブラッカーが放つ青い炎と共にリュウガがコーカサス目掛けて動きだし、ブレイドも助走から跳躍に移った。

「ウェェェェイッ！！」
「ハァァァァッ！！」

―ドォォォォン―

ブレイドのライトニングソニックと、リュウガのドラゴンライダーキックが同時に炸裂。

大きな爆発が起こり、辺りは煙で包まれた。

「「やった!?」」

手応えはあった。避けられたわけではないだろうが・・・。

「ダメ・・・だったみたいだね」

煙が晴れた先には、ソリッドシールドだけが残されていた。

粒子となって消えていくシールド。

多分そのままコーカサスのもとに戻ったのだろう。

まあ封印には程遠い結果だったが、なんとか撃退には成功したことを喜ぶ二人。

「サンキューな、お前にまた助けられた」

「気にしなくていいよ。それじゃあ僕はこれで・・・」

そう言ってオーロラの向こうに消えるリュウガ。

ブレイドは彼の姿が見えなくなった瞬間、ドスッと腰を下ろした。

我慢していた戦闘時のダメージが、一気に彼の体に襲い掛かったのだ。

だがゆっくりしている暇は彼には無かった。

(ブレイド、そんなところでゆっくりしてていいのかな?)

突然頭の中に響くコーカサスの声。
ブレイドは辺りを見渡したが、相手の姿も気配も感じない。

（今回はもう退くよ。でもね・・・）

―大事ヘリを、そのままにしておいていいのかなぁ？―

―地下のフォワード&ギンガ&カリス―

ガジェットたちを次々に撃破し、地下でようやくレリックのケースを発見した六人。
だが、そこに乱入者が現れる。

虫のような人型、そして謎の少女。
召喚獣ガリューと、召喚士ルーテシアである。

相手の奇襲にはカリスが見事に対処し、なんとかレリックが奪われることを防いだ。
そのまま少女を確保しようとするティアナと、ガリューと激しい戦闘を繰り広げるカリス。

だが全員が二人の敵に集中しているとき、突然の激しい光と衝撃が地下の六人を襲った。

「グッ！」
「ウッ！」
特に集中していたカリスとティアナが一番ダメージを受ける。
そしてレリックのケースを持っていたキャロが怯んでいるうちに、
ガリューによってケースが奪われてしまう。
「ああっ！レリックが！！」
ガリューはそのままルーテシアも保護、未だに自由に動けない六人
をよそに先程の光の『発生者』のもとに移動する。
「たくも～、アタシたちに黙って勝手に出かけちゃったりするから
だぞ」
地下に響く正体不明の声。
「ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのアタシ！」
そう言って登場したのは、リインと同じサイズの・・・妖精。
「烈火の～・・・剣精！アギト様が来たからな！！」
周りに花火をボンボンあげながら名乗る妖精・・・アギト。
「何者かと思えば・・・子供か」
それを見たカリスがボソッと呟いた。
「こ、子供だとぉ！？言っとくけどな、アタシはテメェよりも長く

生きてんだよ!!」
カリスの発言にキレるアギトだが、『長生き』について言う相手を間違っている。

「残念だったな・・・俺は『人類』という存在が生まれる前から生きている（殆どは封印されていたが）」

相川始、ジョーカーは不死身なのだから。

「よりにもよってこの人に言わなくても・・・ねぇ？」
「うん・・・一真さんならともかくね」

カリスの後ろでティアナとスバルが話している。
当然それはアギトの耳にも入るわけで、喧嘩を売る相手を見事に間違えたことを更に思い知らされることになった。

「う、うっせえな!とにかく、お前らまとめて・・・かかってこいやー!!」

顔を真っ赤にしたアギトの言葉で、再び戦闘が開始された。

第三十九話～不死身のカリスと烈火の剣精～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ブレイド「当たったら・・・どうすんだよ！！」

ディエチ「いくら抑えてたとはいえ・・・少しへこむな」

クアットロ「あ、あら？見えてるのかしらぁ？」

トーレ「・・・無い！」

次回『３・４・１０と戦闘終了』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（０ｗ０）あれ？数字（登場人物）足りないんじゃないか？

（作者）カットした

（；＞：：Ｖ：：＜）勝手な奴だ・・・

（；０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十話～３・４・１０と戦闘終了～（前書き）

ああ、ついに四十話かぁ。
アンケートは今日一杯までで、詳しくは前話の前書きに。

今回はなんと言うか…微妙…かな？

オリ展開入りますね。
休日編は次回で終了です。ラストのはやての台詞は、休日編を通しての心の叫びです。

ペースが上がらないのは辛いです。

それでは、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十話～3・4・10と戦闘終了～

「ハッ！！」

アギトが炎を次々に放つが、それはすべてカリスとティアナによって撃ち落とされる。

「そんなものか？」

「まだまだぁ！！」

カリスの軽い挑発にのり、どんどん攻撃が単調になってくるアギトだが、実は冷静さを失っているように見せかけているだけ・・・作戦があるのだ。

カリスとティアナが炎を撃ち落とす度、辺りには煙が発生する。

最初は大したことのないものだったが、アギトの勢いが増すことによって、煙の濃度が上がっていく。

そう、『前が見えない程に』

（狙いはこれだったか・・・）

カリスが気付いた時には、既に彼でさえも視認することが不可能な

ものになっていた。

辺りを見渡すカリス。
そんな彼の後ろから、ガリューが伸ばした爪を突き出して猛スピードで突っ込んできた。

（間に合うか！？）
咄嗟にカリスラウザーを振ろうとするカリスだが、明らかに間に合うタイミングではない。

そのままノーガードで攻撃を受けそうになるカリスだが、彼のすぐ横からギンガが飛び出してくる。

「！！」
その攻撃に気付いたガリューが、すぐに対象をギンガに移す。
そして二人は互いの武器をぶつけ合い、ガリューは攻撃の相殺に成功する。

同時に弾き飛ばされ、いったん距離を置いた二人に仲間が駆け寄る。

「済まない、助かった」
「あなたが怪我をしたら、一真さんが悲しむと思って・・・／／／」
「死ぬことは無いから安心しろ。それにあいつがそれぐらいで悲しむことはないだろう」
「ですよね・・・」

「ガリュー、大丈夫？」
「・・・（コクッ）」
「やっぱこの人数差はきついか？・・・ってなんだ！？」

アギトが驚いたのも無理はない。
彼女ら三人の体に、蔦のようなものが巻きついているのだから。
元を辿っていくと、相手の仮面ライダーが持つ弓から伸びている。

「てめぇ！何しやがった！！」

怒鳴るアギトに向かって、カリスは一枚のカードを見せる。

それはハートの7『バイオ』
効果は、カリスラウザーから発生させた蔦で相手を捕縛するというもの。

更にカリスは発生させた蔦を使って、そのままレリックのケースも確保した。

―戦闘区域から少し離れたビルの上では―

そのビルの上には二人の少女がいた。
メガネの少女は座りながら戦闘区域の方向を見つめ、もう一人の少女も、布に包まれた長い何かを片手で支えながら見つめていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」
メガネの少女がもう一人の短めの髪の少女（のように見えるが、実は長い髪を後ろで縛っている）に話しかける。
「あぁ、遮蔽物も無いし、空気も澄んでる」
ディエチと呼ばれた少女は、その瞳を機械のようにした状態で、ある一点だけを見ていた。
それは、ヴァイス、シャマル、そしてあの少女が乗っているヘリだった。
「でもいいのかクアットロ、撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」
今度はディエチのほうがメガネの少女に尋ねた、クアットロというらしい。
だがクアットロ・・・いやジェイルやウーノが言う限りは『大丈夫』らしい。
そう、彼女たちはウーノの姉妹である。
その頃カリス達は、あれから更に戦闘があったものの、到着したヴィータ&リインや、彼女たち持ち前のコンビネーション、そしてカリスの能力によってなんとか切り抜けた。
何が起こったかというと、『バイオプラント』から脱出したルーテ

シア達は、地上に出た状態で新たに大型の召喚獣『地雷王』を呼び出して地下の八人を殲滅しようとしていた。

しかし、崩れ去る地下の空間からナカジマ姉妹のウイングロードを使って脱出。
地雷王はカリスが『スピニングダンス』でぶっ飛ばし、それを更にキャロが捕縛する。

ちなみにスピニングダンス『Ｓｐｉｎｎｉｎｇ　Ｄａｎｃｅ』とは、ブレイドのライトニングソニック同様カリスの三枚コンボ技である。『フロート』『ドリル』『トルネード』の三枚をラウズすることで発動し、空中に浮遊してから回転、その状態で相手に蹴りを食らわす技だ。

アンデッドを仕留めるこの技には、巨大な体をした地雷王も敵わなかった。

既にガリューを退かせていたルーテシアとアギトのもとにはナカジマ姉妹とヴィータが向かい、そちらとの戦闘に二人が気を取られているうちに、エリオとリインが二人を拘束。

こうして『一旦』は解決したのだった。

―ロングアーチ―

「市街地にエネルギー反応！！」

指令室に緊張が走る。

いきなりのエネルギー反応、そしてその反応が大きすぎる。

「砲撃のチャージ確認。物理破壊型・・・推定Sランク！！」

―クアットロ&ディエチ―

「インヒューレントスキル・・・ヘヴィバレル、発動」

エネルギーの出所はディエチが持っていた、布で巻かれたものの中身『イノーメスカノン』

構える先にあるのはもちろんヘリであり、隣に立っていたクアットロは遠くで掴まっているルーテシアを通してカリス達・・・いやヴィータに語りかける。

「逮捕はいいけど」

その頃、掴まっているルーテシアも、クアットロの指示通りに喋りだした。

「逮捕は、いいけど・・・」

今まで沈黙していた彼女が突然喋りだしたことに驚きながら、それでも少し警戒する八人。

「大事なヘリは、放っておいていいの？」

『！？』

その場の全員、カリスでさえも驚愕した。

更にその後、ルーテシアは確実にヴィータだけに対して言った。

「あなたは・・・また守れないかもね」

「！！」

それと同時に、

―砲撃は放たれた―

そして、

―直撃した―

「砲撃、ヘリに直撃・・・」
「そんなはずない！状況確認！！」

ロングアーチのモニターには煙しか映っていない。

ヴィータたちの方も最悪だ。
彼女がルーテシアに掴みかかり、全員の目線がそちらに向いた瞬間、
『地面』から現れた謎の少女にケースも、捕まえていたルーテシア
とアギトも取り戻された。

「ウッフフ～のフ～♪どう?この完璧な計画♪」
「黙って、今、命中確認中・・・・・！?」

今回の一連の動きをすべて指示していたクアットロが得意げになる。
そんなクアットロを制して、ディエチがもう一度瞳を機械に変える。
だが、晴れて来た煙の向こうにはまだヘリが飛んでいる・・・飛ん
でいる！?

それにヘリの前に
―影が二つ―

「危ないだろ・・・」
（!?）
誰かの声が、ディエチの頭に直接響いた。
どうやらクアットロも同じ声を聞いているようだ、かなり驚いた表情をしている。

「当たったら・・・」

煙が晴れきったそこにいたのは、『黄金の翼』を広げた剣士の姿

「どうすんだよ!!」

強化ブレイラウザーを振り抜きながら、真っすぐにディエチ達の方を見てブレイドは言った。
その隣にはなのはがいるのだが、彼女のバリアジャケットはいつもと異なる形状だった。

『なのはさんとレイジングハートさんの、エクシードモード!!』

通信で大声を出すシャーリーはほっておいて、ここで状況を整理しよう。

コーカサスとの戦闘を終えたブレイドは、ヘリと地下のどちらの援護もいけるように、ちょうど真ん中をバイクで移動していた。

そこで入ってきた『エネルギー反応』の報告、彼はすぐにヘリを目指した。

だがヘリが見えたところで、砲撃の発射を確認。このままでは間に合わないと判断した瞬間、ジャックフォームに強化変身した。

すると先程の戦闘ではノーマルだったＪＦは、何故か金色のＪＦに強化されていた。

だがそのおかげで、瞬間移動ばりのスピードを発揮することができ、なんとかヘリを守ることに成功したのである。

「そこの二人！」

ブレイラウザーの切っ先を、遥か遠くのビルの上にいるディエチたちに向けて剣崎は言った。

「絶対にそこ動くなよ！！」

「一真くん・・・無理だと思うよ？」

隣にいるなのはが意見を述べるが、ブレイドは何も聞かなかったか

のように動き出した。

「いくら抑えてたとはいえ・・・少しへこむな」

「あら?ディエチちゃんもそういう所あるのね・・・って今は逃げるの！」

クアットロが焦ってディエチの腕を掴んだ。

そして彼女を引っ張るのと同時に、金色の魔力弾と炎の弾丸が、二人が直前までいた場所を見事にぶっ壊した。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

「俺も『少女』を撃つのは避けたいところだが・・・」

「「投降しないのなら、容赦はしない（しません）」」

フェイトとギャレンＪＦがゆっくりと降りてくる。

あまりの威圧感（特に橘からの）によって、すでにディエチは軽く戦意損失。

クアットロも汗を流す・・・が、

「き、今日は遠慮しときますぅ！ＩＳ、シルバーカーテン！」

クアットロは自らの能力を駆使することによって、まるでその場に居ないかのように姿を消した。もちろんディエチも連れて、である。

だが、『相手が悪かった』。

本当に、その一言に限る。

『Ｓｃｏｐｅ』

ギャレンが一枚のカードをラウズする。

元の世界では『カテゴリー８か、面白い！』などと言われたのに、結局一度も使われなかったカード。

スコープの名の通り、その能力は『索敵の能力の向上』とどのつまりは視力等の超強化である。

とにかく、これで姿を隠した二人がそれはそれはハッキリと見えるわけだ。

「残念だったな」

進行方向に持ち前のスピードで先回りし、未だに姿を消したままの二人・・・厄介な能力持ちのクアットロに銃口を向ける。

「あ、あら？見えてるのかしらぁ？」

ゆっくりと姿を現す二人。

もうクアットロでさえも自分の能力が呆気なく破られたことで、軽く自信を失っている。

「相手が悪かった・・・としか言えないな」

ギャレンは依然銃口を向けたままだ。

（どうするのクアットロ。このままじゃ・・・）

（だ、大丈夫よ。トーレ姉さまぁ！）

クアットロが念じた瞬間、目の前のギャレンの体勢が崩れた。

「なんだ！？・・・グアッ！！」

どこからか攻撃を受けるギャレン。

しかし彼が目で追おうにも、相手は凄まじい速さで移動しているのか、全く視認することができない。

（貴様ら何をやっている！）

（（す、すみません・・・））

クアットロとディエチに念話で話しかける女性の声、この声の主こそ、現在ギャレンを一方的に攻撃している人物。

『三番目』・・・『トーレ』である。

トーレはそのままギャレンラウザーを狙う。

ラウザーさえなければライダーは無力化したも同然、さらにあれを回収できたら、ドクターの研究のためにもなるだろう。

（ラウザー・・・いただくぞ！）

死角から接近し、一気に取り去る・・・はずだったのだが。

―スッ・・・―

（なんだと!?）

ギャレンはトーレの動きが分かりきったかのように、華麗に避けた。

それだけでも十分驚いているのに、とにかく離脱しようと加速した瞬間、腕を掴まれた。

「俺ならついていけるんだよ!」

振り返った先には、なのはに合わせて飛んだために少し遅れて来たブレイドがいた。

それにしても不覚だった、『金色の翼のブレイド』のスピードに勝てる者はいないと、出撃前に注意を受けていたというのに。

ギャレンのほうに時間をかけ過ぎた。

「・・・大人しく、ついて来る気は・・・」

「・・・無い!」

「やっぱり、そうだよなぁ・・・」

あからさまに肩を落とすブレイド。

だがその手は、未だにトーレの腕を掴んだままだった。

「そこの二人もか?」

ブレイドが向いたのはクアットロとディエチの方。
二人は何も言わなかったが、その沈黙は『拒否』を示していた。

「う～ん・・・しょうがないな」

なんだか解放してくれそうなブレイドの様子に、少し期待と呆れが入る三人だったが・・・

「しっかり反省してもらうからな！」

一斉にガックリとなる羽目になった。

「・・・なぁ、私の出番あれだけ！？」

上空のはやてもガックリである

第四十話～3・4・10と戦闘終了～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「うぇぇ・・・」

クアットロ「それは？」

ディエチ「お、おいしい・・・」

トーレ「・・・感謝する」

剣崎「ぬいぐるみって・・・いやいやいや」

次回『取り調べの定番料理・・・とぬいぐるみ』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回でようやく休日編が終了ですね。そこからは２００件記念の閑話集で。

（ＯＨＯ）取り調べって言ったら、アレですか？

（作者）その通り。でも、普通は取調室には丼とかライトスタンドとかの鈍器になりえるものは置かないって言ってた。全てがそうなのかはわからないけど、確かに危ないや。

（；ｏｗｏ）誰から聞いたんだ？

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

第四十一話～取り調べの定番料理・・・とぬいぐるみ～（前書き）

遅くなりました、四十一話です。
次回はキャラ設定を投稿しましょうか。
キャラ設定なのに無駄に長くなってしまったので、見ていただけると嬉しいですｗ

※キャラ設定を投稿したその日に、『リリブレ人気投票』の告知＆ルールを投降します。

次々々回からは閑話を・・・とりあえず二つやって、その後は預言等を終わらせて、『色々』書きます・・・ていうかやりますｗ
少しだけ期待しててくださいｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十一話～取り調べの定番料理・・・とぬいぐるみ～

「なあ、何か喋ってくれよ・・・」

剣崎が悲しげに言った。

ここは、先程の現場から左程離れていない、管理局の施設の一室。

先程の事件の際に拘束した三人を、剣崎が取り調べている。

だが三人と、『俺がやる』と立候補して一人で相手をしている剣崎の間には会話がほとんどない。

剣崎が話しかけても、ほとんどを無視されてしまう。

なんとか頼み込んで名前は教えてもらった。

だが、目的等については教えてはくれなかった。

「俺と話すの・・・そんなに嫌なのか？」

軽く涙目になっている剣崎に対する反応は・・・

向かって右端トーレ・・・一瞬だけ憐れむ表情だったが無視
真ん中クアットロ・・・面白そうに見ているが答えない
左端ディエチ・・・反応に困ってる

「うぇぇ・・・」

剣崎は情けない声を出しながら机に突っ伏した。

「あらぁ？もうギブアップ？」

クアットロが面白くてたまらないという表情で聞くと、剣崎は少し拗ねたように顔を上げる。

「答えてくれないじゃないか・・・」
「頑張りに免じて、少しだけ喋っちゃおうかしら～？」
「ホントか！？」
「ウ・ソ♪」

クアットロに見事に遊ばれる剣崎。
再び突っ伏す剣崎だが、突然声のトーンを下げて三人に聞いた。

「これだけは答えて欲しいやつがあるんだけど・・・」

その言葉で、注意を剣崎に向ける三人。
そして剣崎は顔を上げて言った。

「アンデッドについて、どこまで知っている？」

彼の表情と声は、先程までのどれとも違っていた。
それは、三人に・・・いやすべての人に恐怖を与えるには十分すぎるほどの。

流石の三人も息を呑む。

ディエチはカタカタと震えているし、クアットロの顔も青い。
トーレでさえも、顔に出さないようにこらえるのが精いっぱいである。

「お前たちが何かを知っている・・・いや、アンデッドに関わってるのはわかってる」

「カテゴリークイーン同士の融合・・・あれをやったのは、ジェイル・スカリエッティなんだな?」

今まで感じたことも無い殺気が、部屋と三人を支配する。
三人は自分の意思に反して、ゆっくりと首を縦に振るしかなかった。

「解放されたアンデッドは十三体・・・間違いないな?」

三人は再び頷く。

「なら最後だ・・・」

一斉に身を固くする三人。
このままでは、答えたくないことも答えることになってしまう。

「統制者・・・『モノリス』はどこにある!?」

口調を激しくしながら問う剣崎。

だが、三人の反応は・・・

「モ、モノリス?何のこと?」

当惑の表情をしていた。

―バンッ!!―

「ふざけるな!融合に加えてアンデッドを模したガジェットの制作!!」

「知ってるんだろ!どこにある!!」

椅子から立ち上がり、息も声も荒げる剣崎だが、三人の表情は先程から変わらない。

戸惑ったままの三人を睨み付けるようにしていた剣崎は、一息つくと殺気を納めた。

「ごめん・・・」

椅子に腰を落とし、片手で髪を掻き毟る剣崎。

そんな彼の姿を見ていると、モノリスというのが彼にとって重要なものだということがわかった。

だが、彼女たちは本当に何も知らない

ラウズカードは何度も見たことがあるが、それ以外に関係するもの

は見たことが無い。
ドクターなら何か知っているだろうか？

このようなことを考えていた三人は気付いた。
―自分はこの男の手助けをしたいと思っている？―

（（（まさか・・・そんなこと）））

伏せていた顔を上げ剣崎のほうを見た三人だったが、そこには剣崎はいなかった。

―ガチャッ―

開いた扉から剣崎が顔を出す。
彼は丼が四つ乗ったお盆を持っていた。

「それは？」

相変わらず喋るのはクアットロだけだが、剣崎はそのことについてはあまり気にせずに答えた。

「いや、取り調べって言ったらさ、やっぱりカツ丼だと思って・・・」

「「「カツ丼？」」」

「あ、トーレとディエチは久しぶりに喋ったな」

剣崎の言葉にハッとした二人がすぐに口を閉じるが、彼は嬉しそうに笑っている。

―コトッ―

丼を並べ、蓋を開ける剣崎。

「どうぞ召し上がれ」

少し恥ずかしそうに言う剣崎。なぜなら、彼はこういう台詞は全くと言っていいほど使わないからである。

「「「・・・」」」

目の前のカツ丼を凝視したまま、動かない三人。

剣崎も不安になってくる。

「もしかして・・・気に入らなかったか?」

残念そうに丼を下げようとする剣崎だが、彼の手は三人によって止められた。

驚いた剣崎が顔を上げると、三人はそれぞれの丼を引き寄せた。

しかし、一緒に置いた箸を見て首を傾げている。

「あ~、箸は使えないか・・・スプーン・・・いやフォークだな」

剣崎は走って部屋を出ると、すぐに三本のフォークを持って戻ってきた。

それを渡した後、自分は箸を持って椅子に座る。

「いただきます！いや～、俺も腹が減っててさぁ・・・ん？」

手を合わせてお決まりの台詞で食べ始めようとする剣崎だが、三人がこちらを見てキョトンとしているのに気付いた。

「ねぇ、その『いただきます』ってなにかしら？」

「ウェ！？知らないのか！？」

オーバーなくらい驚いている剣崎。

でも知らないならしょうがないと、いただきますとごちそうさまについて少し語ってあげた。

―数分後―

「「「「いただきます」」」」

口をそろえて言うと、剣崎は箸で、三人はフォークで食べ始めた。

「・・・！！」

「あらぁ、なかなかいけるじゃない♪」

「お、おいしい・・・」

「よかったぁ・・・」

それぞれの反応を見て安心した様子の剣崎。

「ねえ、アナタって以外に器用だったりするのかしら？」

「以外は余計だぞ。箸だって日本人なら当然だし」

「ふ～ん」

その後は比較的静かに食べる四人。
たま～にディエチが喋たりしたので剣崎は喜んでいたが、やっぱりトーレは何も言わなかった。

「「「「ごちそうさまでした」」」」

「さて、俺はこれ片付けないといけないけど・・・どうする？」

試すような目をする剣崎。
ここでの『どうする？』は、もちろん『逃げるか逃げないか』についての質問だろう。
少々体に力が入る三人だが、剣崎はすぐに笑って言った。

―『逃げてもいいぞ』―

数秒ほど理解するために時間を要したが、間違いなく彼は『逃げてもいい』と言った。
理由を聞けば、『だって喋るつもりないだろ』と返される。
もちろんこちらの秘密を話すつもりなどない。
だがなにもせずに逃げるのは、なんだか心苦しいものがあった。

（我ながら、甘くなっちゃって・・・）

少し前・・・いや数十分前なら絶対にありえないだろう感情が、クアットロの心にでてきた。
チラリと横の二人を窺うが、どちらも何とも言えない表情をしていて、同じことを考えているのだということがわかった。

「でもいいの？私たちを逃がしたら、アナタ大変よ？」

「大丈夫だろ？こいつがいれば」

剣崎は壁をコンコンと叩く。

すると・・・

「ど、どうも～・・・」

先の戦闘で、カリス達から見事に目標を奪い去った水色の髪の少女『セイン』が現れた。

これには流石に驚いた。

まさかそこまでとは・・・。

「見つかったのは結構早くて・・・カツ丼もいただいちゃった」

『テヘッ』っと自分の頭を小突くセインに対して、三人・・・特にトーレが深いため息をついた。

「俺、セインの気配ならわかるんだけど、潜ってる時に捕まえるとか絶対無理だからさ」

―だから大丈夫だ―

満面の笑みで言う剣崎に、三人はまたもやため息をつくところだった。

普通、敵に対して『逃げてもいい』とか『大丈夫』とか言うものだろうか。

それが顔見知りだったり、敵意のない相手ならまだしも、思いっき

り敵意丸出しで、さらに攻撃まで加えた相手に対して・・・はぁ。

「お言葉に甘えてもいいのね？」
「だからいいって言ってるだろ」

「知らないわよ？」
「大丈夫だって」

「次も敵なのよ？」
「また捕まえて、カツ丼食べさせてやるからさ」

「・・・いいわ。セインちゃん、連れてってちょうだい」

悪意のない笑みを浮かべ、壁の前で突っ立っていた妹を促す。
するとクアットロ以外の三人もようやく動き出した。

「じゃあね、カツ丼楽しみにしてるからさ～」
「捕まる気満々かよ・・・」

「・・・感謝する」
「それだけ聞ければ十分だ」

「おいしかった・・・また」
「ああ、またな」

三人が部屋を出て、壁からはセインの腕だけが出ている。
『ホラーかよ』などと言いながら剣崎が苦笑しているなか、クアットロは動いていなかった。

「なにやってんだよ、行かないのか？」

首を傾げて尋ねる剣崎に、今度は『少しだけ』いじわるそうな笑みで言った。

「今度はお箸の使い方、教えてくれるんでしょう？」

「・・・は？」

「冗談よ♪」

それだけ言うと、クアットロがセインの腕を掴もうとする。すると剣崎が無言で、小さなメモのようなものを取り出し、クアットロの手に握らせた。

『これは何？』と尋ねようとするクアットロを遮って、剣崎は彼女を壁に押し込んだ。

その後、合流したルーテシアとレリックのケースを確認したが、中身は空っぽ。

ティアナとキャロにしてやられたことに怒っていたトーレだったが、普段の彼女にしては、あまり厳しくなかったそうだ。

因みにメモには、ミッド語？（多分剣崎の手書き）でこう書かれて

いた。

―またいつでも来いよ。今度はカツ丼以外の料理も作るからさ―

―ああ、あと妹とかお姉さんにもよろしくな（主にいただきますとか）　剣崎一真―

―聖王病院―

「もう、だから気を付けてって言ったのに」

「ごめん・・・」

そこで歩いていたのは剣崎となのは。

クアットロに『逃げられた』ことについて怒られていた。

すでに皆からかなりしぼられた剣崎だったが、保護した少女の様子が気になったので、こうしてなのはと病院に来ることになった。

しかしそこでなのはが話を戻してきたので、今もこうして怒られている。

ようやくなのはのお説教が終わり、フェイトへの念話での報告している最中、急に彼女が足を止めた。

「ん？どうしたんだよ」

「これ・・・」

なのはが見ているのはうさぎのぬいぐるみ。

なんとなく察した剣崎は、すぐにそれを買った。

「あの子に・・・だろ？」

「うん・・・」

なのはにぬいぐるみを渡して、すぐに病室に引き返そうとする剣崎。

だが、なのはが彼の袖を引っ張って止めた。

振り返った彼の目の前には、

「嘘だろ・・・」

―ブレイドの・・・いや自分のぬいぐるみがあった―

「ぬいぐるみって・・・いやいやいや」

うさぎのぬいぐるみの隣のカート。

そこには『仮面ライダー剣』のぬいぐるみが置いてあった。

そう、ブレイドだけではないのだ。

・（０ｗ０）これと、

・（０Ｍ０）これと、

・（＜・・・Ｖ・・・＞）これと、

・（０Ｈ０）これである。

なのはが突き出しているぬいぐるみを押し返そうとする剣崎だが、彼女はそれを許さない。
一分ほど押し合いが続き、結局条件付きで剣崎が折れることになった。

「～♪」

ブレイドのぬいぐるみを抱きしめて嬉しそうに歩くなのはを見て、剣崎はため息をつきたくなった。
ため息の原因はそれだけではない。
なのはが持っている『袋』、これこそが問題なのだ。

―『いいけど、自分で買えよ』―

―『うん！』―

などという会話があり、なのはは嬉々としてぬいぐるみを『複数』手に取った。

「・・・」
「～♪」

「・・・マジかよ」

ということで、なのはが持つ袋の中にはブレイドで一杯なのである。
他の三人のぬいぐるみは買わなかった。

それにしても、自分のぬいぐるみを抱きしめているなのはを見て思

う。

（なんかいろいろと恥ずかしいな・・・）

そうこうしているうちに病室についた二人。
眠っている少女のベッドの隣に立ち、なのはは剣崎が買ったうさぎのぬいぐるみを枕元に置き、さらにブレイドも置いた。

「いや、ちょっと待てって」
「ダメかな？」

ワザとらしく聞き返すなのは。
それに言い返そうとする剣崎だったが、

「パパ・・・ママ・・・」

少女が放った一言に口をふさいだ。

なのはが少女の頬をそっと撫でると、少女の表情が和らぎ、すやすやと寝息をたてる。

眠っている少女に語りかけるなのはの横で、剣崎は悲しげな眼で少女を見つめていた。

第四十一話～取り調べの定番料理・・・とぬいぐるみ～（後書き）

（０ｗ０）次回？の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

（０ｗ０）俺達の設定紹介！

（０Ｍ０）この作品での設定と、作者の偏見が詰まっているぞ！！

（；＜：：Ｖ：：＞）それにしても、無駄に長い・・・。

（０Ｈ０）その日は人気投票の告知の投稿もあります！

（；０Ｍ０）だから次回？と次々回？も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

リリカルブレイド・人物設定（前書き）

はい、予告通り人物設定です。

か～な～り長いので、携帯で読むことはお勧めできませんねｗ

初めて一万文字超えましたよ・・・アハハ。

今日中に人気投票の詳細についても説明があるので、そちらは確実に読んでおいてくださいね。

リリカルブレイド・人物設定

全員をカバーしたわけではありませんが、主要人物はカバーできたと思います。

今回の説明を参考にしていただければ、人気投票の際に便利かもしれません？

ヴィヴィオは現時点で聖王病院にいるので、最後に回しました。

主人公

【剣崎一真】

外見年齢２２歳
自称２６歳

仮面ライダーブレイド／ジョーカー／ブレイドジョーカー

ご存じ『仮面ライダー剣』と『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ』の主人公。
『剣』最終回で崖から飛び降りたところ、『本当の統制者』を名乗る人物・・・いや白捻じれコンニャク・・・いやモノリスによって、バトルファイトの真相を告げられる。

その後、半強制的に異世界（リリなのの世界）へ、しかも空港火災の真っただ中に飛ばされる。
そこでナカジマ姉妹を救出。なのはとフェイトとも出会うが、仮面ライダーだと名乗り姿を消す。

リリブレ本編までの四年間を、生活費を稼ぐためのバイト、ミッドチルダでの事件の解決、そして解放された十三体のアンデッドの封印に費やしてきた。
そのため、ミッドチルダ内では仮面ライダーは『正義の異形』という認識をされており、管理局の大半から好印象を持たれている。

だがその正体故にバイト先を転々としており、本編開始時点でのバイト先は『レストランＡＧＩＴΩ』。

そして、人型のガジェットに襲われるスバルを救出。四年ぶりの再会を果たす。
さらに到着したなのはとも再会。
なのはによって強制的に『機動六課』へ同行させられるハメに。

そして機動六課への協力を承諾。
その後は民間協力者として食堂で働いている。

超がつく鈍感男で、周りの女性の大半から好意を持たれているのに気付かない。
だが他人の色恋沙汰にはある程度敏感である。
本人にあまり恋愛がしたいという気持ちがないため、彼の周りの女性は苦労が絶えない。
周りの女性を美人と認識しているのだが、特に何もしない。
『アクシデント』が起こった際は物凄く慌てる。

未封印アンデッドは、カテゴリーキング【コーカサスビートルアンデッド】を残すのみとなっている。

【仮面ライダーブレイド】
人類基盤史研究所【ＢＯＡＲＤ】によって開発されたライダーシステム第二号。
適合者である剣崎不在の四年間、烏丸や橘によって改良が施されてきたため、全体的な能力の向上が図られている。
ホテル・アグスタでの事件の際、橘によって渡され、その後はジョーカーではなくこちらで戦闘を行っている（少しだけ例外あり）。

【ブレイド・ジャックフォーム】
睦月と嶋によって届けられた【ラウズアブゾーバー】と、スペードのＪ・Ｑを用いることによって強化変身したブレイドの高機動形態。
六枚の翼を用いた空中戦闘も可能である。
アブゾーバーにも手が加えられており、剣崎の意思によって更なる進化を行うこともあるのだが、仕組みを理解できていないのでコントロールはできていない。
進化した場合、翼の色が銀・赤から金・赤に変化。
ラウザーからのカードの射出＆オートラウズが可能。つまりラウザーさえ持っていれば、あとは勝手にやってくれるのである。
スピードは最早瞬間移動と言っても過言ではないのだが、その分剣崎の体に与える反動も大きい。

【ジョーカー・ブレイドジョーカー】
不死身のアンデッド達の『５４体目』であり、現在の剣崎の正体ともいえる姿。

しかし本人はこの姿での暴走を危惧している。
ジョーカーでの姿は、もとのジョーカーの緑だった部分が青くなっているだけで、能力等については変化が無い。
ブレイドジョーカーは、ジョーカーラウザーにスペードのＡをラウズすることによって変化した、ジョーカーとしてのもう一つの姿。
本来ならビートルアンデッドになるところだが、ライダーシステムによって変化した剣崎は、アンデッドの力を借り、姿を少し変える程度の変化である。
頭にはスペードマークが彫りこまれ、各部分に銀の鎧が追加される。
ラウザーもハートからスペードに変化し、更にブレイラウザーを模した剣、【ジョーカーラウザーＢ（ブレイド）】を召喚できるようになった。
カード使用の際は、カリス同様にラウザーを武器にセットしてからラウズする。

暴走の危険が高いのは、
ジョーカー＞？Ｆ＞ブレイドジョーカー＞ブレイド＞ＪＦ

ブレイドライダーズ

【相川始】

外見年齢２２歳
自称２６歳

仮面ライダーカリス／ジョーカー

本作のもう一人の主人公だが、登場回数は後述の橘とほとんど変わらない。
剣崎とは違い、橘&睦月と『元の世界』の四年後から来た。
外見は全く変わってないのだが、遥と天音？（元の世界での居候先の親子）や店の客からは気にされていないので、本人も気にしていない。
四年間でたこ焼きの技術に磨きがかかってしまったことに自分でも驚いているが、そのおかげでミッドでも生活費を稼ぐことができている。

六課メンバーのなかでも、エリオ&キャロからは懐かれている。

【仮面ライダーカリス】
始が変身する仮面ライダー。
ブレイド達のようなシステムではない。
ジョーカーの能力を使い、ハートのA『マンティスアンデッド』の姿を借りたものであるため、最初は六課サイドから『剣崎同様の優しい（ここ重要）アンデッド』という認識がされていた。（剣崎が説明していなかった）
前述のようにシステムではないので、ヴァージョンアップ等がされたわけではないが、始自身が封印したアンデッドを四年間で思いっきり屈服させたため、引き出せる能力が上がっている。

ミッドチルダに来るまでは、ハートのQを虎太郎に預けていたのだが（更に睦月によって解放）、二人の同意のもと、再封印して連れてきている。

【橘朔也】

外見３０代
実際は２９歳

仮面ライダーギャレン

ご存じ剣崎の頼れる（？）先輩である。
元科学者で、剣崎のいない四年間、ブレイバックルやラウズアブゾーバーの改良を行ってきた。
もちろん自分のギャレンバックルの修復&改良や、睦月のレンゲルバックルの改良も行う一流の人である。
影から見守るスタンスは変わっていなかった。
食いしん坊かつ悪食のため、始たちの邪魔ばかりしてしまう。
だが本人には邪魔する気などないので余計タチが悪い。

六課メンバーの中では、ティアナ&スバルに慕われている。

【仮面ライダーギャレン】

ＢＯＡＲＤが開発したライダーシステム第一号。
四年前のカテゴリーキング『ギラファアンデッド』との戦闘で大破したギャレンバックルを、烏丸の協力のもとで修復。
時間はかかったが、その分一番改良が加えられている。
システムの改良プラス橘の精神的成長によって、戦闘力が大幅に増している。

【ギャレン・ジャックフォーム】
ブレイド同様にアブゾーバーを使って強化変身した、ギャレンの高機動形態。
元の世界程の勝率の低さではないが、如何せん橘が人間であるため、ブレイドのＪＦ？（強化）ほどの力は出せない。
飛行速度はブレイドのＪＦ？（ノーマル）と変わらない。

【上城睦月】
２１歳
仮面ライダーレンゲル
四人目のライダーであり、四年前の戦いで一番剣崎達に苦労をかけて色々と大変だった青年。
だが、自分の所持するアンデッドと一番心を通わせているのも彼であり、引き出せる能力は剣崎に次いで高い。
元の世界での四年間は、自分のスートの上級アンデッドを三体とも解放していた。（ミッドでは嶋のみ解放）
カテゴリーＡの呪縛は完全に克服したため、四人の中で暴走や能力の低下が一切ないライダーである。

幼馴染から彼女になった望美とは相変わらず仲が良く、元の世界で待つ彼女の存在は彼の支えである。

実はこっそり六課メンバーとの交流もある。これについては後日投稿する。

剣崎の鈍感を打ち破る術を、なのは達と日々研究中である。

メンバー全員から一定の好印象。

【仮面ライダーレンゲル】

アンデッドによって製作させられたライダーシステム。

皆に苦労をかける原因がコレである。（実は橘にも原因はあるが）

だが睦月によるカテゴリーＡ『スパイダーアンデッド』の完全封印、そして改良によって、現在は全く問題ない。

一番最後に開発されているため、ブレイドやギャレンとの違いもある。

三枚コンボの『キック技』が無いが、クラブ１０『リモート』によるアンデッドの解放が可能であり、Ａ以外の全てのアンデッドを解放すれば、一気に４８体の戦力を動かせる。

【レンゲル・ジャックフォーム】

上記のブレイド・ギャレン同様にアブゾーバーで強化変身したレンゲルの高機動形態・・・のはずなのだが、向上したのはパワーというなんとも言えないフォーム。

そして飛べない・・・何をどうしようと、ほかのライダーの力？（カリスのフロート）を借りなければ絶対に飛べない。これは『三形態』統一。

だがその分のパワーは三つのＪＦ？（ブレイドの強化ＪＦ含む）の中で一番高い。

【嶋昇／タランチュラアンデッド】
クラブのカテゴリーキングだが、ライダー達に積極的に協力してくれる不思議な人物。
剣崎や始以外のアンデッドの中で一番信頼があるため、剣崎がいなくなったあと真っ先に解放された。
基本的に戦いを好まないが、睦月や剣崎達のためには力を振るう事を惜しまない。
カテゴリーキングであるため戦闘力も高い。
飼っていた（封印後は預かってもらっていた）小鳥のナチュラルは置いてきた・・・はず。

機動六課

・能力等は割愛

【高町なのは】

１９歳

ご存じリリカルなのはシリーズの主人公である。
機動六課では『スターズ分隊』の隊長を務めている。

メンバーの中で唯一、年上の剣崎の事を『一真くん』と呼ぶ人物であるが、その理由は『子供っぽいところがあるから』らしい。
そこのところも含めて剣崎の事が好きである。

元から好意をよせていたが、ホテル・アグスタの時から表面に出るようになった。
剣崎とともにヴィヴィオの様子を見に行った際に買った『ブレイドのぬいぐるみ』を大事にしており、彼女のデスクにはいつも置いてある。皆の分も買ってきている。

【フェイト・テスタロッサ・ハラオウン】

19歳

リリカルなのはシリーズのヒロイン的存在。
かといって剣崎を独占できるわけではないのが現実。

六課では『ライトニング分隊』の隊長であるが、自身の仕事が忙しいので訓練に付き合うことは少ない。
現在はなるべく剣崎のそばにいたいので、頑張って仕事をこなしている。

剣崎にはいつの間にか惹かれていた。
彼の六課加入時に一緒に行動していたのが原因?であると思われる。

剣崎を『一真さん』とさん付けで呼んでいるが、そのうち『一真』になるかもしれない。

なのはが買ってきた『ブレイドのぬいぐるみ』は、なのは同様デスクに置いてあるが、何気に持ち歩くことも多かったりする。

【八神はやて】

１９歳

機動六課の部隊長。

つまりえら～い人である。

デスクワークばかりで疲れているが、たまに剣崎が差し入れを持ってきてくれるのが楽しみ。

彼女の『部隊長命令』によって、六課メンバーだけでなく剣崎も苦労させられている。

剣崎のことをイケメンと評し、好意はよせていたのだが、あまり表面に出すことはなかった。

だが周りがどんどん剣崎に惹かれているため、『これはうかうかしてられへん』と、剣崎争奪戦に参戦。

彼を最初にデートに誘う。

剣崎のことは『一真さん』と呼ぶ。

『ぬいぐるみ』はやはりデスクの上。

【シグナム】

外見年齢１９歳？

絶対１９歳に見えない人である。

だが美人であることに変わりない。

夜天の書の主、はやてに仕える守護騎士（ヴォルケンリッター）。

『ライトニング分隊』の副隊長であり、フェイトとはよく模擬戦をする仲。

バトルマニアの異名は伊達ではなく、剣崎に最初に模擬戦を申し込んだ。だがそれ以降は彼女を含めてだれも模擬戦はしていない。

何気に『アクシデント』が多く、その都度顔を真っ赤にする。

だが相手が剣崎なので、恥ずかしくても頑張る・・・一番の努力人。

剣崎が最初にフラグを立てたのは彼女。

『ぬいぐるみ』を持ち歩いているのだが、いつもどこからか取り出している・・・不思議。

【ヴィータ】

外見年齢８歳

シグナム同様の守護騎士。

『スターズ分隊』の副隊長であり、訓練にもよく顔を出している。

教官資格を持っており、本人も教えることは満更でもない様子。

見た目は少女だが、その力は鉄槌の騎士の名に恥じない。
剣崎を男というか仲間として認識している。

８年前に起きたなのはの事故のことを引きずっており、なのはが無茶をすることは良しとしない。

【シャマル】

外見年齢２２歳

六課屈指のドジッ子美人さんである。
はやてに次いで積極的。

剣崎の笑顔にコロッとやられてしまった。

戦闘の度に剣崎が怪我をするので、一緒にいれることは嬉しいが、不安になってしまう。
医務室が彼女の職場であるため、『ぬいぐるみ』ももちろんそこに置いてある。
いつも眺めているらしい。

因みに、彼女と剣崎、そしてリインが揃うと・・・あら不思議、何故か家族にみえてしまう。

【ザフィーラ】

外見年齢２５歳？

ヴォルケンリッターで唯一の男性。
マッチョに加え、犬耳で尻尾つきである。

剣崎の過去を知った最初の人物であり、しかも本人から直接聞いたのは彼のみ。

今作では人間形態が基本であり、逆に狼形態の方が少ない。

【リインフォース？】

外見年齢１０歳

八神家の末っ子であり、ユニゾンデバイス。
外見より低い精神年齢だが、それは彼女が生まれてからの時間が短い故のこと。

はやて、シグナム、ヴィータとユニゾンできるらしいが、現時点では誰ともユニゾンしていない。

実は大きくなる（人間の少女サイズ）ことが可能であり、剣崎をビックリさせた。
多分、ブレイド、そしてレンゲルとのユニゾンも可能ではないかと思われるが、相性については不明。

飛竜のフリードと共に、剣崎の肩に乗っていることが多い。

【ティアナ・ランスター】

１５歳

『スターズ分隊』に所属する新人の一人。
現時点で一番最後に剣崎を好きになった。
最初こそ剣崎にいい印象を持っていなかったが、自主訓練での協力等があり好意を抱くことになった。

同じタイプの橘に憧れる半面、彼の無茶苦茶さには少々呆れる。
たま～に剣崎を死んだ兄と重ねて『お兄ちゃん』と呼んでしまうことが恥ずかしいらしい（描写無し）が、剣崎はそれを何気に喜んでいる（別に変な意味ではない）。

『ぬいぐるみ』はこっそり持ち歩いている。
理由はスバルに見つかりたくないため。

【スバル・ナカジマ】

１５歳

『スターズ分隊』所属の新人。
原作のもう一人の主人公だが、今作ではそこまでスポットを当てていない。
この世界で剣崎が初めて会った人物であり、その時に命を救われた。
彼に対する思いは、どちらかというと憧れであり、なのは達を応援

する側。

剣崎の作った料理が大好きであり、姉のギンガにも自信を持って進めていた。

ティアナがぬいぐるみを持ち歩いていることはしっかり把握している。

【エリオ・モンディアル】

１０歳

『ライトニング分隊』所属の新人。

新人の中では唯一の男の子のため、異性に囲まれた生活には少々困っていた。

だが剣崎の加入と、それに伴いザフィーラが人間形態で過ごすようになったので、以前よりも気分が楽になった。

だがキャロの積極的な行動には振り回されている。

自身の過去を忘れきれずにいたが、始の言葉で迷いは消えた。

そのため、始を慕っている。

彼は本物の記憶を写したクローンである。

これはフェイトも同様で、その共通点が保護につながる。

同じ槍使いのムッキーと一緒に訓練することもある。これも後日の話で語る。

【キャロ・ル・ルシエ】

１０歳

『ライトニング分隊』所属の新人。
ある集落で生まれた少女だが、その強大な力を恐れられ追放される。
その後フェイトによって保護されるが、同じような立場のエリオとは六課設立まで会ったことはなかったようだ。

彼女の竜召喚の能力はまだ全容を明かしていないが、剣崎を除いたメンバーのほとんどはすでに把握している模様。

普段は飛竜のフリードを連れている。
因みにフリードは剣崎によく懐いているようである。

始を慕っているが、これといった理由が無いはずであり、やはり『彼が少女に好かれる』ということになる。
これでロリコン疑惑は払拭さ！

平成ライダー達

・主役だけを紹介

【五代雄介】

仮面ライダークウガ（未変身）

店長を差し置いてレストランの中心人物。
エプロンのマークが金色なのは彼が特別だから・・・らしい。
ライダーであることは話していないが、『他のメンバー』にはバレバレで、かつ周りがライダーであることに気付いていない。

ライダー大戦唯一の未参加者。

霊石アマダム、そしてそれを埋め込んだベルト・アークルは完治しているが、本人は変身を心のなかで拒んでいる。

そのため、現時点でも彼は変身していない。

【津上翔一】

仮面ライダーアギト

『レストランＡＧＩＴΩ』の店長。
癖のある店員をしっかりまとめている。
剣崎が自主的に辞めなければ、そのまま働いてもらうつもりだったが、彼が今の生活を楽しんでいるので、陰ながら応援。
何故か（ジェイルのお気に入りなのか？）アンノウン型のガジェットが多いため、よく店を空けてはお詫びに手料理を振る舞う。

野菜をふんだんに使った料理も健在。
味も大変良いため、女性に人気である。

【城戸真司】

仮面ライダー龍騎

平成の愛すべきおバカ。
ライダーサイドでは、剣崎の詳しい過去を知っている数少ない人物。
もともと臨時のバイトとしてレストランで働いていたが、剣崎が抜けた穴を塞ぐために入った。
餃子はピカイチだが、総合的には剣崎や店のメンバーには遠く及ばない。
親友？の蓮も来ているようだ。

【乾巧】

仮面ライダーファイズ／ファイズ・ブラスターフォーム

本当の統制者から正真正銘の生を受け、木場勇治とともに参戦。
相変わらず口は悪いが根は優しく、子供達に夢を尋ねながらのんびりしている。オートバシンがファイズブラスターを持ってきていたのには驚いていた。
猫舌も相変わらずのようである。

【日高仁志】／【ヒビキ】

仮面ライダー響鬼

メンバー一番の自由人。
今日もどこかで鍛えてる。
明日夢と京介もついてきているらしく、たまに三人でレストランへ来るようだ。
ホテル・アグスタではルーテシア達と遭遇。
お馴染みのあのポーズを気に入ったルーテシアからは興味をもたれている。

【天道総司】

仮面ライダーカブト／カブト・ハイパーフォーム

相変わらずな人パート？。豆腐にかけては次元世界一・・・と思いきや、『ライダー料理対決』で剣崎の作戦の前に敗れた。
まだ修行が足りないと、日々精進を重ねている。

ヒビキ同様アグスタでルーテシア達と遭遇しており、あのポーズはガリューが気に入った。

彼のチートは更にすごくなった（記憶の消去）

【野上良太郎】

仮面ライダー電王（未変身）

相変わらずパート？。
普段はデンライナーで生活しているので金銭等の心配が無いはずが、オーナーの『働かざる者食うべからず』という言葉で、始の屋台で働くことに。
椅子やテーブルをひっくり返すのは日常茶飯事だが、それより酷いのは橘が近くに居る時。
イマジンズは着ぐるみで客寄せ。
今回の事件について、確実に知っているであろうオーナーが何も言ってくれないため、彼の苦労は増していくばかり。

【紅渡】

仮面ライダーキバ（未変身）

大戦時のライダーサイドの中心人物で、この世界では主にバイオリニストとして活動中。
太牙と名護もついてきているようで、それぞれの分野で活躍中。
士との仲は改善されているが、ライダー達には『ディケイド時』の落ち着いた口調で話す。
デンライナーのオーナー同様、今回の事件の詳細を知る数少ない人物。

【門矢士】

仮面ライダーディケイド（未変身）

今作でのライダー達の中心人物。
どうやら自分の意志で世界を移動できるようになったようで、今回は写真館のメンバーは一人を除いて登場しない。
レストランの中で、五代を除くと唯一変身できていない人物だが、剣崎には正体を明かしている。（ちなみに五代・真司以外のメンバーも剣崎に正体を明かしている）
写真の腕は・・・そのまんまであるが、暖かさを感じるいい写真だと思う。
大雑把な事件の概要は把握しているが、オーナーも渡も離さないので詳しいところまでは聞いていない。
レストランの高ランクデザート担当兼、アイデア係。

【左翔太郎】

仮面ライダーダブル（未変身）

他のメンバーに少し遅れてミッドに来た探偵コンビの左側。
現在は新しく開かれたミッドの遊園地で、迷子センターのお兄さんとして働いている。
迷子になった際に剣崎がお世話になっており、その時に剣崎の事を知った。
どうやら事情はほとんど知らなかったようである。
現在は秘密裏に捜査中。

【フィリップ】／【園咲来人】

仮面ライダーダブル（未変身）

探偵コンビの右側。

何故かあらゆる次元世界（プラス並行世界）の『本棚』を一挙に閲覧できるようになったため、『剣崎一真』に関する本の多さに興味を持った。

剣崎自身にも興味があり、ファングを使って剣崎を捕獲しようとまでしたが、翔太郎によって未遂におわる。

彼の手にかかれば、迷子を確実に親元に届けることなど造作もない・・・らしい。

【剣崎一真】／【黒剣崎】（未登場）

仮面ライダーブレイド（未変身）・ジョーカー（未変身？）

『もう一人の剣崎一真』であり、ディケイドに登場したのはこちら。

存在を匂わせているが、未だ『ハッキリ』とした登場の気配はない。

士は色々『お世話』になっているのでこの剣崎は嫌い。

黒剣崎が剣崎にとっての『未来の姿』なのかどうかはハッキリしていない。

どうやら姿を消しているようで、フィリップも『彼』の本は閲覧できないようになっている。

今作オリジナル（ｎｏｔ作者オリジナル）

【夜闇未来】

仮面ライダーリュウガ

ある人物（黒剣崎）によって連れてこられた剣崎のサポート役。
普段は自身の世界で生活しているが、剣崎に何かあった時は士が無理やり連れてくる。
実は士を慕っているようだが、レストランメンバーには止められているようだ。
彼の相棒はもちろんドラグブラッカーだが・・・喋れる。
もう一度言おう・・・喋れる。
某怪盗とも会ったことがあるが、いろいろあったので彼の事は嫌い。

敵勢力

・現時点での登場人物だけを紹介
・もしかしたらその都度増えるかも

【ジェイル・スカリエッティ】

ご存じマッドサイエンティストで、稀代の次元犯罪者。
変態医師の名に恥じない変態度に加え、フィリップのように知らないものに惹かれるタイプ。

ライダー大好きであり、ぬいぐるみももちろん確保しているさ！！
実は細かいデザインについては彼が手掛けており、そのデータを匿名で送っているらしい。

ライダーについての『ある程度』の知識を有しているが、いったいどこで知ったのかは全く不明。

アンデッドの融合までやってのける程の頭脳の持ち主。
更にはアンデッドや、その他の怪人をモチーフとしたガジェットまで制作し、ライダーには敵わないものの、その戦闘力&物量で六課のメンバーを追い詰め、さらに一時的ながらフェイトの捕獲まで成功させる。

自分の娘・・・特にウーノには頭が上がらない。
彼には原作にもない隠された計画があるようだが・・・？

【ウーノ】

ナンバーズの長女。
超美人・・・しかし敵である。
優しい表情とかしたら絶対に男は落ちる・・・剣崎だって頬を染めるはず。

本来の計画をほったらかしにしがちなジェイルのストッパー。
しかしあまり上手くいってない。
彼女が悪いのではなく、ジェイルがヒドイだけ。

トーレ、クアットロ、セイン、ディエチの話す剣崎に興味がある模様。
こっそりぬいぐるみも確保。

【トーレ】

ナンバーズの三女。
休日編では、ギャレンに気を取られ過ぎてブレイドに捕獲される。
彼女が遅いのではない、ブレイドＪＦ（金）が速過ぎたのだ。

取り調べの時に食べたカツ丼を気に入ったらしい。

流石にぬいぐるみを確保することは無いが、剣崎に対して良いライバル意識を持っている。

【クアットロ】

ナンバーズの四女・・・メガ姉。
メガネは伊達であり、外した方がいい・・・絶対にいい！
腹黒さに加え、甘ったるい喋りで相手の神経を逆なでするが、剣崎には全く通用しなかった。

その腹黒さはナンバーズ・・・いや全キャラ中で最も黒いはずだったが、剣崎との出会いが何かを変えた様子。

接触した四人の中で、一番剣崎を気に入っている。
というか別の感情を抱いてる。

【セイン】

ナンバーズの六女。
ライダーでも対応しきれない能力を持っているが、少しでも体の一部を出せば、剣崎と・・・多分始なら捕まえることが可能。

捕まった三人を助けに来たが剣崎に捕まり、さらにカツ丼まで食べさせてもらった。

彼の優しさに少々惹かれるものがあるらしいが、表面化するほどのものでもない。

【ディエチ】

ナンバーズの十女、だが起動は早いし活動期間もほどほどに長い。
本気ではなかったとはいえ、自身の砲撃をブレイドに軽く防がれたことはショックだったようだ。

取り調べではトーレと同様に喋ろうとしなかったが、カツ丼を食べてからは剣崎と話すようになった。

剣崎にはクアットロと同様の感情を抱くが、敵であることが、その気持ちを少し押さえつけている。

上級アンデッド

【高原】／【イーグルアンデッド】

スペードのカテゴリーJ。
親しい者や、戦闘中の相手には基本的に普通に話すが、初対面の相手や戦闘前の敵に対しては敬語で話すインテリメガネ。

自分の知る動物についての知識を語るのが大好きだが、唐突すぎてついていけない。

剣崎サイドで最初に接触したのはフェイトだが、それ以前にも出現していたようで、すでに多くの局員を葬ってきた。

この世界の彼も、過去にカリスと約束を交わしていたようだ。

【矢沢】／【カプリコーンアンデッド】

スペードのカテゴリーQ。
ほんっと相変わらず卑怯な奴で、この世界の彼も人質作戦を使った。
本来ならもっと男寄りのはずなのだが、この世界ではハートのカテゴリーQ【オーキッドアンデッド】と融合させられているので、カマ言葉に磨き？がかかっている。

別に男が好きで女が嫌いな訳でもないが、フェイトとシグナムには妙にあたっていた。

【キング】／【コーカサスビートルアンデッド】

スペードのカテゴリーK。
現時点で最強の相手。
自分をキングと称するとか・・・イエナンデモアリマセンヨ？
この世界の彼は異様に強い。
更にソリッドシールドの強化、オールオーバーの攻撃力上昇など、
正直大丈夫か？と思えるほど強い。

初戦はブレイドのライトニングソニック、リュウガのドラゴンライダーキックの同時攻撃でやっと撃退させることができたが、本人にはまだ余裕がある模様。

重要人物

【ヴィヴィオ】

剣崎と始が保護したオッドアイの少女。
原作でも重要な位置にいたが、今作でも重要である。
どちらかと言えばＪ・Ｓ事件後の方が重要？
スカリエッティ一派は彼女を狙っており、Ｓランクの砲撃にも耐えられると言われているなど、どう考えても普通ではない。

今作では母親に加え、父親も求めている。
それがどういう意味か・・・丸分かりですねｗ

現在は聖王病院で検査、治療中。

この子に手を出さなかった始は、やはりロリコンではないようだ。
彼が少女を探すのではなく、彼のいるところに少女が集まってる。

リリカルブレイド・人物設定（後書き）

ここでもう一度、念のために。

※この後、人気投票の詳細も投稿しますので、そちらは確実に読んでおいてください。

9月1日以降にこれを読んだ方は、スルーしてくださって構いません。

ちょっぴり番外編～リリブレ人気投票告示！！～（前書き）

ということで説明回ですが、しっかり読んでくださいね。

今回はちょっと大事な会話もあるので、『ちょっぴり番外編』ということになりました。

それではリリカルブレイドちょっぴり番外編、始まります。

ちょっぴり番外編～リリブレ人気投票告示！！～

―六課内会議室―

そこには、普段の会議室の広さでは絶対に入らない人数が集まっていた。

それぞれが談笑する中、六課の部隊長ことはやてが立ち上がる。

「え～それでは、今回の議題について確認するな？」

彼女の言葉で静まる室内。

はやてはそれに満足したように頷くと、手元のモニターを操作して、スクリーンに詳細を映し出す。

「今回皆さんがここに集まったのは、他でもない、作者の要請や」

そう言って私の写真をスクリーンに・・・ってどこで手に入れた！？

とにかく、思わぬところからの要請で戸惑う一同。

ここで一人の男が立ち上がった。

この作品の主人公、剣崎である。

「なあ、俺気になってたんだけどさ」

発言した彼に集まる視線。

剣崎は完全に注目が集まったのを確認すると、一息ついてから言った。

「なんで封印したアンデッドまでここにいるんだよ!!」

途端、剣崎に集まっていたモノが、非難の視線に変わった。

流石に全員からそんな視線を受けてしまうと、剣崎は狼狽えることしかできない。

そんな彼を見て、ある者は睨みつけ、ある者はため息をついて首を横に振り、ある者は苦笑し、そしてあるものは熱い視線に切り替える・・・いやそれはおかしいだろ。

「一真くん、作者さんの要請なんだよ?それに、『皆仲良くね~』ってここに書いてあるし」

なのははは立ち上がると、自分ところに届いた招待状を見せる。

そこにはこう書いてあった。

『〇月〇日、機動六課内の会議室に集合。そこで、『ある事』を発表します。今回は【全員】が集まるので、それを覚悟してください。積もる話もたくさんあるとは思いますが、皆仲良くね~』

「・・・最後だけ妙に軽くないか?それに俺の招待状なんか違うぞ」

剣崎がポケットの中から出した招待状には、こう書かれていた。

『六課内の会議室に集合。』

「でも、意外と話せるよ？」

フェイトが話していたのは・・・高原　（イーグルアンデッド）であった。

よくそんな相手と会話できるものだなぁ・・・。

まさかと思って剣崎が見回すと、いたいた他にも。

・矢沢？（カプリコーンアンデッド）

・キング（コーカサスビートルアンデッド）

・あの時のジョーカー（サウンドステージ編参照）

それぞれが剣崎に敵意を向けることなく、自分の相手と談笑している。

剣崎は・・・諦めた。

「ほんなら、続きや」

はやてが更にモニターを操作。

するとそこに出て来たのは・・・。

「・・・『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ・人気投票』！？」

「送られたデータによると・・・」

―ルール説明―

・参加者（読者）無制限

・一人三つずつの持ち票を、それぞれ別のキャラに投票

・その数を競ってランキングをつける

・投票できるキャラクターは、第四十四話までに出て来た人物に限る（一度でも登場していれば可）

・投票対象はアイテム等も可

・ライダーの名前でも可、だがその場合は同一として加算
例）剣崎一真・・・１０票　仮面ライダーブレイド・・・7票　＝剣崎・・・１７票

・期限は８月３１日まで

「以上♪」

「ノリノリだな・・・」

テンションが上がりまくる　　とは違い、逆にテンションが下が

る剣崎。

そんな彼に後ろから声をかける人物がいた。

「せっかくだから楽しまないと損よ?剣ちゃん♪」

「っけ、剣ちゃん!?」

振り向いた剣崎の前にいたのは、

「お前か・・・クアットロ」

「はーい♪」

ついこの間会ったばかりの、しかもちょっとだけ苦手な相手に遭遇するとは。

見回せば、トーレ、セイン、ディエチの他にも彼女等と同じ格好の少女達の姿。

いや、ある女性だけは違う格好だったが・・・。

「あれはウーノ姉様。私達の頭脳よ」

クアットロが解説を入れると、向こうにいたウーノが頭を下げる。

どうやら彼女にもしっかり聞こえていたようだ。

剣崎も頭を下げた。

だが腑に落ちないことがある。

「人数多いな！」

「出番が無かったというのに、ついてくると言い張って聞かんのだ」

いつの間にかトーレが隣に立っていた。

クアットロは、少し離れた場所ではやてと話している。

（何と言うか・・・タヌキとキツネだな）

そんな事を思い浮かべると、二人が同時にこちらを向いた・・・嫌な笑みを浮かべて。

剣崎が後ずさると、誰かにぶつかってしまった。

「あっ、ゴメン！」

「何、気にする事は・・・」

ぶつかったのは白衣の男性。

紫色の髪に、金色の目・・・。

「じ、ジェイル・スカリエッティ？」

「ああ。こんなところでアレだが、初めまして。剣崎一真君」

そう言って手を差し出すジェイル。

一瞬迷うものの、剣崎も手を差し出した。

しっかり握手を交わすと、それからは他愛のない話で盛り上がった。
途中、剣崎を研究する云々の話が出たが、そこはスルーして、それぞれの『家族』についての話を続ける。
そんな中、ジェイルが表情を暗くして、剣崎に話す。
「こんな時にすまないが、これだけは言っておきたい」
雰囲気の変わった彼を見て、剣崎も表情を硬くする。
「モノリスは・・・私のもとにある」
「!?」
「そしてもう一つ」
「・・・なんだ?」
イラつく剣崎を押さえ、ジェイルは言った。
「私にもしものことがあった時・・・娘たちを頼むよ」
「・・・何言って!?」
問いただそうとした剣崎の腕は空を切った。
見ればジェイルは壁に潜っていくかのように、ゆっくりと姿を消しつつあった・・・セインのディープダイバーだろう。
「これ以上は、あそこにいる執務官殿が許してくれないようなのでね。ここで去るとするよ」
「おい!ちょっと待てよ!!」

「とにかくだ、今の事・・・保障してくれるかい？」

「・・・ああ」

剣崎の返答を聞くと、ジェイルは一瞬だけ笑顔になると、すぐに表情を引き締めた。

「それではまた会おう。仮面ライダーブレイド」

いかにも悪役のような表情、そして口ぶりでジェイルが言うと、剣崎も挑戦的な顔で頷いた。

「一真くん！最後に主役が挨拶しないと！」

なのはが手を振っている。

先程のジェイルの言葉が気になっていた剣崎だが、すぐに切り替えると、いつの間にか渡されていたマイクを持ち、『カメラ目線』で話し出す。

「それでは！これで人気投票の説明を終えたいと思います！！」

剣崎がそう言うと、すぐにマイクを橘がふんだくる。

「読者の皆が協力してくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！」

悲壮な表情になった橘から、今度は始がもぎ取った。

「誰が投票してくれても構わない。参加してくれる人数が大切だからな」

始は睦月にマイクを投げる。

「おっとっと、皆さんの投票待ってます！！もちろん俺に投票してくれますよね！」

こうして剣崎にマイクが帰ってくるが、彼の周りにはジェイル達を除いた登場人物たちが揃っていた。

「締め切りは８月３１日ですからね！！」

「それでは～」

一斉に息を吸い込む

『よろしくお願いしま～す！！』

ちょっぴり番外編～リリブレ人気投票告示！！～（後書き）

※次回予告もあります。

学校生活も再開するので、すいません。次話の投稿は遅いと9月になってしまいます。

この頃はご迷惑をかけてばかりですね・・・すいません。

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

翔一「いらっしゃいませ～って橘さん、今日はお一人ですか？」

ティアナ「あ、睦月さん！大丈夫です」

エリオ＆キャロ「「始さん！おはようございます！」」

次回『三人の生活』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　作者）次回は陽炎丸さんのリクエストで、橘、睦月、始の三人の生活にスポットを当てます！

（；ｏｗｏ）知られざる三人の生活はいかに！？

（；ＯＭＯ）だから次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

ちょっぴり番外編パート？～リリブレ人気投票結果発表！！～（前書き）

※次回予告は前にやってのでカット

先にこっちを投稿します！

なんか誤字とかありそうで怖いですが、多分正確にできたと思います。

皆さんのご協力のおかげで、人気投票も無事終了しました。

ありがとうございました！

因みに私・・・つい最近からツイッターを始めました。

・・・いえ、なんでもないんです。

どうせパソコンからじゃないとアクセスできませんし。

それでは、

リリカルブレイドちょっぴり番外編パート？、始まります。

ちょっぴり番外編パート？～リリブレ人気投票結果発表！！～

※ランクインしなかった人物ももちろん登場します。そして地の文は少ないです。

―ホテル・アグスタ―

ホテル内の会場・・・そこでは、以前六課に集まった時よりも数が増えた集団がいた。
男性も女性も着飾って、普段とは全く違った印象の面々が談笑している。

剣崎もまた、以前アグスタに来た時の格好で一人立っていた。

「やあ、また会ったね」
「・・・ああ」

剣崎に話しかけた男・・・ジェイルだが、剣崎の反応は鈍い。
この状態では雑談も何もないと判断したジェイル、だが彼も剣崎以外の話し相手がいないため、彼の隣で突っ立ってみることにした。

ジェイルの視界の端に映るものがあった。
登場人物たちがこの中で唯一面識のない人物・・・作者というか私である。
「作者が来たという事は、もうそろそろだ」
「ピクッ）・・・何？」
剣崎がようやく反応を示す。
彼の目は真っすぐ作者に向いており・・・あれ？血走ってない？
「え～、それでは・・・」
一言で会場が静まり、照明も全て消される。
「『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ人気投票・結果発表』を開始しま～す！！」

「今回の司会を務めさせていただきます。作者の『元副会長』です！！」

―パチパチパチパチ！―

「それにしても、まさかこんなに票が集まるだなんて・・・」

壇上で感慨にふけりだす作者。

だがその後すぐにブーイングが沸き起こり、急いで切り替える。

「すいません。では今回の人気投票のデータをご覧ください」

―人気投票データ・総合―

参加者・・・２３名

票・・・６７票

※６９じゃないのは計算ミスではありません。

ランクインキャラというか得票キャラ・・・２１名

―ガヤガヤガヤ・・・―

得票キャラの表示が出た瞬間、会場のざわめきがさらに増える。
作者が咳払いをするとそれはすぐに収まり、結果発表を静かに待つ。

「はい、それでは結果発表に移る・・・その前に、『賞』について話しておきましょうか」

参加者全員が首を傾げる。
『そんなこと言ってなかったじゃないか・・・』
という声も聞こえてくる・・・が、
それも当然。
書いている今、決めたのだから。

「『男性陣？（剣崎以外）』でのトップの方は、一話限りの主人公をやってもらい」

「女性陣のトップの方は、もれなく剣崎からの熱いキスが待っておりま～す！」

この発言の瞬間、会場のボルテージがマックスに達してしまった。
まさかこのタイミングでマックスになるとは・・・。

だがここでこの話に物申す人物が一人・・・。

「ちょっと待てよ！俺はどうすんだ！？」

この賞の恩恵を唯一受けられない人物・・・剣崎。

いや、キスをもらえるなら十分じゃない？

「十分じゃない！俺一人がもらえる賞はどうしたんだよ！！」

詰め寄る剣崎だが、作者は涼しい顔で、

「だって普段から得してるじゃん」

と返す。

そして剣崎の耳元に顔を寄せると、彼にしか聞こえないように言った。

「ボソッ・・・シグナムのアレを揉みしだいたのは、どこのどなた様でしたかね～？」

流石の剣崎もこれには反論できない。

事故とはいえ事実には変わりなく、あの時の感触も実はハッキリと・・・。

自分の手を見ながらぶつぶつと呟く剣崎に意地の悪い笑みを向けると、作者はモニターを操作する。

「反論する剣崎が自分の世界に入っている隙に、結果発表を始めましょうか！！」

「それでは２１位から！これは得票が一票だけの人が多いので、同率での２１位となります！」

―人気投票・第２１位―

高町なのは

シャマル

リインフォース？

ガジェット？・？・？

夜闇未来

左翔太郎

ブレイドのぬいぐるみ

―以上―

「私・・・元の主人公なのに・・・それに一真くんからのキス・・・」

「はいソコ、メタな発言しない」

崩れ落ちるなのは。

「いくらブレイドでも・・・ぬいぐるみと同じなのね」

隣を見ると、シャマルもなのは程ではないが、結構落ち込んでいるようだ。

だが他はと言えば・・・

「リ、リインに入れてくれた人がいるですか!?ありがとうです～♪」

リインはランクインしたことを手放しで喜んでいるし、

『ウィーン、ウィウィーン』

ガジェットたちは喜びを動きで表そうとしているし、

「よかった・・・入れて」

未来は軽く泣いているし、

「どうだフィリップ！」

翔太郎は相棒に自慢して、ジト目で睨まれている。

「続きまして、第１２位の発表に移ります！同率で二票、二名がランクイン！！」

―人気投票・第１２位―

城戸真司

矢沢・カプリコーンアンデッド

―以上―

「っしゃあ！！やっぱ人気者はつらいよ～」

「フォォォォォウ！！悪いね～、人気でさぁ！！」

若干調子に乗っている二人。

この後、真司は鉄拳で黙らされ、矢沢は封印されました（笑）

「え～、おバカ二人が沈黙したので再開します。続いては第１０位！得票３で四名のランクイン！！」

―人気投票・第１０位―

八神はやて

ティアナ・ランスター

五代雄介

門矢士

―以上―

「ええ！ここで私なんか！？」

かなり驚いた顔ではやてが声を上げ、

「悔しいけど・・・なんか納得・・・」

ちょっと俯いたティアナは結果を受け入れる。

女性陣が少なからずショックをうけている。

「よかった～。出番ないから忘れられてるかと思ってたけど・・・

みんなありがとう！」

確かに空気になりつつあった五代が、カメラ目線でサムズアップ。

「・・・っとここで俺だと？ちっ、次回から『リリカルディケイド』

が始まるもんだと思ってたぜ」

それまで参加者をカメラに収めていた士は、賞を曲解しながらも片

手をあげて歓声にこたえる。

男性陣はそれほどでもないようだ。

すでに半分以上の結果が発表されている。

ランクインしている人物たちは安心しているが、それ以外は気が気でない。

自分たちが上位に食い込んでいる可能性を否定したいわけではないが、それでもランク外だった場合を考えると・・・という事。

そして『彼女』は、それが最も顕著であった。

（なのはもはやても、もうでちゃってる・・・私は・・・）

フェイト・テスタロッサ・ハラオウン・・・彼女はこの中で一番自信を持ってない人物であった。

ただでさえ、なのはとはやてが出てしまっているのだ。

あの二人の上を行くことなど、自分には不可能だと考えていた。

「次は第6位の発表です！ここからは一人づつなので、私が発表していきたいと思います！」

モニターを切り替え、発表した人物の顔写真が大きく表示されるようにする。

「人気投票、第6位は・・・」

「遅れて来た四人目!!仮面ライダーレンゲル、上条睦月!!!」

「お、俺が6位にランクインしてる・・・や、やったぁ!!」

まさか自分がここに入れるとは思っていなかった睦月が、結果を噛み締めるように・・・だがはっきりと喜んでいる。

しかし3人は違った。

「睦月が6位?間違ってるんじゃないか?」

「ああ、睦月が6位など信じられないな」

「アイツが6位なはずがない」

剣崎、橘、始がまさかの発言。
しかもカードを構えながら。

「ちょっと待ってくださいよ!?文句なら皆さんに・・・ウワァァァァ!!」

「さて、3人による腹いせが済んだところで・・・第5位の発表です!」

ここからは正真正銘の上位ランク・・・緊張が増していく。
肩で息をしていた剣崎達も、一斉に姿勢を正した。

「得票5の第5位は・・・」

「何気に目立つもう一人の主人公?仮面ライダーカリス、相川始だぁ!!」

「!!」

「「始だと!?」」

結果に驚いた始・・・だけでなく、剣崎と橘も同じくらい目を見開いていた。

先程と同じようにカードを取り出す二人だが、始が取り出した二枚のカードの片方が『ハートのK』であることを確認してしまい、急いでしまいこんだ。

いくら二人がかりとはいえ、自分たちもただでは済まないのは明白であった。

そして再びフェイトはというと・・・

(ああ・・・相川さんも入ってる。もうダメかも・・・)

ガックリとうなだれるフェイト。

そこに近づく人物が一人。

「テスタロッサ、どのような結果だろうがしっかりと受け止めなけ

れば、一真に嫌われるぞ？」

「シグナム・・・」

フェイト同様、未だに名前を呼ばれていないシグナム。
ああ言ってはいるが、内心ではかなり動揺している。
それでも気丈でいようと、彼女なりに努力しているのだ。

「まあ、肝心の一真がアレではあるのだが・・・」

スッと視線を横に向ければ、やけ食いする橘のよこで体操座りをし、
のの字を書いている剣崎の姿。

それを見ると、フェイトも少しだけ気が楽になって様で、顔を上げ
て結果をまつ。

「第４位の発表です！！」

「得票６の第４位は・・・・」

「実はヒロイン的な場面が多い！？フェイト・テスタロッサ・ハラオウン！！」

「・・・・？」

「おい、テスタロッサ！しっかりしろ！」

いきなりのそれで状況を理解しきれていないフェイトの肩を、シグナムが揺さぶる。

「私・・・入れたの？」

「ああ、お前が４位だ」

「そっか・・・うぅ・・えぐっ・・・」

「泣くほどでもないだろ・・・いや、よかったな」

「うん、うん！・・・うぇぇん・・・」

泣き出してしまったフェイトの背中を、ぎこちないながらも軽くたたくシグナム。

だが実際はかなり動揺していた。

フェイトが４位に入ったという事は、現在は彼女が女性陣トップになる。

つまり、剣崎の『熱いキス（笑）』は、フェイトが受けることに・・・。

「それではついにトップ3の発表!!」

「まずは第3位!得票7でこの順位をもぎ取ったのは・・・」

「出番がある回の感想では必ず話題に!?人気過ぎて私もビックリな男!!仮面ライダーギャレン、橘朔也!!!!」

「さ、サヨゴォォォォォ!!!!」

天国の彼女に向かって叫びだす橘。
隣の剣崎はさらにふて腐れる。
どうやら攻撃する気にもならないようだ。

「ほ、ほら。橘さんもランクインしたじゃないですか・・・ガクッ」

やっと復活したと思ったムッキーも、またすぐに倒れる。

「いいよな、3人とも入ってるし・・・どうせ俺なんか」

「お前、やはりいい目をしているな。俺の兄弟になれ」

「地獄(こっち)も兄貴といれば楽しいもんだ・・・」

「え～、変な兄弟に勧誘されている剣崎は放って、次いきましょうか！」

「第2位の発表です！果たして男性トップの橘、女性トップのフェイトを抜く人物はだれなのか！？」

「得票8の第2位は・・・」

「最初にフラグを立てられて、さらにハプニングも起こりがちなこの人!!シグナムだぁぁぁぁぁっ!!」

「わ、私か!?」

流石のシグナムもビックリである。

まさかここにきて2位になれるとは、予想だにしなかっただろう。

賞のことをすっかり忘れて、彼女はなるべく顔に出さないように喜んだ。

忘れているので、周りの女性陣からの視線の意味に気付いていないが・・・。

とにかく、

―残るはあと一枠―

剣崎と地獄兄弟の3人を除いた会場の全員が、固唾をのんで壇上の作者を見る。

この最後の一枠に入った人物が、この作品で一番となる。

未だに呼ばれていない者は、それぞれが『自分が一番ではないか』と、周りにアピールする。

例えばこの人のように、

「フッ、ここまで来たら俺しかいないだろう。何せ一番強いのは俺だからな！」

な～んてことを言って周りからブーイングを食らう人もいる。

そんなこんなで再び騒ぎ出す参加者を、作者が再び咳払いで鎮める。

「よし、それでは最後の一人・・・第1位の発表だぁぁぁぁ！！」

―オオ～！！―

「この人物、なんと得票13！！一票違いの2位以下よりも抜きん出ています！！」

「そんな栄冠の第1位に輝いたのは・・・」

「やっぱり『彼』しかいないでしょ！この小説の主人公！！」

「仮面ライダーブレイド！剣崎一真ぁぁぁぁ！！！」

「・・・うぇ？」

「そしてこの時点で受賞者も確定！！男性陣は橘朔也、女性陣ではシグナムがトップだぁぁ！！」

「「はっ！すっかり忘れていた！！」」

剣崎は拍子抜けしたような顔で、残る二人は受けた『賞』についてを思い出し、片方は満足げに、もう片方は顔を赤くしていた。

「さて、見事第1位に輝いた剣崎に、何かコメントを頂きましょうか！」

作者の言葉に、剣崎の周りにいた人物達―（ジェイル、士、真司、翔太郎）が、未だにボーッとしていた彼を抱えて壇上まで運んで行く。

運ばれ、立たされ、マイクを握らされたところで、剣崎もようやく理解したようだが、どうやら嬉しさよりも戸惑いが先にきているよ

うだ。

壇上でしどろもどろになっている剣崎・・・そんな彼に、士からの声がかかる。

・・・もちろんあのＢＧＭとともに

「一真！お前はこの結果に満足いかないのか？いや、満足なはずだ。そうじゃないならあんなに拗ねるわけないからな」

「お前はこの物語の主人公で、たった今、皆に認められる存在になった」

「そんなお前が胸を張らなくてどうする！グダグダしてると、その座取っちまうぞ！！」

「俺は・・・通りすがりの仮面ライダーは、いつでもそこに立つ準備ができてるんだ！覚えておけ！！」

士の言葉に、周りも頷く。

そして剣崎もようやく踏ん切りがついた。
士を見て首をゆっくりと縦に振り、深呼吸。
そしてマイクを握りなおして喋りだす。

「あ、あの・・・ありがとうございます！まさか俺が1位になるなんて思ってなくて・・・でも！ホントに嬉しい！！」

「こんな俺でよければ・・・これからも、よろしくお願いします」

頭を下げる剣崎。
そんな彼に、会場中から拍手が送られる。

ちょっとしてから頭を上げた剣崎の顔は、かなり恥ずかしそうだった。

「は～い！それよりも、まだお楽しみが残ってるじゃないかぁ」

剣崎とシグナムを見ながら作者は言った。
その瞬間、会場からは歓声とブーイングと・・・まあとっても騒がしい状態に。

二人は顔を真っ赤に染め、互いに見つめあっていたり。

「あ、あぁ・・・シグナム？」

正直逃げたくて仕方がない剣崎。
だがシグナムの呟きで動きを止めた。

「ボソッ・・・初めてだ」
「うぇ？」

「男にこういうことをされるというのは初めてだから・・・ど、どこでもいいんだ！だから・・・」

「き、キス・・・してくれないか？」

（私は何という事を言ってしまったんだ・・・あぁっ！！）

頭の中で悶絶するシグナム。
会場の状態を考えるに、今の発言を聞いていたのは剣崎だけだろう。

いや、それが逆に問題であるのだが・・・。

シグナムの発言に驚いた剣崎だったが、彼女が望んでいるのなら・・・と決意を固めた。

「わかった」
「！？」

「いや・・・ほっぺでいいなら・・・うん」
「も、もちろんだ！」

剣崎はシグナムの反応を確かめると、ゆっくりと彼女に近づいていく。
周りも、動きを見せた二人に集中して、誰も動かない・・・一人を除いて。

剣崎が目に前に来たことを確認すると、シグナムは少しきつめに目を閉じた。

そんな彼女の反応に内心苦笑いしつつ、だがやはり緊張しながら、剣崎もゆっくりと顔を寄せる。

二人の顔の距離が１０センチ・・・９センチ・・・８センチ・・・。

７センチ・・・６センチ・・・５セ

―ドンッ―

「「うわっ！？」」

―ドッシ～ン―

突然倒れこむ二人・・・剣崎が立っていた場所のすぐ後ろにいたのは・・・唯一動いていたこの人。

「やっぱり、こういうシーンはアクシデントがあってこそでしょ♪」

作者・・・そう、彼が思いっきり剣崎を押したのだ。

（いってぇ・・・・・・って、ん？）

痛みで顔を顰めた剣崎だが、唇の感覚に違和感を感じて眉を寄せる。

そしてゆっくりと目を開いた先には・・・

「んっ・・・んんんん（う、うそだろ）」

自分の顔と真っすぐに向かい合ったシグナムの顔。

そして二人の唇はもちろん、

―しっかりと重ねられていた―

剣崎がシグナムを抱きしめるような状態で、しかも頬ではなく唇。

会場のボルテージのＭａｘが更新されるのも、無理はなかった。

そして二人はと言うと、

―呆気にとられて全く動いていなかった―

目を見開いているだけで、体も顔も動かそうとしない二人。

そんな姿は、傍から見れば・・・その・・・感触を味わっているように見えるわけで、それが面白くない人達には十分な起爆剤となり・・・。

―ジャキン―

「二人とも・・・いつまでそうしてるのかな？」

なのはの腹の底が冷えるような声によって、ようやく二人も飛び起

きる。
だが互いの顔を見ようとせず、背けあって顔を染める。
そんな姿が余計に面白くないなのは・・・そして隣に並んだはやては、ゆっくりと光を集める。

「ま、待つんだ二人とも！こんなところでそんな魔法・・・」

「「うるさい！！」」

止めに入ろうとした作者を一声で下がらせる。

「いや、これは事故だって！っていうかそこのソイツが！！」

流石の剣崎も作者を指差しながら弁解を始める。

「確かに作者さんも悪ふざけが過ぎるよ・・・でもね」

「二人ともお楽しみやったように見えたんやけどなぁ？」

瞬間的に視線を逸らす二人・・・え？ホントにそうだったの！？

「ちょっとだけ・・・柔かかったなぁって・・・なんちゃって」

―ビキッ―

何かが割れるような嫌な音が聞こえた・・・気がした。

「「グスンッ・・・一度あの世で頭冷やせぇぇぇっ！！」」

「ふ、二人らしくないぞ！・・・あぁ・・・ウソダドンドコドォォォォン！！！」

―ドゴォォォォン―

「ええ・・・こ、これにて結果発表を終わります。ご協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました。・・・ガクッ」

「こ、これからも、『リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ』をよろしくな・・・ガクッ」

こうして、波乱の結果発表は幕を閉じたのであった・・・チャンチャン♪

番外編～三人の休日～（前書き）

※前回のイベントは、決してヒロイン決定などではないことをご了承ください。
シグナムにそういうイベントが多いだけで、正直『誰がヒロイン？』等は考えてません。

ちょっとサブタイを予告から変更しました。

相も変わらず執筆スピードが遅いので、四～五日で投稿できるように頑張りたいと思います。

次回から本編に戻って、もう一つの番外編（異世界もの）はまた今度にします。
あれ実は『三つ目の次回作』に関係するので、しっかり書いときたいんですよ。

『あ、ストック溜まってる』と思ったら、ソレかなり先の話でした・・・。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

番外編～三人の休日～

仮面ライダーブレイド、剣崎一真の生活というのは皆さんご存知だろう。
食堂で働いて皆のご飯をつくり、たまにある失言でみんなに粛清され、それでも相手の気持ちに気付かなくて・・・。
まあ挙げたらキリがない。

だが他の三人のライダーはどうだろうか？
橘、始、睦月・・・この三人は、剣崎があんなことやこんなことになっている間、一体何をしているのだろう。

今回は、そんなお話

―カランカラン―

「いらっしゃいませ～って橘さん、今日はお一人ですか？」

『とある店』に足を踏み入れた橘。
そこの店長に出迎えられ、カウンター席に座る。

「ああ、二人は出かけていてな」

『いつものパスタ』を頼み、出された水を飲みながらキッチンを見る。
そこの光景は彼にとっては楽園だった。
料理、料理、料理・・・そして食材に至るまでが、彼の目には素晴らしいものに見えた。

橘朔也は食いしん坊『だった』わけではない。
確かに彼は悪食、というか味覚障害だろうか・・・でゲテモノも喜んで食べるような男だ。
だがそこまで量を意識する人物では無かった。

なら何故？

それは、元の世界での生活習慣に関係していた。

剣崎が何も言わずに消えてから四年間、彼は必死に研究を重ねた。
モノリスから始を通して、剣崎の行方、そして自分たちも行くことになることを知っていた橘は、剣崎を人間に戻すために、自分の体を顧みない生活を送っていた。

所長の烏丸が止めても無駄。

橘は自分の非力さと迂闊さが、剣崎にあのような決断をさせたと思っていたのだ。

冷静な判断を下せていれば、カテゴリーキングを封印する前に他のアンデッドを解放できていただろう。

それをぶち壊し、友達思いの剣崎が選べる選択肢を無くしてしまったことに、彼は深く後悔していた。

そんな彼の生活は、食事も睡眠も最低限・・・いや足りていない程の毎日。

そんな生活が長く続くはずもなく、ある日彼は倒れた。

病院のベットの上でも研究をしようとするのでパソコンは没収。

その代わりに、大量の見舞品が置かれたのであった。

最初こそ手を着けなかったが、空腹に勝てなかった橘は、ついに手をつけた。

空腹は最高の調味料とはよく言ったものである。

橘は食べた、食べた・・・そして食べた。

これがスタートであり、退院後は、

極限まで腹を減らす↓ひたすら食べる

を繰り返していた。
だが人間には慣れがある。
さらに増える食事量、短くなるインターバル・・・そして現在に至るのであった。

「ウワッ！やっちゃた・・・」

突然厨房から聞こえた声に反応し、顔を上げると

（あれは確か・・・城戸だったか）

赤色で龍のマークの入ったエプロンを着た青年、城戸真司が手を額に当てていた。

どうやら料理を焦がしてしまったようだ。
それも徹底的に。

誰が見ても『え、何これ』と言うであろうソレだが、真司のまわりは『またか』という表情。

「餃子なら失敗しないんだけどなぁ・・・って橘さん！？」

真司が気配に気付いて振り向くと、そこには橘が箸を持って立っていた。

そして彼はおもむろに腕を伸ばし、箸でソレを掴んだ。
驚いた真司が止める間もなく、口に入れて咀嚼しだす橘。
厨房の全員が見つめる中、橘は一回頷いて、真司に向かって笑顔で言った。

「コレクッテモイイカナ？」

「「「「「ホントに美味いんですか（のか）！？」」」」」

―上城睦月の場合―

『ある建物』の正面から堂々と入る睦月。
見知ったオレンジの髪を見つけたので声をかけた。

「こんにちは～、剣崎さんは居ませんよね？」

「あ、上城さん！大丈夫です」

そう、ここは・・・

―機動六課であった―

六課内の会議室。

ここに集まった『七人』は、それぞれ神妙な表情で話し合っている。

「それで、剣崎さんはどうなりました?」

この場で唯一の男性である睦月が、他の六人に尋ねた。

「これと言った進展無し、手強いわぁ」

「もう!鈍感すぎるよ」

「ちょっと悔しいね」

「テスタロッサの言う通りだ。魅力が無いのだろうか」

「でも顔を赤らめたりするじゃない?」

「でも、どこか一歩引いてるような感じですね」

『う~ん・・・』と頭を抱える六人。

睦月は心の中でため息をついた。

剣崎の鈍感さにはほとほと呆れる。

まあ本人には言えないのだが・・・。

仮面ライダーとしては尊敬できるのだが、それ以外となるとどうもアレである。

こんないい女の子達？（例外あり）に囲まれて、しかも好意を寄せられているのに気付かない彼を攻略するのは至難の業だ。

（どうにかできないものか・・・）

一分ほど考えていた睦月は・・・突然腹黒くなった。

「フフフ・・・これなら完璧だ」

不気味に笑う睦月の周りに六人が集まる。

『いったいどんな案が！？』

「こうすれば剣崎さんと言えど・・・ゴニョゴニョ」

さて、睦月の考え出した計画とはなんだったのか。

必ず話す時が来るだろう・・・。

―その頃建物の外では―

「「始さん！おはようございます！」」

「おはよう」

始とエリオ、そしてキャロの三人は、今日のような剣崎のいない日には一緒に訓練を行っている。

剣崎のいない日＝睦月達が話し合っている日なので、残っているのはヴィータだけ。

そこでヴィータが始に相談したところ、彼は『暇だからな』と訓練を請け負ってくれた。

たまに睦月が、同じ槍使いのエリオと訓練をする時があるので、その時はキャロと二人である。

かといって彼が教えることはないので、もっぱら実戦訓練だったが。

「俺に攻撃を当てれるか？」

『Ｃｈａｎｇｅ』

「やってみせます！」

「今日こそは！」

「「セットアップ！！」」

―1時間後―

「「・・・」」

二人はすっかり項垂れていた。
ここまでショックを受けられると、正直始も対応に困ってしまう。

「ショックなのはわかるが・・・当てられると俺の対場がない」

すこ～し冷ために言う始。
だが二人にはこれでいいのだ。

「なら次こそは頑張ります！」

「頑張ろうね！エリオ君、フリード！」

「キュク！」

やはり子供の相手が一番勤まるのは、彼だった。

「さて、結局俺も来てしまったが・・・」

六課の前で立ちすくむ橘。
長い昼食の後、彼もこうして六課に訪れていた。

すでに許可証は持っている（三人がはやてに作ってもらった）ので、出入りは自由だ。
それにそんなことをしなくとも、既に六課の職員とは顔なじみであるため、正直許可証の提示はいらない。

だが、ダイアの１０のような、様々な姿に容易く変われるアンデッド（しかも能力まで）がいるのだから・・・と、三人ともあえてしっかりとした形をとる。

そういう相手が来た場合、始なら気付けると思っていたが、彼は天音のそれにしか気付いていなかった（他は戦闘中だったから?）ため、多分剣崎も気付けない・・・と思う。

「あ！たっちばなさ～ん！！こんにちは！！」

「ああ」

六課の中でぶらぶらしていると、ちょうど仕事にひと段落がついたスバルが出てくる。

ここで橘はふと思った。

多分スバルは慣れないデスクワークで少々ストレスが溜まっているだろう。

←

ティアナは今、睦月たちと会議中だから、外で体を動かすにしろ一人。

←

そして自分も、ちょうど体を動かしたいと思っていたところだ。

「外に行くぞ」

「え？」

「フッ・・・実戦訓練だ」

「！・・・はいっ！」

「どうした！そんな直線的な動きでは、相手に避けて欲しいと言っているようなものだぞ！！」

「クッ！でりゃぁぁぁっ！！」

激しい気合いとともに繰り出されるスバルの拳を、橘・・・ギャレンは容易く躱していく。
スバルはパワーもスピードもあるが、如何せん動きが直線だ。
相手が自分より強ければ強いほど、それは致命的なものになる。

あの剣崎だって、最初は動きが直線的で、相手に翻弄されるばかりであった。
特にタックルを使った暁には・・・ってそこだけは今もそうだったぞ。

とにかく一度止めて、スバルに『直線の危険』について話していく。

せっかく『ウイングロード』という力があるのだ。
あれを更に使いこなせれば、彼女の戦略の幅は広がる。

彼女のそれが広がれば、それはティアナが組み立てる作戦の幅も広がるということに繋がり、最終的には六課の戦力としてのそれに・・・というわけだ。

最初こそ説教をもらっているような表情をしていたスバルも、次第に事の重要さに気付いたようで、今は食い入るように橘の話を聞いている。

特にティアナの作戦云々の話になった時が一番集中していた。

橘は再びふと思った。

スバルはティアナを、『ライバル』として見たことがあるのだろうか？

「少し聞きたいことがあるんだが・・・」

「はい！なんでしょうか？」

「君は彼女・・・ティアナを、どう思う？」

突然の質問の本質が見えず、首を傾げるスバル。

「隣を走る仲間・・・それはよくわかっている。君たちの絆は強い」

「だが、ライバルとしてはどうだ？共にではなく競い合う・・・そういう風に考えたことはあるのか？」

彼の言葉に、スバルはハッとした表情になる。

いつでも一緒に・・・という意識が強かったが、ライバル・・・ティアナはどう考えているのだろうか。

「ちなみにだが、ティアナの方は、君をパートナーとしてだけでなく、ライバルとしても考えているぞ」

「ティアが・・・」

「彼女は君を超えようと頑張っている・・・それは、君も同じではないか？」

「ライバルは『敵』ではない。ともに高めあうことができる大切な存在だ」

「高めあう・・・私とティアが」

ゆっくりと噛み締めるように呟くスバルに、橘は笑顔で言った。

「二人ならそれができる。何せ俺が見込んだんだ、剣崎や睦月のように君たちも強くなる」

「え？一真さんと上条さんって橘さんが？」

「ああ、二人は俺が育てた」

胸を張って自慢げに語る橘。

いつもと違う彼だが、二人の存在は彼にとって大きいのだろう。

いや、始が大したことがないというわけではない。

だって橘はほとんど始に関与していないのだから。

「橘さん、私・・・ティアを親友として・・・ライバルとして走ります！！」

「そうか」

満足げに頷くギャレン。
そして休憩終了と言わんばかりに構え、『アブゾーバー』に手を伸ばす。

スバルがギョッとして止めようとするが、ギャレンは『これくらいは想定しなければな』と構わずラウズした。

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｑｕｅｅｎ』

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

もうこの時点でスバルはガチガチなのに、ギャレンは止めの一枚をラウズした。

『Ｇｅｍｉｎｉ』

分身したギャレンＪＦは、一方にギャレンラウザーを渡して、渡した方は見ているだけの状態になった。

だがギャレン曰く、『もしかしたら参加するかもしれんな』とのことで、

これで、

・二丁拳銃

・銃剣
・分身（力は押さえてあるのでラウザー以外、つまり本体は幻影）
・将来的に考えて飛行

というティアナ対策が完成した。

まあ、この後スバルがボロボロになったのは言うまでもないが、その代わり、後日訓練でスバルがティアナに勝利した。

そのため対抗心を燃やしたティアナによって、剣崎が『ジャックフォーム&ビート縛り』で訓練に付き合わされたらしいが・・・。

―そんなこんなでそれぞれが六課で過ごし初めて数時間後―

『皆さん！一真さんが帰ってきました！！』

突如かかった放送で、三人の動きが止まる。
だがそれも一瞬で、すぐさま動き出した。

「もう帰ってきた！とにかく、この作戦なら剣崎さんだって落ちる

はず！！」

「二人とも、次を楽しみにしてるぞ」

「今日はここまでか。だがこれで勝てるはずだ！！」

それぞれの相手に声をかけ、六課の隊舎横に停めてあったバイクにまたがる。

六課メンバーによる見送りの中、三人は去っていった。

「ふんふんふ～ん♪・・・って皆なんでこんなところにいるんだ？」

『なんでもない（です）！！』

「え、あ・・・はい。もう気にしません・・・」

こうして、橘たちの休日は流れていくのだった。

番外編～三人の休日～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

シグナム「ところで一真、何か腑に落ちないという顔をしているな」

剣崎「・・・冗談、だからそれ（レヴァンティン）向けないで。バイク事故はホント酷いから」

なのは「ああ、こんなところにいたの」

ヴィヴィオ「パパと・・・ママがいないの」

はやて「そやね、まあええタイミングかな。隊長三人で・・・あと一真さんも連れて行こか」

次回『え？ぬいぐるみ気に入られてる！？』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（ 作者）ホント酷いよこの頃・・・。話書きたいけど、ＳｔｒｉｋｅｒＳを見直す時間が無いから先の展開がうろ覚えすぎて書けないし。

（；ｏｗｏ）確かに・・・ある部分までは原作沿いだもんな

（；作者）しかも予言まだ決まりきってないし・・・。

（；ＯＨＯ）致命的ですね・・・。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）そんなことで大丈夫なのか？

（；ＯＭＯ）それは置いておき、次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十二話～え？ぬいぐるみ気に入られてる！？～（前書き）

はい、第四十二話です！

やっと本編に戻ってきましたねｗ
そしてやっとヴィヴィオがまともに喋るｗ

でもスピードはまだまだ・・・と。
困りますねぇ。

あ、ツイッター・・・いつでも話し相手になってください。

とにかく今回も行ってみましょうか。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十二話～え？ぬいぐるみ気に入られてる！？～

―剣崎Ｓｉｄｅ―

道路を並走する車とバイク

「すみませんシグナムさん、車出してもらっちゃって」

「なに、車はテスタロッサからの借り物だし、向こうにはシスターシャッハもいらっしゃる。私が仲介したほうがいいだろう」

運転席のシグナムと助手席のなのはが話している。

すると、ガラス越しにシグナムがこちらに顔を向けた。

「ところで一真、何か腑に落ちないという顔をしているな」

「いやさ、シグナムって剣振る以外のことができたんだなぁって」

―ジャキン―

「・・・冗談、たからそれ（レヴァンティン）向けないで。バイク事故はホント酷いから」

そうこうしていると、シグナムの方に通信が入りモニターがでてくる。
多分彼女が例の『シスターシャッハ』なのだろう、かなり焦ってるみたいだけど・・・。

自分の文字通り超人的聴力で聞き取った限りは、

・不手際があったらしい
・検査の合間に少女がいなくなった

とのことだ。

「・・・普通にマズイな」

俺はスピードを上げた。

なのはとシグナムが事情を聞いている。
それにしても気に入らないな。
どうやらシャッハは・・・いや教会は、あの子を危険人物みたいに考えているらしい。

俺はそうは思いたくない。
どれだけ危険でも、あの子は絶対に守ってやらないといけないな。

理由か？

なんと言うか・・・境遇が似てるって言うか。
俺の周りって、何故か親に会えないやつが多いだよ。

たま～にそういう話が出てくると、やっぱり雰囲気が悪くなる。
俺の過去は橘さんが話したみたいだけど、流石に子供の頃の話はしなかったようで、みんなは俺の両親のことを知らない。

まあとにかく、今はあの子を探さないとな。

「なのは、行くぞ」

「え？あぁ、うん」

なんか後ろでシグナムが何か言ってるけど、それよりもあの子が優先だ。

俺は病院の外を探すことにした。

―なのはＳｉｄｅ―

先ほどからいろんなところをまわってけど、あの子は一向に見つからない。

「ねえ一真くん」

隣を歩く一真くんに話しかけたけど、なんだか考え事をしてるみたいで返事をしてくれない。

「一真くんってば」

もう一度声をかけたけど、やっぱり返事をしてくれそうにない。
少しムカついちゃったので、こっそり耳元に顔をよせた。

―ス～ッ・・・―

「一真くんってば!!」

「うぇっ!?」

―バタン!!ガサガサ―

あ、垣根に倒れちゃった。
でもあんなに近くによっても大丈夫なら、こっそり・・・ちゅ、チューとか・・・できたかもしれない。

―剣崎Ｓｉｄｅ―

ったく、なのはのせいで地味に痛い目にあったじゃんか・・・。
とにかくこの状態をなんとかしないと・・・?

―Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

垣根に倒れこんでいた剣崎の耳が、かすかな音を捉えた。
それが少しずつ大きくなってくる事を確認した剣崎は、なのはに目くばせをすると、自分はなるべく音を立てないように起き上がる。

起き上がった剣崎が、声を出さずに指で少し離れた木を指し示す。
すると大きめの音とともに、あの少女が姿を現した。

「あっ」

なのはが声を出してしまったので、少女も剣崎達に気付く。

「ああ、こんなところにいたの」
なのはが声をかけるが、少女はこちらを怯えた目で見ている。
うさぎとブレイドのぬいぐるみを大事そうに抱えながらである。

（とりあえず、ぬいぐるみは気に入ったんだな）

やはり自分のぬいぐるみに対して微妙な感情を抱く剣崎だが、少女がしっかりと抱えているので何とも言えない。

「心配したんだよ」

ゆっくりとなのはが近づいていく。

とりあえずはなのはに任せて後ろに立ったままの剣崎だったが、突

然嫌な気配を感じた。

―ザンッ！―

剣崎が瞬きをしたその間に、なのはと少女の間にシャッハが割り込んだ・・・騎士甲冑姿で。

後ろから見ていた剣崎でもわかる警戒心。

もちろん少女は怯え、ゆっくりと後ずさってく。

シャッハも少女を追い詰めるようにゆっくりと前に出ていく。

少女は涙目になりながら尻餅をついて、ぬいぐるみをどちらも落としてしまった。

ちなみに、剣崎はここでブチギレた。

「おい、何やってんだよ」

剣崎が前に出る・・・バックルを持って。

それを見たなのはが焦って止めようとするが、そんなことで止まる剣崎ではない。

「何って、この子を・・・」

「この子を・・・なんだ？」

少女を見る時は極力笑顔で、バックルを腰に当てた。

―ガチャ―

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

すぐ目の前にオリハルコンエレメントを展開し、通り抜ける。

「こんな子供に、武器なんか向けていいと思ってるのか！！」

ラウザーには手をかけないが、拳を思いっきり握りしめてブレイドは言った。

その言葉でシャッハは顔を俯け、少女は涙目には変わらないが、自分の横に落ちているぬいぐるみと本物のブレイドを見比べている。

「しかし・・・」

「シスターシャッハ、ちょっとよろしいでしょうか」

「あ、はい・・・」

「一真くんも、落ち着くの」

「ああ・・・」

なのはが声をかけると、シャッハは戸惑った表情で引き下がる。

ブレイドもようやく力を抜いた。

「ごめんね、びっくりしたよね」

二つのぬいぐるみに付いた土を払って、少女に渡す。

少女はキョトンとしていたが、ぬいぐるみを受け取ると再び抱える。

後ろでは、ブレイドがずっとシャッハを見ていた。

「・・・（ジーッ」

「あの・・・すいませんでした」

ジッと見つめたままのブレイドの視線に耐えきれず、シャッハが頭を下げた。
それに対してブレイドは、自己紹介をしているなのはと少女・・・『ヴィヴィオ』というらしい、の方に顔を向けていった。

「あんたが謝るのはあっちだろ」
「は、はい！」

シャッハはすぐに甲冑を解除すると、ヴィヴィオの前にかがんで謝っていた。
ヴィヴィオも最初こそ先程のソレがあったので警戒しているようだったが、シャッハの謝罪に心がこもっていたことがわかったのだろうか、こっくりとうなずいた。

ブレイドも彼女のもとに行こうとするが、流石にこの格好で自己紹介もどうかと思うのですぐに変身を解除した。

「こんにちは、俺は剣崎一真っていうんだ」

うん、ほかに自己紹介のしようがない。
するとヴィヴィオは、ブレイドのぬいぐるみと剣崎を何度も見比べながら首を傾げた。

「あ～、それは、ブレイドっていうんだ」
「ブレイド・・・」

名前を呟きながら、ギュッと抱きしめている。

「よかったね、気に入ってくれたみたいで」

「そんな顔でいわれても嬉しくないぞ」
笑いをこらえているようななのはに、剣崎はムスッとした表情で答えた。
「ところで、ヴィヴィオ、どこか行きたかった？」
「パパと・・・ママがいないの」
ヴィヴィオの言葉に、二人の表情が変わる。
だがなのははすぐに表情を切り替えて言った。
「ああ、それは大変。じゃあ一緒に探そうか」
なのはが剣崎に目くばせをすると、剣崎はヴィヴィオを抱え上げた。
「俺も一緒に探すから、泣いたらダメだぞ」
「・・・うん」
その後、三人で病院の敷地内を探したが、ヴィヴィオの両親を見つけることはできなかった。
剣崎も事情は聞いていたので、泣きそうになるヴィヴィオを連れて、なのはやシグナムと六課へ戻ることにした。

―部隊長室―

はやてとフェイトが今度ある査察について話している。

単なる査察と侮るなかれ、六課には部隊長が自認するほどツッコミ所が満載なのだ。

たたでさえ高ランク魔導師の集まりで、リミッター付とはいえ正直やりすぎな面があるというのに、そこに更なる不安材料が入っているのだから。

「一真さんには・・・隠れてもらおうかな・・・あははは」

フェイトが遠くを見ながら力なく笑うのも無理はない。

剣崎の存在・・・それはか～な～り厄介なものだからだ。

もちろん六課のメンバーは剣崎をいろんな意味で好いている。

『仮面ライダー』という存在も、管理局の中では容認されている。

だが、彼が『機動六課』という場所にいることが問題なのだ。

ただでさえ戦力が集中している六課にライダーが一人追加されるということは、言ってみれば管理局最強の部隊が完成したと言っても過言ではない。

単なる最強ならいいのだが、その力は他の追随を決して許さない。

更に言うと、六課に所属するライダーこそブレイドだけだが、実際にはほかの三人も協力してくれているわけで・・・。

と言っても、剣崎が仮面ライダーだということを知っているのは六課だけ。
査察の際も、黙っていれば多分・・・そう多分大丈夫だ。

「正直、ライダーに勝てるのはアンデッドだけやしなぁ・・・」
「四人集まったら誰も勝てないよね」

頭の中に四人を浮かべてみる。

六課としては二番目に付き合いのある橘。
剣崎の話によれば、『橘さん?ああ、まだまだ本気じゃないけど』とのこと。

次は始。
またもや剣崎の話によると、『始?ああ、もっとすごいのあるけど』とのこと。

実はこっそり何度か遊びに来ている睦月。
ま~たまた剣崎によると、『睦月?今なら【アレ】ができるだろうからほかの二人と同じ』

最後に剣崎。
これは三人からそれぞれ聞いたところ、

橘『剣崎か?あいつは俺達の中で一番強いぞ』

始『剣崎?あいつの強さは俺達の比ではないな』

睦月『剣崎さん?あの人こそ最強のライダーですよ。本人には言い

にくいですけど（主にＫＦについて）』

「「・・・ハァ」」

「みんな強すぎるよ・・・」

「自信失くすわぁ・・・」

ガックリとうなだれる二人。

管理局的には、『六課はライダーとの窓口』認識がされているが、地上本部がどんな些細な事を言っても、こちらとしては返す言葉が無い。

探られて、見つかった場合は・・・解散？

「ま、まあそれは置いといて、これ査察対策にも関係してくるんだけど」

フェイトが強制的に話を逸らす。

このままでは永遠と続きそうだったから無理もない。

「六課設立の本当の理由、そろそろ聞いてもいいかな？」

フェイトが聞きたいのは『表向き』の理由ではない。

このようなトンデモ部隊を設立したということは、とても重要な訳があるから・・・それをはやての口から聞きたいのだ。

「そやね、まあええタイミングかな。隊長三人と・・・あと一真さんも連れて行こか」

「聖王教会、カリムのところへ」

第四十二話～え？ぬいぐるみ気に入られてる！？～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

はやて「エースオブエースと仮面ライダーにも、勝てへん相手がおるんやなぁ」

カリム「初めまして。カリム・グラシアと申します」

剣崎「サンキュー！俺、あんたみたいな優しくて綺麗な人、初めて会った！！」

なのは「これって・・・」

次回『三つの予言』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　作者）次回はようやく『予言』が出ます！

（；ｏｗｏ）ホント大したモノじゃないんだけどな

（　作者）なにを！この滑舌ワル男！！

（ｏｗｏ；）は！？お前それはいったらダメだろ！！

（；ｏＭｏ）二人の事は放っておけ。とにかく次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十三話～三つの予言～（前書き）

は～い、第四十三話です！

今回はやっとこさ予言ですが、特に捻りはありません。
ホントです！信じてください！！
この先が予言の通り進むかは謎ですが（ここ重要）。

そして今回も剣崎による犠牲者がｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十三話～三つの予言～

―部隊長室―

「さて、とりあえず二人を・・・」

聖王教会へ向かうことにしたはやてとフェイトは、同伴させることにした剣崎となのはを呼ぼうとモニターを出した。

だがそこに映ったのは二人の姿ではなく、

「うえぇぇぇん！」

モニターにドアップで大泣きしているヴィヴィオの顔であった。

「あぁ・・・もう泣くなって」

「泣かないで～」

大泣きするヴィヴィオに縋り付かれている剣崎となのは。
一緒にいたフォワード陣も『どうしたらいいのかわからない』という顔で三人を見ている。

そこにはやてとフェイトも入ってくる。

「エースオブエースと仮面ライダーにも、勝てへん相手がおるんやなぁ」

ニヤニヤしながら主に剣崎を見るはやて。

（フェイトちゃんはやてちゃん、あの・・・助けて）

念話でなのはが頼んできた。
剣崎は念話が使えないが、『どうにかしてくれ』と顔にはっきりと書いてあった。

そこでフェイトが三人のそばまで行くと、しゃがんでぬいぐるみを二つとも拾い上げ、ヴィヴィオに話しかけた。

「こんにちは、この子達はあなたのお友達？」

フェイトの言葉に剣崎が思いっきり顔を引き攣らせたが、そうこうしているうちにも、フェイトがぬいぐるみを使ってヴィヴィオの気を引いている。

彼にとっては、何度見ても微妙な気分になるのだ。
だが子供の扱いに慣れていたフェイトによって、数分後にはヴィヴィオの説得に成功していた。

聖王教会

「あ、えっと・・・剣崎一真！民間協力者・・・です」

剣崎は、目の前の女性にちょっと戸惑いながら名乗った。

部屋に入るなり、自分の名前と役職を名乗ったなのはとフェイト。

自分も名乗るべきだと考えた剣崎だが、自身がどういう立場だったのかをすっかり忘れていたため、視線ではやてに確認をとりながら自信無さげに名乗ったのであった。

「初めまして。カリム・グラシアと申します」

カリムが微笑んだのを見て剣崎は思った。

（美人だな・・・）

―ドスッ―

「いてっ！・・・何すんだよ」

剣崎が下を見ると、なのはが思いっきり足を踏んでいる。
顔こそ笑顔だが、纏うオーラが凄まじい。

おや？はやてとフェイトも同じ状態だ。

剣崎は見事に心を読まれていたのであった。

「どうされました？」
「あ、いえ！何も・・・」

剣崎達が席につくと、そこには先客がいた。
管理局の制服を着た青年・・・見た目は剣崎よりも落ち着いた感じがする。

「クロノ提督、お久しぶりです」
「ああ」

少々他人行儀だが、フェイトとも知り合いなのだろう。

だがあまりに他人行儀だったフェイトたちだが、カリムの一言で、その場の全員が一変した。

「じゃあ、クロノくん久しぶり」
「お兄ちゃん、元気だった？」

剣崎の目が見開かれた

「・・・お兄ちゃん！？」

「っ、それはよせ・・・」

思いっきり驚いている剣崎と、気恥ずかしそうにしているクロノだが、周りは二人の反応を思いっきり楽しんでいた。

（フェイトってお姉ちゃんだけじゃなかったのか！？）

フェイトの過去を少しだけ（だが重要な事）しか聞いてない剣崎であった。

「似てないな・・・」
「聞えてるよ？」

剣崎の前に顔をズイッと出してフェイトは言った。

「ウェァッ！？ご、ごめん」

「気にしなくていい、義理の兄妹だからな」

そこからフェイトのことで話すこと十分少々・・・。

「あ～、もうそろそろ話を戻そか」

はやての一言でようやく話が終わった。

フェイトの恥ずかしい過去まで話していたため、剣崎と話し手のクロノは笑いをこらえ、当の本人は顔を真っ赤にして弁解していた。

だが、その後は全員が表情を引き締め、はやて、カリム、クロノの言葉に耳を傾けた。

まずは六課設立の表向きの理由

設立にあたって協力してくれた人物達

そして、『カリムの能力』

（預言書の作成・・・か）

剣崎はちょっと胡散臭い気もしたが、この世界の・・・しかもこんな立場にいる人の予言なら大丈夫なのだろうと、信憑性についてはほんの少しだけ放置した。

だが、

（一年に一度・・・何歳なんだ!?）

「あ、あの・・・」

「なんでしょう?「歳を・・・」それ以外ならお答えしますよ?」

「すいません・・・なんでもないです」

剣崎の言葉に頷くと、カリムは預言書を三枚、それぞれなのは、フ

ェイト、そして剣崎の正面に浮かべた。

古代ベルカ語で書かれたそれは、剣崎達には何が書いてあるかさっぱりの代物だ。

これを解読して少しでも正しい解釈ができるようにするのは、相当大変なのではないだろうか。

だが剣崎は言ってしまった。

せっかく我慢していたのに、彼の正直すぎる性格は、その発言を抑えきれなかった。

「不便だよな、よく当たる占いってところだろ？」

彼の発言で、時間が停まったような気がした。

はやてとクロノは眉毛をピクピクと動かしているし、なのはとフェイトも『うわぁ・・・』という表情で剣崎を見つめている。

カリムは少しだけ悲しそうな表情をしていた。

ここでようやく、剣崎は失言だったことに気付いた。

「あ、ごめん！俺なんでも口にしちゃうから・・・本当にごめん！！」

自分の発言でカリムが傷ついたことに対する責任を認め、剣崎は立ち上がって頭を下げた。

まあ『ごめん』の時点で少々あれだが、それはしょうがない。

カリムも、そんな剣崎の姿勢に表情を和らげる。

「いいんです。自分でも不便な能力とは思っていましたし、あなたのように面と向かって言ってくださる方もいませんでしたから、実はちょっとだけ嬉しくもあるんですよ」

少し顔を傾けながら微笑むカリム。

剣崎には、それが聖母マリアのように見えたとか見えて無いとか。

「サンキュー！俺、あんたみたいな優しくて綺麗な人、初めて会った！！」

カリムの手を握りながら、とても嬉しそうに話す剣崎。

まあ確かに、彼のまわりにいた女性は昔も今も一癖（それもかなり癖が強い）ある人ばかりであった。

カリムは剣崎に手を握られながら、顔を赤く染めて『そ、そんな／／／』とか、『いけない、私はシスターで／／／』などと言っている。

まあ、そんな状況を『三人』が大人しく見ているはずもなく・・・

―ジャキン―

「三人とも、ここでの戦闘行為はご法度だ」

・・・なんとか回避されたようだ。

―数分後―

落ち着きを取り戻した部屋の中、ようやく話が本題に入る。

「で、六課設立の本当の理由・・・についてやったな?」

はやてが、クロノとカリムに頷く。

二人もそれを返し、カリムは一枚の預言書を浮かべる。

そこにはこう書かれていた

―旧い結晶と無限の欲望が交わる地―

―死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る―

―死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち―

―それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる―

「これが、『ある事件』を指す予言・・・」

そう言って締めくくるカリム。

流石の剣崎でも、これが何を指すのかわかった。

「それ、今俺達が関わっている事件について・・・だよな」

「ええ、ほぼ確実に、これはこの先・・・近い未来の話」

詳しくは分からない。
まだ起きていない事柄なのだから。

だが、この場にいる全員が、この予言の不吉さを感じ取っていた。

カリムはもう一つの予言書を浮かべた。

「そして、これが『五年前』から追加された文章」

彼女の言葉に、剣崎の眉がピクッと動く。
そう、『五年前』といえば、剣崎がこの世界に来る前・・・つまり元の世界でアンデッドと戦っていた頃だ。

―世に混乱をもたらす黒き者と―

―運命に逆らう不死の剣士現る―

―破壊と創造を司る十番目―

―仲間を集め、動き出す―

「これって・・・」

「間違いない。俺のことだ」

なのはの問いに、剣崎は確信を持って頷いた。

『統制者』、『運命』、『不死の剣士』

間違いなく、剣崎自身の事を指していた。

だが、五年前・・・つまりまだ戦い始めて少しの時期にこの予言がなされていたという事は、

「俺がこうなることは、もう決まってたんだな・・・」

諦めを滲ませた笑みを浮かべる剣崎。

なのは達も、このことについては何も言えないでいた。

カリムも顔を顰めると、更にもう一枚の預言書を・・・、

「ま、まだあるんか？」

流石のはやても把握していなかったようだ。

クロノも同じようで、目が少し大きく開かれていた。

カリムははやての問いに頷くことで答え、同じように読む。

―始まる滅び、機械仕掛けの異形の行進―

―三人の旅人が立ち上がりし時―

―戦士は揃う―

―金色の王は真実を知り―

―再び切り札を掴む―

「今度こそ、以上よ」

カリムの言葉で、少しながらも緊張が解ける。

それにしても、ある程度の予想のつく最初の予言、すでに起きたことである二番目の予言と違い、ミッドの人間からすればさっぱりな内容の三番目。

だが剣崎には少しだけ掴めた。

士が言っていた事、翔一たちの正体、これが関わっているのだろう。

そう、これは

―彼等『仮面ライダー』についての予言―

そして最後の文

（切り札を掴む・・・か）

なのはやフェイト、そしてはやては気付いていない事だが、これも自分に関することのはずだ。

そうなると、前半は何を指しているのだろうか？

三人の旅人・・・なんだか二人ほど心当たりがあるような、無いような。

そうこう考えているうちにも話は進み、結局剣崎達が帰ろうと思った時には夜になっていたのだった。

第四十三話～三つの予言～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

レジアス「奴等・・・『仮面ライダー』との窓口でもある六課は、いくら本局と言えども簡単には切れまい」

なのは「でも、正直一真くんが一番厄介なんだよね～♪」

剣崎「お前の心が一番読みやすいもんだな」

はやて「もう二度とあんな思いをする人がいなくなるような世界！その為なら命ぐらい！！」

次回『変えるために必要なモノ』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　作者）次回と次々回は少しだけ・・・シリアス？

（；ｏＨｏ）『？』ってなんですか・・・。

（；作者）シリアスなような・・・そうじゃないような・・・。ま、普通に読んでくださって大丈夫です！多分シリアスじゃないですから。

（；ｏＭｏ）それで納得するしかあるまい。次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十四話～変えるために必要なモノ～（前書き）

し、シリアス？
いえ、そんなことは無いはずです。
いつもよりちょびっと暗いだけですよ。

そして読者の皆さんに発表が、
活動報告にも書きましたが、この度、新しい小説を始めようかと思います。

内容は、『モンハン世界に変態オリ主転生、ハンター兼仮面ライダーカイザとしてウフフな生活』ですｗ
リリブレ新作二作とメガレンジャーは、Ｓｔｒｉｋｅｒｓが終わった後にやります。
こっちは『アレ分』が少ないですからね、あっちで半端ないことに・・・？

発表はこんなところです。
それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒｓ、始まります。

第四十四話～変えるために必要なモノ～

「査察の日程は決まっているのか」
「人員は確保しました。週明け早々に行います」

とあるオフィスにいる一組の男女。
男性の方は、先日テレビでも出ていたレジアス・ゲイズ。
女性の方は、そんな彼の娘であり秘書であるオーリス・ゲイズ。

会話の内容は、まさに査察について。
そしてその査察の対象は、機動六課である。

「公開陳述会も近い。教会や本局を叩けそうな材料を探してこい」

レジアスは今回の査察によって、六課だけでなく、六課に縁のある本局や教会をも一網打尽にしようと考えている。

彼には彼の正義があり、地上本部には地上本部の言い分もある。

地上をないがしろにする本部と、それに近い教会や六課。
彼からすれば、自身の『敵』にも等しい存在なのであった。

しかし、機動六課は単純な部隊ではなかった。

オーリスが調べたところ、機動六課の編成は、本部に何らかの問題があった際に、すぐに切り捨てることができるものらしい。

そのためのキャリアの少ない部隊長、貸出扱いの分隊長、固有戦力（ヴォルケンリッター）を除けばほぼすべてが新人で構成されている。

その報告を聞いて、忌々しげに『使い捨て』と評するレジアス。

だが、今の機動六課には重要な役割があった。

レジアスもそれを承知している。

「奴等・・・『仮面ライダー』との窓口でもある六課は、いくら本局と言えども簡単には切れまい」

「はい。彼らはこちらからの勧誘は一切受け付けません。ですので六課を解散させるという事は、彼らとの接点を消すという事に繋がります」

一見レジアスが止まる理由など無いようだが、実はある。

魔導師でも敵わない『化け物』と戦う仮面ライダー。

そんな彼らは、民衆からすれば正義の味方であり、そんな彼らと親しく接している六課・・・とどのつまりが管理局のイメージアップになる。

しかもライダー達は次元世界間を動き回るわけでもない。

地上・・・ミッドチルダでの活動しかないのだ。

つまり、六課の次に接点があるのは実は地上本部であり、数か月前までは地上の局員とライダーの共闘もあった。

まあ、これは剣崎が六課に入る前の話であるのだが、それでも民衆にはよいイメージを与えることには成功している。

そんな地上にとっての、いわば客寄せパンダである仮面ライダーとの接点を無くしてしまうのは、武闘派のレジアスには少々痛い。

自身の発言が民衆には過激に写るのは承知している。

だからこそ彼らによるイメージアップが大事なのだ。

幸い青い仮面ライダー・・・姿は違うが性格と声の一致しているため同一であろう人物は、地上の局員たちを悪く思っていないようだ。

「とにかくだ、今なら忌まわしい本部の奴らも動きずらい。六課が切られるラインが引き下げられた今こそ、絶好の好機！」

「はい」

「この後私は会議があるのだったな。その時にでも査察の計画をまとめておけ」

「わかりました。失礼します」

―機動六課―

「ほんならなのはちゃん、フェイトちゃん、一真さん」

「うん」

「情報は十分、大丈夫だよ」

「あれだけ教えてもらえれば俺はいいから」

剣崎の言葉が終わると同時に、なのは、フェイト、剣崎の三人が各々の部屋（なのはとフェイトは同室だが）に歩き出す。

だがはやてだけが立ち止り、少しの逡巡の後、意を決したように三人を呼び止める。

振り向いた三人に駆け寄ったはやては言った。

「私にとって、二人は命の恩人で、一真さんは大切な人で」

「六課がどんな結末を迎えるか・・・まだわからへんけど」

顔を俯けて話すはやて。

そんな彼女に、なのはとフェイトは自分の意思が揺るがないことを伝える。

そしてなのはが敬礼してから述べる

「八神部隊長。今のところ、部隊長は何も間違っていないであります！」

「だから大丈夫。いつものように堂々と命令してください。胸を張って『えへん』と」

続いて敬礼したフェイトの言葉が終わると、剣崎がはやてに歩み寄る。

そして手を彼女の頭にポンッと置いた剣崎は言った。

「そんなこと今更言ったって、誰も不安になんかならないぞ」

「皆お前を信じて付いてきてくれたんだし、それに」

「俺がいるから大丈夫だ」

剣崎の発言に少々キョトンとなるはやて。
だがすぐに顔を俯かせる。

（そ、そんな台詞反則や・・・でも）

「期待・・・しとるよ？」

「ああ、任せとけって」

そう言ってはやての頭に乗せていた手を下げる剣崎。
『あっ』とはやては言いそうになったが、何とか抑え込んだ。

「でも、正直一真くんが一番厄介なんだよね～♪」

「うぇぇ！？」

少しムカッときたなのはが言った冗談（真実）に仰天する剣崎。
その反応に満足したように、なのはが舌を出して『冗談♪』などと言ってしまったので、剣崎はムスッとしながら、自室ではなく食堂の方に歩いていってしまった。

「・・・ほんま、一真さんには敵わんなぁ」

「怒った一真くんもかわいいかも・・・」

「なのは、ヴィヴィオが待ってるよ？」

フェイトによって、『そういえば！！』と走り出すなのは。
それを見た二人は顔を見合わせて苦笑し、フェイトはなのはを追って、はやては自室へと向かっていった。

明りも付けず、自分のデスクにつくはやて。
懐から剣十字を取り出し、そのまま引き出しを開ける。
そして奥に入っていたアルバムを手に取って開いた。

そこに写っていたのは、はやてがミッドに移り住む前・・・つまり地球の海鳴市に住んでいた頃の写真。
小さい時のはやてはもちろん、なのはやフェイト、アリサやすずかが写真の向こうから笑いかける。

パラパラと捲っていたはやての手が、あるページで止まる。

ベンチに座る男性と、その膝に乗っている二匹の猫の写真。

「グレアムおじさん・・・」

はやてにとって、恩人と言える大切な人物。

彼女の命があるのは彼がいたから。

彼のおかげではやては育った。

そしてヴォルケンリッターが護り、なのはとフェイトが救い、そして・・・

（あの子が・・・初代リインフォースが残してくれた命や）

アルバムをしまい、引き出しを閉じて窓の前に立つ。

（あんな悲しみとか後悔なんて、この世界の誰にも、あったらあかん）

（私の命は・・・）

（そのために使うんや）

「・・・なんだかんだ言って」

「!?」

悲壮な決意を抱いたはやての後ろから声がかかる

「お前の心が一番読みやすいもんだな」

「一真さん・・・」

「因みに、ノックはしたからな」

彼の言葉に、はやてが『いやそういう事やなくて』と返そうとする前に、剣崎ははやての襟をつかんで持ち上げた。

「え?ちょ、ちょっと!?」

騒ぎ出すはやてを、そのままソファーまで運び、ボスンッと座らせる。

「女の子の運び方やないなぁ・・・」

「子狸にはこれぐらいがちょうどいいだろ?」

恨めしそうに見てくるはやてに、珍しくさらっと返す剣崎。

「な!そんな言い方ないやろ!一真さんの・・・滑舌ワル男!!」

「!!」

流石に、

「お前・・・それだけは」

「言ったら・・・言ったらダメなんだぞ・・・うぇぇ」

スルーできなかった。

今、一番『ズーン』が似合う男・・・剣崎一真。

「で、なんの用なん？レディの部屋に入って来てまで」

剣崎が持ってきた紅茶とお茶菓子を頂いているはやて。

「いや、ソレを差し入れに来ただけ『だったけど』」

「けど？」

はやての返しに肩を竦めて一息つくと、剣崎は言った

「命を無駄に捨てようとするやつがいたから、ちょっと説教を」

瞬間、はやての顔が歪む。

半分睨みつけるようなはやての視線を、どってことないという様にスルーする剣崎。

普段の彼らしくない動きは、ことさらはやてをイラつかせる。

「捨てようとしたことは・・・確かにそうや。でもな、それを無駄とは言わせへんよ！！」

「もう二度とあんな思いをする人がいなくなるような世界！その為なら命ぐらい！！」

熱くなり、立ち上がろうとするはやてを、

「お前・・・ふざけんな！！」

殺気を滲ませた剣崎が止める。

「そりゃお前はいいよな！自分の意思でやったことだから」

「でもな・・・他の皆が納得すると思ってるのか！！」

彼の言葉に一瞬怯むはやて。
だが彼女とて引き下がるわけにはいかない。

「皆は・・・皆は分かってくれる！」

「そんなわけあるか！表面はそうでも、誰も納得なんてしてくれないんだよ！！」

「『あんな思い』？大体どういうことかは予想がつく・・・お前が、まさに皆に味あわせようとしてるんだからな！！」

「世界が変わっても、お前の大事な人たちは変われないまま・・・それでもいいのか！？」

「それともあれか？それも尊い犠牲だとでも思ってるのか？・・・馬鹿馬鹿しい、認められるかよ！！」

怒涛の勢いの剣崎の言葉に、はやては顔を俯かせて拳を握りしめるしかなかった。
言葉を絞り出そうにも、剣崎の言葉が頭の中をグルグル回っていて何も考えれない。

自分のやろうとしたことは、なのはやフェイト・・・そしてシグナム達を悲しませるためのものだった？
でも・・・このままの世界なんて！！

「それでも、私がやらなあかんのや・・・私が」

凝り固まってしまったかのようなはやての思考。
剣崎は更に深いため息をついた。

「更に言わせてもらうけどな、お前一人の命で足りるわけないだろ」

「世界を変えるためにはな、たくさんの時間がいる、たくさんの犠牲がいる」

「『お前だけじゃ』無理なんだ」

「ならどうしたらええの！？」

泣き出しながら訴えるはやてに、剣崎は立ち上がって隣に座ると、

頭に手をおいた。

「俺が、俺が無茶する」

第四十四話～変えるために必要なモノ～（後書き）

（ｏｗＯ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「俺は、はやてにぜぇぇぇったい死んでほしくない！・・・ってうわっ！！」

はやて「でも私は止まるわけにはいかへん」

剣崎「俺が来ないから・・・心配しちゃったか？」

ヴィヴィオ「・・・うん」

次回『剣崎ですか？これが素です』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回は特に進展はありません。繋げると長いのでわけた話ですからね。

（ＯＨＯ）それにしても、やっぱり戦闘が無いとハリがないです

（；作者）う～ん確かに・・・。ここは剣崎に地球出張にでも行ってもらおうか？

（＞：：：Ｖ：：：＜）それぐらいが妥当だろうな

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十五話～剣崎ですか？これが素です～（前書き）

ふい～、難産だった。

結構短かったのでラストを追加したら、なかなかのカオスにｗ

地獄のテスト＆新作があるので、今回から来週いっぱいまではお休みです。

こういう時に執筆スピードが向上するので、なるべくストックを稼ぎたいところ。

でも新作があるのでそうもいかない難しい時期です。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十五話～剣崎ですか？これが素です～

「俺が、俺が無茶する」

「え・・・」

「お前が無茶しないように、俺がたくさん無茶する。俺には『丈夫な体』があるからさ」
「でも、今の一真さんの体・・・」

剣崎はああ言っているが、今の彼はどちらでもない。
人間でも、アンデッドでもない半端な体。

丈夫なんて嘘だ。
人より『ほんの少し』だけのソレは、剣崎の言葉が意味する丈夫ではない。
不老不死かどうかさえ、現状では不明なのだ。
それでも隣にいる彼は無茶するという。

「お前を死なすぐらいなら、俺が。たくさんの人がこれで時間を費

やすなら、俺が費やす」

「なんでなん？」
「ん？」

剣崎が口を閉じてはやてを見る。

「なんで、そこまでしようと思うん？」

彼女の疑問に、剣崎はさも当たり前かのように答えた。

「俺は、人間が好きだからな」

「昔から変わらない、変えるわけにはいかないこの気持ちが、いつも俺の背中を押してくれる」

「それにさ」

ここで一度言葉を切る剣崎。
はやても顔を上げて彼を見ると、そこにはとびっきりの笑顔があった。

「俺は、はやてにぜぇぇぇったい死んでほしくない！・・・ってうわっ！！」

笑顔だがきっぱりとそう言ってくれた剣崎に、はやては思い切り抱き着いた。

おろおろする剣崎だったが、彼女の体が震えているのを見ると、その背中をゆっくりとさする。

それから数分は、その状態が続いた。

ようやく落ち着いたはやてだが、その眼は真っ赤になっており、剣崎も不安げに様子を窺う。

「ごめんなぁ・・・我慢しとったんやけど、ちょっと限界きてしもたみたいや・・・」

「あのな、ちょっとだけ・・・私の話聞いてくれる？」

彼女の言葉に頷くと、はやてはゆっくりと話し出した。

自分の両親の事

支援してくれた『足長おじさん』

ヴォルケンリッターの四人との出会い

穏やかだった生活

なのはとフェイトとの出会い

そして・・・大切な『もう一人の家族』のこと

だから今の自分があり、あんなことが二度と、誰にも起きないような世界にしたいこと

全てを話し終えたはやては、何も言わずに再び剣崎に抱き着いた。

今度は彼も、しっかりと受けとめる。

「ごめん。俺・・・」

「ええんよ。『死んでほしくない』って言うてくれた時、嬉しかった・・・」

「でも私は止まるわけにはいかへん」

顔を離し、剣崎の目をしっかりと見つめるはやての真剣な表情に、剣崎の顔も真剣なものになる。

「絶対にやらなあかんのや・・・だから」

「だから？」

「手伝って・・・くれへんか？」

「・・・もちろんだ！」

三度目の抱き着き。
だがもうはやては泣いていなかった。

こんなに頼りになる人が近くにいたことを、自分はわかっているようでわかっていなかった。

そう、はやては感じていた。

―数十分後―

「スー・・・スー」

「はやて。お～い・・・ハヤテサン？ナゼハナサナインデス？」

抱き着いたまま寝てしまったはやてのせいで、剣崎は動くことができなかった。
そして彼は焦っていた。

先程は状況が状況なので気付かなかったが、こうも密着していると・・・あたるあたる。

何がとは言わないが、二つの柔かいものだと言えばよくご理解いただけると思う。

だがここは流石の剣崎。
これぐらいで理性を失う男ではない。
それどころかその点では全く大丈夫なのが彼である。
添い寝したって大丈夫だということを、私ははっきり言える。

だが、焦ることには変わりなかった。

にしても、

「寝てるにしては力、やけに入ってるような・・・」
「・・・（ビクッ」
「「・・・・・」」
―ヒョイッ―
―テクテクテクテク・・・―
―シュンッ―
―ポ～イッ―
「キャン！」
「もう寝ろ！いいな！！」

自室のベットの上に放り投げられたはやての前に、憤怒一歩手前な剣崎が立っていた。
そんな彼に逆らうほど、はやては無謀ではなかった。

「は、はいぃ・・・」

―テクテク―

―シュンッ―

（ったく、はやてのやつ・・・）

はやてをベットに放り投げた後、持ってきていた紅茶と茶菓子を回収し、キッチンに戻った剣崎。

キッチン、食堂の両方とも人はおらず、剣崎がたてる食器の音しかしない。

そんな中、剣崎の超人的聴力が再び発揮された。

「・・・だれだ？」

ドアの影にいるであろう人物に、なるべく普通の声色で話しかける剣崎。

すると、『ヒョコッ』という音聞えてくるような仕草で、子供が一人、入ってきた

「な～んだヴィヴィオか」

その腕にしっかりとブレイドを抱えながら、ヴィヴィオが入ってきた。
そう言えば、帰ってきてから顔を出していない剣崎。
それを思い出して、少し罪悪感が・・・。

「俺が来ないから・・・心配しちゃったか？」
「・・・うん」

どんどん涙目になっていくヴィヴィオの様子に焦った剣崎は、自分に一番近い席を勧めた。
すると少し表情が和らぎ、すぐに椅子に座る。

「なのは達にはちゃんと言ったのか？」
「うん」

「う～ん・・・ホットミルクでも飲む？」
「？・・・飲む！」

ヴィヴィオにとって、ホットミルクは未知の領域。
興味津津であった。

「ゴクッゴクッゴク・・・プハッ」

「おいしかったか？」

「うん！」

剣崎お手製のホットミルク（レシピ？明かせん！）をおいしくいただき、かなりリラックスしたのか、ヴィヴィオが椅子の上でうつらつらしだした。

「もう寝た方がいいんじゃないか」

「うぇ・・・うぇぇい」

（どこで覚えた！？）

まさか一日で、ヴィヴィオが『ウェイ』を覚えてしまうとは・・・。

剣崎は当分自重しようかと考えていた。

とにかくこんな足取りが覚束ない状態では、部屋に辿り着くどころか、この食堂から出ることさえ怪しい。

剣崎はヴィヴィオの使ったマグカップをすぐに片付けると、やはりフラフラしているヴィヴィオを抱えて、なのはとフェイトの部屋に向かった。

「入るぞ～」

―シュンッ―

「！？」

部屋に入った剣崎が見たものは・・・少々刺激が強すぎた。
主にフェイトの方が。

「ヴィ、ヴィヴィオが歩け無さそうだったから！・・・はいっ」

「あ、うん・・・」

近くにいたなのは（こちらも正直危ない）にヴィヴィオを渡し、剣崎は逃げるように部屋を出て行ってしまった。

彼が逃げるような状態だったことに関してよくわかっていなかった二人だが、首を傾げて互いを見たときに理解した。

「「これは使えるかも・・・フフフ」」

不吉な笑いが木霊する中、ヴィヴィオは幸せそうな顔をして眠っていた。
この二人の影響を受け過ぎないことを切に願う・・・無理だとは思うが。

「・・・ハァ。いろいろと危なかった気がする」

一旦部屋に戻った剣崎。
だが今度は着替えを持って、隊舎内の浴場に向かっている。

以前の海鳴への出張時に、『やっぱり六課(ここ)もああした方がいい！！』という剣崎とシグナムの進言によって、大幅な改装を受けてすごいことになっている。

それこそ海鳴のスーパー銭湯並みの状態になっており、今度の査察での不安要素になりつつあるほど。

だがこれによって、剣崎やなのは達をはじめとした職員たちのリラックス度も上がっており、ヴァイスなどからも『よくやった一真！』と評判は上々。

気苦労が絶えない剣崎の、数少ない癒しの場である。

のれんをくぐり、さっさと服を脱いでいく。
服を籠に投げ入れ、ガラララっと開けると・・・。

「剣崎か。先に入らせてもらっているぞ」
「やはりこういうモノは日本人として欠かせないな。よくやった剣崎」
「流石剣崎さん。こういうところにまで気が回るなんて一流だな～」

「さ！早く入って入って！」
「剣崎君、なかなか粋だね～」
「ここ取材したら結構なスクープになるだろうな～。あ、ダメか」
「おばあちゃんが言ってた。入浴は、騒がしいことが一番大事なことだ・・・ってな」
「あん？この状況は何だって顔してんな。大体わかれ。でもよくやった！」

「喜んでもらって何より・・・ってナズェイルンディス！？」

なんかいろいろいた。
かなり見覚えのあるのがくつろいでる。

何故か全員、剣崎が入って来たのに焦りもせずにくつろいだままだった。

『ミッドにはこういうものがないからとてもいい』・・・らしい。

「ま、まあ・・・たまにはいっか」

か～な～り気になるが、『もうこれ以上はツッコまない』・・・そう心に決めた剣崎なのであった。

第四十五話～剣崎ですか？これが素です～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎＆ティアナ「「し、死ぬかと思った・・・」」

なのは「一真くんとティアナが上手くいってるのが・・・あの・・・」

フェイト「なのはさんが、ヴィヴィオのママってこと。私もね」

ヴィヴィオ「パパ？」

剣崎「うぇ！？」

次回『やはりこうなった』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（　作者）次回はようやく、剣崎が一児のパパになります。

（；ｏｗｏ）なんか勘違い招きそうな言い方するなよ！こ、子供はできないから！

（＞：：Ｖ：：＜）最早手遅れだ

（；ＯＭＯ）次回は来週になるが、それでも見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！

第四十六話～やはりこうなった～（前書き）

お久しぶりです！
ちょっと長くなったので分けました。
正式？にパパになるのは次回ですｗ

ここですこ～し窺いたいんですが、『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』と『ＶｉＶｉｄ』との間の四年間の空白があるじゃないですか。
で、その四年のどこかで剣崎にはミッド以外の別世界に飛んでもらおうと思うんですけど、どこがいいですか？

ＦＦとかドラクエはよくわかんないので無し、オリ設定の世界は可。

どうでしょう？

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十六話～やはりこうなった～

―訓練場―

一列に並んだ『五人』の男女と、その前に立つ女性。
女性はため息をつくと、目の前にいる男に尋ねた。

「うん、なんで一真くんもいるのかな？」

「いや、ティアｎ・・・たまにはこういうのもありか～って」

今の発言で大体把握したなのはは、少し意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「なら、今日の朝練のメニュー変更。一真くん＆ティアナ対、私と残りの三人で模擬戦いこうか！」

―十数分後―

「「し、死ぬかと思った・・・」」

肩で息をするブレイドとティアナの前には、地獄絵図がひろがっていた。

酷いのは光景だけではない。

ブレイドアーマーは所々が破損し、ブレイラウザーにはひびが入っている。

どこの誰が、そんなあり得ない事をしたのか・・・それはもちろんなのはであった。

自分で言ったくせにチーム編成に不満たらたらだったなのはは、剣崎達に憂さ晴らしと、問答無用で砲撃をぶっぱなした。

彼女がいつも口を酸っぱくして言っていたチームプレーはどこへやら。

その砲撃は、スバル、エリオ、キャロを巻き込んでしまう。

ブレイドはジャックフォームで対抗。

以前の戦いでなのはにあったアドバンテージが無くなった事、そしてティアナと息のあった攻撃によって、模擬戦は一方的に進んでいた。

もともと橘とコンビを組んでいた剣崎は、似たようなタイプの（しかも今は誤射がない）ティアナとの相性もよかった。

しかし、そんな戦い方に余計に腹を立てたなのは。

模擬戦は戦闘に変わっていったのだった。

・・・ということがあったのだが、なんとか退けて今に至る。

「ったく、お前らしくないぞ。どうしたんだよ？」

変身を解除して、突っ伏しているなのはの前にしゃがむ剣崎。

先程まで我慢していたティアナも、既に限界だったようでダウンしてしまった。

つまり、意識があるのは二人だけである。

「だって・・・」

「ん？」

「一真くんとティアナが上手くいってるのが・・・あの・・・」

「そ、そんなことでか」

若干顔を引き攣らせている剣崎だが、それも無理はない。

まさか嫉妬（剣崎となのはでは捉え方が違うが）でここまでの戦闘に発展するとは思わなかったのだ。

だがこのままにするのも・・・！

剣崎は解決法を思いついた。
そうだ、考える必要などないではないか。
これで一発解決だ!!

「なら今度から、俺となのはでコンビを組めばいいんだろ?」

「えっ!いいの?」

剣崎の言葉を聞いた瞬間に、ガバッと起き上がったなのはだったが、正直言った方からすれば少し引く。

「あ、ああ・・・それぐらいどってことないけど・・・ってどこいくんだアイツ?」

彼がすべてを言い切る前に、なのははバリアジャケットを解除して隊舎の方へ向かってしまった。
そうなると、残された剣崎がやるべきことは・・・。
訓練場の後始末&四人の介抱なのであった。

―隊舎横・訓練場近く―

朝練で早くからいないなのはの代わりに、ヴィヴィオと一緒にいるフェイト。
訓練場の近くを二人で歩いていると、後ろから声がかかった。

「ヴィヴィオ～！」
「！」

呼ばれたヴィヴィオはすぐに反応すると、繋いでいた手を放して、声の主、なのはのもとへと駆け寄る。

「おはようヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」
「うん」

「おはようフェイトちゃん♪」
「うん。なのは、何かいい事でもあった？」

「ええ！？う、ううん！なんでもないよ！」

なのはの表情やテンションを見抜いた・・・といってもバレバレだったが、そんなフェイトの言葉にオーバーなほど焦りだすなのは。
な～んとなく、フェイトにはわかったような気がした・・・ついでに嫌な予感もした気がした。

「そういえばなのは、訓練場の後始末はちゃんとやってきた？」
「うんもうやって・・・なかった！『一真くん』も置いてきたままだったし！」

そう言って戻ろうとするなのはを、

ガシッ！

フェイトが掴んで止めた。

「どうしたのフェイトちゃ・・・ん？」

「なんで一真さんの名前がここででるのかな？もちろん教えてくれるよね・・・ぜ・ん・ぶ」

「は、はい・・・」

結局、自分の心の中だけに留めておくはずだったのに、今回のことをすべて話す羽目になったなのはなのであった。

「・・・で、俺は結局一人なのか」

そんな話を離れた訓練場からさりげなく聞いていた剣崎は、ガックリと肩を落としていた。

―数時間後、なのは&スバルお仕事中―

「前線メンバーどころか一真くんまでいないから、なにかあったらお終いだね♪」

「何も起きないことを祈ります・・・ってなんでハイテンション！？」

現在、六課内に残る前線メンバーはなのはとスバルのみ。
ザフィーラやシャマルもいるが、いざ戦闘となったら不安がありすぎて怖い。

―フェイトさん一家の場合―

「そういえば、ヴィヴィオって昼間はどうしてるんですか？」

「部屋でお留守番なんだけど、寮母のアイナさんやザフィーラ、一真さんが面倒を見てくれてるかな」

「そういえば、一真さん今日シグナム副隊長とお出かけって言ってましたね」

キャロと会話していたフェイトだが、エリオの発言に動きを止めた。
因みにヘリに乗っているのだが、操縦席ではヴァイスが冷や汗をかいていた。

「エリオ・モンディアル二等陸士、ただいまの発言は本当ですか？」

階級付きフルネームで問うフェイトに、問われたエリオも冷や汗ダ

ラダラである。
フェイトはあくまで・・・そうあくまで笑顔なのだが、心の中は大荒れ。
ヘリのなかの空気が一気に下がっていくのがわかる。
雰囲気とかではない。
何故ならキャロとフリードが抱き合って震えだしているのだから。
え？やっぱり雰囲気？
・・・気にしない気にしない。
―そんな頃の剣崎＆シグナム―
（（ビクゥ！！））
「な、なあシグナム？今すごい嫌な・・・」
「最後まで言わなくてもわかる・・・気にしたら呑まれるぞ」
因みにここ、『レストランＡＧＩＴΩ』である。
青ざめた顔をして料理を食べる二人を、士がかげからカメラに収める。
「これで何人目だ？」
そう言う士の後ろの掲示板（店員しか見れない）には、『一真！浮気の現場！！』と書かれたコーナーがあり、これまで彼と一緒に来た女性とのツーショット写真がバッチリ撮られていたりする。

―再び戻ってなのは&スバル―

「ヴィヴィオって、この先どうなるんでしょうか」

スバルからの問いだったが、なのはの考えはまとまっている。
ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つかれば、そこで暮らすのが一番だろう。
難しいのはわかっているが、あの子の幸せを考えたら、やはりそうするべきだ。

でもそれにはやはり時間がかかる。
それまでは、

「私が面倒みてけばいいのかなって思う」

エリオとキャロにとってのフェイトのように、保護責任者として家庭が見つかるまで面倒をみる。
それが、今のなのはの考え。

「いいですね！ヴィヴィオ喜びますよ！」
「う～ん、喜ぶかな？」

「きっと！」

「ほら、やっぱりよくわからない」

場所は変わってなのはの部屋。

とりあえず説明してみたはいいが、ヴィヴィオには少々難しかったようだ。

スバルはどう説明していいのか迷った挙句・・・遂に言った。

この小説が始まって云十数話・・・ようやくここまでたどり着いたのだ!!

・・・おっと取り乱してしまった。

話を戻そう。

それで、スバルが何を言ったか・・・。

これだ!

「つまり、しばらくはなのはさんがヴィヴィオのママだよってこと」

「ママ？」
「あ、いやっ、その～・・・」
不思議そうな顔をしてなのはを見上げるヴィヴィオを見て、『あ、やばっ』と思っているスバル。
訂正しようにも上手く言葉が見つからないので、未だに喋らないなのはの反応を窺う。

「いいよ、ママでも」

そう言うと、なのははゆっくりとしゃがみ、ヴィヴィオにしっかりと言い聞かせる。

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで、なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオは、それでもいい？」

ヴィヴィオの表情は変わらず、ずっとなのはを見つめたまま。

「ママ？」
「はい♪ヴィヴィオ」

なのはが答えてくれたことでようやく理解できたのか、ヴィヴィオは彼女に抱き着いて泣き出してしまう。

スバルは驚き、アイナは微笑み、犬・・・狼モードのザフィーラは表情が読めない。

だがとにかく、三人に見守られながら、ここに一組の親子ができた。
どこかの誰かさんならケーキを確実に送りつけていただろう。
それぐらい素晴らしいことであったから。
・・・まあ、スバルにはこの後訓練が待っていたが。
剣崎＆シグナムのほうは、特に何かあったわけでは無かったので割愛。
―夜・なのは＆フェイトの部屋―
「そう、なのはがママになってくれたんだ」
「うん」
知っていたが、ヴィヴィオ本人から事の顛末を聞くフェイト。
だが突然少し得意げに語りだす。
「でも実は、フェイトさんもちょっとだけ、ヴィヴィオのママになったんだよ」
「？」
フェイトのよくわからん説明に、ヴィヴィオは首を傾げる。

そんなヴィヴィオに説明するが、『保護責任者』がわからない子供に『後見人』がわかるはずもなく、やっぱりよくわからないという表情になる。

「つまりなのはさんがヴィヴィオのママで、私もね、ヴィヴィオのママになったの」

「なのはママと、フェイトママ？」

「「は～い♪」」

これでようやく納得がいった。

二人に手を握ってもらいながら、とても喜んだ顔になるヴィヴィオだったが、ふたたびキョトンとした表情になると、ベットの上の『ぬいぐるみ』を凝視する。

なのは達が様子を見ていると、ヴィヴィオは突然『ぬいぐるみ』・・・そうブレイドを手に取って部屋から走り去ってしまった。

「「・・・え？」」

しばらくすると、ヴィヴィオの『ぱたぱた』という足音と共に、『バタバタ』という足音が聞こえてくる。

開いたドアからヴィヴィオが顔をのぞかせる。

ヴィヴィオはこう言った。

「パパ？」

そして反対側の手を引っ張った。
ヴィヴィオがつないだ手の先には、

「「あ」」

「・・・ハイ？」

「パパ！」

「うぇ！？」

全く状況がつかめない・・・剣崎がいた。

第四十六話～やはりこうなった～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「わかった。今この時から、俺がヴィヴィオのパパになる」

なのは「せいか～い♪」

フェイト「もう・・・諦めて？」

ヴィヴィオ「よいしょっと。へへ～♪」

次回『川の字・・・じゃなかった四本だ』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；０ｗ０）首の皮一枚つながった・・・。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）諦めろ。時間の問題だ。

（０ｗ０；）そう言うお前は天音ちゃんとどうなったんだよ！

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）・・・秘密だ。

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十七話～川の字・・・じゃなかった四本だ、と思いきや～（前書き）

サブタイを予告から少々変更

第四十七話～川の字・・・じゃなかった四本だ、と思いきや～

すいません遅れました。

テストで1教科やらかしまして、親からパソコン禁止と言われまして。

今も継続中ですが、今回はいないタイミングを狙って予約投稿しました。

一番頑張った教科なのに・・・唯一の一夜漬けじゃない教科だったのに・・・うぇぇ。

ぶっ飛んだほど間を空ける気はさらさらないですが、一週間のうちのいつ投稿できるか分かったものじゃないので、すいません。

それでは、

リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十七話～川の字・・・じゃなかった四本だ、と思いきや～

「パパ！」

「うぇ！？」

素晴らしい笑顔で抱き着いて来るヴィヴィオ・・・だが、剣崎は何のことなのかさっぱりだ。

なのはとフェイトは『あ～』と妙に納得した表情。

そして顔を見合わせ・・・ニヤリ。

「そう！一真くんも、今日から『一真パパ』になるんだよ～」

「はぁ！？」

「ヴィヴィオ、喜んでくれたんだ。フェイトママも嬉しいな」

「何言ってんだ！？」

よくわからない状況に放り込まれたと思っていたら、突然パパがどうだのママがどうだの・・・。

実は天才剣崎一真の頭が、状況を把握しようとフル回転する。

・・・いや、そんな必要がないほど、この状況はハッキリしていた。

主にヴィヴィオの言動で。

「とにかく」

抱き着いたままのヴィヴィオを抱え上げ、二人のいるベットの上にのせる。
そして・・・、

「お休み！」

逃げた。

と、思いきや

ギュッ

「え・・・」

とても小さい、拒否してはいけない手が、剣崎のシャツの裾を掴む。

「パパ・・・」

振り返った剣崎の目には、今にも泣きだしそうな目で自分を見つめる小さな少女の姿が。

そのまま手を握り返そうとしてしまう剣崎だったが、どうしても手を出せない。

これだけは・・・はっきりさせておかないといかない。

「ヴィヴィオ」

「？」

剣崎は意を決した。
そして・・・姿を『元に戻した』

「「「!!」」」

ヴィヴィオだけではない。
なのはとフェイトの表情も驚愕に染まる。

「俺は、こんなやつだ」

「パパって呼んでくれたことは・・・ちょっとだけ嬉しかった」

「だから決めてくれ。こんな俺で・・・俺でいいのかってウオッと」

いきなり飛び込んできたヴィヴィオを慌てて受け止める。
こんな刺々しい体なのにも関わらず、離すまいと腕を精一杯に伸ばして。

「パパ」

「今からヴィヴィオのパパ」

小さな体から、しっかりとした意思を感じた。
なら、答えないといけない。

「わかった。今この時から、俺がヴィヴィオのパパになる」

体を・・・『本当に元に戻して』剣崎は言った。

―この子を守ろう、俺にどれだけのことができるかはわからない―

―でも―

―この子を・・・守ろう―

―俺自身の命に代えても―

小さな体を抱き上げて、しっかりと抱きしめる。
向こうも、返してくれる。

それが、剣崎にはとても嬉しかった。

「で、ここでも～んだ～い♪」

せっかくの空気を見事なほどにぶち壊してくれたなのはに、もれなく三人から非難の視線が送られる。

だが彼女は悪びれる様子もなく、楽しくてたまらないという表情で続ける。

「仲のいい夫婦がする事ってな～んだ？」

「なのは、何言って・・・・・・（ボンッ！」

真意を尋ねようとしたフェイトだが、突然頭から湯気を吹き、真っ赤になって顔を俯ける。

「どうしたん・・・だ・・・・（ボンッ！」

剣崎も同じく湯気を吹いて顔を俯けた。

「え？二人ともどうしたの？・・・・あ・・・・（ボンッ！」

いきなり変な反応をしだす二人を不思議に思ったなのはだったが、自分の質問とこの反応を照らし合わせた結果・・・結局先の二人と同じところに至った。

何って・・・アレである。

子供の前では絶対にできないこと。

「フェイトちゃんと一真くんの・・・エッチ。そんなこと考えてたんだ」

ボソッと呟いた言葉に反応して、二人は物凄い勢いで顔を上げた。

「「なのはの質問が悪い！！」」

「あはは～・・・。質問替えよっか。仲のいい『家族』がすることってな～んだ？」

「「？」」

考え込む二人。
なんだろう・・・買い物？

「わかった！」

ここで声をあげたのは、なんとヴィヴィオだった。

「一緒に寝ること！」
「せいか～い♪」

「「ブハッ！！」」

いきなりの問題発言に吹き出す二人。
つまり、なのはは暗に『一緒に寝よう（もちろん健全な意味で）』と言っているわけで・・・つまり・・・その、うん。

「やっぱり帰る」

剣崎は逃げるしかなかった。
それなのに、

ガシッ×3

「・・・離せ三人とも。流石にそれは無理だから」

「「「いや」」」

「フェイト、落ち着いて考えてくれ。おかしいぞコレ絶対」

「もう・・・諦めて？」

何故か疑問形なフェイトだが、掴んだ手は離さない。

ここでヴィヴィオが駆け寄り、足にしがみつく。

それだけでも剣崎的にはきついのに、更に再び涙目で見上げられたら・・・。

さっきの発言をいきなり後悔する羽目になった剣崎なのであった。

「とりあえず・・・着替えて枕持ってきます・・・」

―十数分後―

「まだかな～？楽しみだね二人とも♪」

「う、うん」
「うん♪」

―シュン―

「あ、きｔ」

―シュン―

「なんで閉めるの！！」

ドアを開け閉めすること三回、ようやく入ってきた剣崎だったが、明らかに視線を逸らしている。
それも無理はない。

―シュン―

やはりフェイトの格好は・・・男にはキツイ。

なのはも、普通のパジャマだが・・・うん。

「なあ、やっぱり帰ってい「だめ、パパ」・・・ハイ」

おずおずとベットの脇まできたはいいが、いったいどういう並びで寝るつもりなのだろうか。

「私とフェイトちゃんが両端で、一真くんは真ん中ね♪」

なのはは剣崎の腕から枕をふんだくり、自分とフェイトの間に置く。

そしてそのまま手を引っ張って、剣崎をベットの上に引く。

軽く死んだ目を天井に向ける剣崎、だがヴィヴィオはどうするのだろうか？

彼がその質問を口にする前に、答えは出た。

「よいしょっと。へへ～♪」

上だった

二段ベットとかそんなものじゃなくて

剣崎の上だった

イメージとしては・・・『〇トロ』のあのシーン。

メイが初めて大ト〇ロにであった時の状態。

つまりヴィヴィオはうつ伏せになって剣崎の上に乗っかっている。

息苦しさ等は感じないが、これで剣崎の逃げ道は完全にふさがれた。

そんな彼に追い打ちをかけるが如く、両腕はなのはとフェイトによって捕まる。

ただでさえ大きい胸で腕を挟まれる剣崎。

男性諸君としては羨ましいところだが、剣崎にとっては厄介この上なかった。

いや、完全に嫌な訳ではない。

彼だって仙人ではない、男なのだ。

しかし『逃げ道を塞がれている』という状況では、全くと言っていいほどに喜べなかった。

かといってここで逃げようと腕を動かせば、逆に二人に刺激を与える事になり、もれなく明日からは『変態』もしくは逃げたことによる『ヘタレ』の称号がついてくるだろう。（刺激を与えた剣崎が無事に逃げれるとは思えないが）

それに、もうすでに眠りかけているヴィヴィオを降ろしてしまうのは、パパと言った手前彼にはできなかった。

「おやすみ一真くん♪」

「おやすみ」

そう言いながらさらに力を強めてくる二人に、今更離せとも言えず、

「あ、あぁ、おやすみ」

そう返すことしかできない剣崎、ある意味ヘタレである。

（早く寝るべきなのか・・・それとも起きて『何も起きないようにするべき』か）

寝たら寝たで何をしてしまうかわかったものじゃないし、起きたままならままでこの感触を朝まで味わうことになる。

「何も起きるな・・・頼むから」

祈るように呟く剣崎。

そんな彼の両腕に、突然痛みが走る。

左右に首を振れば、不機嫌さを隠さない二人の顔が。

「そんなに、私たちと一緒に寝るのは嫌なの」

「私たちのこと、嫌いなんだ」

背筋が凍るような低い声に、剣崎は思わず恐怖を感じてしまう。

「い、嫌とか嫌いとかじゃなくて・・・年頃の女の子が男と一緒に寝るっていうのは・・・な？」

「私たちもう１９だよ」

「ミッドでも日本でも、もう結婚できる年なの知ってるでしょ？」

かなりストレートな発言をしたなのは。

流石にフェイトも焦ったが、心配はいらなかった。

だって剣崎だから

「結婚？何言ってんだ。そういう話じゃなくて（ｒｙ」

気付かない＆ａｍｐ；軽く説教モードに入りだす剣崎。

フェイトはホッと一息だが少しムッとなり、なのはと言えば・・・

「・・・（ブチン」

完全に怒っていた。

「だからやっぱり・・・オウッ！」これ幸いと調子に乗っていた剣崎だったが、わき腹にきた衝撃が強制的に動きを止める。

「なら、一真くんが襲いたくなるまで・・・続けるから」

「だから何言って・・・顔近いし怖っ！！」

至近距離なのに目元が影になって見えないなのは。

抱きつく対象を腕から体に変え、自分の体を思いっきり押しつける。

焦った剣崎だったが、腕はなのはに枕にされてしまっていた。

するとフェイトまで同じように体を押しつけてくる。

（ななな何でこんなことをしてくるんだこの二人は！？）

・・・わかるだろ普通。

しかし、少し冷静になってみれば、なのはは明らかな怒りを感じるが、フェイトからは恐怖を感じる。

簡単に言えば、なのはに怯えているのだ。

片方の結論に達した剣崎は、肘と手首を精一杯に曲げてフェイトの頭を撫でる。

（ちょっと辛いな・・・これ）

ちゃんと撫でようとすると、曲げている手首に負担がかかる。

そんなことを考えていると、フェイトがさらに頭を寄せてきた。

確かに撫でやすいのだが、腕枕どころか肩枕で痛くないのか心配だし、いかんせん顔が近すぎる。

吐息が耳にかかる度にドギマギして、今更ながら顔が真っ赤になる剣崎なのであった。

そんな彼の様子に、恥ずかしいがそれ以上に満足したフェイト。

だがそれと同時に、向こう側の親友から発せられる負のオーラが増しているので、恐怖から余計に体を押しつける。

（もう・・・勘弁してくれ）

これ以上体を押しつけられたら、ホントに寝ている間安心できたものではない。

「これ以上この状況が続いたら・・・部屋に帰るからな」

二人の機嫌がどうなるかはわからないが、精神的にはこの部屋から出たほうがマシだ。

すると意外なことに、なのはから負のオーラは消え、変わりに押しつける力が強くなった。

フェイトも気持ち頭を離す。

（よく分かんないけど、そんなに誰かと一緒に寝たかったのか？・・・相部屋なのに）

勝手に結論付け、『ならしょうがない』と体に入っていた無駄な力を抜く。

「今度こそおやすみ。出てかないから、早く寝ろよ」

「「・・・（コクッ」」

肩の上で頷いた二人の頭にポンッと手を乗せ、剣崎は目を閉じる。

なのはとフェイトも、彼を離さないようにしっかりと体を寄せてから目を閉じた。

「ふにゃふにゃ・・・おやしゅみなしゃい・・・」

寝ているのに寝る夢を見るヴィヴィオの寝言を聞きながら、三人は眠りについた。

第四十七話～川の字・・・じゃなかった四本だ、と思いきや～（後書き）

（０ｗ０）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎（足絡められてるぅ！？）

なのは「一真くんって寝てるときこんな顔してるんだ・・・ちょっと意外」

なのは「今なら『ちょうど』起きてないみたいだし、『初めてだけど』・・・いいよね」

シグナム「どうしてこうなった！？」

シャマル「負けたわ・・・まだ諦めないけど」

次回『勘違いって怖い』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）投稿日・・・未定

（；０ｗ０）大丈夫かよそれで・・・

（０Ｈ０；）一週間以上は空けませんから！

（；０Ｍ０）こんな調子だが次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十八話～勘違いって怖い～（前書き）

ああなってこうなる第四十八話。

今回はいつにも増してアレだった・・・。
これぐらいならたまにはあり・・・かなぁ？

このままだと本当に『次回と書いて未定と読む』状態になりかねませんが、頑張ります！

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十八話～勘違いって怖い～

―チュンチュンチュン―

「んっ・・・朝か」

小鳥のさえずりを聞きながら、光・・・窓の方へ頭を向ける剣崎。

「・・・・・は？」

しかし彼が向いた先は窓ではなく、

「スー、スー」

なのはの寝顔であった。

視線を下げれば、ボタン二つ分開いたパジャマから見える谷間が・・・

（っておおい！目を向けるな俺！）

もう手遅れだったが、凝視することは避けた剣崎・・・だが、

「・・・・・あ」

反対側にはフェイトが、しかもなのはよりも露出度が高い格好で眠っていた。

しかも肩から紐が外れていて、このままでは・・・

（だから見るな俺！！）

意地（男としてどうなのか）で顔を背けた剣崎。

しかし彼のピンチは続く。

男性ならまずある、朝の生理現象・・・。

ズボンの不自然なふくらみと言えばわかるだろう。

（マズイよな・・・これ）

昨晩の会話があってからのこれはマズい。

とりあえず足元のタオルケットで誤魔化そう試みる。

しかし！

（足絡められてるぅ！？）

二人の足がしっかりと絡んでおり、剣崎の足は全く動かない。

腕は腕枕、足も動かない、このままでは・・・この中で一番朝が早いなのはに見つかる。

（すごい嫌な予感しかしない・・・）

『襲われる。最低でもそれに準ずるナニかをされる』彼の頭にそんなことが過る。

昨日の状態の彼女なら、朝練を取り消してでもこちらを優先しそうな気がする・・・そんな剣崎なのであった。

（しっかし、なんでまた）

昨日の原因を改めて考察しようとする天才剣崎。

しかし恋愛・・・女心についてサッパリな彼にわかるはずもなく、思考は再び『この状況をどう切り抜けるか』にシフトした。

「んっ・・・んん」

（ヤバいヤバいちょっと待てって！！）

彼が無駄なことを考えている間になのは目覚める。

しかしそれと同時に、剣崎の頭に稲妻走る。

なのはを利用するようで気が引けるが、やらなかった時のことには変えられない。

剣崎はすぐに行動に移った。

（なんかごめん！！）

「へっ？」

ギュッ

「あの、一真くん？」

「ぐ、ぐ～、す～・・・」

「なんだ、まだ寝てるんだ」

―『とにかく時間を稼ぐ』―

その為に剣崎は、なのはの頭を抱え込んだ。

しかもがっちりと。

こうすれば頭は動かないし、もしかしたら・・・このまま朝練の時間もこのままかもしれない。

ピッピッピ

「あ、ティアナ？今日の朝練は中止、ゆっくりしてていいから」

『へ？あ、はい！』

ピッ

どうやら見事に成功したようだ。

剣崎の企み？通りに時間を稼ぐことはできた。

しかし彼は迂闊だった。

寝ていると判断されているとはいえ、自分から近くに寄せるということが何をもたらすのかを。

「昨日はすぐに寝ちゃったから・・・」

（・・・足上がってきてないか）

「今はしっかり楽しませて貰うから♪」

なのははさらにしっかりと足をからめ、更に顔を寄せる。

吐息がくすぐったいが、それよりも上がってくる足が怖い剣崎。

そんな彼の状態には気付かず、なのはは無防備ではないが無防備な剣崎の顔を見つめる。

（な、なんか顔の横がムズムズするっ！）

よく、『後ろから視線を感じる』というものがあるが、これは本当に感じるものだと思う剣崎。

今回は横・・・しかも真横であったが。

「一真くんって寝てるときこんな顔してるんだ・・・ちょっと意外」

剣崎は自覚が無いが、今の彼の顔は結構顰められてる。

なのは、いや皆としては『口を少し開いてポケーッとしてる』というイメージだったので、なのはが『意外』と言ったのもうなずける。

実際普段の彼ならその通りなのだが・・・。

「もうちょっとだけ♪」

更に足を上げていくなのは・・・しかし次の瞬間、二人の動きが止

まった。

そう、剣崎の作戦は、失敗した。
明らかに当たった感覚があるし、腕の中のなのはの顔も、下を向くために動こうとしている。

「「・・・・・」」

沈黙する二人。
剣崎の顔からは冷や汗が流れ、なのはの口元は、

「・・・（ニヤッ」

吊り上がった。

「男の人が朝『こうなる』のは聞いたことあったけど、もしそうじゃなかったら・・・どうしようかなぁ？」

（え゛！？）

「今なら『ちょうど』起きてないみたいだし、『初めてだけど』・・・いいよね」

（うぇぇっ！？）

剣崎焦る。
このままでは、いろいろと描写できないアレやコレが・・・。
流石に何のことかはわかる。
理由がわからないだけなのだ！！

「それじゃあ・・・遠慮なく」

そろりそろりと動くなのはの手。

ガシッ

「ホントこれ以上は・・・勘弁してください！」

・・・頑張って止めた。

精神的にも身体的にも、ギリギリでとどまることができた剣崎なのであった。

無理やり腕を引っこ抜いて止めたはいいが、止められたほうは少々ご機嫌斜めのようで・・・。

「起きてたんだ。なのに『こんな』状態ってことは・・・」

「いや！これは・・・生理現象ってやつで・・・」

尻すぼみする剣崎の言葉に、『胡散臭い』という表情のまま、じっと見つめるなのは。

「なら本当に・・・「ん～、むにゃむにゃ」・・・」

なにを言おうとしたのかは定かではないが、目覚めつつあるヴィヴィオによって最悪の状況は回避できた。

しかし未だになのはの手は下に向かおうとしており、予断を許さない。

「と、とりあえず落ち着くまで・・・待ってくれ」

物凄い申し訳なさそうな、というか情けない顔でそう言う剣崎に、

なのはもようやくもとに戻る。

「いいよ。とりあえず一真くんが不能じゃなかったのはわかったから」

「んなっ！！」

男としてそれは無視できない。

剣崎の顔が引き攣る。

「んっ、一真さんが不能って・・・ホント？」

完璧に寝ぼけたままのフェイトが酷い勘違いをしたまま起き上がる。

その拍子に肩から完全に紐が外れ・・・

「ば、ばかっ！？自分の格好を見てから起きろ！」

自由になった左手で目を塞ぎ、あたふたしながら声を上げる剣崎。

それに反応して下を向いたフェイトも、五秒ほどすればはっきりしてきたようで、顔を真っ赤にして隠すように腕を組んだ。

・・・逆効果だと思う。

するとヴィヴィオも今度こそ目を覚ます。

「パパ、ふのうって・・・にゃに？」

「お、お前にはまだ早い！」

すっかりお父さんである。

―二十分後・食堂―

「あー、久しぶりにたっぷり寝た～」

「ホント、アンタに『起こされる』までもなくしっかり寝れたわ」

ぐっすり寝れたスバルとティアナ。

「まだ眠い・・・」

「キュク～・・・」

「僕も、ちょっと・・・」

寝すぎて逆に眠くなってしまったキャロ、フリード、そしてエリオの子供組。

「なのはちゃんが朝練を中止するなんて、今日はスターライトブレイカーでも降るんか？」

「シャレになってねえ・・・」

「おおよそ、テスタロッサが何かしでかしたのでしょう」

「たまにそういうことあるものね～」

「・・・（言えぬ）」
「・・・（言えないですぅ）」

約二名を除いて何も知らない八神家。

ザフィーラとリインは見た！！

そして遂に・・・

「皆おはよー」
「おはよう」
「おはようございます！」
「・・・・おはよう」

『・・・・・・』

包む沈黙

いや、４人が一緒だというのは別におかしくない

だが、

ギュッ×３

「ハァ・・・」

朝っぱらから両腕を組まれ、肩には少女が乗っている。

今までを顧みても、これは異常だった
そして肩に乗る少女の言葉は、この場を、いや機動六課全体を混乱させるのに十分すぎるほどの効果を発揮することになる。

「パパ、ママ、早くご飯食べよ？」

「ぱ・・・」

誰が呟いたのだろうか、たった一文字のそれが、全員の息を合わせるように

『パパァァァァァッ！？』

今までで一番大きな声が、六課に響き渡った。

―青年説明中―

食堂にいた者どころか騒ぎを聞き付けて職員全員が集まる。

一言も逃すまいと耳を傾ける彼らに、剣崎は『しっかりと』、『勘違いしないよう』に説明した。

なのはやフェイトに説明させたら、どんな嘘八百が飛び出すかわかったものではなかったからだ。

大概は、

『へ～、良いんじゃない？』

とか、

『それより昨晩はお楽しみだったのか？』

という反応だったが、ってやっぱり勘違いしてやがる。

「どうしてこうなった！？」

シグナムはさっきからそれしか言わないし、エリオやキャロ、ザフィーラを除いた主要メンバーほど、何か勘違いをしている・・・そう感じた剣崎。

ちなみにリインも勘違いをしている側だ。

はやては、

「こんなところでボサッとしてられへん！今すぐ婚姻届をっ！」

と、剣崎に聞こえないように言ってから抜け出そうとしてフェイトに捕獲された。

シグナムはさっき言った通り、

「どうしてこうなった！？」

しか言わない。

シャマルは

「負けたわ・・・諦めるつもりもないけどね」
勝手に闘争心を燃やし、

ティアナは、

「いっそ忍び込むぐらいのことを・・・あ、いやっ、何でもないですなのはさん！！」

なのはからのＯＨＡＮＡＳＨＩ一歩手前であった。

そしてスバル、エリオ、キャロは思った

（（（無敵過ぎる・・・あと少し羨ましい））））

こうして、後に『無敵なパパとママ（しかも二人）』と称される４人のお披露目は終わった。

「つまり、一真さんは二人と夫婦になったってことなんやな」
「いやっ、だから俺はヴィヴィオの父親なんだけど？」

「それはつまり・・・二人と契りを結んだということか」
「遠回しだけどそれ結婚だよな！？それ違う！」

「ということはつまり、最低でも恋人異常なわけ・・・」
「どこが『つまり』なんだよ！話聞いてるのか！？」

「二股男・・・最低ね」

「うぇぇ！？お前もか！！」

「「否定するんだ～、ふ～ん・・・」」

「だってこれはハッキリさせとかないと・・・何故怒ってるんです？」

『自分の胸に聞けぇぇぇぇぇぇぇっ！！！』

「な、ナズェダァァァァァ！！」

・・・勘違い＋鈍感＝最悪の場合、死

男性陣は学んだ。

だが大丈夫。

剣崎よりも酷い者など、次元世界中どこをさがしてもいないだろうから。

ちなみに数日後、六課に出向してきたギンガが、結局くっついたままな四人を見てショックで膝をついたのは・・・完全に余談である。

第四十八話～勘違いって怖い～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「俺は？」

なのは「一真くんは『そのまま』で戦ってね♪」

フェイト「危ないよ～。転ばないでね」

ヴィヴィオ「うぇっ！！」

次回『約束とその日』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；作者）もうちょっとで話が大きく動くのに・・・進まない。

（；ｏｗｏ）戦闘まであと少しなのに、書けない。

（；ＯＨＯ）使いたいネタがあるのに、そこまで行ってない。

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）つまり最悪ということだ

（；ＯＭＯ）諦めたらそこでボドボドダァ！！だから見捨てないで次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第四十九話～約束とその日～（前書き）

ようやく投稿四十九話です！

無駄に長くなってしまい完成が遅れました。
Ｊ・Ｓ事件だと、これが最後のほのぼのパートになるかと。

次回が全然完成して無いのがきついところですが、もうすぐ書きたいところになるので頑張りたいところ。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第四十九話～約束とその日～

剣崎がヴィヴィオの父親になってから、さらにはギンガが出向してきた日までの間、
相変わらず剣崎達から離れないヴィヴィオや、コレ幸いと積極的にアプローチしてくるなのは＆amp;フェイト。
そして負けじとアプローチをしてくるはやて達によって、剣崎の心と体はボドボド・・・にはなっていなかった。

風呂に入れば、多少の毒はあっても、頼もしい？仲間と楽しくやっているので、それも加味すればプラマイゼロ、以前と変わらない。

それに、ヴィヴィオの相手をするのは彼にとって苦ではない。むしろ彼は嬉しかった。
それに彼も二十六歳（肉体的にも精神的にも足りてないが）、子供がいてもおかしくない・・・五歳児だが。

とにかく、楽しく過ごせていた。

そんなある日のこと・・・

―六課・訓練場―

・・・の近くの森。
現在ほとんどの前線メンバーがここに集まり、ともに訓練していた。
そして出向してきたギンガの挨拶も済み、まずはナカジマ姉妹のタイマン。

これは姉のギンガが勝利。

しかし、それに続いて隊長格四人対、ギンガを含めたフォワード五人の模擬戦となり・・・。

「俺は？」
「う～ん、隊長(こっち)側に入れたらダメだから、一真くんはフォワードの方に行って」

なのはの言葉に安堵する五人だが、それに続いた言葉に、絶望へと真っ逆さまに落ちることになる。
・・・剣崎も含めて。

「でも変身したらこっちの勝ち目がないでしょ？だから・・・」

「一真くんは『そのまま』で戦ってね♪」

「「「「「「・・・は？」」」」」」

「そうだな。それがいい」

「たまにはガツンと食らってみろ」
「・・・頑張って！」

隊長三人からのありがたい？お言葉を頂く。
流石に納得いかないこの条件に、剣崎は不満を顔に出す。
しかし、そんなことで覆すことができるような四人ではなかった。

「ブレイラウザー、出せるでしょ？」
「剣があれば戦える。心配はいらないな」
「そうそう。シグナムの言うとおりだ」
「・・・が、頑張って！」

「フェイトそればっか・・・。っていうか、俺に死ねと？」
「死なないでしょ？」
「うるさい！」

そんなこんなで、隊長陣四人ＶＳフォワード五人＆ただの剣崎による模擬戦が始まった。

「うおっ、ちょっと待てよ！」

「バカ！危ないだろ！！」

「勘弁してくれ！俺ばっかり卑怯だぞ！」

「ああ・・・お花畑と給料袋が俺を呼んでる・・・」

剣崎に・・・黙祷（チ～ン。

結局、フォワード五人が剣崎をフォローしたりしているうちに全員

がばてて、隊長陣の勝ちという事で終了。
なのは曰く『これ、なかなかいいかも』とのこと。

そして訓練に一段落付いた頃・・・。

「パパ～、ママ～♪」

ヴィヴィオ登場。
パパ＆ママ×２の姿を確認して駆け寄ってくる。

「「ヴィヴィオ！」」
「危ないよ～。転ばないでね」

「うん！」

フェイトの注意に元気よく返すヴィヴィオ。
だがこの場の全員（フェイト以外）は思った。

（これは・・・転ぶ）

「うぇっ！！」

バタッ

（やっぱり・・・）
（なんか他人事な気がしないぞ・・・）

苦笑するメンバー。
だがフェイトママは焦る。

「あっ、大へｎ「大丈夫！」」

倒れたヴィヴィオに駆け寄ろうとするフェイトだったが、なのはがそれを止める。
その場でしゃがみ、『ここまで歩いてくるように』と声をかけるなのはだったが、既に涙をこぼし始めたヴィヴィオは起き上がろうとしない。

「なのはダメだよ。ヴィヴィオまだ小っちゃいんだかｒ「待てって」」

我慢しきれず再び駆け寄ろうとしたフェイトだったが、今度は剣崎に止められる。
ムッとなるフェイトだったが、剣崎が歩き出したのを見ると、今度は訝しげな顔で彼を見る。

周りも同じだ。
わざわざフェイトを止めてまで、自分で歩み寄っていく剣崎の行動には、さすがに疑問しか抱けない。

どんどん歩いていく剣崎だったが、ヴィヴィオから1メートルほどのところでストップ。

泣きかけのヴィヴィオを含めた全員の頭の上に『？』が浮かんだ。

「ヴィヴィオ」
「えぐっ・・・パパぁ」

「手、伸ばして」
「・・・うぇ？」

『うぇ』はやめろと言いたいところだったが、剣崎はそれを呑みこんで、ヴィヴィオに手を伸ばすように促す。

するとヴィヴィオ、ゆっくりと剣崎に向かって手を伸ばしていく。

しかし剣崎は動かない。

「もっと、もっと伸ばせるだろ？」

「うぅ・・・」

彼の言葉に、もっと手を伸ばすヴィヴィオだったが、それでも彼は動かない。

「お前の限界まで」

それだけ言うと、剣崎も腕を伸ばした。

ヴィヴィオがそこを目指して、真っすぐに、思いっきり手を伸ばす。

しかし、あと少しが届かない。

「ん～！」

すると剣崎が、

「・・・よしっ！」

ガシッ

その間を埋めた。

つないだ手をそのままにヴィヴィオを抱え上げ、頭をなでる。

ヴィヴィオはしっかりと腕を回し、離さないように抱き着いた。

（ちょっとやりすぎたか）

焦る剣崎だったが、すぐに抱き着いている『娘』の耳に顔を寄せると、こう言った。

「俺の手はこれだけしかないけど、ヴィヴィオが精一杯手を伸ばしたら・・・ちゃんと掴むから」

「だからヴィヴィオも、ちゃんと手を伸ばす。約束な！」

「うん・・・」

「あ～、だからもう泣くなって。ここにいるから」

「うん！・・・」

だがヴィヴィオの力は強まっていくばかり。
ホントにやり過ぎた剣崎なのであった。

「「・・・それ、私とも約束」」
「・・・定員オーバーです。っていうか何時からいた」

後ろを向かなくとも、声でなのはとフェイトだということはわかる。

『そんなこと言わずに！！』

だが気がつけば、さっきまで離れていた他のメンバーまでもが後ろに。

「ああもうわかったから！皆とも約束だ！！」

『やった～！』

「でもなはやて、お前はダメだ」

「え～、なんでなん！」

「仕事ほったらかしてるやつが何言ってんだ！」

「そんなこと言わんと、な？」

上目づかいでこちらを見てくるはやて。

そういうのには本当に弱い・・・剣崎なのであった。

「一週間だけな」

「短っ！」

・・・いやもしかすると、耐性がついたのかもしれない。

―六課・食堂―

剣崎は厨房で、ほかのメンバーはテーブルにつく。

相変わらずな食事量のスバルとエリオだったが、ギンガには・・・及ばなかった。

ただでさえ食べるのがいるところに、それよりも食べる者が追加されて、剣崎達もてんてこ舞い。

そんな中、

「ヴィヴィオ～、ダメだよ。ピーマン残しちゃあ」

「う～、苦いのきらーい」

「これぱっかりは助けられないよ」

ピーマン嫌いの少女は、この時初めて『母親が二人』ということの大変さを知った。

そしてニンジン嫌いの少女も、他人事とは思えずに、隣の少年へ渡すはずだったニンジンをストップさせる。

すこし離れてはいるが、それぞれが嫌いなものを前にウンウン呻っていると、

「俺が作った料理、食べてくれたら、『ご褒美』があるんだけどな～。ヴィヴィオ、キャロ？」

「「う～・・・」」

「この前店長から教えてもらった、おいしいケーキ、二人はいらないのかー？」

救いの天使（剣崎）が現れた。

「「ケ、ケーキ！？」」

「残さず、１人で全部食べたやつだけな」

「パパァ・・・」
「一真さぁん・・・」

二人はケーキが食べたそうに剣崎を見てくる。
しかし彼は引かない。
料理(このこと)に関しては妥協しないと、彼は決めたから。

「ダメだ。あ、皆は取りに行っていいぞ。・・・待てそこの姉妹。
一個だけだ。」

「「あ、あはは～。やっぱり？」」

何個も確保しようとしていたナカジマ姉妹に釘を刺しつつ、横目で
ちびっこを伺う。

ちなみに現状は、

ヴィヴィオ
・ピーマン大嫌い。だが数は少ない。

キャロ
・食えなくもないがやっぱりニンジン嫌い。しかも数が多い。

となっており、同等の難易度である。

唸り続ける二人を見ていると、給食を残して休み時間なのに外に出
れない小学生が思い浮かぶ。

まあ、ヴィヴィオはそうだとしても、キャロはデスクワークに訓練
と、食べ終わっても楽しい要素が無いのだが。

だから早くしないと、せっかくのケーキがナカジマ姉妹の腹の中行きになってしまう。

「どうする？」

「「どうするの？」」

・・・どうやら既に食べ終わっているようだ。

味も満足したらしく、期待に目を光らせながら伺ってくる。

「わ、私は食べます！」

キャロがニンジンに挑みかかる。

「お、いいぞキャロ。ところで？」

「・・・食べなきゃケーキないの？」

「ああ。パパの料理をぜーんぶ食べてくれない子にはケーキなしだな」

それに、と続ける剣崎。

「好き嫌いしてると、皆みたいに綺麗になれないぞ」

軽く言った剣崎だったが、何げに反響は大きかった。

「一真！わ、私も！綺麗・・・か？」

「いまさら何言ってんだシグナム。ここのみんなが綺麗じゃなかったら、誰が綺麗なんだよ」

思わぬ発言だったが、六課の女性陣は大歓喜である。
次の瞬間には剣崎が女性陣に囲まれ、先ほどの言葉を自分に向けて言ってほしいと頼む?始末。

てんやわんやな中心部から這って抜け出した彼は、二人の少女が顔を顰めてこちらを見ているのに気付く。
どうやらヴィヴィオも頑張ったようで

「ヴィヴィオもキャロも、ちゃんと食べたか?」

彼の問いに頭をブンブン振って頷く二人に水を渡しつつ、『ちょっと待ってろ』と声をかけて厨房に向かう。

しかし彼は、他のみんなが食べたケーキには目もくれず、更に奥にあった『キレイなオレンジとグリーンのケーキ』を手に取った。

「お待たせ。頑張った二人に、『特製ケーキ』をプレゼントだ」

「「キレイ・・・」」

どうやら見た目は気に入って貰えたので、デザート用のフォークを渡して椅子に座る。

目で促すと、二人は同時にフォークを持ち、ケーキを小さくカットし、そして・・・食べた。

「何げに自信作だけど、どうだ？」

「おいしい！」

「とってもおいしいです！」

満面の笑みでこちらを見る二人に少々の『罪悪感』を抱きつつ、彼女等がケーキを食べる姿を眺める。

二人ともすぐに食べおわり、しかし少々物足りなさげに剣崎を見てくる。

まあ彼からすれば好都合なので、すぐにお代わりを取りに厨房へ。

「なあ、一真さん？」

「んー？」

厨房の前にいたはやてに呼び止められストップ。

「二人が食べた『アレ』、店長さんがらみやろ」

「隠しても仕方ないもんな。その通りだ」

解説しよう！『店長』とは、この頃影が薄い『レストランＡＧＩＴΩ』の店長、『津上翔一』のことである！！

・・・あ、わかってるから説明はいらない？

ですよねー。

「ということはやっぱりあのケーキに使っとったのは・・・」

「そういうこと」

剣崎は厨房から二つの食材を取り出す。

「ニンジンとピーマンだ」

後に、これを知った二人が半泣きの状態でポカポカと叩いてきたが、剣崎は笑うだけでまったく反省してませんでしたとさ。

しかしこれがきっかけで、二人の好き嫌いも改善の一途を辿ることになったので、なのはとフェイトは剣崎に感謝し、二人はその後もニンジンとピーマンのケーキを食べ続けるのだった。

しかし、そんな平穏も長くは続かない

剣崎を待ち受ける戦いは、もうすぐそこまで来ていたのだから

―ジェイルラボ―

一人研究室で作業を続けるここの主、ジェイル・スカリエッティ。

彼も相当な空気だったが、今彼が纏う雰囲気は、そんなことを吹き飛ばすぐらいにくるものがあった。

「もうすぐ、第一歩を踏み出すことになる・・・が、しかし」

キーを叩く指を止め、手術台の上にいる金色の異形・・・コーカサスビートルアンデッドを見、ひとり口を開く。

「私にできる『悪役』も、そろそろ限界といったところだ」

目の前のカプセルの中に浮かぶ一枚のカードを一瞬だけ視界に入れると、再び作業を再開する。

「『娘達』の処置も終わった。『奴等』の満足する仕事もした。そして・・・」

「従順な僕（しもべ）の演技は・・・もうすぐで終わり。これが最後の仕事だ」

すでに『例のガジェット達』はすべて完成してある。

あとは数を揃えるだけ。

ふと顔を上げても、そこにあるのは研究所の無機質な天井。

だが彼は語る。

自分で撒いた、この絶望的な状況を打開することができる、唯一の切り札に向かって。

ここにはいないが、その時になれば、きっと動いてくれるだろう。

「もしものことがあったら、前言った通りだ」

「娘たちのことは、よろしく頼むよ・・・剣崎一真」

一瞬だけ見せた表情は、娘を想う父親の顔であった

だがそれをすぐに引き締め、全ての元凶を思い浮かべる。

「モノリスは・・・ここにある」

動き出す『運命』に抗う剣士は

どのような『進化』をみせるのか

公開意見陳述会まで・・・あと

―七日―

第四十九話～約束とその日～（後書き）

（ｏｗＯ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

剣崎「帰ったら、野菜ケーキ作ってやるから」

ヴィヴィオ「ふつうのケーキがいい・・・」

オーリス「お待ちしておりました」

キング「ひどいな～。こんな上客に攻撃するなんてさ」

次回『迫りくる王』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）ようやっとＪ・Ｓ事件解決に向かって歩き出しました。

（；ＯＨＯ）まだ『走らない』んだ・・・。

（作者）うっさいぞ！競艇のＣＭでアッ○ーナにメロメロのくせに！！

（；ＯＨＯ）アレは俺だけど俺じゃないですって！！

（；ＯＭＯ）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第五十話～迫りくる王～（前書き）

※今回からシリアス。特に次回はマジシリアス。

第五十話（通算だと５７）にきました！

そういや『科捜研の女』ってドラマに、木場がレギュラー出演してました。
ビックリしましたｗ

一か月で２０話ペースがその半分に落ちましたが、続ける気は満々です。
とりあえず今の目標は、今年のＭｏｖｉｅ大戦までにライダー勢揃いをやることですね。
映画始まったら一気に書き直さないといけなくなりますし、どうせオリジナル展開ならこちらから仕掛けるべきですｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第五十話～迫りくる王～

「警備？俺がか？」

「そうや。本局と地上本部から名指しできたんよ」

六課の部隊長室で向き合う剣崎とはやて。
既に公開意見陳述会は明後日に迫っており、ミッドが騒がしくなってきていたなか、剣崎には『会場警備』の要請が来ていた。
しかも本局と地上本部という双極のところからの要請に、流石の剣崎も顔を顰める。

「どっちかからなら分かるけど、どっちもって言うのは・・・」

「地上本部は宣伝、本局は予言に警戒。ちょうどタイミングが重なったんやな」

「宣伝って・・・まあ確かに『俺は』仲がいいけど」

地上との確執も無く、尚且つどちらからも信用されているので、宣伝云々もまあいいだろうとは思う。
しかし、

「いつカテゴリーキングが出るかわからないのに、警備なんてしてて大丈夫なのか」

「話を聞く限り、カテゴリーキングはスカリエッティ側や。やるとしても精々陽動、それに一真さんを確実に狙ってくると思う」

確かに、イーグルアンデッドとは違い、狙うのは他のライダーではなく剣崎（ブレイド）だろう。
以前撃退したことも、その可能性を引き上げる。

「でもそれなら、本部の警備なんて余計に危険だ」
「本部（そこ）で局員と一緒に封印したら・・・どうや？」

「・・・いい宣伝にはなるだろうけど・・・。あんまり関わって欲しくないんだけどな」
「もう手遅れや。ここは大人しく生贄になっといてな」

「六課のか？・・・わかったよ。」

こうして、剣崎の本部行きが決定した。
双方から提示してきた日時は同じ。

陳述会の二日前・・・つまり今日であった。

―格納庫前―

早速本部へ向かおうとした剣崎だったが、ヴィヴィオという避けられない壁に阻まれていた。

「いや、ちょっと出かけるだけだから。そんなに泣くなって」

「うぅ・・・」

膝にしがみついて離れようとしないヴィヴィオ。

そこまで自分を好いてくれたことを嬉しく思いつつも、早く行かねばならないという焦りがある。

「帰ったら、野菜ケーキ作ってやるから」

その言葉にピクッと反応すると、涙を溜めた目を剣崎の顔に向ける。

「ふつうのケーキがいい・・・」

「わかった。・・・それじゃあ行ってきます、ヴィヴィオ」

「・・・いってらっしゃい、パパ」

泣くのを堪えようとするヴィヴィオの頭をポンポンと叩き、剣崎はアクセルを吹かした。

―地上本部―

「・・・でっけー。」

本部から１００メートルほどのところでバイクを停め、引きながら目の前の建物を見上げる剣崎。

さすが『地上本部』と言うだけあって、威厳を感じる・・・気がする。

「そういえば」

そう言うとブレイバックルを取り出す。

名指しとはいえ、それはあくまで『仮面ライダーブレイド』なのであって、『剣崎一真』の名ではない。

ちょっと前に査察に来た人にバレたが、それでも『剣崎一真』は管理局内で広まっているわけではない。

変身しなければ追い返されるだろう。

「変身」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

バイクを引きながら変身するライダー・・・シュールだ。

だがとにかくこれで心配は無い。

そのまま歩を進めく。

すると前方が騒がしいのに気付く。

『戦闘的なものではないので心配はいらないだろうが』と思いなが

ら歩くと、

『ワアァァァァ！！』

「うぇ！？」

突然局員と歓声に囲まれるブレイド。

あまりにいきなりなのでおろおろしている。

そんな中、人垣を割るように一人の女性が歩いてくる。

「お待ちしておりました」

「あ、この前の・・・オーリスさんだっけ？」

目の前の女性『オーリス・ゲイズ』は、ブレイドというか剣崎が自分の名前を憶えていたことに驚いていた。

「大した話もしていないのに、覚えていてくださったんですね」

「いや、いきなり正体ばれるとか『大したこと』だから」

そんなツッコミを物ともせず、『デキる人』なオーラを漂わせながらオーリスはモニターで確認を取る。

「いきなりになりますが、あなたに担当してもらうのは正面（ここ）です」

『ウオォォォォォ！！』

「こ、この人たちは・・・」

「あなたのような人が来たことに喜んでいるだけです。ご心配には及びません」

「は、はあ」

向こうは喜んでも、こちらは珍しく素直に喜べない。そんなブレイドなのであった。

「変身（それ）は解除していただいてもよろしいです。口外するような局員もおりませんから。当日、または緊急時はなってもらう必要がありますが」

オーリスの言葉に、そのまま変身を解除しようとするが、局員たちの無言の訴えが腕の動きを止める。
どうやらこのままがいいようで・・・。

「とりあえずこのままで・・・」
「わかりました。それではよろしくお願いします」

綺麗に一礼し、そのまま本部へ戻っていく。
ブレイドも局員たちに挨拶を済ませると、彼らとともに警備にあたった。

「流石に、変な奴とかは来ないな」

「ええ。来るとしたら当日、その時は頑張りましょう！」

局員と会話を交わしながら警備を続ける剣崎。

だが通信機を操作していた局員の表情が変わる。

「どうした?」

「いえ、Dブロックとの連絡が・・・」

彼が喋りきる前に、突然の爆発音が響き渡った。

「「敵!?」」

二人だけでなく、まわりの局員も警戒を始める。

そんな中、空から『ナニか』が落ちてくる。

それはその場の全員の顔色を変えた。

「デバイスと・・・腕」

肘から先だけ。

局員の制服がきれいに破れ、いや切れていた。

ドォォン・・・

今度はすぐそば、剣崎達の右斜め前方が爆炎に包まれる。

臨戦態勢に入るブレイド達に、煙の中から声がかけられる。

「ひどいな~。こんな上客を攻撃するなんてさ」

その人をなめ切った声には聞き覚えがあった。

過去、剣崎と戦闘を行って唯一、封印まで持ち込めなかった相手。

さらに言えば、五年前からこいつには手を焼かされた（まあ別個体だが）。

「カテゴリーキング！！お前だけは！！」

「封印するって？この前勝てなかったじゃん」

何げに痛いところを突かれたが、すぐにアブゾーバーからカードを引き抜いた。

『Ｆｕｓｉｏｎ　Ｊａｃｋ』

しかし

（だから・・・）

（ナゼ金じゃないんデス！所長！橘さん！！）

心の中でツッコんだ通り、ジャックフォームはノーマルのまま。

だがもういい。

（皆の為にも・・・アンデッドを封印するだけだ！！）

真正面から一気に突撃、ではなく、今回はステップによって近づいていく。

ずっと翼を広げたまま、ステップ毎に飛行による加速を加える。

最高速が出せなくとも、残像が薄く見えるレベルならこれで出せる。

「ウェイ！！」

キィン！！

だが相手も甘くない。

人間状態でも使えるソリッドシールドは、強化ブレイラウザーの刃を全く受け付けなかった。

「学習能力がないな～。効かないって」

前の戦闘のように挑発してくるキングだったが、今回のブレイドはソレに乗らなかった。

（『こいつ』は剣を手放さないかもしれない。ならどうやって盾を壊す・・・）

ブレイドの知るソリッドシールドの破壊方法は、キング自身が持つ剣、オールオーバーによる斬撃と、ライダー二人以上による同時必殺技。

ブレイラウザーでは、これを切り裂けない。

『キングラウザー』なら・・・しかし無い物ねだりをしてもしょうがない。

今回は未来や橘達が来るとも限らないし、待っていたら局員側の被害が増えかねない。

どうやらガジェットも引き連れていたようだ。

それらを残った局員たちが対応している。
1人で、今持っている力で対応するしか・・・。
（待てよ・・・確か新しいコンボが一個）
橘が、『なのは』を参考に考えたらしいコンボが、今のブレイラウザーにはあるはずだ。
風呂場で言われたのですっかり忘れていた。
（それに・・・懸けてみるか）
ブレイドは、ラウザーから三枚のカードを取り出した。

第五十話～迫りくる王～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

キング「なにそれ。聞いたことないコンボだ」

ブレイドＪＦ「もう一度だ」

コーカサス「キングとキングが合わされば・・・最強なんだよ！！」

ブレイド「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

次回『敗北のブレイド』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（；作者）次回グロ注意

（；ｏｗｏ）ま、まあ自分で言うのもあれだけど、気を付けて。

（；＞‥‥Ｖ‥‥＜）『残酷な描写あり』は伊達ではないということだ

（；ｏＭｏ）だが次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第五十一話～敗北のブレイド～（前書き）

※グロ注意
そこまで細かく描写はしていませんが、念のため。

次回、次々回は打って変わりますが、今回はアレですので。

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第五十一話～敗北のブレイド～

（ぶっつけ本番・・・決まれよ）

取り出した三枚のカードをラウズしていく。

『Ｓｌａｓｈ』

『Ｔｈｕｎｄｅｒ』

そして

『Ｍａｃｈ』

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｔｒｉｋｅ』

「なにそれ。聞いたことないコンボだ」

「『新しい』コンボだからな」

キングの眉がピクッと動いたが、未だに姿を戻す素振りを見せなかった。

「ふーん・・・で、それ強いの？」

「（ギクッ！）・・・ああ」

さっきも思っていたが、このコンボは今思い出したもので、一度も試したことがなかった。
橘に限って、『全く無意味』な技を設定しないとは思うが、『ちょっと使えない技』なら十分可能性がある。
彼が参考に、と見ていたなのはの十年前の映像。
リインの姉という人物に使っていたが・・・。

（エクセリオンバスター・・・なんだっけ？）

とにかくその技？のモーションを意識したらしいこのコンボ。
あれを見る限り、コーカサスには使え無さそうな気が・・・。
なのはの様に、使った後の追撃ができるわけでもない。

しかし翼は必殺技のために金色に輝いているし、ブレイラウザーが纏う雷も臨界一歩手前。

（ああもう！どうとでもなれ！！）

思い切り大地を蹴り、マッハの力で強化された脚力が凄まじいスピードを生み出す。

翼を用いて超低空飛行をしながら、ところどころで何度か大地を蹴る。

先程のステップ戦法の比ではない速さで突っ込み、ブレイラウザーの刃を・・・突き刺

ギィンッ

せなかった。

「いやさ、正面から来たら簡単に防げるから」

（・・・）

シールドを展開させ余裕の表情のキング。
人間形態の彼にそのまま蹴り上げられ、一気に１０メートル後ろまで下がる。

「つまんないの。ちょっと期待してたのに」

「・・・」

呆れっぱなしのキングの言葉を聞いても、ブレイドは何も言おうとしない。
技が使えなかったことにショックを受けているわけではない。
彼はずっと、今の攻撃の際に垣間見た光景を分析していた。

（触れると同時じゃなくて、実は直前に展開してる・・・のか？）

ブレイドの目がおかしくなければ、今の『ライトニングストライク』でブレイラウザーを突き出し始めた時、その時にシールドが出現したように見えた。

「もう一度だ」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｔｒｉｋｅ』

ダンッ！

再び大地を蹴り、一歩に先程よりも更に力を入れながら突撃する。
最早視認しるのが不可能なレベルのそれは、
ギィンッ！！
またも届くことはなかった。
「見えないくらい速かったけど、正面じゃダメだってば」
しかしブレイドは確信した。
奴の盾（ソリッドシールド）は、
『こちらからの攻撃が一定範囲に入る直前、自動的に発動する』
そして
『シールドのダメージは、一回消えるとリセットされる』
ならどうするのか。
今のブレイドには、ジャックフォームによって強化された『ライトニングソニック』か、先程から使用している『ライトニングストライク』しかない。
しかも消費したＡＰを考えると、それすら使えない・・・いや、そんなことも無かった。
『Ｆｕｓｉｏｎ』
気付いたらカードをラウズしていた。
これにより２４００の回復。

強化ブレイラウザーのＡＰは７４００
ライトニングストライク一回で３２００
二回使って残りが１０００

そして今の回復で、

（残りが３４００か・・・）

使える技は・・・

「これだけだ！」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｓｔｒｉｋｅ』

残ったコンボはこれだけだった。
『ライトニングソニック』は消費が３８００・・・つまりオーバーだ。

残る一回のチャンスを、二回も不発に終わった技に懸けるのは正直不安だが、そこは自分の頭と体で補えばいい。

どうすれば、これを使って奴（コーカサス）を封印できるか。

さっきのシールドの展開も踏まえて・・・。

（くそっ！どうすれば・・・ん？）

思わず左の拳を握りしめたブレイド。
しかし仮面の中で歪められた顔は、握りしめた拳を見ると・・・笑みに変わった。

「行くぞ！！」

三度目のスタートを切り、一回目と同等のスピードで突っ込む。

「今度はちょっと見えてるけど？」

「いいんだよ！！」

キングの言葉を全く気にせず、『あえて』スピードも軌道も変えることなく距離を縮めていくブレイド。

それを見て呆れた様な表情をとると、キングはさらに体勢を楽にした。

「食らえ！！」

あと数メートルの地点で声を上げるブレイド

あくまで勝つ気でいるブレイドに、キングは完全に呆れかえった。

「バカの一つ覚え「どうかな！！」・・・！？」

下らないと目を閉じた瞬間、キングの『右のわき腹』に痛みが走った。

「な・・・なんで」

何でブレイドが弾かれてないのか

何で右のわき腹なのか

なんでシールドが出ているのに・・・

―ブレイラウザーが刺さっているのか―

「どうだ！！」

「お前っ！いつの間に『左手』に・・・」

キングは気付いた。

ブレイドがラウザーを持つ手が、『右手』から『左手』に変わっていたのだ。

「武器を両手で扱えないようじゃ・・・」

「料理人！じゃなかった仮面ライダーなんてやってられないんだよ！！」

締まらない男・剣崎一真。

だが、キングに一撃、しかも大きなダメージを与えたことに変わりはない。

（このままいけば、あと一撃で終わる！！）

刺さったままのブレイラウザーをそのまま上に切り上げようと力を入れる。

「くっ！調子に乗るな不完全が！！」

「グッ、ウェアッ！！」

相手による蹴りをもろに食らいながらも、どうにか切り上げることには成功したブレイド。
しかし蹴られながら行ったそれは、相手のバックルを開かせるには足りなかった。

「くそっ!!俺が・・・キングが、こんな成り損ないに!!」

数メートル先で蹲るブレイドを睨みつけ、憤怒の表情を浮かべるキング。
さらに後ろに視線を送れば、今の一撃を喜ぶ局員たちの姿。
どうやら彼が連れて来たガジェットは全滅したようだ。

それも相まって喜ぶ局員を見ていると

（イライラするんだよ・・・お前等!!）

姿を変えていくキング。
だがその姿は、本来のソレとは異なっていた。

しかし蹲ったままのブレイドは、まだそれに気づいてはいない。

（あぁ・・・キツイぞこれ）
先程の蹴りが、スーツを通して多大なダメージを与えていた。

だがあと少し。

今の戦法を使えば、使えるコンボが無くても勝てる

―そう思っていた―

「ぎゃぁぁぁ！！」

「う、腕が！」

「一体どこから！？」

後ろから聞えてきた悲鳴に、体を上げようとしていたブレイドが動きを止める。

しゃがんだまま、首を回してみると

―そこは地獄絵図だった―

体を切り裂かれ倒れ伏す局員たち

彼らの血で染まった地面

そして響く悲痛の叫び

「だ、だれが・・・こんなこと」

そうは言ったが、剣崎の中で答えは出ていた。
だがそれを確信に変えることができなかった。

今正面を向けばいる敵は、

『遠距離を攻撃する手段』など、無いはずなのだから

「キングは最強だ・・・」

「だから『弱いアンデッド』なんかの力は借りない」

「ならどうする？」

まるで自分に尋ねているようで、ブレイドはゆっくりと顔を前に向けた。

するとそこにいたのは

彼がさっきまで相手をしていたアンデッドとは

「キングとキングが合わされば・・・最強なんだよ！！」

―全く別のアンデッドだった―

「お前・・・どうやって」

「あのいけ好かない『博士』がさぁ、この前一晩でやってくれたよ」

軽口を叩きながらゆっくりと歩みを進める『コーカサス』

「な、なら、どいつと融合を・・・」

少なくとも、ブレイドはコーカサスと融合していると思われるアンデッドに心当たりがない。

ところどころが黒くなっていることから、黒を基調としているはずだが、カテゴリーキングに『金』や『紫』を基調としたアンデッドはいても、黒いアンデッドなんて・・・。

（いや・・・まさか、『こいつ』が）

そこまでたどり着いた剣崎は、正体に気が付いた。

そうだ、いるではないか。

まだ自分が『一度も会った事のない』カテゴリーキングが。

何故今まで気付かなかったのか。

答えは一つ

「ハートの、カテゴリーキング・・・」

「せーかい」

ならば、『色が黒い』のはハートのカテゴリーキング『パラドキサアンデッド』の特徴ということ。

そして今後ろにいる局員たちを、剣崎よりも前にいるのに攻撃できたわけは

「そのアンデッドの能力か・・・」

「それもせーかい。俺じゃアレはできない」

肩を竦めるコーカサス。

だが、彼からは自信が溢れているのがわかる。

「前々から気になっていたんだ・・・」

「何さ？」

「『ジェイル・スカリエッティ』という科学者が、お前たちの融合やガジェットの製造をしている」

「そうだけど？」

「ならそこにあるんじゃないのか。モノリスが・・・統制者が！！」

「な～んだそんなこと」

「そんなこと・・・だと！！」

コーカサスの言葉に剣崎が激昂する。

だが

「教えてもらうぞ！！モノリスの場所あ〝あ〝あ〝！！？」

切りかかる前に、彼の右肘から下は『切断されていた』

「相手との実力差を考えてから来いよ」

今度は右脚を

「あ〝・・・あぁ・・・」

「まだ立つ気でいるとはね。バカじゃねえの？」

さらに左膝から下を

「勝てないのに武器なんか構えてんじゃねえよ！！」

そして、最後に左手を

「それじゃ、」

「おやすみ」

「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「っと、首はマズイか。危ない危ない。『生きて連れて帰らなきゃいけない』んだった」

肢体をバラバラに切断され、先程の叫びと共に意識を失ったブレイド・・・いや変身を解除させられた剣崎を見下ろしながら一人ごちる。

「結構血出てるけど大丈夫だろ。半端とはいえアンデッドだし、あの変態が治すんだろうしさ」

コーカサスは剣崎を担ぐと、そのままどこかへ消えてしまった

仮面ライダーブレイド・剣崎一真の・・・敗北であった

第五十一話～敗北のブレイド～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

橘「・・・明日、俺も警備にまわろう」

はやて「なんで！！あそこで止めんかったんや私は！！」

クアットロ「傷は『完治』しましたけどぉ、でもあのバカのせいで意識が戻りません」

ウーノ「あら、私が看病してはいけないの？」

次回『知り合いだとこうなる』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回は前半シリアス、後半シリアル

（；ＯＭＯ）シリアル・・・ナニイッテンダ

（ＯＨＯ）次回からは、『第四十一話』と『人気投票編』を前提として進んでいきます。

（ｏｗｏ）つまり俺とクアットロ達は知り合いだし、ジェイルとも普通に喋る仲ってこと

（＞‥‥Ｖ‥‥＜）そのために人気投票は『ちょっぴり番外編』と銘打ったからな。存分にシリアスをぶち壊してくれる。

（；ＯＭＯ）それを踏まえて次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

第五十二話～知り合いだとこうなる～（前書き）

※今回は人気投票編をもとにできております。『作者』等の部分はなしでいきますが。

いきなりのシリアスブレイク。
サブタイの通りな回ですね。

天音ちゃんキター！！
でも・・・
（；＞：：：Ｖ：：：＜）何があったんだ天音ちゃぁぁぁぁぁん！！

彼的にはショックだったようでｗ

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まります。

第五十二話～知り合いだとこうなる～

『それじゃ・・・おやすみ』

『あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁ！！』

手足を切断されるブレイド

後ろにいた局員たちのように、血の池に倒れ伏す剣崎

それを担ぎ、どこかへ去っていったコーカサス

機動六課の面々と橘たちは、その映像を、ただ見つめるだけだった

エリオとキャロ、そしてグリフィスまでをも含めたロングアーチメンバーは退室。

こんな映像を見て耐えられるほど、彼女たちは『戦い』を知っているわけではなかった。

だがそれは、指令室に残ったメンバーの大半に言えることであった。

リイン、スバル、ティアナ、ギンガは顔を真っ青にして口元を押さえてる。

隊長三人もいつ倒れるかわからない状態。

ヴォルケンズには過去の経験故にまだマシだったが、シグナムとシャマルのダメージは大きかった。

そして橘たちは、

「「「・・・・・」」」

無言で、しかしその顔は怒りに耐えていた。

―剣崎の敗北、そして拉致の翌日―

地上本部、そして本局から六課に報告がきた。

『仮面ライダーブレイドがアンデッドの襲撃によって重症。さらに拉致された』という内容のそれは、始めは六課の誰にも理解できなかった。

しかし、そのことについて問いただしたグリフィスが、地上本部から監視カメラの映像を送られる。

そこで主要メンバー全員で確認したのが間違いだった。

耐性の無い者は気を失う寸前まで、ある者でも気分を悪くするソレ。

先程言ったメンバーは退室。
はやては橘たちに連絡を付ける。

そして冒頭、はやて達は二回目、橘たちは初めてこの映像を見る。

そこで彼らは後悔した。

いくら元の世界で勝ったことのある相手とはいえ、この世界ではいつも以上に苦戦していたというのに、サーチャーに反応があっても、剣崎に任せきりにしてしまった。

これでは信頼でなく、一方的に剣崎に依存しているようなものだった。

彼らは例外なく、血が滲むほど拳を握りしめ、行き場のない、いや自分に対する怒りに耐えた。
怒ったところで、剣崎が元気に戻ってくるわけでもない。

「橘さん、一真さんの反応は・・・追えるんか」

「・・・すまない。アンデッドサーチャー、果てはブレイバックルの発信機も含めて、あいつの足取りを追えるものはなかった・・・」

「くっ！剣崎さん・・・」

「・・・剣崎」

辛いのは六課だけではない。

寧ろ長い付き合いの橘たちのほうが、辛かった。

「・・・明日、俺も警備にまわろう」

「俺も行きます」

「俺もだ」

三人からの申し出に、はやては頷き地上本部に許可を取る。

返答はもちろんＹＥＳ。

それを聞いた三人は、準備のため六課を後にした。

「うっ、うぅ・・・」

最初に声を漏らしたのは誰だっただろうか。

それは瞬く間に伝染し、指令室にいた全員が崩れ落ち、嗚咽を漏らす。

死んだなんて思いたくない。

死ぬはずがないと思っていても、やはりその可能性が捨てきれない。

「死なないよね？一真くん死なないよね！！」

「・・・みんな何とか言ってよ！！」

なのはの悲痛な声が響くが、誰もそれに応えることも、顔をあげることもできなかった。

「・・・ヴィヴィオの、ところに行ってくる。ずっとここにいたから・・・心配してるだろうし」

なのはが去り、

「私も、エリオとキャロの様子見てくるね・・・」

フェイトが去り、

「ティア・・・少し外出よ？」

「・・・（コク」

「ギン姉も、行こ・・・」

「ええ・・・」

スバル、ティアナ、ギンガも部屋を出た。

「ザフィーラ・・・」
「・・・心得た」

ヴィータはザフィーラを伴い、

「・・・主はやて、私も・・・外に出ています」
「私も・・・もう戻らないと」

「わかった。夕飯の時間には・・・帰ってきてな」

シグナムとシャマルも退室、残ったのはリインとはやてだった。

「は、はやてちゃんも外に・・・」
「私はええよ。リインこそ外の空気吸ってきや」

言外に『一人にしてくれ』と言うはやての言葉に従い、リインも部屋をでていった。

「なんで・・・送り出してまったんやろ」

「なんで、止めへんかったんや」

「なんで!!あそこで止めんかったんや私は!!」

床を叩き、後悔の念に縛られるはやて。

機動六課は・・・たった一人の男がいなくなったことによって、全員が同じ思いなのに・・・バラバラで、脆くなった。

―どこかのラボ―

いや、どこかどころかバレバレである。

ここはジェイルラボであった。

「どう？彼の様子は」

「傷は『完治』しましたけどぉ、でもあのバカのせいで意識が戻りません」

長女（ウーノ）と四女（クアットロ）の会話。

内容はもちろん、あのバカ（コーカサス）がバラバラにしてつれ帰った剣崎の事。

トーレやクアットロなどの、剣崎と関わりを持つ者は怒りを露にしたが、コーカサスに勝てる者はいなかったため、ドクターことジェイルがストップをかける。

その後、すぐにジェイルによる処置があり、本人の超人的（今は低くなっているが）な回復力も相まって、切断された手足は『再生』。

しかし、1日経って夜（つまり襲撃前夜）になっても彼の意識は戻らず、先の会話に至る。

「ウーノ姉様は彼の心配じゃなくて、他の皆の心配をしてください」

「あら、私が看病してはいけないのかしら？」

「もちろん」

（即答しなくても・・・）

基本的にはクアットロが、時にはセインやディエチが看病するが（トーレは様子を見にくるだけ）、ウーノは看病させてもらえない。セインに言わせれば『美人だしスタイルもいいから』との事。

（気にはなるけど・・・盗ったりはしないわ。・・・多分）

と、ウーノ自身にも自信がないので、部屋にも入れてもらえなかった。

『セッテやディード、（スタイル等がウーノと同様）はありなの？』

と尋ねれば、

『確かに危ないけど、ウーノ姉を入れるよりはマシ』

と返された。

「嫌われてるわけじゃないからまだいいけど、そこまで露骨にしなくてもいいじゃない・・・」

ちょっぴり心が傷ついたウーノであった。

切断される自分の手足。
そして最後の一本・右腕に・・・

『それじゃ、おやすみ』

「ッ！ウワアアアアアッ！！」

剣崎は、気を失う直前の光景を思い出し、ショックで目を覚ました。
その勢いで起き上がり、一瞬で流れ出した冷や汗を感じながら肩で息をする。

「ここは・・・」

ようやくある程度の落ち着きをみせた彼は、自分の周りを見回す。
見たこともない機材が置かれ、自分の体からは数本の管・・・多分点滴。

パッと見たところ手術室のような場所だが、そんなところに患者を放置する病院があるはずもなく、剣崎は首を傾げるばかりであった。

「・・・！そういや手が、足も・・・ちゃんとある」

切断されたはずの手足が、しっかりとある。

「そっか。あれは・・・夢だったんだな」

そう思うことによって先程の『夢』が再び鮮明に浮かぶ。

だが思い出せば思い出すほど、腕が、脚が疼く。

疼く箇所を押さえようと思っても、自由に動いてくれない。

そして思い出す痛みも、鮮明だった。

「あらぁ？やっとお目覚めなの？」

突然ドアが開き、聞き覚えのある甘ったるいような声とともに入ってくる一人の女性。

「・・・・・・」

剣崎は彼女を見て三回ほど瞬きをすると

「やっぱり夢だ。おやすみ」

布団をかぶり寝にかかった。

（あ、この布団気持ちいい）

「そのお布団、私のよ～ん♪」

完全に寝かかっていた剣崎だったが、その言葉によって覚醒すると、まだぎこちない動きしかできない手を使って布団をたたみ始めた。

「もう、ダメよ寝てないと」

結局クアットロによって押さえつけられ、布団から頭だけ出しながら現状を問う。

「で、ここは」
「私たちの『家』」

「俺はどうなった」
「バラバラで、死体一歩手前ね。でももう再生したわ」

「陳述会までは」
「もう明日よ」

「看病・・・してくれたのか？」
「セインちゃんやディエチちゃんに言ってやりなさい。私は気にしてないわ」

「ありがとう」
「だから言わなくてもいいのに。でも受け取っておくわ。どういたしまして」

以上の会話を終えると、クアットロはモニターで誰かを呼び出す。

そうして部屋に入ってきたのが

「私だ」

「誰に言ってんだお前」

ここの主、広域次元犯罪者ことジェイル・スカリエッティであった。

「では早速『検査』といこうか」

入ってきて早々に、室内の装置を操作していく。

するとクアットロが布団を剥ぎ取り、剣崎が首を傾げると同時に、

彼の四肢はベッドの下から飛び出してきた装置によって固定されてしまった。

「な!?なにするつもりだ!?」

「ハッハッハ、心配することはない。単なる『検査』だよ」

「こっちを見て言え!!っていうかこれは改造する気満々な装置だろ!!」

「・・・何を言っているのか理解できないね」

「だからこっちを見ろ!や、やめろショッカー!!ぶっ飛ばすぞ!!」

「そう言われると余計に『改造』したくなるよ」

本格的に怯え、暴れ始めた剣崎。

そんな様子を見ている二人は、突然笑い出す。

「へ?」

「冗談だよ。改造するわけがないだろうに」

「怯えるなんて、意外とかわいいところもあるじゃない？」

（なんかムカつく・・・あとウソっぽい）

「とにかく、普通の検査だ。大人しくしておいてくれたまえ」

「・・・ああ」

敵陣なのにこの空気。

知り合いとは恐ろしい

第五十二話～知り合いだとこうなる～（後書き）

（ｏｗｏ）次回の、リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳは！

ジェイル「話をしよう」

剣崎「いや、大丈夫だ。問題ない」

オットー「楽しみにしてます」

ディード「それでは、失礼しますね」

ジェイル「つまり私の言いたい事、それは」

次回『ジェイルの仮説』

―運命の切り札をつかみ取れ！―

（作者）次回からはどんどんオリ要素が増えていきます。予告での双子の発言も小さいながらその一つ。

（ｏｗｏ）にしてもいきなりシリアスじゃなくなったなぁ

（作者）そりゃ仲悪かったら君速攻で逃げるじゃん

（ＯＨＯ）確かに、それじゃあ敵の本拠地がばれちゃいますもんね

（；＞：：Ｖ：：＜）天音ちゃん・・・

（０ｗ０；）始、元の世界の天音ちゃんは大丈夫なんだろ？心配すんなって

（；０Ｍ０）次回も見てくれないと、オレノカラダハボドボドダァ！！

番外編～六課のハロウィンこんなもん～（前書き）

本編じゃないんです！！
あと完璧に遅れました。

予告もしてない番外編（ハロウィン）を投稿します。

しかも無駄に長いですｗ

疲れた・・・これは疲れた

それでは、
リリカルブレイドＳｔｒｉｋｅｒＳ番外編、始まります。

番外編～六課のハロウィンこんなもん～

「へ～、ハロウィンか～。一真さんはそういう事ばっか思いつくんやねぇ」

「お前馬鹿にしてんのか」

部隊長室にて、剣崎からの提案を聞き、面白そうだとニヤリ笑うはやて。

馬鹿にされた剣崎は、少しムッとしながらも好感触を得たことに満足していた。

「でもな～」

「あるか？これに問題なんて」

「絶対みんな化ける側に回りたがると思うんよ」

「・・・あ～」

迂闊だった。

ホントに迂闊だった。

この六課のメンバーを思い出せば、ほとんど全員がお菓子をもらいたがるに違いないことは明白。
かく言うはやても、そっち側に回りたい。
そうなると、用意するお菓子の量も半端ない。

「やろ？だから人数的に『あげる側』が足りへんし・・・」
「そいつら（もちろん自分も含む）に負担がかかり過ぎると・・・」

提案した途端に積むとは・・・と考えていると、剣崎にいい考えが浮かんだ。

「いた。こういう時ちょうどいい人たちが」

「で、俺達を引っ張ってきたと」
「断りませんよね。いっつもここの風呂使ってんのに」

そう返されると、士も言葉がでなかった。
しかも店長以下他のメンバーはヤル気満々だったりする。
ということで士も腹をくくった。

「まあいい。ならチビッ子が虫歯になるようなもん作ってやるよ！」

「それは勘弁してください」

「それで剣崎、俺も仮装すればいいのか？」
「待て始。お前の場合先が見えるマジ見える」

ついでなので始、橘、睦月も連れて来た。

「ホントに！？」
「私たちも貰って大丈夫なの？」

今度は分隊長二人に説明。
なのはは嬉しそうだが、フェイトは少し申し訳なさそうだ。

「そんなこと言っても、仮装したいだろ？」
「そ、それは・・・少しやりたい」

ということで分隊長，Ｓ、仮装サイドに参加決定。

「アタシはもちろん仮装していくぞ！」

「わ、私は・・・どうするべきか」

副隊長の片方、ヴィータは即答したが、シグナムは迷っているようだ。

自分が仮装するのもアレだが、お菓子を準備するにも勝手が・・・。

「シグナムはそう来ると思ってたから、はやてから伝言。『ここで仮装せえへんかったら騎士の名折れや』ってさ」

「そ、そういうことなら私も仮装しよう！」

「ちなみに、落ち武者はなしだから」

「ぬぬぬ・・・」

「やるやる！寧ろやらせてください！！」

「私は別に・・・」

スターズに持ちかけると、スバルは予想通りだったが、ティアナは反応が薄い。

まあ、ミッドにハロウィンの文化がないのが原因である。

それにティアナが仮装しそうにないのは目に見えてる。

「そうか？店長や士さんも来てたりするんだけｄ「やる！！」・・・

そ、そっか」

士の作るものが何気に好きなティアナ。
流石レストランのデザート担当。

「大丈夫なんですか？僕たちまで参加して」
「そこは少し心配です・・・」
「きゅく～」

ライトニングは遠慮気味。
しかし、彼らは確実に参加させる、とはやて＆フェイトからの厳命もあるし、剣崎としても、子供らしく楽しんでほしい。

「子供が遠慮するなって。いいだろ？たまにはこういう事もあったって」
「ホントに大丈夫ですか？」

エリオは不安げだ。
自分たちまで参加しては迷惑だと思っているのだろう。

「大丈夫！」
「あ、五代さん」

そんなところに現れた子供好き、五代雄介。
笑顔と青空とサムズアップが一番似合う男である。

「あ、君たちは初めましてだったね。はい！これ俺の名刺」

エリオたちが口を開くよりも早く、自分のお手製の名刺を渡していく。

「「２１１０の技を持つ男・・・五代雄介？」」

「きゅく～？」

十年で１１０個増やす男、五代雄介。

因みにミッド語で書かれていたりする。

「君たちが参加してくれると、俺や剣崎君も嬉しいんだよ？」

「本当ですか？」

五代と剣崎を見れば、二人とも笑顔で頷いている。

「子供は楽しむ！それが一番！！」

「「はい！」」

「きゅく！」

ということで参加決定。

その後も・・・

「ギンガもやるだｒ「もちろん！！」・・・よし」

「私も参加していいんですか？」
「あ、ああ！シャマルは是非『仮装』で参加してくれ！」

「リインもですか～？」
「もちろん！」

「ザフィーラはあげる側な」
「心得た」

「一真さ～ん、私もいいですか？」
「シャーリー・・・ならアルトとルキノも誘ってやれよ」

「僕はどうすればいいでしょうか？」
「グリフィスはあげる側で」

「おう一真！俺はどうすればいい？」
「ヴァイスはもちろんあげる側だって。まさかもらえると思ってたのかよ」

「あ、一真さん。私は」
「アイナさんはあげる側・・・い、いや、仮装でもいいです！」

「パパ～、私は？」
「ヴィヴィオも仮装な？」
「うん！」

と参加者を募り・・・

チーム仮装には女性陣が、チームお菓子には男性陣が。

―そんなこんなで当日、開始二時間前の男性陣―

「お前等もっと動け働け！！あと津上！材料足りてねえぞ！」
「ホント！？マズイなぁ」
「『裏ワザ』使って俺買ってきます！変身！！」
「俺も『裏ワザ』を使うとするか、変身！」

「あれ？真司君と総司君どこいったの？」
「そ、それは気にすんな！！お前ももっと手を動かせ！！」

「睦月！始！そっちはどうだ？」
「大体大丈夫です！」
「こちらもほとんど終了した」

「橘さんはナズェミテルンディス！？あとつまみ食いしないでください！！ああもう始！睦月！」

「「「変身！！」」」

「（０Ｍ０；）＜ウワァァァァァ！！」

「それにしても」
「騒がしいなあいつら・・・」
「そうですね。ってザフィーラさんもヴァイス陸曹も意外と手際が

いい・・・」

「ま、昔ちょっとな。あと今は陸曹って呼ぶなよ？」

「これぐらいはできてこその守護獣だ」

（ヴァイス陸ｓ、さんはともかくザフィーラさんは何かおかしいと思います・・・）

―その頃の女性陣―

「あ、主！？この格好はどういうことなんですか！？」

「ええやろ？シグナムは胸を強調せなあかんって。これな？女海賊をイメージして・・・」

「はやてちゃん・・・私の格好はどういうことなのかな？」

「はやて、私のもどこかおかしいよ」

「それはなのはちゃんは異名、フェイトちゃんは昔のイメージから貰ったんやけど？」

「それならわかる・・・けどなのはのソレは」

「おかしいよね！？」

「血～吸っちゃうぞ～（わよ～）♪」

「そこの姉妹！まだ始まってない！！ホントに血吸ってやろうかしら！！」

「え、エリオ君・・・かっこいい」
「あ、ありがと！キャロも似合ってるよ！」

「オバケです～♪」
「ふふふっ、かわいいオバケさんね」

「アイナさん！これで大丈夫？」
「あら！いいわヴィヴィオちゃん。私も大丈夫かしら」
「だいじょ～ぶ～！」

「ほら二人とも！恥ずかしがらないで！」
「「そんな事言ったって～！！」」

―そんなこんなで開始時間―

代表のはやて&剣崎による説明。
・六課の至る所（流石に屋内）に男性陣がスタンバっている
・しっかり台詞を言わないとお菓子はもらえない
・別に何回同じところに行ってもいい
・でもとりあえず一通りは回ろうＺＥ

と、大体こんな感じ。

「ほんなら一真さんも行ってらっしゃい」
「ああ。期待せずに待ってるよ」

多々ある通路の一つに入っていく剣崎を、いつものメンバーが目で追っていた。

そして彼が行ってから数分後。
「六課ハロウィン！スタートや！！」

その言葉を合図に、女性陣は各通路（『何人か』は剣崎が消えた通路）に走り出していった。

「・・・走らんでもええと思うんやけど」

はやてはすっかり置いていかれてしまったようである。

―第一ポイント・ノーマル男性陣―

・・・割愛

―第二ポイント・ヴァイス、ザフィーラ、グリフィス―

「「「「トリックオアトリート！」」」」

シャーリー、アルト、ルキノ、ヴィヴィオが突撃する。

ヴァイスはカラカラと笑い、グリフィスは苦笑いしながらお菓子を渡す。

この小説では珍しく狼モードのザフィーラは、ヴィヴィオにモフモフされながらお菓子の入った籠を、咥えて配る。

ちなみに、ロングアーチの三人は、ジャックオランタンの仮装。
しかし露出度高め。
シャーリーは普通にふるまっているが、残りの二人はやけくそであった。

―第二ポイント・橘、始、睦月―

「「「トリックオアトリート（です～）！！」」」
「「と、トリックオアトリート！」」

こちらにはシャマル、ヴィータ、リイン。
そしてエリオ&キャロ

シャマルはいつもの白衣に血のようなものがべっとり付いている。
正直そんな状態での笑みを見せられると、マジ怖い。
睦月の顔も青くなる。

ヴィータは自身の持っている『のろいうさぎ』の着ぐるみ。
こちらはある意味正常である。

猿轡を噛まされた橘がお菓子を渡す。

リインはベタに白い布を被り、目のところに穴を。
浮いているので、初見なら幽霊と見間違う（しかも魔法をつかって地味に発光している）。

エリオは狼男。
何気に映える。
合い過ぎて本物ではないかと疑うほど。

キャロは魔女。
しかし服装はピーリカピリララで、ドッカ～ンなやつの主人公のソレであり、とどのつまりは魔女見習いである。
しかし流石『一番魔法少女がらしい』と言われるだけあり、違和感が左程ない。

上記の三人には、始からお菓子が渡された。

―第四ポイント・レストランＡＧＩＴΩ―

「「「トリックオアトリートォ！！お菓子くれないと血を全部吸うぞ～！！」」」

無駄に気合いの入ったナカジマ姉妹、そしてティアナが最初に突撃。

この三人は吸血鬼。
最初は『フランケンシュタインにしよう！』などとテンションを上げていた姉妹を、『二人がやるとシャレにならん』とティアナが阻止。
結局空きの有った吸血鬼になった。

三人の目がマジなので、早く渡さないと吸われるような感覚を覚える。

ということで、買い物に行って休憩中の真、総コンビを抜いて、五代、翔一、士の三人が渡す。
実はこのお菓子、店で売ったら高すぎて誰も買おうとしないようなもので、ここらへんに、彼ら、というか士の日頃の感謝（常連＆入浴）が表れてたりする。

そして
―第五ポイント・剣崎一真―

「トリックオアトリートや～！」

悪魔に扮したはやてが登場。

「なんだよはやて。子狸じゃないのか？」

すでに仮装を見ていたのにも関わらずな剣崎の皮肉にもめげず、ズイッと手を突き出すはやて。
だがここで疑問が。

「あれ？みんなは私より先におると思ったんやけど」
「お前が一番だけど？」

なら最初に突っ走っていったなのは達はどこへ行ったのだろうか。
他のポイントで止まるようなタイプではなかったと思うのだが・・・。

全体を楽しむシャマル、ティアナ、ギンガと違い、はやてを含めた四人はここだけが目当てのはず。

「まあええやろ。とにかくお菓子くれないと化かすよ～」
「やっぱ狸じゃん」
「しまった！？」

本性を現したはやてを笑いながらも、剣崎はちゃんとお菓子を渡す。

「んでどうや？なかなかやろ～？」
「露出多くないか？」

「嬉しいやろ♪」
「ばかっ、そんな恰好でくっつくな！」

傍から見たらイチャイチャしているようにしか見えない二人。
だが二人とも、突然立ち込めた冷気に動きを止める。

「・・・トリックオアトリートォ・・・・」

何故か部屋には霧が。
そして通路の向こうから、謎のシルエットが近づいてくる。

「「ホントにオバケ!?」」

抱き合いながらガタガタと震える二人。

そして霧の向こうから現れたのが・・・

「お菓子をくれないと・・・斬るぞぉ・・・・」

水を滴らせ、レヴァンティンをぶらぶらさせながら脅してくるシグナムであった。
どうやら女海賊の『幽霊』らしい。

セッティングしたはやて自身も、まさか水まで被ってくるとは・・・
と顔が引き攣っている。

だがシグナムは知らない。
正体がわかれば・・・その格好はエロいだけだ!!
胸は強調されているし、脚等の露出も多い。
そこに水を加えてどうする。

「と、とにかく鏡見ろ」

「何を言って・・・!?」

「タオル・・・ついでに着替えとけ。・・・いやここでじゃないから！！」

―数分後―

その後違う部屋で着替え（同じ衣装）、はやてと共に他のところを回ってきたシグナム。

そして戻ってきた二人が剣崎の隣を陣取って、回ってきた女性職員の応対をしていると・・・。

「おいシグナム。霧はもういいから」
「？何を言っている。私は何も・・・」
「こ、今度こそオバケなんか！？」

聞えてくるのは鎖の音。

ジャラジャラと不気味に響くソレのもとは、やはりこの部屋に近づいていた。

流石のシグナムもこれにはビビる。

今度は三人で抱き合いながら震えていると、出て来たのは・・・

「トリックオアトリート・・・お菓子くれないと地獄に送り込むぞぉ・・・」

なんともまあ怖い事を言ってくる、フェイト（死神）であった。
子供の頃の、バリアジャケットのイメージが死神だったことから用意されたこの衣装。

昔のバリアジャケットを更に死神に近づけて、音の原因の鎖を巻き、バルディッシュはもちろんハーケンフォーム。

だがシグナム同様、ここにもはやてのこだわりが。
際どさ満点のミニスカートは健在。
さらに上もそのままなので、体のラインが物凄くハッキリする。

「お、お前も、着替えてこい」

あの剣崎が『鼻から何かを出しそうになりながら』そう告げる。
これには三人ともビックリである。

服とは、時に着ていない時以上にエロい時がある。

そう言うものなのである。

―さらに数分後―

着替えて、回って、さらにその後着替えるという面倒な手段を取り、結局そのままなフェイト。
剣崎はなるべく見ないようにしているが、その行動が見ていた二人に火をつける。

悪魔はやては衣装の所々を破きだし、女海賊シグナムは再び水を被った。

（ホントもう・・・勘弁してください！！）

自分が男なのを、人生の中で一番強く感じた剣崎なのであった。

な～んてことをしていると・・・

「おい・・・今度は誰だよ」

再び霧が立ち込める。

普通の女性職員や、シャマル達ではこうはならなかった。（シャマルは残ろうとしたが、何かを思いついた様子ですぐに出ていき、ナカジマ姉妹とティアナは未だに目がマジだったので隔離）

ということは・・・

「もうなのはしかいないよね」

「衣装を知っとる分、余計雰囲気がピッタリやと思う」

「あれは・・・恐ろしい」

（あれ？なのはってどんな格好してたっけ・・・？）

そんなこんなで・・・

―魔王が降臨した―

「トリックオアトリート！お菓子くれないと、ＯＨＡＮＡＳＨＩするよ♪」

「「「「どうぞこれを、そして命だけはお助けを」」」」

「なんで！？」

なのはの格好は・・・魔王であった。

悪魔を通り過ぎて、魔王である。

アグレッサーモードを真っ黒にして、さらに刺々しいデザインに変更。

ところどころに『第六〇魔王』のような意匠を施してある。

（元ネタの）大魔王バー〇ではない。

戦国武将のほうの魔王であった。

「や、やっぱりアレかな・・・これ」

あまりにも剣崎達のリアクションが気になったのか、しきりに衣装を見回すなのは。

対する四人は、地面にひれ伏すように頭を下げる。

フェイトやはやてはともかく、シグナムも一緒に。

「やめてよ四人とも！？」

―数分後―

なのはが隊舎内のすべての人をひれ伏させてから戻ってきた。

ハロウィンもそろそろ終わりがけ。

あと剣崎が渡してないのは、

「ヴィヴィオだけなんだけど・・・」

「それにしては遅いね」

「迷ってないといいんだけど・・・」

「いや、六課(ここ)でそれはないやろ」

「テスタロッサは過保護だな」

そんなこんなで・・・

「はい霧来たー」

「ヴィヴィオ～、早くおいで～」

「待ってるよ～？」

三人の親が呼びかけるが、霧の向こうからは返事が来ない。

聞えてくるのは、くすくすという笑い声だけ。

「トリックオアトリート。お菓子くれなきゃ、イタズラするぞ♪」

明らかにヴィヴィオではない声、しかも相手の姿が見えない・・・。

「「「「「え〝・・・」」」」」

直感的にヤバいと判断した剣崎が、まだ残っていたお菓子を、恐る恐る前に出してみる。

するとお菓子の入った籠ごと・・・消えた。

それと同時に、笑い声と霧も消え、あたりはもとの状態に戻っていた。

「「「「「まさか・・・」」」」」

「「「「「本物の・・・」」」」」

五人そろってソレを口にしようとする

そして開きかけた瞬間・・・

「トリックオアトリート!!」

「うぇぇっ!?」

「「「きゃぁ!?」」」

「そんなバカなそんなバカなそんなバカな・・・」

突然の大声に、今度は五人で抱き合いながら、声の主を探す。
シグナムのことは・・・気にしない。

上ばかりを見ていた四人（シグナムは未だにブツブツと呟いている）だったが、全員の服が引っ張られたことにより、視線を下に向ける。

「な、なんだ・・・」
「「「「ヴィヴィオかぁ・・・」」」」

そこにいたのは、今度こそ本当にヴィヴィオ。
ちなみにその衣装は、

「ヴィヴィオ・・・お前は、アンデッドになってしまったというのか・・・」

と、思わず剣崎が台詞をパクるほどのものであった。

なぜ最初の時に気付かなかったのか。
ヴィヴィオの格好は、青いジョーカー。
つまり剣崎であった。

「パパとおそろ～い♪」

かなりデフォルメされていたが、どこからどうみても小っちゃいジョーカーになっているヴィヴィオ。
『お揃い』と言って喜んでいるのを、剣崎も喜んでいいのか悪いのか、反応に少し困ってしまう。

「ほら一真くん、お菓子」

「ヴィヴィオ待ってるよ」
「？、あ、ああ！」

左右の『ママ』からの声かけによって気がつけば、ヴィヴィオが手をいっぱいに広げて待っている。

「・・・よし！可愛いジョーカーにいたずらされないように、お菓子あげないとな」
「うん！」

こうして、（リアルで）二日遅れた六課のハロウィンが終わりを告げた。

しかしこのハロウィン、最後にシャマルが配ったお菓子によって、参加者のほとんどがダウンするという結果だったのを、ここに忘れずに記しておく。

彼女自身は剣崎に渡すつもりだったのが、何故全体に広まったのか・・・。

きっと（０Ｍ０）↑これも関わっているだろうが、もしかしたら、

―『お菓子が足りなかった為に、イタズラされたのかもしれない』―

誰にって？そりゃ・・・・

イタズラオバケに決まっているでしょう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7426s/

リリカルブレイドStrikerS

2011年11月2日02時03分発行